

【支那】

支那に於ける國勢調査につ

いて(講演)

支那人に關する統計的觀察

亂

支那の大亂歟抑も清國の開

放歟

中清叛亂

支那の動亂と日本の態度

支那南北分立不可

支那動亂部見

支那南方の軍政府は交戦國

體として承認すべきもの

なりや否や

近日の南北妥協論

支那南北の和平問題

支那の政戦を直視して

奉直戦争と支那政局の將來

直隸系に就て

民國動亂の本源

支那動亂の真相と日支經濟

界の影響

人物論を中心としての支那

戦攻近局總論

服部宇之吉(日社)大〇九卷一
宮本 基(統維)大二三

青柳 篤恒(外時)四四〇二二
青柳 篤恒(外時)四四一四一六八

三宅雄二郎(外時)四四一四一六八
嶺南 學人(外時)大二二八二二〇
有賀 長雄(外時)大二二八二二六

寺尾 亨(國際)大七一七一
内藤虎次郎(外時)大七二二三八

清水 泰次(外時)大八三〇三五八
青柳 篤恒(外時)大二二二六四四
神田 正雄(外時)大二二二五四四

清水 泰次(外時)大二二二六四四
田代名兵衛(經商)大二三三
黒根 祥作(外時)大二三三

五五二

江浙戦と其影響

支那動亂と國際的關係

支那動亂と日本

奉直交戦の觀察

直隸派とは何ぞや

支那紛争と日本

支那の無政府と儒家思想

援張排露と上海暴動

支那關稅特別會議と動亂

關稅會議と奉直戰

動亂支那の趨くところ

奉郭戰當時の軍官、滿鐵及

び領事館

支那の煙禍と其救濟策

支那軍閥のトリック

支那の時局と吳張聯盟

日 支 關 係

旅順威海衛に關する清英露

獨の交渉

清人に對する邦人の態度

遣唐使

現政府の對清政策を難す

辰丸事件と日清の國交

辰丸事件國際法規

佐藤安之助(外時)大三四四七
小村俊三郎(外時)大三四四七
宇治田直義(外時)大三四四七

松井 等(外時)大三四四七
松本 鎰吉(外時)大三四四七

小幡 西吉(外時)大三四四七
小島 祐馬(我等)大三四四七
西澤 英一(財經)大三四四七

知誠 眞治(外時)大三四四七
稻原 勝治(外時)大三四四七
河瀬 蘇北(國知)大三四四七

燕 塵 社(外時)大三四四七
吉田 虎雄(外時)大三四四七
大西 齋(外時)大三四四七

小川 節(外時)大三四四七
有賀 長雄(外時)大三四四七
松崎藏之助(日經)四四〇一

池邊 義象(京法)四四〇一
青柳 篤恒(外時)四四〇一
青柳 篤恒(外時)四四〇一
立 作 太 郎(國際)四四〇一

日清新協約

清韓に對し我商業的機關を

設備する必要

皇道新道の別を論じ日本の

對支根本政策に及ぶ

姑息の小康を食ふ勿れ

支那に於ける日本の實勢力

對支那政策の將來

國產獎勵と支那

外交史上より觀たる倭寇

日本人は支那の智識に乏し

對支思想の根本的解決

日支經濟關係接觸の一手段

支那に於ける吾外務制度改

革の必要を論ず

日支交渉事件に就て

日支交渉と最後通牒

對支外交の遠算

對支態度に就き識者の覺醒

を促す

對支經營と金融機關

對支交渉に就て

日支の關係

對支問題の眞意義

有賀 長雄(外時)四三九

宮崎 駿兒(東經)四三九

大原 武慶(國圖)大一一九

福本 誠(國圖)大一一九

加藤 高明(國圖)大一一九

井深彦三郎(國圖)大一一九

莊田 秋村(東經)大三七〇

後藤 秀穂(外時)大三二〇

布川 靜淵(東經)大三二〇

松岡 均平(外時)大四三三

筑 山 生(東經)大四三七

今井 嘉幸(國家)大四二九

山本唯三郎(洋經)大四一七

小山清一郎(外時)大四二二

原田豊次郎(外時)大四二二

及川 恒忠(外時)大四二二

添田 壽一(財經)大四二二

原田豊次郎(外時)大四二二

秋月左都夫(國圖)大四三三

長島 隆二(國圖)大四三三

對支經營と努力關係

支那の排日熱と善後策

南北米經濟關係と日支經濟

關係

對支政策と戦後の日本

日支親善の障礙

對支政策に就て

對支政策の局面展開

日支關係の改善

日支條約の整理

再び日本の對支政策に就き

て

支那海關邦人吏員増加問題

製鐵業の獨立と日支同盟

日支經濟關係の眞相

日米支の提携可能なりや

日支經濟關係に就きて

日支親善の秘訣

日本の利權獲得と支那の反

對

日支經濟關係改善の骨子

支那に對する日本の態度

遣唐使の性質

對支政策に就きて

橋本圭三郎(財經)大四二

「宮蒼鷹公(財經)大四二

神戶 正雄(經叢)大五二

長瀬 鳳輔(國圖)大五四

牧野 義智(國圖)大五四

小川郷太郎(外時)大五二

末廣 重雄(外時)大五二

神戶 正雄(亞經)大六一

蟻川 新(外時)大六二

末廣 重雄(外時)大六二

末廣 重雄(外時)大六二

今泉嘉一郎(財經)大六二

戸田 海市(經叢)大六二

泉 哲(商經)大六一

神戶 正雄(商經)大六一

西澤 公雄(財經)大六四

本多 精一(資料)大六三

寺尾 亨(國圖)大六五

牧野 義智(國圖)大六五

末廣 重雄(外時)大六五

末廣 重雄(外時)大六五

【支那】

露國と支那民國とに對する 我邦の態度	牧野 義智 (國國) 六七六 柏田 忠一 (國家) 六七三		
排日的支那國民教育 米人の眼に映じたる日支關係	宗倉 保 (亞經) 六七二 根津 一 (亞經) 六七二 末廣 重雄 (外時) 六七七 内藤虎次郎 (外時) 六七七 木村増太郎 (亞經) 六七二 中橋徳五郎 (法論) 六七一 桑原 隲藏 (外時) 六八三 過激派東來より生ずる日露 支の外交問題	清水 泰次 (國際) 六八八 泉 哲 (外時) 六八九 田中幸一郎 (外時) 六八九 泉 哲 (外時) 六八三 山東問題の善後策に關して 中華國民に告ぐ	立 作太郎 (外時) 六八三 内藤虎次郎 (外時) 六八三 蜷川 新 (國際) 六八八 稻原 勝治 (外時) 六八三
山東問題に就て	泉 哲 (外時) 六八九		
對支政策の根本的改革を促す	泉 哲 (外時) 六八三		
山東問題の善後策に關して 中華國民に告ぐ	立 作太郎 (外時) 六八三 内藤虎次郎 (外時) 六八三		
山東問題と支那の主張及び 不法	蜷川 新 (國際) 六八八 稻原 勝治 (外時) 六八三		
米國上院と山東問題	稻原 勝治 (外時) 六八三		
青島問題と日米の正論 對支政策の根本方針に就いて	蜷川 新 (外時) 六八三 辻村 楠造 (財經) 六九七 青柳 篤恒 (外時) 六九三 本多熊太郎 (外時) 六九三 田川大吉郎 (洋經) 六九一		
日支外交の側面觀 支那と日本	仁保 龜松 (法叢) 六〇六 小山精一郎 (外時) 六〇三 副島 道正 (外時) 六〇三		
支那の視察の所感を述べて 日支關係に及ぶ	蜷川 新 (外時) 六〇三 米田 實 (外時) 六〇三 青柳 篤恒 (外時) 六〇三 稻葉 君山 (外時) 六〇三 神田 正雄 (外時) 六〇三		
日支英米の關係を論じて二 重外交の弊に及ぶ	下田 禮佐 (長彙) 六一一 矢野 恒太 (東經) 六一一		
對支四國借款團と日本の利害	木村増太郎 (亞經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一 瀧本 誠一 (亞經) 六一一		
山東交渉條件に接して 支那民族の平和的日本侵入 對支關係箴言	伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一		
支那援助提議と日本の態度 日支經濟關係と連絡航路の前途	伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一		
日支親善に就て 支那より見たる日支經濟關係	伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一		
遼東利權の外交上の立場 對支經濟政策	伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一		

經濟的日支親善の意義 列國の對支決定と日支の立場	前田幸太郎 (亞經) 六一一 神田 正雄 (外時) 六一一
貿易の發達階段より見たる 日米支の關係	作田 莊一 (亞經) 六一一 清水 泰次 (外時) 六一一 清水文之輔 (東經) 六一一
對支不干涉宣言について 對支政策の基礎	清水文之輔 (東經) 六一一
支那關稅改正と日支經濟關係	高柳松一郎 (財經) 六一一 西川 喜一 (亞經) 六一一 佐藤安之助 (外時) 六一一 神津助太速 (外時) 六一一 神田 正雄 (國知) 六一一
在支我領事制度刷新論 支那排日對策如何	山口 二酉 (國知) 六一一 清水文之輔 (東經) 六一一 平沼 淑郎 (臺法) 六一一 後藤朝太郎 (外時) 六一一
支那に於ける排日の真相 日支關係の現在及將來	山口 二酉 (國知) 六一一 清水文之輔 (東經) 六一一 平沼 淑郎 (臺法) 六一一 後藤朝太郎 (外時) 六一一
支那に於ける排日運動と國際聯盟	山口 二酉 (國知) 六一一 清水文之輔 (東經) 六一一 平沼 淑郎 (臺法) 六一一 後藤朝太郎 (外時) 六一一
支那に於ける排日と對策 日華文化同盟の提唱	山口 二酉 (國知) 六一一 清水文之輔 (東經) 六一一 平沼 淑郎 (臺法) 六一一 後藤朝太郎 (外時) 六一一
支那排日に對する基礎智識 支那に於ける日本無線電信 獨占權に就て	山口 二酉 (國知) 六一一 清水文之輔 (東經) 六一一 平沼 淑郎 (臺法) 六一一 後藤朝太郎 (外時) 六一一
日支實業聯合機關創設に就て	山口 二酉 (國知) 六一一 清水文之輔 (東經) 六一一 平沼 淑郎 (臺法) 六一一 後藤朝太郎 (外時) 六一一
日支條約廢棄問題 米國の日支條約默認	山口 二酉 (國知) 六一一 清水文之輔 (東經) 六一一 平沼 淑郎 (臺法) 六一一 後藤朝太郎 (外時) 六一一
日支協約と支那の新策動 日支條約の争闘と提携外交 日支關係と英米の斡旋 所謂二十一箇條問題 日支條約無効論の不成立 帝國の外交の基調と所謂廿一箇條問題	伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一
支那の排日問題 支那外交規範「機會均等」 主義と「廿一箇條」の考察	伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一
對支經濟政策と日本 加藤内閣の對支責務 支那に於ける日本勢力の衰退	伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一
對支經濟政策の基調 日米問題の解決と對支新方針	伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一
日米問題と對支政策 日支提携實現の機	伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一
惱める支那の諸相と日支關係の更新 對支經濟問題 對支不干涉方針の徹底	伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一 伊藤 正徳 (財經) 六一一

對支文化事業と二十一ヶ條問題	朱念祖 (外時) 六三三九	四六四
都會地偏重の對支交渉	後藤朝太郎 (外時) 六三三九	四六七
歐米の新傾向と日支の將來	波多博 (外時) 六三三九	四八〇
加藤内閣に對する支那國民の希望	股汝耕 (外時) 六三三九	四七七
奉直戦後の日本支那及列國對支自主々義と其試練	小村俊三郎 (外時) 六三三九	四七九
東支鐵道附屬地問題	松井等 (外時) 六三三九	四八〇
日支間の暗礁と共榮の基調	北川鹿藏 (外時) 六三三九	四八三
支那民心洞察の急務	宮脇賢之介 (外時) 六三三九	四八八
支那動亂と我對支政策	江榮實 (外時) 六三三九	四九三
本邦紡績の對支關係	白井哲夫 (外時) 六三三九	四九七
支那に於ける排日運動	太田宇之助 (外時) 六三三九	四七七
支那の動亂と對支政策	神坂靜太郎 (外時) 六三三九	四七七
對支方針確立の必要	河瀬蘇州 (國知) 六三三九	四七九
斷乎たる對支手段	泉哲 (外時) 六三三九	四九五
對支不干渉より援助主義へ	高木陸郎 (外時) 六三三九	四九七
支那の對日信賴	小田切萬壽之助 (外時) 六三三九	四九七
支那の排外運動と日本對策	白岩龍平 (外時) 六三三九	四九八
我對支新方策の基調	望月小太郎 (外時) 六三三九	四九九
對支協調外交と借款團	矢野仁一 (外時) 六三三九	五〇〇
日支兩國の經濟的關係	神田正雄 (外時) 六三三九	四九六
	澤村幸夫 (外時) 六三三九	四九七
	堀江歸一 (外時) 六三三九	四九七
	朱念祖 (外時) 六三三九	四六四

對支文化事業の競争	柏田忠一 (外時) 六三三九	四七二
對支文化事業と吾人の之に對する若干の希望	田崎仁義 (商濟) 六三三九	四七二
對支文化事業の使命	岡部長景 (外時) 六三三九	四九二
	(日支貿易に就ては「貿易」の條を見よ)	
清國貿易の景況	伊東祐毅 (統集) 四三三	三三二
北清通商論	鄭永昌 (明法) 四三五	三三〇
列國の對清貿易策	根岸信 (國經) 四三九	三三〇
日清兩國外國貿易の特色	瀧本美夫 (國經) 四三九	三三〇
清國の開市場及開港場	津村秀松 (國經) 四四〇	三三〇
支那に於ける葡萄牙人の貿易及植民の濫觴	遠藤源六 (國經) 四四一	三三〇
世界の貿易上に於ける印度及支那	伊吹山徳司 (日經) 四四一	三三〇
支那貿易論	田中穂積 (外時) 四四一	三三〇
清國事變と對清貿易	田中穂積 (日經) 四四一	三三〇
日支貿易の將來を論ず	河津暹 (法協) 六三三九	三三〇
支那貿易發展策	辻村楠造 (財經) 六三三九	三三〇
歐洲戰亂と支那貿易	[資料] 六四一	三三〇
支那海關の沿革及其組織	[資料] 六四一	三三〇
支那貿易に就て	戸田海市 (經叢) 六四一	三三〇
支那最近の外國貿易	鷺堂生 (財經) 六四一	三三〇
支那の輸出禁制策	戸田海市 (亞經) 六四一	三三〇
綿製品の輸入狀況	善生永助 (財經) 六四一	三三〇
對支問題の根本策	白岩龍平 (外時) 六三三九	四七二
對支政策轉換の好機會	望月小太郎 (國知) 六三三九	四七二
日支親善と對等條約	水野廣徳 (國知) 六三三九	四七二
邦人の中華民國に對する態度一般	泉善治 (長策) 六三三九	四七二
往古に於ける上海と日本の史的關係	新村出 (經叢) 六三三九	四七二
我對支外交に就て	西澤英一 (財經) 六三三九	四七二
官民の誤れる支那觀	後藤朝太郎 (法政) 六三三九	四七二
日露支三國の關係	植原悦二郎 (國知) 六三三九	四七二
成功せる對支外交	望月小太郎 (外時) 六三三九	四七二
岐路に立てる對支國策	中山謙介 (外時) 六三三九	四七二
議會に映したる支那問題	柏田忠一 (外時) 六三三九	四七二
支那に對する國民的覺醒	安田正篤 (外時) 六三三九	四七二
資本家の日支合同	神戸正雄 (時經) 六三三九	四七二
農業	農業 支那を見よ	
文化事業	稻葉君山 (外時) 六三三九	四七二
對支文化事業の更新	後藤朝太郎 (外時) 六三三九	四七二
支那文化事業に對する基礎智識	山口昇 (外時) 六三三九	四七二
對支文化事業に就て	桑原隲藏 (外時) 六三三九	四七二
對支文化事業に就ての希望	朱念祖 (外時) 六三三九	四七二
對支文化事業と二十一ヶ條問題	朱念祖 (外時) 六三三九	四七二
支那最近經濟事情と外國貿易の趨勢	河合利安 (統集) 六三三九	四七二
徳川時代支那貿易に使用せし支那語	武藤長平 (五經) 六三三九	四七二
戰亂の支那貿易に及ぼせる影響	善生永助 (財經) 六三三九	四七二
支那買辦制度に就て	木村増太郎 (亞經) 六三三九	四七二
戰後の支那市場と日本	善生永助 (財經) 六三三九	四七二
米國の對支貿易發展	善生永助 (財經) 六三三九	四七二
英國對支貿易の將來	善生永助 (財經) 六三三九	四七二
戰後の支那市場と日英米の貿易競争	善生永助 (財經) 六三三九	四七二
清代の廣東貿易	稻葉岩吉 (亞經) 六三三九	四七二
倭寇時代に於ける日韓漢の貿易品	後藤秀穂 (亞經) 六三三九	四七二
支那の電氣用品輸入貿易	善生永助 (財經) 六三三九	四七二
支那に於ける外國貿易趨勢	善生永助 (財經) 六三三九	四七二
貿易の發達階段より見たる日米支の關係	作田莊一 (亞經) 六三三九	四七二
天津港に於ける對日本貿易の現在及將來	吉野美彌雄 (亞經) 六三三九	四七二
開國以後最初の上海貿易	川島元次郎 (商濟) 六三三九	四七二
支那一般開市場の條約上の性質	齋藤良衛 (國際) 六三三九	四七二

支那一般開市場と外國の屬人的行政權との關係	齋藤 良衛〔國際〕大二三	支那法と孝道	東川 德治〔志林〕大九三
支那貿易の趨勢	〔資料〕六一三	支那に於ける法律思想の變化	板倉松太郎〔法記〕大九三
支那一般開市場と外國の屬人的行政權との關係	齋藤 良衛〔國際〕大二三	支那法と奴婢	東川 德治〔志林〕六一二
上古及中古の支那對西貿易及其路線	平沼 淑郎〔早商〕大二五	支那兩主義と法律	東川 德治〔志林〕六一二
唐令と日本令との比較研究	中田 薫〔國家〕四三七	元の經世大典並に元律	淺見倫太郎〔法協〕大二四
明會典に就て	淺井 虎夫〔京法〕四四三	支那今日の法制	及川 恒忠〔法研〕大二三
尙書に見えたる法の公示	淺井 虎夫〔京法〕四四三	支那刑法志	松 嶺 子〔法協〕四六三
唐六典に就て	淺井 虎夫〔京法〕四四三	舜帝の刑法に於ける刑の發達	田能村梅士〔明法〕四六三
唐律疏議に就て	淺井 虎夫〔京法〕四四三	大清刑律草案	岡田朝 郎〔志林〕四四三
明律に就て	淺井 虎夫〔京法〕四四三	清國の刑法草案に付て	岡田朝太郎〔法協〕四四三
清國既成法典及び法案に就て	岡田朝太郎〔志林〕四四三	支那に於ける恩赦の沿革	寺田 四郎〔辯協〕大元二
清國の法制	岡田朝太郎〔刑評〕四四三	支那往時の刑事政策一斑	不破 清警〔新聞〕大三一
支那に於ける法學問題雜感	杉 榮三郎〔國家〕大二七	支那法と姦罪	東川 德治〔志林〕大六一
支那に於ける法律生活の整理	長島鷲太郎〔辯協〕大六二	支那法と刑の執行猶豫	東川 德治〔京法〕大七一
支那法と自首	東川 德治〔志林〕大七二	中華民國に於ける刑政の一斑	板倉松太郎〔法記〕大九三
支那法と法官の責任	東川 德治〔志林〕大八二	中華に於ける動靜刑法の一斑	板倉松太郎〔法治〕大一一
中國立法事業の近況	板倉松太郎〔法記〕大八九	支那古代の刑罰思想	加藤 行吉〔辯協〕大二七
支那法と言論	東川 德治〔志林〕大九三		

漢代刑名一斑	東川 德治〔志林〕大三二	欽定大清商律を評す	松本 丞治〔法協〕四七三
支那法と妖書妖言罪	東川 德治〔志林〕大三二	清國新破産法を讀む	加藤 正治〔新報〕四四〇
支那古代の刑罰觀念に就て	加藤 行吉〔法政〕大四三	春秋時代に於ける楚國相續法	戸水 寛人〔國家〕四三〇
支那の國體を論じて新憲法に及ぶ	副島 義一〔志林〕四四三	支那古代の婚姻制度	東川 德治〔京法〕大六一
中華民國憲法制定に就て	清水 澄〔新報〕大二三	支那法上より見たる婚姻の豫約	東川 德治〔志林〕大六一
支那憲法如何	清水 澄〔國體〕大二一	支那法と養子	東川 德治〔志林〕大七一
支那憲法草案に於ける條約權	有賀 長雄〔國際〕大二二	支那民律と族制	東川 德治〔志林〕大七一
中華民國憲法	有賀 長雄〔外時〕大二一	支那に於ける住家の賃貸借	東川 德治〔志林〕大七一
支那憲法制定事業の沿革	有賀 長雄〔外時〕大九三	支那の債權抵鎖に就て	板倉松太郎〔志林〕大八二
支那監獄の起源	田能村梅士〔法協〕四六二	支那の利息制限法に就て	清水 泰次〔早法〕大二二
支那監獄の起源を讀みて	鈴木 宗言〔法協〕四七三	支那物權總論	田中 忠夫〔亞經〕大四九
清國の獄制	小河滋次郎〔刑評〕四四三	支那の債權抵鎖に就て	田中 忠夫〔亞經〕大四九
清國に於ける執行の効力に就て	光井 深〔新聞〕四四三	支那の利息制限法に就て	田中 忠夫〔亞經〕大五〇
支那古代の陪審制度	東川 德治〔志林〕大五八	北 清 專 變	有賀 長雄〔外時〕四三三
支那法と自首	東川 德治〔志林〕大七二	清國事件の真相	有賀 長雄〔外時〕四三三
支那に於ける司法制度	小山 松吉〔法記〕大七八	清國事件と列國	有賀 長雄〔外時〕四三三
支那及露西亞の司法制度	池田 虎二〔松吉〕大八二	南部山東省司教アンツェル氏の義和團論	宮本平九郎〔外時〕四三三
支那の裁判及監獄	稻田周之助〔外時〕大二三		
	關口 半〔朝司〕大二三		

不可撤兵論 有賀 長雄 (外時) 四三三 年 卷 三 三

清國事件と國際公法 有賀 長雄 (外時) 四三三 三 三

國際法學會と清國事件 有賀 長雄 (外時) 四三三 三 三

清國善後策 有賀 長雄 (外時) 四三三 三 三

清國事件に關する日英外交の顛末 有賀 長雄 (外時) 四三三 三 三

清國事變と我邦貿易との關係 廣瀬 吉雄 (統集) 四三三 一 二三四

勞働及び勞働階級 勞働及び勞働階級—支那を見よ

【シニョアー】 (William Nassau senior, 1790-1864)

利子制抑説上に於けるセニ 寺尾 隆一 (國家) 四四二 五 一〇

オルとガルニエ 演田 恒一 (三學) 六四一 九 七

ナツソウ・ウイリアム・シニョアーに於ける收穫遞減の法則 演田 恒一 (三學) 六四一 九 七

シニョアの價値論 濱田 恒一 (三學) 六四一 九 七

【ジノウイエフ】 (Georgij Sinowjew, 1883-)

黨とは何ぞや ジノウイエフ (マル) 六四四 三 一

プロレタリアートと科學 ジノウイエフ (マル) 六四四 三 一

【司馬遷】

司馬遷の自由放任説 小島 祐馬 (政治) 六八一 一

【支拂猶豫】

支拂猶豫と優先權の實行 中山 秀之 (明法) 四四一 二 二四

各國モロトリウムに就いて 十龜 盛次 (東經) 六三七〇 一 七七〇

支那猶豫令觀及向後の金融對策 鳩山 秀夫 (國家) 六四二 九 三

支拂猶豫令に因る手形權利の保存 三宅嘉十郎 (銀研) 六二二 五 三

佛の實例 妹尾 一雄 (銀研) 六二二 五 三

支拂猶豫法の結末如何 相原 文雅 (法研) 六二二 五 三

モロトリウムの概念と日英支拂猶豫法の結末如何 堀江 歸一 (エウ) 六二二 一 一三

支拂猶豫制度の種別に就て 大竹 虎雄 (法政) 六二二 一 一三

モロトリウムに關する研究 齋藤常三郎 (法叢) 六二二 一 一三

單に支拂猶豫を乞ふ場合と認諾判決 中村 宗雄 (早法) 六二二 一 一三

英國一般支拂猶豫條例の解 小野 實雄 (新聞) 六二四 一 二四〇七

説 英國支拂猶豫條例の管見 十龜 盛次 (東經) 六三七〇 一 七七〇

英國に於ける支拂猶豫法 十龜 盛次 (東經) 六三七〇 一 七七〇

米國出征軍人軍屬及其の家族の保護を目的とするモラトリアムに就て K K 法學士 (日經) 六三二 一 六

英佛獨に於けるモラトリアムの一斑 加納 久朗 (國家) 六三三 四 四

岩崎 博 (銀研) 六三二 五 三

【紙幣】 貨幣を見よ

【西比利亞】

西比利亞旅行談 有賀 長雄 (外時) 四三五 五 五

浦潮斯德と旅順及大連 下村 宏 (外時) 四三五 五 五

露領堪察加視察記 進藤 紫朗 (保雜) 六四一 五 五

西比利亞に於ける民族 伊達 三郎 (外時) 六九三 二 二

西比利亞擾亂經過 小山精一郎 (外時) 六九三 二 二

西比利亞の情勢と對策 播磨 檜吉 (外時) 六九三 二 二

西比利問題の現狀と對策 今井 時郎 (外時) 六九三 二 二

西比利の研究 今井 時郎 (外時) 六九三 二 二

露國極東自由港問題 田中 榮 (國經) 四四〇 三 六

露領亞細亞の移民事業 西比利亞植民 最近西比利亞經濟事情 西比利の鑛業と英國 西比利亞の經濟的意義 西比利貿易の將來 西比利亞の經濟援助 浦港以北の西比利亞諸港 西比利の政治及經濟現況 (講演)

露國沿海州及黑龍州の鑛山に就て 野村 徹 (外時) 六八三〇 三 六〇

西比利亞の通貨事情 肥田 啓造 (財經) 六九七 二 二

露國黑龍江地方侵略史 煙山專太郎 (外時) 六三三 三 三

西比利の將來に及ぼす三勢力 上原 好雄 (外時) 六七二 八 二九

國際法上より見たる西比利問題 泉 哲 (外時) 六九三 三 〇

日米露三ヶ國とカムチャカ 淺見 登郎 (早政) 六二四 一 一

西比利鐵道の落成 ルロアゴニー (外時) 四二二 一 九

對西比利亞鐵道策 佐藤 宏 (外時) 四三二 二 二

【西比利亞】【私法】

西比利亞鐵道の完成 宮本平九郎〔外時〕四五 五〇
 西比利亞鐵道複線の效力 巽 來治郎〔外時〕四〇 一〇 二七
日本の出兵
 チエツクスロツアツク軍隊に關する承認 立 作太郎〔外時〕六七 二八 三三
 西比利亞出兵の眞意義 泉 哲〔國國〕六七 六 六
 シベリヤ出兵の法理的論據と先例 高橋 作衛〔國際〕六七 一六 六
 西比利亞戦争と戦利品問題 小山精一郎〔國際〕六七 一七 二
 西比利亞出兵の可否を論ず 市村 光惠〔法論〕六七 一〇 一〇
 チエツク軍救援の眞意義 泉 哲〔外時〕六七 二七 三二
 日米浦鹽出兵に就て 末廣 重雄〔外時〕六七 二八 三三
 帝國軍艦員の浦鹽港上陸と露國政府の態度 立 作太郎〔外時〕六七 二七 三三
 西伯利を如何にするか 蜷川 新〔外時〕六八 三〇 三六
 西比利亞撤兵論 板倉 卓造〔三學〕六九 一四 一三
 尼港事件と世論是非 蜷川 新〔外時〕六九 三三 三六
 尼港問題と蘇丹事件 田川大吉郎〔洋經〕六九 一 九
 北樺太占領の法理的批判 小山精一郎〔外時〕六九 三三 三九
 西伯利撤兵と朝鮮統治 中尾 龍夫〔外時〕六九 三三 三五
 我軍撤去と極東露領 中尾 龍夫〔外時〕六九 三三 三五
【私法】 參照||商法。法學。法律。民法。
 公法私法の別を評す 井原 師義〔法協〕四七 二 五

公法私法を區別する標準 八橋 容〔法協〕四三 一七 二
 八橋氏の公法私法の區別説を讀む 日山彦十郎〔新報〕四三 九 九七
 公法と私法の區別を讀す 戸水 寛人〔國家〕四三 一五 一六
 私法と研究と社會法 志田鈿太郎〔志林〕四五 四 三六
 私法制度に於ける内外表裏の觀察 志田鈿太郎〔新報〕四五 一三 六七
 行政法と公私法の接觸 織田 萬〔明學〕四五 一 八九
 公法私法の區別に就て 井上 密〔京法〕四五 一 四
 私法は法學の全部に非ず 美濃部達吉〔國家〕四五 二〇 八
 獨逸近時に於ける私法學界の趨向 石坂音四郎〔京法〕四五 三 六七
 公法に依る民事法系の變形 佐々木惣一〔京法〕四五 三 三
 臺灣私法の完成 ノイマイヤー「獨逸殖民地に依る私法上の混交關係」(譯) 福田 徳三〔國經〕六〇 一 三
 公法と私法の關係を論ず 吉阪 俊藏〔法協〕六二 三 一
 公法上の行爲に於ける私法名義 美濃部達吉〔國家〕六二 二七 一〇
 公法と私法との中間區域 市村 光惠〔京法〕六三 九 二四
 私法の社會的傾向 美濃部達吉〔國家〕六三 二八 一九
 松本博士私法論文集(第一) 松本 丞治〔新報〕六三 二四 九

卷)の發行
私法の適用を論ず

私法上に於ける決議の性質 本島(臺灣)人は内地人と 伊藤 正介〔臺法〕六九 一四 一
 公法及私法 寺田 四郎〔國國〕六〇 九 二
 馬耳幹半島諸國の私法制 希臘唯一の法曹テオフラストと希臘私法 寺田 四郎〔國國〕六〇 九 七
 私法適用の論理 廣濱 嘉雄〔法叢〕六三 九 二
 私法の缺陷に就て 西本辰之助〔法研〕六三 二 二
 マルクの下落と私法關係 小町谷操三〔志林〕六三 二六 二〇
 震災後の私法觀 遊佐 慶夫〔早法〕六三 三 一
 公法私法の區別を否認する見解に就て 渡邊宗太郎〔法叢〕六三 二 五
 ベンタムの個人主義的私法原理 平野義太郎〔法協〕六三 四 二
 私法學の對象と方法とに就いて 廣濱 嘉雄〔社科〕六四 一 四
 自然法の私法に對する適用について 平野義太郎〔法協〕六四 三 九
 公法關係と私法關係の接觸 河村 大助〔辯協〕六四 二九 九
 私法の方法論に關する一考察 我妻 榮〔法協〕六五 四 六

行政及司法を論ず

行政及司法を論ず 奥田 義人〔法協〕四八 三 三
 民事と行政事件 江木 衷〔新報〕四六 三 二五
 司法權の範圍 呼雨 山人〔新報〕四三 七 七
 司法制度の改良に就て 菊池 武夫〔新報〕四三 九 九
 司法權擴張論 河原榮次郎〔新聞〕四三 一 三
 司法制度の改正 松波仁一郎〔志林〕四三 三 三
 司法權の範圍 松波仁一郎〔新聞〕四三 一 三
 立法司法及行政の區別及其意義 寺崎 勝治〔新聞〕四三 一 二〇
 中古に於ける司法の概略並に當時の一般法制に對する見解 美濃部達吉〔明學〕四〇 一 一
 民事司法關係法規の研究と我(京都)大學講座制度 山内 正瞭〔新報〕四二 一八 三
 司法權獨立の意義 雄本 朗造〔京法〕四二 三 六
 岡松博士の内地臺灣司法共通を讀む 穂積 八東〔辯協〕四二 二 二六
 内地臺灣司法共通法案に就て 增島六一郎〔辯協〕四二 二 二八
 人權擁護の必要を論じて 中村啓次郎〔辯協〕四二 三 二八

【私法】【司法】

參照||裁判所。裁判所構成法。少年裁判所。陪審制度。領事裁判。

法制度の革新に及ぶ
司法政策論
余か司法上の經歷
陪審制度を論じて司法権の
參與に及ぶ
司法制度改良案一斑
司法時弊
行政整理と我司法省
司法部の行政整理如何
國家の司法權と刑事陪審制
度
司法制度の改正に就て
司法心理の研究
司法時感
司法統一論
司法大臣は辯護士より推薦
すべし
司法統一論
松田司法大臣に望む
司法改革に就て
海軍問題と司法權
司法權の獨立
尾崎司法大臣に望む
俗人より見たる司法

鳩山 和夫	〔辯協〕	四二	二二	二七
新井要太郎	〔辯協〕	四三	二二	二七
横田 國臣	〔法記〕	四四	二〇	一
仁保 龜松	〔京法〕	四五	五	一九
大澤 眞吉	〔辯協〕	四六	一四	一九
花岡 敏夫	〔辯協〕	四七	一四	一五
磯部 尙	〔辯協〕	四八	一六	一六
原 嘉道	〔新聞〕	四九	一	七二
原 夫次郎	〔刑評〕	五〇	四	九二
水口 吉藏	〔國國〕	五一	一	三
皆川 治廣	〔法記〕	五二	二二	四五
花岡 敏夫	〔辯協〕	五三	二七	一七
増島六一郎	〔辯協〕	五四	二七	一七
笠原文太郎	〔辯協〕	五五	二一	一七
土屋理喜治	〔辯協〕	五六	二二	一八
笠原文太郎	〔新聞〕	五七	二一	一八
野村 嘉六	〔新聞〕	五八	二一	一八
江木 千之	〔國國〕	五九	二二	一七
植原悦二郎	〔國國〕	六〇	二二	一七
大澤 眞吉	〔辯協〕	六一	二八	一八
田坂 貞雄	〔辯協〕	六二	二八	一九

司法革新論
學徒の見たる司法權獨立問
題
退京に際し再び司法權統一
を論ず
大浦内相に對する告發事件
を論じて司法省官制の改
正を促す
司法大臣と檢察事務
司法上の共助に司法事務共
助法上の送達及び令狀の
共助を論ず
政治の原理より見たる司法
權の獨立と大浦氏の不起
訴
司法統一案を通過するは我
憲法史上の務なり
司法の尊嚴
立憲國に於ける行政、司法、
立法三權の關係
司法の危機
司法政策の失敗
臺灣裁判問題と司法統一
司法制度の革新

林 立夫	〔新聞〕	六三	一	九四九
富田 山壽	〔京法〕	六四	一〇	一一
土屋理喜治	〔辯協〕	六五	一九	一九
大澤 眞吉	〔辯協〕	六六	一九	一九
笠原文太郎	〔辯協〕	六七	一九	二〇〇
溝淵 孝雄	〔法記〕	六八	二五	五
布施 辰治	〔新聞〕	六九	一〇	五
増島六一郎	〔辯協〕	七〇	二〇	一
増島六一郎	〔辯協〕	七一	二〇	一
植原悦二郎	〔國國〕	七二	二四	九
伊藤 秀雄	〔新聞〕	七三	二五	九
新井要太郎	〔辯協〕	七四	二二	九
土屋理喜治	〔辯協〕	七五	二二	九
増島六一郎	〔新聞〕	七六	二二	九

司法部に社會政策を適用す
べし

笠原文太郎〔新聞〕六六 年 卷 一三四號

朝鮮並に臺灣談合事件の經
過を敘して司法統一の緊
要を論ず
立憲政體と立法司法及行政
首腦を行政部に押へられた
る我司法制度
司法統一私論
司法と民意
「司法と民意」を讀む
司法權と國民の信頼
南支那に於ける我國の司法
權を臺灣に領有するの議
軍隊式司法制度
司法制度の改善
現行の司法制度
比律賓司法組織及法學教育
に付きて
司法改善の急
司法制度の改善
司法改善と陪審制(講演)
司法の民衆化(講演)

大井 靜雄	〔辯協〕	六六	二一	一〇
松本 重敏	〔新聞〕	六七	一	三六
川手 忠義	〔辯協〕	六八	二一	一〇
早川彌三郎	〔國國〕	六九	二一	一〇
中島 玉吉	〔法叢〕	七〇	一	四
石田文次郎	〔法叢〕	七一	一	四
平澤 均治	〔辯協〕	七二	一	六
三好 一八	〔臺法〕	七三	一	二
中島 玉吉	〔法叢〕	七四	一	二
高野 金重	〔辯協〕	七五	一	二
入山祐次郎	〔辯協〕	七六	一	二
花岡 敏夫	〔辯協〕	七七	一	二
宮島 次郎	〔辯協〕	七八	一	二
高野 金重	〔辯協〕	七九	一	二
卜部喜太郎	〔辯協〕	八〇	一	二
永屋 浩	〔辯協〕	八一	一	二

司法時事論
國民の司法參政
大勢順應の司法制度
司法部の革新に就て
司法權獨立の兩意義
司法部内改善私見
司法革新の提議
司法制度改善の急務
司法と具體的妥當性
司法的行動の眞諦
司法制度改善の急要
行政整理と司法省
司法と國民の後援
司法機關改善の急務を論し
て陪審制度に及ぶ
司法と風教
大震災と司法
司法部の革新に就て
司法時事論
司法保護の成績
財政整理と司法制度
南滿洲鐵道附屬地に於ける
司法權作用の奇現象
思想善導と司法教育

宮島 次郎	〔辯協〕	八二	二五	三
猪股 洪清	〔辯協〕	八三	二五	六
平山六之助	〔辯協〕	八四	二五	九
横田 秀雄	〔法記〕	八五	二二	二
江木 衷	〔新聞〕	八六	二一	二
高橋武一郎	〔新聞〕	八七	二一	二
松本 重敏	〔新聞〕	八八	二一	二
原 嘉道	〔財經〕	八九	二一	二
牧野 英一	〔朝司〕	九〇	二一	二
栗山 兼吉	〔朝司〕	九一	二一	二
原 嘉道	〔新聞〕	九二	二一	二
三上 英雄	〔新聞〕	九三	二一	二
小室 春富	〔辯協〕	九四	二一	二
原 嘉道	〔新報〕	九五	二一	二
佐伯 復堂	〔新聞〕	九六	二一	二
不破 清警	〔新聞〕	九七	二一	二
横田 秀雄	〔法記〕	九八	二一	二
宮島 次郎	〔辯協〕	九九	二一	二
宮城長五郎	〔辯協〕	一〇〇	二一	二
瀬尾 義治	〔辯協〕	一〇一	二一	二
三田 勝	〔法曹〕	一〇二	二一	二
原 嘉道	〔法新〕	一〇三	二一	二

【司法】

司法部改善の第一歩	横田千之助〔法新〕六三	一七
司法事務刷新に對する管見	久田 博人〔法新〕六三	一七
司法部改善に就ての所感	安達元之助〔法新〕六三	一七
政權の授受と司法權の濫用	播磨 龍城〔新聞〕六三	一七
ミツナルスタイン氏の司法改良論を讀みて	竹井 廉〔新聞〕六三	一七
司法改善の二三	齋藤 巖〔新聞〕六三	一七
司法省内の行政整理には	供託局を廢止して貰ひた	
い	Y H 生〔新聞〕六三	一七
司法部は更に民衆化せよ	佐伯 復堂〔新聞〕六三	一七
司法權の威信問題	綠 翠老〔新聞〕六三	一七
司法制度改善に關する意見書	大塚 春富〔新聞〕六三	一七
司法制度の改善策	江口 巴港〔新聞〕六三	一七
司法教育普及の機	原 嘉道〔正義〕六四	一七
司法權の擁護	卜部喜太郎〔正義〕六四	一七
司法改善問題の二三	寺崎 勝治〔新報〕六四	一七
司法部の實質的獨立を論じ	大塚 春富〔辯協〕六四	一七
司法省廢止問題に及ぶ	岸井 辰雄〔辯協〕六四	一七
司法制度の革新を促す	宮島 次郎〔辯協〕六四	一七
司法制度改善と中國辯護士大會の決議		
全大日本帝國に司法權獨立		

の保障を與へよ	原 嘉道〔法新〕六四	一七
司法權運用に對する希望	横田 秀雄〔法新〕六四	一七
(講演)	鈴木喜三郎〔法新〕六四	一七
司法權の神聖と獨立に付き	穆 堂 生〔法新〕六四	一七
司法制度改善私見	横田 秀雄〔新聞〕六四	一七
司法部將來の爲めに	土屋 倫啓〔新聞〕六四	一七
司法刷新の急務	播磨 龍城〔新聞〕六四	一七
所謂司法權問題	播磨 龍城〔新聞〕六四	一七
選舉干渉と司法權		
司法制度、裁判事務取扱と		
國民生活安定淳風美俗維		
持、司法制度の改善	松倉慶三郎〔新聞〕六四	一七
司法制度改善意見	松倉慶三郎〔新聞〕六四	一七
政黨内閣の確立と司法大臣	坂本 靱衛〔新聞〕六五	一七
の地位		
臺灣法院を論ず	鈴木 宗言〔志林〕六五	一七
臺灣の司法制度に就ての所		
感	新田 繁水〔新聞〕六五	一七
臺灣司法制度の革新	谷野 格〔臺法〕六八	一七
獨立せる臺灣の司法	三好 一八〔臺法〕六八	一七
朝鮮	有賀 長雄〔外時〕六九	一七
韓國に於ける日本の司法權		

韓國の司法制度と法律	松寺 竹雄〔法政〕四二	三
韓國に於ける司法制度に就		
て	江木 翼〔國家〕四二	一〇
新統監府の司法部刷新論	羽 山〔新聞〕四二	一〇
朝鮮司法の回顧と其のデレ		
ンマ	匿名氏〔新聞〕六七	一〇
朝鮮司法制度の改革	宮脇 梅吉〔新聞〕四四	一〇
朝鮮司法界の現状	國分 三亥〔新聞〕四五	一〇
朝鮮司法界に對する回憶	渡邊 暢〔朝司〕六三	一〇
朝鮮司法界に對する回憶	草場林五郎〔朝司〕六三	一〇
獨逸國司法實務談	小宮三保松〔法記〕四三	一〇
獨逸司法事務問答	小宮三保松〔法記〕四三	一〇
獨逸殖民地司法制度	小山 溫〔法協〕四九	一〇
其		
英國の司法制度に就て	マリツク〔辯協〕六三	一〇
英國の司法制度	三木猪太郎〔新聞〕六四	一〇
佛蘭西司法組織概要	寺田 四郎〔辯協〕六三	一〇
佛蘭西の司法權に參與する婦		
人	鶴峯 四郎〔法記〕六六	一〇
米國司法制度の不完全	磯谷幸次郎〔新聞〕四四	一〇
米國に於ける司法制度	田宮準一郎〔國國〕六五	一〇
伊太利の司法制度	眞鍋 虛舟〔辯協〕六五	一〇
比律賓の司法界(講演)	松波仁一郎〔辯協〕六九	一〇

【司法】【司法官】

支那に於ける司法制度	小山 松吉〔法記〕六七	一〇
支那及露西亞の司法制度	池田寅二郎〔法記〕六七	一〇
ソヴェト露國の司法制度	稻田周之助〔外時〕六三	一〇
及訴訟手續		
關東州司法制度改善論	小山 松吉〔法曹〕六二	一〇
判事、檢事登用試験委員及	小野 實雄〔新聞〕六二	一〇
辯護士試験委員の組織を		
論ず	田部 芳〔法協〕四三	一〇
無監督の司法官	松田 正久〔刑評〕四三	一〇
司法官養成の方法を論じ判		
檢事登用法規改正の必要	磯谷幸次郎〔新報〕四三	一〇
に及ぶ		
司法官試験の事務修習の改		
良に就て	安島 次郎〔辯協〕四四	一〇
司法官の常識問題	雄本 朗造〔京法〕六二	一〇
司法官の進退に就て	井本 常治〔辯協〕六二	一〇
普國司法官採用試験規則	榮 當重〔法協〕六三	一〇
最近に裁判と司法官の獨立	大場 茂馬〔國國〕六三	一〇
米國の新法官罷免制と外人		
保護	米田 實〔國國〕六三	一〇
司法官増俸の議に就て	大澤 眞吉〔辯協〕六六	一〇
法官諸公に「無刑録」を薦		

司法官吏増俸と人物の精練
大法官論
本年(大正九年)度施行司
法官試験刑法第一問に就
て

石山 彌平〔辯協〕六七三
無名氏〔新聞〕六七三
川手 忠義〔辯協〕七八三

予の觀たる司法官停年法
司法官停年制に就て
陪審制度及び法官停年制の
違憲問題

谷 健次郎〔法政〕六九二
村瀬 孝文〔新聞〕六九二
不破 清警〔新聞〕六九二

英國大法官と王太子
司法官諸氏に望む

宮地 貞一〔法叢〕六二〇
播磨 龍城〔新聞〕六一一

青年司法官に望む
司法官と工匠鑿孔
司法官と警察官の抗爭に就
て

横田 秀雄〔法新〕六二三
老法 曹生〔新聞〕六二三
播磨 龍城〔新聞〕六二三

司法官停年法廢止論
司法官及び辯護士の養成
司法官の態度

荒木 櫻洲〔新聞〕六三三
不破 清警〔新聞〕六三三
齋藤常三郎〔法叢〕六二四

司法官諸氏に告ぐ
速に定年退職制を廢すべし
司法官の行動果して然るか
憲法第五八條第二項の解釋

横田 秀雄〔辯協〕六二四
原 嘉道〔法新〕六二四
橋高 香却〔新聞〕六二四

司法監察官新設の議を難す
司法警察權行使論
臺政革新と司法警察
法廷警察權の行使に就て
司法警察官の被告人留置權
司法警察官の被疑者釋放權
と適用せられざる法律の
效力

上昌益三郎〔新聞〕六七二
伊藤 正介〔臺法〕六九二
三好 一八〔臺法〕六九二
大澤 眞吉〔辯協〕六九二
永山章次郎〔臺法〕六九二

寛〔新聞〕六二五
貨幣。銀行。金融。經濟
學。資本家。資本主義。
資本稅。資本利子稅。商
業。生産。貯蓄。投資。
富。トラスト。利子。利
潤。勞働と資本。(マル
クス資本論は「マルクス
資本論」を見よ)

小田 寛〔新聞〕六二五
參照 貨幣。銀行。金融。經濟
學。資本家。資本主義。
資本稅。資本利子稅。商
業。生産。貯蓄。投資。
富。トラスト。利子。利
潤。勞働と資本。(マル
クス資本論は「マルクス
資本論」を見よ)

資本論
「財」「財産」及び「資本」
帝國主義と資本國
不變の資本可變の資本
資本觀念に關するクラーク
教授の學說を評論す
保護貿易と資本の作成

山内 正暉〔志林〕三九八
テリイ〔國家〕三九二
坂西 由藏〔國經〕四〇二
關 一〔國經〕四〇三
福田 徳三〔新報〕四二八
中川角太郎〔新報〕四二八
渡邊 鐵藏〔國家〕四三三

【資本】

資本の成立と貯蓄との關係
マルクスの不變可變資本と
アダム・スミスの固定流通
資本との關係に就ての研
究
資本制の發展
資本構成の原因
資本制の分類
スミスの交換起原論及土地
と資本との別點に就て福
田博士に教を乞ふ
資本家的集積說の研究
遊離資本と金利
資本家的集積說の研究
資本の所有
資本の實體に就いて
資本の獨立と産業の獨立と
は兩立せず
資本の概念に就て河上博士
の教を乞ふ
資本の眞概念の發展
資本制發展の四大特徴
河上博士の資本の概念及利

山崎覺次郎〔法協〕四三二
福田 徳三〔國經〕四二六
服部 春一〔東經〕四二六
高城仙次郎〔國經〕四二六
柳田 民藏〔京法〕四二六

寺尾 隆一〔新報〕四五三
高田 保馬〔京法〕四五七
熊崎 良〔國經〕六二七
高田 保馬〔京法〕六三九
瀧 正雄〔京法〕六三九
堀切善兵衛〔三學〕六三八
丹羽 豊〔東經〕六四七
河上 肇〔經叢〕六五三
丸谷 喜市〔國經〕六五二
河上 肇〔經叢〕六五三
高城仙次郎〔三學〕六五〇

【司法警察】

より所謂司法官停年制の
可否に及ぶ
定年退職制の廢止と司法官
優遇の議には前提案件と
して忘れてはならぬ
司法官優遇の本義
裁判所書記登用試験の本質
に就て當局の蒙を啓く
法廷に於ける司法官
司法官停年制の改廢と登庸
の門戸開放

松田 源造〔新聞〕六四四
播磨 龍城〔新聞〕六四四
豐島 武夫〔新聞〕六五二
豐島 武夫〔新聞〕六五二
望 武夫〔新聞〕六五二
望 武夫〔新聞〕六五二
望 武夫〔新聞〕六五二

【司法警察】

獨逸國司法警察官
所謂法廷警察に付て
刑事警察の革新
朝鮮の刑事警察
獨逸國に於ける司法警察官
と檢事との實務取扱上の
關係及び檢事と司獄官と
の職務上の關係
歐米の刑事警察及犯罪捜査
の實況

應 當 融〔法記〕四五二
富田 山壽〔京法〕四五二
水野鍊太郎〔刑評〕四五二
松井 茂〔刑評〕四五二
岡田 庄作〔法記〕四五二
太田 政弘〔刑評〕四五二

【資本】

子論の貨幣説を讀む	池田 實	〔商經〕	大五	一	年	卷	二
河上博士の資本論に就て	高城仙次郎	〔國家〕	大五	三〇			二
純粹資本(資金)と資本財との差別及び關係を論じて諸家の批評に答ふ	河上 肇	〔經叢〕	大六	五			二
資本の變化と其限界	小林 行昌	〔會計〕	大六	一			四
資本の眞理「放資原價説」	興梠本太郎	〔國經〕	大六	三			平六
資本なる語の商法上の意義を論ず	内田 銀藏	〔經叢〕	大六	四			三
資本に關する二個の概念	志田鉦太郎	〔會計〕	大六	二			四
資本經濟に於ける矛盾と調和	飯島 幡司	〔國經〕	大六	三			一
資本の將來	楠田 民藏	〔我等〕	大八	一			七
社會主義者の「歴史的法的」資本觀概略	三浦 武美	〔國經〕	大九	二			四
アダム・スミスの資本概念に就て	小泉 信三	〔三學〕	大九	一			七
クラーク教授の資本の機能に就て	黒川 芳藏	〔同論〕	大一〇	一			四
Capital なる語の沿革に就て	金原賢之助	〔三學〕	大一〇	五			六
「資本」なる名辭の變遷	長谷田泰三	〔國家〕	大一〇	三五			八
福田博士「資本増殖の理法」	岡 乾治	〔三學〕	大一〇	一五			二〇

を評す	河上 肇	〔社問〕	大二	一			二〇
私經濟學上に於ける資本の概念に關する一考察	上野 道輔	〔經論〕	大二	一			二
資本の報酬	佐藤 輝雄	〔國經〕	大二	三			六
資本の本質に關する一論争	瀬谷佐次郎	〔同論〕	大二	一			八
資本の蓄積と労働者の位置の不安	金原賢之助	〔三學〕	大二	一六			四六
資本集積の必然的傾向	小泉 信三	〔財經〕	大二	九			五〇
大減費から大増産へ	河上 肇	〔社問〕	大二	一			三六
資本の流通と有價證券	小林丑三郎	〔經商〕	大二	一			四
福田博士の「資本増殖の理法と資本主義の崩壊」について	福田敬太郎	〔國經〕	大二	三四			二一三
土地國有と資本國有	河上 肇	〔我等〕	大二	四			三
土地國有と資本國有	武藤 山治	〔洋經〕	大二	一			一〇三
クラークの資本觀	秋守常太郎	〔洋經〕	大二	一			一〇三
資本配備率の研究に於ける基礎概念としての資本	高田 保馬	〔國經〕	大二	三四			一
資本制の Mechanism としての戦争	中村 茂男	〔經商〕	大二	三			一
資本團體の觀念	松下 芳男	〔法治〕	大二	三			二
純資本及留保益金に絡まる若干問題	猪股 淇清	〔法新〕	大二	一			二〇
	中村 茂男	〔經商〕	大二	三			八

「資本蓄積論」に就いて	ブライス	〔マル〕	大三	一	年	卷	三
資本の計理學的觀念	高瀬莊太郎	〔商研〕	大三	三			二
資本の定義	小林 三子	〔商經〕	大三	一			二
マルクス説に於ける資本の起源	河上 肇	〔經叢〕	大三	一八			二
資本の社會的性質	河上 肇	〔經叢〕	大四	二〇			一
自己資本と他人資本とに就て	中村 茂男	〔會計〕	大四	一六			一
無産階級運動の「方向轉換」と「資本の現實的運動」	福本 和夫	〔マル〕	大四	三			二
現代社會に於ける資本の構成	出井 盛之	〔社政〕	大四	一			五
資本の社債化と其の保護に就て	葛雄 一郎	〔金融〕	大四	二			三
カール・デイトルの資本理論について	金原賢之助	〔三學〕	大四	一九			二
二大私經濟學者の資本學說	青地玄三郎	〔長榮〕	大四	七			二〇
資本形成論	勝田 貞次	〔商專〕	大四	五			一三
私經濟學者ニクツツシユ及ビシエーアの資本學說に關する若干の研究	駒井清次郎	〔商研〕	大四	四			一
經濟學上及び貸借對照表論	林 健二	〔國經〕	大四	三九			三
上の資本概念	岡野 正平	〔商經〕	大四	一			三六
自己資本の意義							

【資本】 【資本家】 【資本主義】

純理經濟學上に於ける資本の概念	酒井正三郎	〔國經〕	大五	四〇			二
オスバール教授の資本學說の研究	田中藤一郎	〔商叢〕	大五	三			一
英米資本の争新	荒畑 寒村	〔マル〕	大五	四			三
セいの資本所得論	増井 幸雄	〔三學〕	大五	二〇			六
資本蓄積の行き詰まり	河上 肇	〔社問〕	大五	一			七〇
銀行及資本家の國民的義務	三倉 滋	〔京法〕	大九	一			三
資本家の思想の一例	河上 肇	〔社問〕	大八	一			九
資本家の覺醒	松本 芳夫	〔三學〕	大九	四			一
カウツキー「恐慌と資本家經濟」	楠田 民藏	〔我等〕	大九	二			八
職業的企業家の成立と資本家との闘争	向井 鹿松	〔三學〕	大四	一九			三
資本家と労働組合法	堀江 歸一	〔エウ〕	大四	三			二〇
資本家の日支合同	神戸 正雄	〔時經〕	大五	一			四三
資本主義	参照 工業、産業、商業、労働と資本。						
資本家主義	松崎藏之助	〔新報〕	四四	一一			二二五
宗教改革時代と資本主義	阿部 秀助	〔三學〕	四四	三			六

【資本主義】

近世資本主義と地代説	阿部 秀助	〔三學〕六二	七	三
資本主義の社會的研究	阿部 秀助	〔三學〕六三	八	六
猶太人と資本主義	落水居逸人	〔東經〕六三	六九	七五九
米國に於ける軍國主義と資本主義	森戸 辰男	〔外時〕六六	二五	二九二
露西亞に於ける資本主義の發達の特徵と最近の大革命	米田庄太郎	〔經叢〕六八	七六	一一六
Kapitalismus なる名辭に就	森戸 辰男	〔國家〕六七	三三	五七七
如何に英米資本主義に對するか	前田幸太郎	〔亞經〕六九	四	一
行詰れる失業問題と資本主義經濟	北澤新次郎	〔財經〕七〇	八	四
資本主義と支那問題	作田 莊一	〔亞經〕七〇	五	四
歐洲資本主義の經濟的崩壊	高橋 龜吉	〔洋經〕七〇	一	九五四
資本主義と物質的進歩に於ける其の貢獻	岩下 堅造	〔社政〕七一	一	二八
資本主義的生産組織の真相	河上 肇	〔社問〕七一	一	三〇
資本主義國家の一歸着點	大内 兵衛	〔原バ〕七一	一	一
(獨逸戰後の經濟狀態)				
現時の世界の財政狀態より見たる資本主義對社會主義				

義(譯)	黑川 芳藏	〔同論〕六一	一	九
資本主義の成熟と企業者の地位	增井 光藏	〔國經〕六一	三三	二
近世資本主義起源考	阿部 秀助	〔三學〕六一	一六	三六
近世資本主義起源考續論	阿部 秀助	〔三學〕六一	一六	二
近世資本主義と殖民經濟	阿部 秀助	〔三學〕六一	一七	一四
資本主義崩壊必然論に對する一考察	三邊 金藏	〔財經〕六一	一〇	三六
福田博士の「資本増殖の理法と資本主義の崩壊」について	河上 肇	〔我等〕六一	四	三
人間關係の基本形式と資本主義社會の本質	波多野 鼎	〔我等〕六一	四	六
資本主義經濟學と自然法則	河上 肇	〔經叢〕六一	一六	二
資本主義的經濟組織の本質と作用	金原賢之助	〔三學〕六一	一七	九
會計眼に映ずる資本主義的生産の運命	中村 武男	〔經商〕六一	二	五
我國農村の資本主義化	河上 肇	〔我等〕六一	一五	四
英國議會の資本主義論戰	堀江 歸一	〔エコ〕六一	一	一〇
個人主義(資本主義)及び社會主義	河上 肇	〔社問〕六一	一	四三
資本主義運動と社會政策	澤田 謙	〔社政〕六一	一	三四
勞農露國の「開國」と「資				

本主義降伏令	福田 徳三	〔商研〕六一	二	一
近世資本主義の起源(ブレシタノ)	石田秀一郎	〔同論〕六一	一	一〇
資本主義の概念(ベロウ)	石田秀一郎	〔同論〕六一	一	二
ルクセンブルグ「資本主義社會に於ける再生産の問題」(譯)	久留間敏造	〔原バ〕六一	一	三
「近世資本主義」第二版序文緒論に於けるゾンバル	高木 壽一	〔三學〕六一	一八	七
復興對策としての資本主義	高橋 龜吉	〔マル〕六一	一	二
資本主義の没落時代	ヴァルガ	〔マル〕六一	一	二六
資本主義の社會とは何ぞや	河上 肇	〔社問〕六一	一	四五七
資本主義のヨーロッパと社會主義のロシア	越智 道順	〔原バ〕六一	一	一七
金融資本主義雜考	谷口彌五郎	〔我等〕六一	一	七
一九二五年の世界資本主義	リトヴィノフ	〔マル〕六一	一	三
資本主義の自然觀	中込本治郎	〔社政〕六一	一	六〇
資本主義發生行程に於ける農民一擧	高橋誠一郎	〔社政〕六一	一	六一
資本主義安定とポリシエツイキ	大竹 博吉	〔外時〕六一	一	五〇四
資本主義の概念、本質及成立	林 癸未夫	〔早政〕六一	一	二

【資本主義】 【資本稅】

資本主義とは何ぞや(講演)	河上 肇	〔和バ〕六一	一	特別號
農業經營に於ける資本主義原則	東畑 精一	〔農經〕六一	一	一
資本主義の發達、效果及其歸趨(マール教授の産業論を讀む)	向井 鹿松	〔社科〕六一	一	一
社會及資本主義的社會	林 癸未夫	〔早政〕六一	一	三四
ドイツに於ける資本主義の發達	石濱 知行	〔社政〕六一	一	六九
露西亞は資本主義へ進みつつあるか	劍村 平太	〔マル〕六一	一	四
搾取と資本主義	丸谷 喜市	〔社政〕六一	一	六九
資本主義及資本主義的生産方法	中川 新吾	〔商經〕六一	一	四三
國債償還と資本課税	舞出長五郎	〔國家〕六一	一	三三
資本課税論	堀江 歸一	〔三學〕六一	一	二
資本課税反對論	舞出長五郎	〔國家〕六一	一	三三
資本税と公平負擔	神戶 正雄	〔經叢〕六一	一	三
資本税の利弊	神戶 正雄	〔經叢〕六一	一	五
資本税の課税方法	神戶 正雄	〔經叢〕六一	一	六
資本税遂に成らず	田川大吉郎	〔洋經〕六一	一	九二

資本課税論	北崎 進	〔經商〕大二	二	五
資本課税と減廢税	澤田 謙	〔社政〕大三	一	四七
資本課税解説	堀 潮	〔和バ〕大四	一	一
資本收益税の負擔配分と資本移動	小山田小七	〔商論〕大五	一	二

【資本利子税】

資本利子税設定の氣運	神戸 正雄	〔經叢〕大五	三	一
第二種所得税と資本利子税	小川郷太郎	〔イン〕大四	二	六
財産税と資本利子税	堀江 歸一	〔エコ〕大四	三	一四
資本利子税の得失	堀江 歸一	〔エコ〕大四	三	二四
資本利子税の問題	神戸 正雄	〔時經〕大五	一	四三
資本利子税説	北崎 進	〔經商〕大五	五	二
資本利子税と國債利拂に就て	島居 庄藏	〔イン〕大五	三	五
資本利子税の實施と債券界預金利子課税方針と資本利子税の取扱方	岩田 耕作	〔イン〕大五	三	五
資本利子税の缺點	圖南 生	〔銀研〕大五	一〇	六
	神戸 正雄	〔經叢〕大五	三	六

【事務】

商工事務管理組織

金子利八郎	〔會計〕大八	五	五
-------	--------	---	---

事務所の組織及び經營に就きて

事務管理のレツドテープ

事務組織及能率増進法

事務管理組織の手續

傳統的事務管理の轉換

事務管理と印字事務

官廳事務管理の革新

事務の商品化

【事務管理】

事務管理者の管理繼續の義務と背任罪	大場 茂馬	〔新報〕大三	二四	五
事務管理者の注意の程度	嘉山 幹一	〔新報〕大四	二五	三
事務管理と共同海損の成否	市村 富久	〔新報〕大四	二五	一
事務管理繼續義務の性質	長島 毅	〔新報〕大七	三八	五
事務管理の要件及效果	鳩山 秀夫	〔法協〕大九	三八	五九
海軍事務管理に就て	荒木 櫻洲	〔新聞〕大二	一九	三
蘭領瓜哇行政一斑	同	實	〔志林〕四	三
瓜哇島に帝國領事館設置の	同	實	〔志林〕四	三

必要を論し併せて名譽領事任命の方針に及ぶ

【社會】

社會の前途(講演)	富井 政章	〔國家〕四二	二	一五
社會の狀態と經濟的事實との關係	相原 重政	〔統集〕四四	一	二〇
經濟上に於ける強者と弱者	松崎藏之助	〔志林〕四三	二	三
個人主義と共同主義	永井 享	〔法協〕三六	二	一
社會と國家との關係	奥田 義人	〔新報〕三六	三	一
社會有機體に就て	遠藤 隆吉	〔法政〕三九	一〇	一〇
社會連帶論	織田 萬	〔京法〕四〇	一	二〇
思想小史	巨鹿 山人	〔京法〕四〇	一	二〇
模倣及發明と社會の進歩	宿利 英治	〔明學〕四〇	一	二四
社會と警察	留岡 幸助	〔辯協〕四二	三	二二
英雄論	石川 半山	〔法政〕四二	三	八
勢力階級と新道德	丹羽 筑山	〔東經〕四二	一	四二
西洋近代思潮大略	寛 克彦	〔法政〕四三	三	一
人間の發展	建部 遜吾	〔三學〕四三	二	二
社會と境遇及天然	川邊 治六	〔三學〕四四	二	二
社會價値の概念	小泉 信三	〔三學〕四四	二	四
社會倫理的ニテエアニス	小泉 信三	〔三學〕四四	二	四

【瓜哇】 【社會】

運の説

自覺の社會的意義	守屋源次郎	〔日經〕四四	四	八九
社會法則の特質を論ず	財部 靜治	〔京法〕四四	三	一〇
分離論	谷本 富	〔國經〕大二	一五	一
社會法則の性質	高田 保馬	〔國經〕大六	二	四
社會の根本的現象(講演)	高田 保馬	〔日社〕大六	三	一四
教育と社會(講演)	高田 保馬	〔京法〕大六	三	九
トオテミズムの起源及び支那太古に於ける此制度の存否	田中 一貞	〔日社〕大六	二	三
社會意識とは何ぞや	吉田 熊次	〔日社〕大六	二	三
社會意識の拘束力を論ず	田崎 仁義	〔日社〕大六	二	三
社會慣習の教養と立法政策	高田 保馬	〔國經〕大六	一	八
歐洲戦後の社會思潮の發展	高田 保馬	〔京法〕大六	一	〇
社會現象の進化	遊佐 慶夫	〔新聞〕大六	一	〇
異質結合論	米田庄太郎	〔國經〕大五	二	一
ブラクマー・キレン共述社會進化の法則	中村長之助	〔商經〕大五	一	二
自然生命心理及社會の解説	高田 保馬	〔日社〕大五	三	三
正義觀念の發達に就て	中村長之助	〔商經〕大五	一	二
國民的理想(講演)	高田 保馬	〔日社〕大五	三	三
分合の法則を論じて個人主義及び國家主義の協同に	中村長之助	〔商經〕大五	一	三
	藤森 達三	〔國國〕大五	四	九
	藤井健治郎	〔新報〕大六	二	二
	江部 淳夫	〔日社〕大六	五	一

及ぶ	丸谷 喜市〔國經〕大六三三	一號
人間の價值	高野岩三郎〔國家〕大六三二	一〇
基礎社會の發達に就て	高田 保馬〔經叢〕大六五	一
スチルナーの唯我論	財部 靜治〔經叢〕大六五	五
社會批評家としてのカアラ	石田 憲次〔經叢〕大七三	八
イ	米田庄太郎〔國經〕大七三	八
科學的アンケート法論	舞出長五郎〔國家〕大七三	九
經濟學と社會的過程	舞出長五郎〔國家〕大七三	九
ダーウキンの淘汰論と社會的進化	藤井健次郎〔法政〕大七二	九
論理上より見たる所謂社會防衛説	財部 靜治〔新報〕大七二	九
協力論	大西猪之介〔國經〕大七二	九
生と學との距離	財部 靜治〔經叢〕大八	九
社會の羈絆力	藤森 達三〔國國〕大八	九
智能を中心として觀たる個人及社會	中島 重〔政治〕大八	九
社會契約説の新らしき觀方	長谷川萬次郎〔我等〕大八	九
國家意識の社會化	大山 郁夫〔我等〕大八	九
社會的變動と政治的組織	長谷川萬次郎〔我等〕大八	九
個人的優越の否定	五來 素川〔東經〕大八	九
國家と社會の戰	高田 保馬〔經叢〕大九	九
基礎社會の發達方向	高田 保馬〔經叢〕大九	九
現行組織の缺陷と社會連帶	杉山直治郎〔國家〕大九	九
社會の存續	高田 保馬〔經叢〕大九	九
支那上古の理想國觀	赤神 良讓〔日社〕大九	九
社會と法	小林 俊三〔辯協〕大九	九
品性と環境	佐々木英夫〔法政〕大九	九
獨逸の社會的理想	鈴木 義男〔國家〕大九	九
分離の一般的性質	高田 保馬〔商經〕大九	九
二個の新復古論、人道主義と文化主義	權田保之助〔我等〕大九	九
人道的理想と自然的法則との背反及借調	河上 肇〔社問〕大九	九
人間の自己瞞着性	河上 肇〔社問〕大九	九
結合に關する一般的法則	高田 保馬〔國經〕大九	九
支那史上の相互扶助について	清水 泰次〔國經〕大九	九
性的に觀た社會	長谷川萬次郎〔我等〕大九	九
思想財產共有の理想	田村 德治〔法叢〕大九	九
思想財産の移入の原理	田村 德治〔法叢〕大九	九
進歩か退歩か	財部 靜治〔經叢〕大九	九
ヘブライ理想と社會的公正	山田 敏一〔社政〕大九	九
世界の二大思潮と社會政策	河津 暹〔國家〕大九	九
戰時及革命中に於ける社會的進化	宗藤 圭三〔商經〕大九	九
厚生と經濟的厚生	高橋 正熊〔社政〕大九	九
社會的進歩と相互扶助	高橋 正熊〔社政〕大九	九

社會の第一要件としての公正	高橋 正熊〔社政〕大九	九
社會と警察力(講演)	松井 茂〔日社〕大九	九
社會と警察	松井 茂〔社政〕大九	九
西洋中世の國家及社會	大類 伸〔法政〕大九	九
社會生活と議會政治との背馳	大山 郁夫〔我等〕大九	九
文化生産者としての社會	高田 保馬〔商研〕大九	九
ヴェーバー及フエヒナーの法則の研究	高垣寅次郎〔商研〕大九	九
社會制度の硬化	赤神 良讓〔日社〕大九	九
革命の原理としての社會正義に就て	赤神 良讓〔經商〕大九	九
現代思想の大綱を論ず	仁保 龜松〔法叢〕大九	九
國際相互扶助論	小村 俊夫〔亞經〕大九	九
心的相互作用と社會の本質	小松堅太郎〔國經〕大九	九
資本と労働と社會	田中 貢〔經商〕大九	九
社會推移の法則を論じて消費組合運動に及ぶ	長岡保太郎〔社政〕大九	九
人類の精神生活に就て	藤森 達三〔國國〕大九	九
社會の團結の減衰	高田 保馬〔經叢〕大九	九
フーガスの本能的社會觀	河上 肇〔經叢〕大九	九
傳統派の社會連帶思想	米田庄太郎〔經叢〕大九	九
國家と社會との關係	高田 保馬〔法政〕大九	九
近世社會思想を生んだ社會環境	淺野 研真〔法政〕大九	九
シユタムラー社會意欲の特性	林 廣吉〔法治〕大九	九
多元的社會觀の政治學的價值	蠟山 政道〔志林〕大九	九
合理的專制主義及個人主義	村瀬武比古〔國國〕大九	九
日本に於けるソリダリティの思想	瀧本 誠一〔三學〕大九	九
社會と人の本質的關係	杉森孝次郎〔法治〕大九	九
新理想主義	得能 文〔我等〕大九	九
ナトルプ教授の社會理想主義	三並 良〔我等〕大九	九
人間關係の基本形式と資本主義社會の本質	波多野 鼎〔我等〕大九	九
宗教的態度と現代社會	長谷川萬次郎〔我等〕大九	九
倫理的態度の現代的效果	長谷川萬次郎〔我等〕大九	九
政治的行動と社會的行動	長谷川萬次郎〔我等〕大九	九
「群衆の時代」	本田喜代治〔我等〕大九	九
現代の社會的諸傾向と政治學との交渉	大山 郁夫〔我等〕大九	九
社會及經濟	楠田 民藏〔我等〕大九	九

ギディングスの観たる社會
 發達の方向
 現實の法則として観たるソ
 リダリテイ
 ジンズバーク「總體意思の
 概念」(譯)
 デュギイの所有者の社會的
 職分論
 氏族制度雜考
 社會の基本的關係(シユタ
 ウデンガア)
 物理的環境と社會との關係
 社會組織と社會正義
 集團意識に就て
 對立より社會連帯へ
 個人と團體との關係
 現實と理想と空想
 加特力教の社會論者に就て
 政治的社會
 社會變動の教訓と學の獨立
 社會の文化と擴大
 所有、知識及び労働
 社會に對する個人的寄與と
 しての知識

小松堅太郎	〔國經〕	六二	三四	四號
青木 節一	〔社政〕	六三	一	三九
新明 正道	〔我等〕	六三	五	六八
阿武京二郎	〔法曹〕	六三	一	二三
本庄榮治郎	〔經叢〕	六三	二七	二
波多野 鼎	〔同論〕	六二	一	二
赤神 良讓	〔經商〕	六二	二	七
赤神 良讓	〔經商〕	六二	二	三
高瀬莊太郎	〔商研〕	六二	二	三
高島佐一郎	〔國經〕	六二	二五	五
財部 靜治	〔經叢〕	六二	二六	一
高野岩三郎	〔原バ〕	六一	一	二
田島 錦治	〔經叢〕	六二	二六	三
村瀨武比古	〔法治〕	六二	二	二
小島 憲	〔法治〕	六二	二	九
小松堅太郎	〔法治〕	六二	二	二〇
長谷川萬次郎	〔我等〕	六二	二五	五
長谷川萬次郎	〔我等〕	六二	二五	六

社會に對する個人の寄與と
 しての労働
 社會の觀念に就て
 社會及經濟
 社會運動と社會進化
 資本主義の社會とは何ぞや
 社會の基本諸關係の研究
 ルクセンブルグ「資本主義
 社會に於ける再生産の問
 題」(譯)
 シユタムラーの社會概念
 概念と現實との分化と集化
 刑法に於ける社會防禦と階
 級防禦
 社會的生活條件と知能の發
 達
 社會と協働
 アダム・スミスの思想に於
 ける社會的自然律
 平均思想の學理的根據
 社會と自然との平衡關係と
 「生産力」
 ギディングスの社會心の問

長谷川萬次郎	〔我等〕	六二	五	七
波多野 鼎	〔我等〕	六二	五	一〇
森戸 辰男	〔我等〕	六二	七	六二
坂西 由藏	〔國經〕	六二	二	三
河上 肇	〔社問〕	六二	一	一
波多野 鼎	〔同論〕	六二	一	一
久留間敏造	〔原バ〕	六二	一	三
堀 眞琴	〔國家〕	六二	三	六七
赤松 要	〔商叢〕	六二	二	一
大塚 春富	〔辯協〕	六二	二	三
桐原 葆見	〔勞科〕	六二	一	二
佐原 六郎	〔法研〕	六二	三	三
高瀬莊太郎	〔商研〕	六二	三	一
瀧本 誠一	〔三學〕	六二	二	一
伊藤 秀一	〔三學〕	六二	二	一

題
 個人の自由と社會の進歩
 社會構成の因子の發生に就
 いて
 社會の結合と心理相互作用
 社會の本質に關して
 集團的經驗に關する一學說
 人類社會に及ぼす自然の力
 に就て
 社會の類廢
 現實世界と神の國
 社會連帯主義に於ける國家
 的干渉の根據
 自己感情の本能の社會的意
 義
 少數支配の進化
 支配に關する原始的感情
 法的社會觀の史的考察
 法的社會觀と經濟的基本權
 群集論に於ける無意識
 共同社會と利益社會
 シユタムラーの社會概念
 フイルマアの族父權論
 人間愛の起源

不破 祐俊	〔法治〕	六三	三	一五
栗原 信一	〔法治〕	六三	三	一三
小松堅太郎	〔法治〕	六三	三	三四
小松堅太郎	〔社雜〕	六三	一	四
高田 保馬	〔社雜〕	六三	一	五
高瀬莊太郎	〔社雜〕	六三	一	七
朝日 融溪	〔社雜〕	六三	一	七
綿貫 哲雄	〔社政〕	六三	一	四〇
高橋誠一郎	〔社政〕	六三	一	四
増井 幸雄	〔社政〕	六三	一	四
波多野 鼎	〔我等〕	六三	六	二
長谷川萬次郎	〔我等〕	六三	六	一〇
長谷川萬次郎	〔我等〕	六三	六	七
森戸 辰男	〔我等〕	六三	六	六
森戸 辰男	〔我等〕	六三	六	六
新明 正道	〔我等〕	六三	六	九
波多野 鼎	〔我等〕	六三	六	一〇
堀 眞琴	〔國家〕	六三	六	一〇
今中 大磨	〔同論〕	六三	一	一四
川村多實二	〔經叢〕	六三	二	五六

社會理想、法律理想
 社會連帯主義に於ける任意
 的組合運動
 經濟と社會
 個人的と社會的
 社會の經濟的發達に關する
 ミルの見解に就て
 歴史的必然の概念に就て
 經濟批判主義の批判
 ビオ・ソシャル假説の意義
 社會過程
 社會の基本諸關係の研究
 (補遺)
 結合の上位
 Gemeinschaftに就て
 デュルケムの集團意識論と
 其の意義
 發達諸段階に於ける社會の
 全體性
 定型としての共同社會
 社會結合の三型式に就いて
 抵抗權史上に於けるロック
 互助作用の支配と軍國組織
 の崩壞

渡邊 省三	〔法新〕	六四	一	五
増井 幸雄	〔社政〕	六四	一	五
岸本誠二郎	〔經研〕	六四	二	四
牧野 英一	〔志林〕	六四	二	七
榎本 鑄治	〔三學〕	六四	二	八
秋山 次郎	〔マル〕	六四	二	一
福本 和夫	〔マル〕	六四	二	三
米田庄太郎	〔經叢〕	六四	二	〇
綿貫 哲雄	〔社政〕	六四	一	五
波多野 鼎	〔同論〕	六四	一	一六
高田 保馬	〔社科〕	六四	一	一
高田 保馬	〔社科〕	六四	一	三
淡 徳三郎	〔社科〕	六四	一	五
小松堅太郎	〔社科〕	六四	一	五
高田 保馬	〔社科〕	六四	一	五
錦田 義富	〔社科〕	六四	一	七
宮澤 俊義	〔我等〕	六四	七	二
長谷川萬次郎	〔我等〕	六四	七	三

社會結合の「共同」と「集合」	新明 正道 [我等] 大四年 七卷 七號
共同社會論	新明 正道 [我等] 大四年 七卷 七號
「行動」の社會性と「經濟行爲」の反社會性	長谷川萬次郎 [我等] 大四年 七卷 七號
社會進化と宗教	山口正太郎 [我等] 大四年 七卷 七號
欲望充足の分化に於ける社會的要素	岩崎 卯一 [我等] 大四年 七卷 七號
階級國家の崩壊過程	河野 密 [我等] 大四年 七卷 七號
オッペンハイマーの社會論	新明 正道 [我等] 大四年 七卷 七號
社會關係の混合形式	新明 正道 [我等] 大四年 七卷 七號
人類社會の形態	小松堅太郎 [社雜] 大四年 七卷 七號
自然社會に於ける青年集合所の機能	久保 榮三 [社雜] 大四年 七卷 七號
「純粹理性批判」に於けるグマインシャスト即ち相互作用の概念	米田庄太郎 [社雜] 大四年 七卷 七號
利益的社會關係に就いて	小松堅太郎 [社雜] 大四年 七卷 七號
タイヤル人の社會編制	内藤吉之助 [社雜] 大四年 七卷 七號
意欲と社會的關係	小松堅太郎 [社雜] 大四年 七卷 七號
行爲に於ける社會の形式性	新明 正道 [社雜] 大四年 七卷 七號
社會の意識と意識の社會性	城戸幡太郎 [社雜] 大四年 七卷 七號
フレイザー「人類の創造」(譯)	今泉 龍三 [長彙] 大四年 七卷 七號
ニユー・ラナーの講話	大林 宗嗣 [原雜] 大四年 七卷 七號
我國のトーマス・ミンスムの考察	中山 太郎 [社雜] 大四年 七卷 七號
カントと人類の結合	村瀬武比古 [法治] 大四年 七卷 七號
社會起原に關する諸學說	本田喜代治 [社雜] 大四年 七卷 七號
社會生活の進化と經濟學	酒井正三郎 [商叢] 大四年 七卷 七號
ステイルナアの「唯一者」とエンゲルズ	森戸 辰男 [我等] 大四年 七卷 七號
世事虛隨觀	財部 靜治 [經叢] 大四年 七卷 七號
世界を貫流する三つの社會觀	山本 三吾 [外時] 大四年 七卷 七號
マルクスの所謂社會意識形態に就いて	河上 肇 [經叢] 大四年 七卷 七號
人格法學と社會感覺	渡邊 省三 [法新] 大四年 七卷 七號
社會と自然	木村喜一郎 [商經] 大四年 七卷 七號
社會と國家の關係	五來 欣造 [早政] 大四年 七卷 七號
Le fait socialの性質と經濟學の研究方法	松浦 要 [新報] 大四年 七卷 七號
社會及資本主義的社會	林 癸未夫 [早政] 大四年 七卷 七號
レオン・ブルジョアの社會連帶論	古垣 鐵郎 [國知] 大四年 七卷 七號
人格政策の理想とする社會	田中 貢 [經濟] 大四年 七卷 七號
エンゲルズ「マルクに就いて」(譯)	鳥 海 [社科] 大四年 七卷 七號
共同社會的關係と利益社會	

的關係との限界並びに複合	小松堅太郎 [社科] 大四年 七卷 七號
社會の文化體系に於ける地位	新明 正道 [社政] 大四年 七卷 七號
社會政策と連帶責任	戸田 貞三 [社政] 大四年 七卷 七號
社會的基本關係について	高田 保馬 [社政] 大四年 七卷 七號
軍國組織が生活を破壊する人類學的事實	長谷川萬次郎 [我等] 大四年 七卷 七號
社會概念の經濟的構成	新明 正道 [我等] 大四年 七卷 七號
社會事實の精神分析的説明に就いて	本田喜代治 [我等] 大四年 七卷 七號
マルクス説に於ける社會と國家	河野 密 [我等] 大四年 七卷 七號
世界社會の研究	圓谷 弘 [社雜] 大四年 七卷 七號
個人と社會	岩井 龍海 [社雜] 大四年 七卷 七號
社會關係の根本に關する二三の問題	小松堅太郎 [社雜] 大四年 七卷 七號
群現象と社會結合	長谷川萬次郎 [社雜] 大四年 七卷 七號
共同社會と利益社會との綜合としての消費組合制度	平野 常治 [社雜] 大四年 七卷 七號
權利の社會化	E. M. 生 [志林] 大四年 七卷 七號
社會化する法律	牧野 英一 [新聞] 大四年 七卷 七號
獨逸に於ける鑛山の社會化	山川 武 [社政] 大四年 七卷 七號
獨逸に於ける經營の社會化に就いて	岡田 重次 [國經] 大四年 七卷 七號
獨逸における産業社會化論	阿部 賢一 [同論] 大四年 七卷 七號
經濟的合理化的極致としての「社會化」	上田 孝三 [社政] 大四年 七卷 七號
保險の社會化	野津 務 [新報] 大四年 七卷 七號
標語としての法律の社會化	牧野 英一 [社政] 大四年 七卷 七號
及び自由法	
ドイツに於ける工業社會化運動	吉田 曉 [社政] 大四年 七卷 七號
J. M. Clark 「經濟學社會化論」(譯)	八木澤善次 [新報] 大四年 七卷 七號
教育の社會化	岩井 龍海 [社研] 大四年 七卷 七號
社會政策を見よ	
リツカートの「文化科學と自然科學」	錦田 義富 [京法] 大四年 七卷 七號
モノグラフィ法論	米田庄太郎 [國經] 大四年 七卷 七號
社會學と社會科學	高田 保馬 [經叢] 大四年 七卷 七號
學術史の研究	桑木 或雄 [我等] 大四年 七卷 七號
社會科學に於けるマルクス	

の地位

哲學と社會科學との關係

社會科學に對する興味の擡頭

社會科學の障礙と其排除

社會科學者としてのキリアム・ベツティ

社會科學と認識問題

社會科學に於ける方法二元論

論

社會科學に於ける唯物論と唯心論

社會科學に就いて

諸學問殊に文化的諸學問の分類に就いて

社會科學への支配階級の攻勢

社會科學の法則

進化論と社會科學との關係

「社會科學の法則」の哲學的研究

サムナー教授の社會科學の分類

赤松 要「國經」六二三年卷一—二號
勝本 鼎一「三學」六二—二六

大山 郁夫「我等」六二—五

大山 郁夫「我等」六二—五

高野岩三郎「原雜」六三—二

村 勝範「經評」六四—一

今中 次麿「社科」六四—一

ブハリン「マル」六四—二

高田 保馬「社雜」六四—二〇

田村 徳治「法叢」六四—二二

大山 郁夫「我等」六五—八

武部與八郎「三學」六五—二〇

今野 秀輔「商濟」六五—六

武部與八郎「三學」六五—二〇

編貫 哲雄「社雜」六五—二四

參照：革命。家族。教育。共産主義。ギルド社會主義。經濟學。個人主義。財產。産業。社會。社會科學。社會教育。社會主義。社會心理。社會政策。社會問題。宗教。少年。人口。人種問題。政治學。戰爭。中産階級。統計。道德。都市。奴隸。犯罪。貧困。貧民。封建制度。婦人。平和。保險。無政府主義。優生學。ユトーピア。勞働及び勞働階級。

【社會學】

ソシオロジーに於て穿鑿の手段としての統計

統計學及社會學

社會學の用に於ける統計

ギデンクス「近世社會學論」

ウオード「現代の社會學」

社會學發達の趨勢

アダム・スミスと近世社會

吳 文聰「統雜」四八—二

吳 文聰「統雜」四八—二

吳 文聰「統雜」四八—二

若宮卯之助「東經」四四—二

若宮卯之助「東經」四四—二

若宮卯之助「東經」四四—二

建部 遜吾「東經」四四—二

建部 遜吾「東經」四四—二

社會學と生命保險との關係

批評的法理學と社會學

觀念力の社會學

シユタムラー氏の哲學的立場及び社會學の根本思想

社會學と現代宗教學との交渉

社會學の哲學的基礎

社會學論

經濟學者と社會學者

社會學とは如何なる科學なる乎(講演)

社會學の觀念の批判及樹立

社會學と統計學との關係

社會學と教育學

活きた社會學(講演)

歐洲戰爭と其主要なる社會學的要素

社會學と社會科學

窮極權論考

社會學の應用方面に就て

松崎 壽「國經」四五—三

大原 祥一「保評」六二—六

米田庄太郎「京法」六二—八

高田 保馬「京法」六二—八

織田 萬「志林」六二—五

米田庄太郎「京法」六二—八

赤松 智城「日社」六三—二

谷本 富「日社」六三—二

米田庄太郎「日社」六三—一

山口鎌治郎「國經」六三—六

加藤 弘之「日社」六三—一

米田庄太郎「日社」六三—一

藤本幸太郎「統集」六三—三

小林 照明「日社」六四—三

谷本 富「日社」六四—二

米田庄太郎「經叢」六五—二

高田 保馬「經叢」六五—二

福田 徳三「國經」六七—二

社會學と地學との關係

一二の社會學的根柢觀念に就て(實理觀、進化觀、渾一觀)

「社會學的研究」の批評に答ふ

社會學の問題と其研究法に就て(講演)

高田保馬氏の二大近著に評して二三の純正社會學的問題に論及す

「社會學的研究」の著者に答ふ

ゼ・エス・ミルの社會思想

社會連帯に就きて

クロボトキンの社會思想の研究

米國に於ける社會學及社會問題を中等學校の學生に教授する事に關する從來の經過

米國に於ける社會學の實狀(講演)

小林 照明「日社」六七—六

フ・クラッスリ「日社」六七—六

建部 遜吾「日社」六八—七

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

高田 保馬「國經」六八—二

歴史と社會學との關係
 社會の強制力(特にデュルケムの學說に就て)
 社會戰の社會學
 社會現象と實證的方法(コムトの社會學的方法論の考察)
 社會學說の異同に就いて
 露西亞社會誌學批評
 經濟學者の社會觀を評す
 社會思想の變態
 社會思想家としてのウキリ
 アム・モリス
 社會哲學に於ける主意的二元論的思想
 地學觀社會學說に就きて
 經濟上に於ける社會連帶說
 歐洲社會學界の近況
 社會意識に關する學說
 實用社會學の樹立を提唱す
 獨逸戰時經濟と社會學說
 社會學者の政治研究
 射伴心の社會學的研究
 原始基督教の社會思想

財部 靜治	〔經叢〕	六二〇	二二	九
野村兼太郎	〔三學〕	六九二	九	九
佐野 學	〔我等〕	六九二	九	九
永田 伸也	〔同論〕	六九二	九	九
古坂 明詮	〔日社〕	六九二	九	九
今井 時郎	〔日社〕	六九二	九	九
小林 照朗	〔日社〕	六九二	九	九
建部 遜吾	〔社政〕	六九二	九	九
加口 哲二	〔三學〕	六九二	九	九
恒藤 恭	〔經叢〕	六九二	九	九
財部 靜治	〔經叢〕	六九二	九	九
大内 武次	〔經商〕	六九二	九	九
松本潤一郎	〔法政〕	六九二	九	九
本田喜代治	〔我等〕	六九二	九	九
小林 照朗	〔日社〕	六九二	九	九
伊藤 久秋	〔長覺〕	六九二	九	九
田中萃一郎	〔法研〕	六九二	九	九
赤神 良讓	〔經商〕	六九二	九	九
高橋誠一郎	〔三學〕	六九二	九	九

高田保馬著「社會學概論」
 カイライルの人生觀と社會思想
 社會學の基本問題(イエールサレム)
 社會學の動機
 社會事實の本質(エミール・デュルケイムの學說)
 オッペンハイマー「社會學の概念」
 グロムプロコフツチの社會學と歴史哲學
 社會學の立脚地
 カイライルの社會哲學
 シュタムラーの社會哲學
 現代社會思潮と最近の經濟思潮
 大震災と社會思想
 社會思想論上のカイライルとミル
 經濟學及び社會思想の唯物史觀概論
 サン・シモンの社會改造哲學及び連帶思想

生島廣治郎	〔國經〕	六二二	三四	二
石田 憲次	〔同論〕	六二二	三四	二
波多野 鼎	〔同論〕	六二二	三四	二
上杉 慎吉	〔國家〕	六二二	三四	二
高瀬莊太郎	〔商研〕	六二二	三四	二
山口正太郎	〔商經〕	六二二	三四	二
Y K	〔法治〕	六二二	三四	二
小松堅太郎	〔法治〕	六二二	三四	二
高橋 正熊	〔社政〕	六二二	三四	二
中島 寛次	〔社政〕	六二二	三四	二
永井 亨	〔社政〕	六二二	三四	二
永井 亨	〔社政〕	六二二	三四	二
谷口彌五郎	〔三學〕	六二二	三四	二
榑田 民藏	〔我等〕	六二二	三四	二
米田庄太郎	〔經叢〕	六二二	三四	二

舊約全書に現れたる社會思想
 ミルの社會思想に就て
 日本社會學の方向
 デュルケイムの社會學論について
 ヴェブレンの社會學說
 佛蘭西社會學史一瞥
 ジュメルの社會學と社會心理學との關係
 マルクスの「社會概念」に就て
 シュタムラーの社會概念
 カントの理性道德と現代の社會思潮
 カントの社會思想
 近代社會學に於ける二つの主傾向
 形式社會學
 フイア・カントの社會學論
 フォン・ウイゼの社會學論
 獨逸最近の社會學論
 社會學の起源に就て
 形式的社會學或は關係學

高橋誠一郎	〔三學〕	六二二	二七	二
瀧本 誠一	〔三學〕	六二二	二七	二
若宮卯之助	〔社雜〕	六二二	二七	二
松本潤一郎	〔社雜〕	六二二	二七	二
小林 郁	〔社雜〕	六二二	二七	二
松本潤一郎	〔社雜〕	六二二	二七	二
林 惠海	〔社雜〕	六二二	二七	二
友岡 久雄	〔經研〕	六二二	二七	二
堀 真琴	〔國家〕	六二二	二七	二
友枝 高彦	〔社政〕	六二二	二七	二
兒玉 達童	〔社政〕	六二二	二七	二
S H	〔法治〕	六二二	二七	二
S H	〔法治〕	六二二	二七	二
米田庄太郎	〔經叢〕	六二二	二七	二
米田庄太郎	〔經叢〕	六二二	二七	二
米田庄太郎	〔經叢〕	六二二	二七	二
新明 正道	〔我等〕	六二二	二七	二
波多野 鼎	〔我等〕	六二二	二七	二

プラトーンの社會思想
 東亞の民族性と社會思想
 カントの歴史哲學の社會哲學
 プラトリーの社會哲學
 ロバート・オウエンの社會哲學
 知的社會學的研究に就て
 ギデイングスの社會哲學に對する二三の疑問
 ウキン大學で逢つた諸教授の印象
 米國社會學の發展
 社會思想としての民主主義
 ホップハウスの社會學說
 マルクス社會學說の起源並に之に對するヘーゲル、フオイエルバッツハ、シュタイン及びブルードンの影響
 基督教の影響を受けたる社會思想
 人種學的社會學說
 明治社會學史資料

谷口彌五郎	〔我等〕	六二二	三四	二
永井 亨	〔社政〕	六二二	三四	二
柳澤 泰爾	〔法治〕	六二二	三四	二
不破 祐俊	〔法治〕	六二二	三四	二
北野 大吉	〔社政〕	六二二	三四	二
藏内 數太	〔社雜〕	六二二	三四	二
岩崎 卯一	〔社政〕	六二二	三四	二
岩崎 卯一	〔社雜〕	六二二	三四	二
山口 正	〔社雜〕	六二二	三四	二
永井 亨	〔社雜〕	六二二	三四	二
松本潤一郎	〔社雜〕	六二二	三四	二
平井 新	〔三學〕	六二二	三四	二
尾形 繁三	〔商經〕	六二二	三四	二
久保 榮三	〔社雜〕	六二二	三四	二
下出 隼吉	〔社雜〕	六二二	三四	二

經濟學の基調としての社會學に關する考察
 社會誌學の本質
 社會學方法論上の論争に就て
 マルテイ社會學に於ける豫見
 フイアカントとフォン・ウイーゼの社會學概念の比較
 Gessellikeの社會學
 カントロウキツチに於ける「社會學建設」への試み
 社會學に於ける文化の取扱
 自然的社會學と文化的社會學
 社會學の對象について
 社會學に於ける二つの傾向
 オクバーン教授の社會變化論
 社會學の歴史的發達
 社會の心理學的解釋
 社會學と現象學
 社會學と心理學

小林 郁	〔社雜〕	大四	一	一四
今井 時郎	〔社雜〕	大四	一	二
レーダー	〔社雜〕	大四	一	五
高瀬莊太郎	〔社科〕	大四	一	五
五十嵐 信	〔社科〕	大四	一	五
關 榮吉	〔社科〕	大四	一	五
酒井正三郎	〔社科〕	大四	一	五
松本潤一郎	〔社科〕	大四	一	五
新明 正道	〔社科〕	大四	一	五
高田 保馬	〔社研〕	大四	一	二
高瀬莊太郎	〔商研〕	大三	四	一
三輪 重年	〔法治〕	大四	四	八
津野 研真	〔法治〕	大四	三	二
綿貫 哲雄	〔社政〕	大四	一	二
米田庄太郎	〔經叢〕	大四	二〇	二
新明 正道	〔我等〕	大四	七	一〇

ブーグレの社會學論
 社會主義概論(近世社會思想大略)
 社會關係論に就て
 古代及び中世に於ける社會契約思想
 英吉利社會思想
 ガストン・リシヤールの社會學說
 社會に於ける知の機能(ウオード社會學の根據)
 再び石川功氏譯「純正社會學」に就いて
 明治社會學史資料
 米國に於ける社會學發達の概観
 バーンズ「一九二五年に於ける米國の社會學」(譯)
 サムナーの社會學說
 形式社會學の發展
 プラトの社會哲學
 ギディングス門下の社會學徒達
 社會選良の周流(バレット社

本田喜代治	〔我等〕	大四	七	二
小泉 信三	〔財經〕	大四	二	三
新明 正道	〔社政〕	大四	一	六
島田 久吉	〔法研〕	大四	四	四
小泉 信三	〔財經〕	大五	三	二
田邊 壽利	〔我等〕	大五	八	一
田邊 壽利	〔社雜〕	大五	一	二
田邊 壽利	〔社研〕	大五	一	三
下出 隼吉	〔社雜〕	大五	一	三
小林 郁	〔社雜〕	大五	一	二
鳥越一太郎	〔社雜〕	大五	一	二
今井 時郎	〔社雜〕	大五	一	二
井森 陸平	〔社雜〕	大五	一	二
不破 祐俊	〔法治〕	大五	一	二
岩崎 卯一	〔社雜〕	大五	一	二

會學の一課題

マックス・シェラーの「知の社會學について」
 レオン・ブルジョアの社會連帶論
 故穂積博士の社會學說
 經濟學の前提を爲す哲學心理學及社會學の諸條件と經濟學との關係

松本潤一郎	〔社政〕	大五	一	二〇
谷川 徹二	〔同論〕	大五	一	二〇
古垣 鐵郎	〔國知〕	大五	六	一
戸田 貞三	〔社雜〕	大五	一	二六
井關 孝雄	〔法政〕	大五	三	二
権田保之助	〔原バ〕	大二	一	五
河上 肇	〔經叢〕	大二	一	五
河上 肇	〔社問〕	大二	一	三七
河上 肇	〔社問〕	大二	一	三八
小泉 信三	〔財經〕	大二	九	三
今井 時郎	〔外時〕	大五	三	五

【社會革命】

社會革命と民衆娛樂
 時機尚早なる社會革命の企について
 マルクス説に於ける社會革命と政治的の革命
 社會革命と社會政策
 社會革命と戦争
 社會革命の國際的退潮

【社會教育】

社會教育の必要
 新聞紙と社會教育
 社會教育及倫理上の一疑問

神戸 正雄	〔日經〕	四四	八	一〇
大山 郁夫	〔我等〕	大九	二	二
高橋 正熊	〔社政〕	大〇	一	五

【社會學】 【社會革命】 【社會教育】 【社會事業】 【社會事情】

【社會事業】

社會教育上の缺陷
 内外社會事業大観
 近代社會事業の根本精神
 大阪市の社會事業成績
 大阪人の社會事業
 簡易保險積立金の運用と社會事業
 社會事業の精神的方面
 社會事業の意義及範圍
 本邦社會事業の現況
 社會事業聯絡機關の沿革及現狀

高橋 正熊	〔社政〕	大〇	一	六
生江 孝之	〔社政〕	大九	一	一
矢吹 慶輝	〔社政〕	大九	一	二
善生 永助	〔財經〕	大九	七	八
野本 稔尋	〔社政〕	大〇	一	六
桑山 鐵男	〔社政〕	大〇	一	一〇
安部 磯雄	〔社政〕	大〇	一	一〇
生江 孝之	〔社政〕	大〇	一	一〇
生江 孝之	〔社政〕	大〇	一	一〇
生江 孝之	〔社政〕	大〇	一	一〇
横山 雅男	〔統雜〕	大二	一	七
三好豊太郎	〔社雜〕	大三	一	七
三好豊太郎	〔都問〕	大四	一	二
前田 多門	〔エコ〕	大五	四	九
三好豊太郎	〔社雜〕	大五	一	三

【社會事情】

流行の心理と現代經濟生活
 青年團の標準年齢に就て
 明治時代進歩の説明

米田庄太郎	〔國經〕	大三	一	一六
布施 辰治	〔辯協〕	大四	一	二〇
澤柳政太郎	〔日社〕	大四	三	一

徂徠の「政談」に現れたる
享保時代の社會狀態
特に日本人身長の地方的差
異及其變化に就て(講演)

中村 孝也〔國國〕大七 卷一 二二
長谷部言人〔日社〕大八 七 一三

日本に於ける社會上及び經
濟上の推移に就て

ジョーンズ〔國經〕大〇 三 一
宇都宮 鼎〔日社〕大〇 八 三五
金 判事〔朝司〕大二 一 四

歐洲戦後の社會觀一斑(講
演)

モルヒネの社會觀
日本社會史の著者に先づ聽
聞申す一箇條

江戸町會所に關する一考察
明治維新時代回顧の一片
本邦に於ける社會經濟組織
の推移

佐古 慶三〔商經〕大二 一 三五
倉持 徳久〔經研〕大四 二 四
紀平 正美〔外時〕大五 望 五〇六

高野岩三郎〔原雜〕大五 四 一
參照II アイ・タフリ ユー・タフリ
ユ一。階級闘争。經濟學。
共産主義。ギルド社會主
義。國有。個人主義。サン
ジカリズム。社會黨。消費
組合。ボルシェヴィズム。
無政府主義。唯物史觀。
ユトーピア。

高野岩三郎〔原雜〕大五 四 一
參照II アイ・タフリ ユー・タフリ
ユ一。階級闘争。經濟學。
共産主義。ギルド社會主
義。國有。個人主義。サン
ジカリズム。社會黨。消費
組合。ボルシェヴィズム。
無政府主義。唯物史觀。
ユトーピア。

【社會主義】

儒墨老の社會主義

吉田 良春〔國國〕四七 八 九二

カール・マルクス氏社會主
義の要領

アドルフ・ワグネル述獨逸
諸大家の經濟學及社會主
義

社會主義と法律

社會主義と所有權の廢止及
制限

社會主義と契約自由の原則

社會主義と商法との關係

社會主義とは何ぞ

社會主義の起原及發達

民法と社會主義

社會主義と物質的史觀論

社會主義の誤謬

最新經濟學派殊に社會政策
及社會主義の經濟政策に
對する關係並に地位を論
ず

私有財産廢止の國家に關す
る社會主義の謬見

社會主義の長所と短所

社會主義を評す

持地六三郎〔新報〕四〇 七 七三

持地六三郎〔國家〕四〇 二 二二三

牧野 英一〔法協〕四六 二 一

小川郷太郎〔法協〕四六 二 二

小野 義一〔法協〕四六 二 三四

岡本 利平〔法協〕四六 二 八

田島 錦治〔内外〕四七 三 三

金井 延〔法協〕四九 五 一

田島 錦治〔内外〕四九 五 一

岡村 司〔内外〕四九 五 二六

丹羽 豊〔國經〕四四 〇 二

ガルカス〔日經〕四四 〇 一 三

松崎藏之助〔國家〕四〇 二 五

桑田 熊藏〔法政〕四〇 二 六

小川市太郎〔法政〕四〇 八 六

古谷 音松〔東經〕四二 五七 一四二

社會主義の最近の發展

社會主義管見

社會主義と共産主義

幕末の社會主義者佐藤信淵
ジョーン・マーテキン「社
會主義と階級闘争」(譯)

マルクスの教義

基督教と社會主義

社會主義と經濟

社會主義と就職難

Sozialismus, Sozialwirtschaft
und Sozialpolitik

社會主義、社會經濟及社會
政策

ゾムバルトよりマルクスへ
社會政策と社會主義

マルクス及マルクス派の學
說

政黨論上より獨逸社會民主
黨を論ず

社會主義は社會本位に非ず
して個人本位なり

個人主義に就て(其の國家
主義及社會主義との關係)

熊崎 良〔國經〕四二 五 二二六

津村 秀松〔國經〕四二 五 二

高橋誠一郎〔三學〕四二 二 一〇

河上 肇〔京法〕四四 四 一〇

近澤 定吉〔日經〕四四 五 一〇

河田 嗣郎〔京法〕四四 四 一

眞鴨 隆史〔東經〕四四 五 一〇

莊田 秋村〔東經〕四四 六 一五七

北崎 進〔東經〕四四 六 一五七

Wautig 〔國家〕四三 二 二

ウエンツヒ 〔國家〕四四 二 五

福田 徳三〔國經〕四四 一〇 三

金井 延〔國家〕四五 二 六

松浦 要〔國經〕四五 二 四一五

佐藤丑次郎〔京法〕大ニ 八 一三

金井 延〔新報〕大ニ 三 七

稲田周之助〔新報〕大ニ 三 二

法的社會主義の研究

社會主義の政治的要素を論
じて其の結局社會本位に
非ずして個人本位たるに
過ぎざるを断定す

法的社會主義と最近の法學

歐洲戰亂と社會主義

ゾムバルトの傲語

集散主義及サンデカリズム
批評としてのギルドソシ
ヤリズム

カントと最近の社會主義

自由主義か社會主義か

生産政策としての社會主義

マルクスの社會主義の理論
的體系

一社會主義者の觀たる世界

戰爭の眞因

生存權及労働權(社會主義
研究一則)

社會主義者としてのゼー・
エス・ミル

社會主義の進化

社會主義と兩性問題

米田庄太郎〔京法〕大ニ 九 九二

金井 延〔法協〕大ニ 三 五

米田庄太郎〔京法〕大ニ 一〇 二〇

安部 磯雄〔國經〕大ニ 二〇 五

織田 萬〔京法〕大ニ 二 六

小泉 信三〔國家〕大ニ 三 一五六

米田庄太郎〔經叢〕大ニ 七 三六

舞出長五郎〔國家〕大ニ 七 三三

河上 肇〔經叢〕大ニ 八 一

河上 肇〔社問〕大ニ 八 一 一〇

河上 肇〔社問〕大ニ 八 一 二一五

稲田周之助〔新報〕大ニ 九 二

河上 肇〔經叢〕大ニ 八 八

河上 肇〔社問〕大ニ 八 一 四

森戸 辰男〔國家〕大ニ 八 三 六

福田博士の社會民主主義論を評す	河上 肇	〔社問〕大八	九
學問藝術と社會主義	小泉 信三	〔三學〕大八	二
唯物史觀と社會主義	榊田 民藏	〔我等〕大八	二
集産主義の社會學的考察	高田 保馬	〔國經〕大八	二
社會主義と各種階級の人々	河上 肇	〔社問〕大八	二
「社會主義及び共產主義文書」	榊田 民藏	〔經學〕大九	一
社會主義の史的觀察	三上 正毅	〔國國〕大九	一
アントン・メンガー「社會主義的國家論」の輪廓	恒藤 恭	〔法叢〕大九	四
社會主義と精神労働者	藤澤 親雄	〔國家〕大九	四
講壇社會主義	阿部 秀助	〔三學〕大九	四
地代論と社會主義	小泉 信三	〔三學〕大九	四
社會主義者の「歴史的法律的」資本觀概略	小泉 信三	〔三學〕大九	四
クロボトキンの相互扶助說	森戸 辰男	〔我等〕大九	二
マルクス派社會主義の思想的背景	榊田 民藏	〔我等〕大九	二
第三インタナショナルに就て	加田 忠臣	〔三學〕大九	二
エンゲルス、「科學的社會主義と唯物史觀」	河上 肇	〔社問〕大九	一
ハイヘン「社會主義と唯物史觀と倫理學」	河上 肇	〔社問〕大九	一
ツガン・バラノウスキ「社會主義の本質及び目的」	河上 肇	〔社問〕大九	一
社會主義の現在の問題	河上 肇	〔社問〕大九	一
農業社會主義論	戸城 太郎	〔社政〕大九	一
社會主義者と企業者の職分	河田 嗣郎	〔經叢〕大九	二
マルクス主義の理論的基礎	上田 貞次郎	〔國經〕大九	三
批判	高木友三郎	〔經究〕大九	一
社會主義的産業組織に對するマールシャル博士の批評	上田 貞次郎	〔國經〕大九	三
マルクス主義に謂ふ所の過渡期について	河上 肇	〔經叢〕大九	三
ウィザールの社會主義評論梗概	三邊 金藏	〔三學〕大九	五
ヨセフ・ディーツゲンの社會主義唯物論	上原 好咲	〔三學〕大九	五
社會主義により生産の増減如何	高橋 正熊	〔社政〕大九	一
社會主義の分類	小林 輝次	〔經叢〕大九	三
マルキシズムの經濟的批判	上田 孝三	〔社政〕大九	一
進化論より觀たる社會民主國	坂田 實	〔社政〕大九	一
ノンパルテイザン・リーグ	藤井 悌	〔社政〕大九	一

經濟學者と社會主義者の立會演說	河上 肇	〔社問〕大九	二
エアフルト綱領改正案に對するキューノーの批評	竹内 徳治	〔國經〕大九	三
獨逸社會民主黨ゲールリツツ綱領	嶋山 政道	〔國家〕大九	三
社會主義の未來國	河上 肇	〔社問〕大九	一
ベルンシュタインとマルクス主義	金原賢之助	〔三學〕大九	一
ハインドマンと社會民主同盟	北澤新次郎	〔我等〕大九	一
社會主義學說	宮島 資夫	〔我等〕大九	一
社會主義革命の必然性と唯物史觀	河上 肇	〔我等〕大九	一
マルクスの比例的關係の鐵則	河上 肇	〔經叢〕大九	一
社會主義革命の必然性(補遺)	河上 肇	〔我等〕大九	一
モリス・ヒルキットの「マルクスよりレーニンへ」	加田 哲二	〔三學〕大九	一
社會主義と日本労働運動	田邊 忠男	〔財經〕大九	一
マルクス派の陣營に於ける内亂について	河上 肇	〔我等〕大九	一
マルクス氏の集産主義の實行難を論ず	田島 錦治	〔經叢〕大九	一
露西亞革命と社會主義革命	河上 肇	〔社問〕大九	一
社會主義と個人主義的自由	河上 肇	〔社問〕大九	一
現時の世界の財政状態より見たる資本主義對社會主義(譯)	黒川 芳藏	〔同論〕大九	一
マルクス主義の社會階級論	加田 哲二	〔三學〕大九	一
岡村博士と「民法と社會主義」	榊田 民藏	〔我等〕大九	一
三大ユトビアンの生涯と思想概説	淺野 研真	〔法政〕大九	一
基督教社會主義者としてのキングスレー	横濱 禮吉	〔三學〕大九	一
ヒルキットのマルクスからレーニンへ	不破 祐俊	〔法治〕大九	一
個人主義及社會主義局外觀	財部 静治	〔經叢〕大九	一
六月革命とバリコムニオン	小泉 信三	〔財經〕大九	一
無政府主義、共產主義、國家社會主義	小泉 信三	〔財經〕大九	一
社會主義と國家	小泉 信三	〔三學〕大九	一
プロレットカルの内容及びその方法	赤神 良讓	〔經商〕大九	一
フォルレンダー「カント社會主義」(譯)	船田 享二	〔我等〕大九	一

ブルジョアの宗教、哲學及び科學に對するマルキシズムの闡明	ニライ・レン [我等] 大二三 年 五 卷 八 號	國家社會主義の國家觀	北原 龍雄 [マル] 大二三 一 三
社會運動としての社會主義	澤田 謙 [社政] 大二三 一 三	レーニンの三著	西 雅雄 [マル] 大二三 一 五
「プロレトカルト」と「マルキシズム」	永井 亨 [社政] 大二三 一 三	レーニンの「英國に於ける社會主義思想の先驅者」	森戸 辰男 [我等] 大二三 一 六
個人主義（資本主義）及び社會主義	河上 肇 [社問] 大二三 一 四	社會主義の分裂と帝國主義	レーニン [マル] 大二三 一 四
社會主義と植民政略	カウツキー [原雜] 大二三 一 一	辨證法とマルキシズム	嘉治 隆一 [我等] 大二三 一 五
社會主義と植民政略に關するエンゲルスの書簡	細川 嘉六 [原雜] 大二三 一 一	マルクスとスタイン	波多野 鼎 [我等] 大二三 一 五
第一インターナショナル	大田黒敏男 [經商] 大二三 一 一	マルクス主義の階級觀	波多野 鼎 [我等] 大二三 一 六
リカードイアン・ソウシアリスツの勞働論に就て	深見 義一 [商叢] 大二三 一 一	科學的社會主義は如何にして可能なりや	平井 新 [三學] 大二三 一 八
ゴータ綱領とマルクス	嘉治 隆一 [我等] 大二三 一 六	全勞働收益權と社會主義	森戸 辰男 [我等] 大二三 一 九
宗教と社會主義との關係	財部 靜治 [經叢] 大二三 一 三	農業社會主義者としてのス Pens	森戸 辰男 [我等] 大二三 一 六
リカードイアン・ソウシヤリズムの「社會主義化論」(譯)	津田 誠一 [三學] 大二三 一 八	社會主義 國家思想	小泉 信三 [財經] 大二三 一 二
パウエル「社會主義經濟論の一發展」	森本富士雄 [辯協] 大二三 一 四	社會主義の經濟的基礎	杉山 斌 [同論] 大二三 一 五
社會主義より見たる經濟狀態	赤松五百磨 [我等] 大二三 一 六	社會主義者の利子掠奪説の批判的研究	古屋 美貞 [同論] 大二三 一 三
「方向轉換」の危險性	濱島 覺成 [經商] 大二三 一 三	社會主義的思想の法律的構成	牧野 英一 [志林] 大二三 一 二
	山川 均 [マル] 大二三 一 二	社會主義の哲學	中込本治郎 [社政] 大二三 一 四
		哲學的及び科學的見地より見たる社會主義	永井 亨 [社政] 大二三 一 四
		社會主義から社會政策へ近代社會主義學說の發展と	永井 亨 [社政] 大二三 一 四

サン・シモン主義	久保田明光 [社政] 大二三 一 五	マルクス・エンゲルス研究	レーニン [マル] 大二三 一 二
ジョン・ステュアート・ミルと社會主義	上田貞次郎 [社政] 大二三 一 五	所の事業	レーニン [マル] 大二三 一 三
資本主義のヨーロッパと社會主義のロシア	越智 道順 [原バ] 大二三 一 一七	社會主義黨と無黨革命運動	ケルゼンのマルクス主義批評
ラッサールとマルクス	小泉 信三 [三學] 大二三 一 一	レーニニズムの世界觀	伊太利に於ける社會主義者の農業經營
經濟的及社會的反映としての社會主義	グキルブランド [社科] 大二三 一 一三	社會主義國家の階級問題	アウガスト・ベーベルと社會民主黨前史
社會主義の「自由王國」	新明 正道 [社科] 大二三 一 二	孫江二氏の社會主義	社會主義概論
ゾムバルトの「プロレタリア社會主義」	小泉 信三 [三學] 大二三 一 九	ラッサールとロオドベルト	科學的社會主義大要
マルクス主義の旗の下に	荒畑 寒村 [マル] 大二三 一 二	スペインの社會主義觀	孫江二氏の社會主義
レニニズムとトロツキズム	レニニズムのABC	ブランキズムとマルクシズム	ラッサールとロオドベルト
黨とは何ぞや?	ジノヴィエフ [マル] 大二三 一 四	赤化宣傳如何	ス
マルキシズムとレーニニズム	ジャン・スタン [マル] 大二三 一 四	福田博士の「レーニンの國家理論」とケルゼンの「社會主義と國家」との奇蹟的合致	スเปนグラの社會主義觀
マルクスの體系とレーニンの體系	福本 和夫 [マル] 大二三 一 四		スパンキズムとマルクシズム
大衆の自然生長性と社會民主主義の目的意識性	レーニン [マル] 大二三 一 三		ム
「何をなすべきか」に就いて	青野 秀吉 [マル] 大二三 一 五		赤化宣傳如何
修正派社會主義概論	金原賢之助 [三學] 大二三 一 五		福田博士の「レーニンの國家理論」とケルゼンの「社會主義と國家」との奇蹟的合致

【社會主義】

再び江亢虎氏の學說に就て
(孫江二氏の社會主義經
濟思想)の補遺)

社會民主國家に於ける官吏

法

日和見主義の社會的根據

最も緊切なる任務に就いて

マルクス正統派の根本原理

「レーニン主義の哲學」

左翼の日和見主義的危險

山川氏の方向轉換論より初

めざるべからず

「哲學の貧困」の翻譯に就

いて

社會的色彩より見たるマル

クス

社會主義と自由主義

二つの社會化綱領(フハー

リンの「共產黨綱領」と

パウアーの「社會主義へ

の道」とに現はれたる社

會化諸方策の管見)

マルキシズムにおける國家

と強制秩序

及川 恒忠 [三學] 大五二〇 一號

杉村章三郎 [國家] 大五四〇 一號

林 辰雄 [マル] 大五四 一號

レーニン [マル] 大五四 一號

堺 利彦 [我等] 大五八 一號

西 雅雄 [マル] 大五四 一號

北浦千太郎 [マル] 大五四 一號

北條 一雄 [マル] 大五四 一號

西 雅雄 [マル] 大五四 一號

村山 進 [マル] 大五四 一號

上田貞次郎 [企社] 大五 一號

岩城 忠一 [商論] 大五一 一號

森戸 辰男 [我等] 大五八 一號

「共產黨宣言」前史の一齣
プロレタリアの發達と社會
主義諸體系(佛蘭西社會
思想)

法律と社會主義

レーニンを生める社會

アドラー「マルクス主義と

獨逸古典哲學との關係」

(譯)

社會主義外交の一齣(マク

トナルドの外交一瞥)

政治的社會主義とサンデカ

リズム

マルクス主義の三つの要素

社會主義の發達に關する概

説

德川時代の社會主義

桂内閣と社會主義者

日本に於ける社會主義運動

の發達

最近日本に於ける婦人社會

主義運動

本邦社會主義(初期)文獻

平井 新 [三學] 大五二〇 六

小泉 信三 [財經] 大五二一 六

泉二 新熊 [法公] 大五三〇 三

赤神 良讓 [社研] 大五一 三

波多野 鼎 [社政] 大五一 六

淺田 江村 [外時] 大五五 五

小泉 信三 [財經] 大五二一 六

レーニン [マル] 大五四 一

山下 祥一 [法政] 大五三 五

橫山勝太郎 [辯協] 大五四 一

淺野 研真 [法政] 大〇一八 五

伊那 玄夫 [社政] 大〇一 一

石川 茂 [マル] 大五四 一

英 國

英國に於ける社會主義の運
動

英國現代の經濟學者と社會
主義

八十年代の英國社會主義

シヨオを中心として觀たる

フエビヤン社會主義運動

英國労働黨と社會主義

英國の労働黨と社會主義思

想

イギリスの左翼派運動

戰時に於ける獨逸の社會民

主黨及び職工組合

獨逸社會民主黨員の軟化論

獨逸の戰時社會主義

獨逸社會主義の二傾向

戰後獨逸の社會主義運動

獨逸社會民主黨の新綱領

獨逸社會主義の消長

獨逸社會民主黨の歴史的背

景

ドイツ社會主義運動の近

植松 考昭 [洋經] 四二一 一號

三田村一郎 [經叢] 大九二 一號

加田 哲二 [三學] 大〇一五 一號

町田義一郎 [三學] 大〇一五 一號

栗屋 關一 [國知] 大二 一號

永井 亨 [社政] 大二三 一號

西 雅雄 [マル] 大四 一號

高野省三郎 [國家] 大四二 一號

楠田 民藏 [國家] 大六三 一號

河上 肇 [經叢] 大七七 一號

阿部 秀助 [三學] 大九二 一號

河田 嗣郎 [經叢] 大〇一 一號

井口 孝親 [我等] 大二 一號

高橋 貞樹 [マル] 大二 一號

村上 保 [マル] 大四 一號

佛 國

佛國社會主義の現狀

佛國に於ける社會主義

經濟學說

米 國

ゾムバルト「米國に社會主

義無き理由」(譯)

米國に於ける基督教社會主

義の新傾向

米國社會主義の模型

An economic interpretation

of the socialistic movements

in the United States. Takagi Senjiro

露國社會主義と農民

社會主義的財政と露國勞農

政府の財政

其 他

歐洲社會主義の現勢を論ず

丁抹國の社會主義

伊太利に於ける社會主義學

説の發達

水上鐵治郎 [社政] 大四 一號

岡村 司 [我等] 大二 一號

關 未代策 [經商] 大五 一號

河田 嗣郎 [日經] 大〇一 一號

河上 肇 [京法] 大〇一 一號

河上 肇 [國經] 大二 一號

有川 治助 [國家] 大七三 一號

阿部 賢一 [國家] 大二 一號

原田豊治郎 [新報] 大六 一號

河上 肇 [經叢] 大七七 一號

金原賢之助 [三學] 大〇一 一號

【社會主義】

【社會心理】 【社會政策】

【社會心理】 參照 國民性。輿論。

農村改善と社會心理研究の必要
事物相關の形式及之に相應する社會心理
群衆心理の最新學說
群衆心理と指導者心理
震災時に於ける社會心理の考察
フロイドの群衆心理論
ジムメルの社會學と社會心理學との關係
農村改造の社會心理學的考察
經濟危機の社會心理的觀察
近代群衆心理論
標語迷信の群衆心理
參照 社會 社會革命。社會 專業。都市。社會問題。 ユトーピア。

岡田 重治	〔國經〕	六〇二	五
寛 克彦	〔法協〕	六九元	一三
江木 衷	〔辯協〕	六〇二五	三
佐久間 鼎	〔社政〕	六〇一	一四
蠟山 政道	〔我等〕	六二六	一
新明 正道	〔我等〕	六三六	一〇
林 惠海	〔社雜〕	六三	一
八木澤善次	〔新報〕	六四三	七
川邊喜三郎	〔社雜〕	六四一	二
江木 衷	〔辯協〕	六四二	二
安岡 秀夫	〔外時〕	六四四	五〇

海員雇入契約の變遷と社會政策
加藤 正治 〔法協〕 四八三 二 二

アッペーの社會政策上の遺稿

社會政策學會大會開催に就きて所感を述ぶ
ハール「世界政策と社會改良」
最新經濟學派殊に社會政策及社會主義の經濟政策に對する關係並に地位を論ず
民法商法と社會政策
エルンスト・アッペーの社會政策
復古的中等社會政策を論ず
日本歴史に於ける社會政策
關稅政策が社會政策か
歐米社會政策の近況
Socialismus, Sozialwirtschaft und Sozialpolitik
社會主義、社會經濟及社會政策
人類行爲の目的を論じて社會政策の根本義に及ぶ
工場法は社會政策法に非ず

坂西 由藏	〔國經〕	四九	一七
河津 暹	〔日經〕	四〇	二
河津 暹	〔日經〕	四〇	二
松崎藏之助	〔國家〕	四〇二	五
稻田周之助	〔新報〕	四一八	四
河田 嗣郎	〔京法〕	四二	七
戸田 海市	〔京法〕	四二	九
有賀 長雄	〔東經〕	四二五	九
河田 嗣郎	〔國經〕	四三	二
金井 延	〔國家〕	四三	三
H. Waentig	〔國家〕	四三	三
ウエンチツヒ	〔國家〕	四三	一
赤尾 隆一	〔日經〕	四四	九
小林丑三郎	〔東經〕	四四	一五

工場法と社會政策に就て
英國の勞働紛擾と將來の社會政策
Social policy of John Stuart Mill
社會政策と社會主義
露國に於ける社會政策及勞働心理
大國家主義としての社會政策
社會政策と個人主義
アダム・スミスの「富國論」及リカードの「國民經濟及租稅原論」に顯はれたる社會政策的方面
社會政策の原理
徳川時代の社會政策
印度の社會改良運動
英國に於ける稅制改正と社會政策
租稅と社會政策
獨逸社會黨に於ける社會改良思想
科學的管理法の社會政策的

山本美越乃	〔東經〕	四四	一
戸田 海市	〔日經〕	四五	一
McLaren	〔三學〕	四五	三
金井 延	〔國家〕	四五	六
熊崎 良	〔國經〕	四五	六
寺尾 隆一	〔日經〕	四五	二
金井 延	〔法協〕	四五	九
黒崎 幸吉	〔國經〕	六二	一
瀧 正雄	〔京法〕	六三	九
瀧本 誠一	〔國國〕	六四	三
山上 曹源	〔日社〕	六五	三
河津 暹	〔國家〕	六五	三
上田貞次郎	〔國經〕	六五	二
森戸 辰男	〔國家〕	六五	九

【社會政策】

價值

儒教の社會政策
現代英國の社會政策的傾向
租稅と社會政策に就て上田教授の批評に答ふ
東洋に於ける古代の社會政策
都市の社會政策
司法部に社會政策を適用すべし
英國戦後の社會政策
社會政策と都市問題
米國に於ける社會改良と教育
社會政策學會北海道講演會記事
社會政策の概念
社會政策學會大會
社會政策の根本思想
王道と社會政策
王莽の社會政策
宋代に於ける兵制と社會政策
ゴッセン研究（社會政策論

森戸 辰男	〔國家〕	六五	三〇
五來 欣造	〔國國〕	六五	四
小野塚善平夫	〔國家〕	六六	三
田中 穂積	〔國經〕	六六	三
瀧本 誠一	〔經叢〕	六六	四
財部 靜治	〔商經〕	六六	一
笠原文太郎	〔新聞〕	六六	一
森戸 辰男	〔國家〕	六七	三
小島 憲	〔國國〕	六七	六
佐々木吉三郎	〔日社〕	六七	一
大西猪之介	〔國經〕	六七	二
森戸 辰男	〔國家〕	六七	三
大西猪之介	〔國經〕	六八	二
永井 亨	〔社政〕	六九	一
小島 憲	〔國國〕	六九	一
吉田 虎雄	〔亞經〕	六九	一
松井 等	〔亞經〕	六九	二

者としてのゴッセン)	山口正太郎	〔同論〕	大九	二
生命保険と社會政策	石川 文吾	〔國經〕	大九	四
世界の二大思潮と社會政策	河津 暹	〔國家〕	大二〇	五
英國の社會政策	森 凱雄	〔國國〕	大二〇	九
幕府政治を論じて社會政策の根本問題に及ぶ	奥野 彦六	〔社政〕	大二〇	一
善書中の社會政策其他	澤村 幸夫	〔亞經〕	大二一	六
支那の古典に現はれたる社會政策	田島 錦治	〔經叢〕	大二一	二
社會政策の精神と労働委員會制度	河津 暹	〔社政〕	大二一	一
人口の移動と社會政策	河津 暹	〔社政〕	大二一	二
社會革命と社會政策	河上 肇	〔社問〕	大二一	三
乾隆帝と社會政策	東川 徳治	〔志林〕	大二三	四
社會政策の原理	小泉 信三	〔三學〕	大二三	七
社會政策我觀	神戸 正雄	〔時經〕	大二三	二
社會運動の批判的原理として社會政策	澤田 謙	〔社政〕	大二三	三
獨逸社會民主黨の産業及社會政策	永井 亨	〔社政〕	大二三	四
資本主義運動と社會政策	澤田 謙	〔社政〕	大二三	一
大震災と社會政策	永井 亨	〔社政〕	大二三	一
國際社會政策會議	福田敬太郎	〔國經〕	大二三	七
社會政策の意義	山口正太郎	〔商經〕	大二三	三
ネオ・マンチエスターズムと社會政策の危機	佐倉 重夫	〔社政〕	大二三	一
歴史派經濟學と社會政策	高橋誠一郎	〔社政〕	大二三	一
フエビアン協會と社會政策	澤田 謙	〔社政〕	大二三	一
帝都復興事業と社會政策	菊池 慎三	〔社政〕	大二三	一
社會政策について	瀧本 誠一	〔社政〕	大二三	一
新社會政策に關する國際運動	永井 亨	〔社政〕	大二三	一
社會主義から社會政策	永井 亨	〔社政〕	大二三	一
アダム・スミスの社會政策	伊東 乃	〔社政〕	大二三	一
一九二四年獨逸社會政策學會大會	梅田 政勝	〔國經〕	大二三	六
ウキルブランド「國民經濟的社會政策」(譯)	中川伊知郎	〔商研〕	大二三	五
現代社會政策の基調	圓谷 弘	〔法政〕	大二三	三
社會改良論としてのマルサス人口論	南 亮三郎	〔國經〕	大二三	六
社會政策に就て	長岡隆一郎	〔財經〕	大二三	一
マルサスの社會政策觀	伊東 乃	〔社政〕	大二三	一
新社會政策體系について	永井 亨	〔社政〕	大二三	一
社會政策の人性觀	永井 亨	〔社政〕	大二三	一
社會政策の社會觀	永井 亨	〔社政〕	大二三	一
社會政策概念の史的発展	林 癸未夫	〔早政〕	大二三	一
社會改良と人性論	島田 久吉	〔三學〕	大二三	一

社會政策より見たる藝術	圓谷 弘	〔法政〕	大二三	二
社會政策の歴史觀	永井 亨	〔社政〕	大二三	一
社會政策の人生觀とその觀念的基礎	永井 亨	〔社政〕	大二三	一
社會政策と連帶責任	戸田 貞三	〔社政〕	大二三	一
社會政策の主體に關する批判的考察	圓谷 弘	〔法政〕	大二三	五

【社會哲學】社會學を見よ

講壇社會黨	和田垣謙三	〔國家〕	大二三	一
社會黨鎮壓法の終始	福田 徳三	〔國經〕	大二三	二
歐洲社會黨講和運動の真相	堀江 歸一	〔財經〕	大二三	八
佛國に於ける社會黨統一の沿革	桑田 熊藏	〔國家〕	大二三	一
歐洲動亂と社會黨の將來	稻原 勝治	〔外時〕	大二三	二
歐洲大戰に對する各國社會黨の態度	桑田 熊藏	〔國家〕	大二三	四
獨逸多數獨立兩社會黨合同問題の回顧と豫測	井口 孝親	〔我等〕	大二三	六
獨逸兩社會黨合同完成の前景	井口 孝親	〔我等〕	大二三	一

ドイツ社會黨合同問題と其背景	森戸 辰男	〔原雜〕	大二三	一
ドイツ兩社會黨合同前史	森戸 辰男	〔原雜〕	大二三	一
ドイツ兩社會黨合同の経緯	森戸 辰男	〔原雜〕	大二三	二
ドイツ社會黨合同の完成	森戸 辰男	〔原雜〕	大二三	一
【社會闘争】參照階級闘争。	森戸 辰男	〔國家〕	大二三	一
社會闘争の經濟觀	大山 郁夫	〔我等〕	大二三	二
社會群の闘争と其政治的意義	高橋誠一郎	〔三學〕	大二三	一〇
羅馬に於ける社會闘争と社會思想	高橋誠一郎	〔三學〕	大二三	一
革命期に於ける羅馬の社會闘争	高橋誠一郎	〔三學〕	大二三	一
革命期の羅馬に於ける社會闘争續論	高橋誠一郎	〔三學〕	大二三	一
理論的闘争の意義	レーニン	〔マル〕	大二三	三
古羅馬社會闘争史上に於けるキケロ	高橋誠一郎	〔三學〕	大二三	九

【社會法學】

【社會法學】	エールリッヒの法律社會學	内藤吉之助	〔國家〕	大二三	四
--------	--------------	-------	------	-----	---

【社會法學】 【社會保險】

社會法學派と歴史學派	伊藤 久秋【國經】大〇三	北米合衆國に於ける社會保險論議	栗津 清亮【國家】大六三
法律社會學	高柳 賢三【法協】大一一〇	萬國社會的保險會議に就きて	三浦 義道【保雜】大七一
Die Soziologie des Rechts Eugen Ehrlich【法協】大一一〇	木村 龜二【志林】大一一二	最近各國に於ける社會保險の發達	瀧谷 善一【國經】大九二九
ケルゼンの法律社會學の方法	田中 誠二【法協】大一一〇	社會的保險の價值	鈴木 義男【國家】大九三四
エーアリツヒの法律社會學の方法	中村彌三夫【早法】大一一一	米國に於ける社會保險	ミルラー【財經】大九七
社會法學に就て	田中 誠二【法協】大一一〇	社會保險の貨銀に及ぼす影響	園 乾治【三學】大九一四
カントロヴィツの法律社會學	杉村章三郎【國家】大一一九	社會保險	田中 貢【國國】大二〇九
法律社會學より見たる公法上の契約(ブツデベルグ)	高柳 賢三【社科】大一一一	獨逸に於ける社會保險の沿革	向阪 逸郎【保雜】大二〇
社會法學より見たる法律と道德との關係	堀 眞琴【法研】大一一五	勞農露西亞の社會保險	岡崎 文規【經叢】大一一五
アメリカに於ける社會法學の發達	尾高 朝雄【法協】大一一四	獨逸に於ける社會保險	森 莊三郎【國家】大一一六
法律社會學の概念とその問題	尾高 朝雄【法協】大一一四	露西亞社會保險の危機	萱場 軍藏【社政】大一一九
【社會保險】	參照 失業保險。保險。勞働保險。	社會保險について	森 莊三郎【國家】大一二六
羅馬に於ける第八回萬國社會保險會議	フォン・マイア【國家】四二二	瑞西に於ける社會保險の現狀	西島彌太郎【法叢】大二〇
英國社會保險會議に就て	杉 琢磨【三學】大三八	社會保險の分科と其の實施機關	一戸 二郎【社政】大二二
			森 莊三郎【經論】大二三
			清水 玄【社政】大二三

會保險創設の時代及其萌芽

露西亞の社會保險	末高 信【早商】大一一一
社會保險の一考察	森田 良夫【社政】大一一一
英國社會保險の現行制度及び其改造	圓谷 弘【法政】大一一三
	末高 信【早商】大一一一

【社會民主主義】

社會主義及び民主主義を見よ

參照||移民。階級闘争。家族。監獄。教育。婚姻。失業。社會事業。社會事情。社會主義。社會政策。社會保險。借家。住宅。少年犯罪人。少年勞働。人種問題。生活費。生活標準。戦争。同盟罷工。都市。犯罪。貧困。貧民。浮浪。優生學。離婚。勞働及び勞働階級。勞働保險。(尙各國名にて「社會」の項を見よ)

【社會問題】

內地雜居の可否は須らく學術的に研究すべし	加藤 弘之【國家】四三六
----------------------	--------------

【社會保險】 【社會民主主義】 【社會問題】

國家と社會問題

現今の社會問題	桑田 熊藏【國家】四九二
ニイチエと社會問題	田島 錦治【新報】四七〇
社會問題の法律的研究の必要	守屋源二郎【國家】四三六
思想の趨向	桑田 熊藏【志林】四三九
國情一變せん乎	岡松參太郎【京法】四三九
下婢の供給不足と其の救済策	河上 肇【日經】四四一
文明の中毒	河田 嗣郎【日經】四四一
忠の概念	松尾清次郎【辯協】四四一
社會の改善と藝娼妓問題	遠藤 隆吉【法政】四四一
新平民の改善と犯罪	寺尾 亨【刑評】四四一
貯金制度と社會問題	有松 英義【刑評】四四一
社會病理學上の實業患	桑田 熊藏【國家】四四二
我國目下の社會問題と教育問題	鈴木券太郎【刑評】四四二
商業上の社會問題	戸田 海市【日經】四四三
家族制度の崩壊か社會生活に及ぼす影響	津村 秀松【國經】四四三
農業上の社會問題	河田 嗣郎【京法】四四四
所謂「主義」濫用の弊	戸田 海市【京法】四四四
ウエツプ「最近社會運動史」	鹽澤 昌貞【日經】四四四

我國の社會問題	石橋 湛山〔洋經〕大元 一	宗教政策と國民思想の動搖	大森 禪〔白社〕大四 二
社會病理論	河津 暹〔日經〕大二 一	國民思想は動搖せりや(講演)	三宅雄二郎〔日社〕大四 二
政治上及社會上の腐敗(講演)	小山龍之輔〔國國〕大二 一	社會指導の理想法に就て	遊佐 慶夫〔新聞〕大四 一
疾病と社會状態との關係	添田 壽一〔國家〕大二 二七	社會問題と經濟及び道德	山田 利淳〔東經〕大四 七
青年に關する理解	大山 壽〔京法〕大二 八	大正五年と國民の大覺悟	鶴澤 總明〔國國〕大五 四
國民の頹廢(講演)	江部 淳夫〔日經〕大三 一	パンの社會化	楠田 民藏〔國家〕大五 三〇
最近社會運動に於ける革命的傾向と第五級團の分化	富士川 游〔日社〕大三 一	英國社會運動史に就て	小泉 信三〔三學〕大六 二
(講演)	米田庄太郎〔日社〕大三 一	體質廢頹問題	財部 靜治〔經叢〕大六 四
國民大奮闘の時機	鶴澤 總明〔國國〕大三 二	シヌモラー教授の獨逸戰後の社會觀	楠田 民藏〔經叢〕大六 五
民心の危機と國の損害	太田 資時〔新聞〕大三 一	自愛主義、他愛主義、種愛主義	五島清太郎〔日社〕大六 四
日本國民に對する希望	松崎藏之助〔日經〕大三 一五	我同胞諸賢に告ぐ	増島六一郎〔辯協〕大七 三
時局に對する日本國民の覺悟	添田 壽一〔日經〕大三 一五	戰時經濟と「社會的最小限」	森戸 辰男〔國家〕大七 三
思潮と文藝	新井要太郎〔辯協〕大三 一八	犯罪と社會生活	米田庄太郎〔京法〕大七 三
戰爭と社會問題	米田庄太郎〔經叢〕大四 一	現時の社會問題に就て	神戶 正雄〔新報〕大七 六
民心の危機と國の損害	太田 資時〔辯協〕大四 一	カーペンターの社會改革意見	河田 嗣郎〔經叢〕大八 九
現代思潮の二大趨勢	新井要太郎〔辯協〕大四 一	社會問題評論	神戶 正雄〔經叢〕大八 九
思想動搖問題解決法	建部 遜吾〔日社〕大四 二	社會運動と宗教運動	河上 肇〔社問〕大八 一
國民思想動搖の原因(講演)	吉田 靜致〔日社〕大四 二	當面の社會問題解決施設	田中 一民〔財經〕大八 一
社會病理學に就いて(講演)	志田鉦太郎〔日社〕大四 三	社會改造の根本精神	大山 郁夫〔我等〕大八 一
國民思想動搖の原因(講演)	藤井健治郎〔日社〕大四 二		

最近社會問題の基調	石井 滿〔法政〕大八 一	農社會問題に就て	小平 權一〔新報〕大〇 三
大戰の教訓と社會問題	浮田 和民〔財經〕大八 一	改造の新論理と社會的意義	柘倉 正一〔我等〕大〇 三
スミスの賃銀論と社會問題	楠田 民藏〔政治〕大八 一	思想問題と經濟問題との關係	稻田周之助〔新報〕大〇 三
社會改造私見	神戶 正雄〔政治〕大八 一	社會運動の背景としての輿論	小尾 範治〔國經〕大〇 三
社會的不安	戶田 海市〔商經〕大八 一	近思想の推移	向井 章〔法政〕大〇 一八
人種の保健(講演)	龜田豊治朝〔日社〕大八 一	社會問題の意義を闡明して	添田 壽一〔社政〕大〇 一
國民保健の六大條件(講演)	建部 遜吾〔日社〕大八 一	「現代社會思潮」を紹介す	小林丑三郎〔社政〕大〇 一
社會問題と農業者	有働 良夫〔財經〕大九 七	勞働及思想問題	山室 軍平〔社政〕大〇 一
社會の眞面目	寛 克彦〔國家〕大九 一三	露西亞農民問題に對する同國社會思想	工藤直太郎〔社政〕大〇 一
國民思想の研究	千葉 龜雄〔我等〕大九 二	社會問題と財政制度	姉崎 正治〔社政〕大〇 一
頹廢的傾向と青年の新運動	大山 郁夫〔我等〕大九 二	社會問題と宗教	河上 肇〔社問〕大〇 一
思想問題、森戸事件及び上杉教授の論說に就て	仁保 龜松〔法叢〕大九 三	合理文明の破産と改造の苦悶	安井 英二〔法政〕大二 一
社會改造の諸理論	井藤 半彌〔國經〕大九 二	所謂思想問題と文化問題	長谷川萬次郎〔我等〕大二 一
現代方便生活と社會の問題	戶田 海市〔經叢〕大九 二	心的改造と物的改造	長谷川萬次郎〔我等〕大二 一
思想界動搖の根源	西尾 豊〔財經〕大九 七	大戰後に於ける獨逸の社會運動	安井 英二〔法政〕大二 一
カーライルと社會問題	石田 憲次〔我等〕大九 七	反動的安定と宗教的傾向	長谷川萬次郎〔我等〕大二 一
米國に於ける社會學及社會問題	戶田 眞三〔日社〕大九 八	男子專制の社會に於ける男女の地位	長谷川萬次郎〔我等〕大二 一
教授する事に關する從來の經過	山口正太郎〔商經〕大九 一	近代思想と概念崇拜	大山 郁夫〔我等〕大二 一
社會改造論の種々相	桑木 嚴翼〔社政〕大九 一		
最近思想問題	三田谷 啓〔社政〕大〇 一		
私生子問題			

【社會問題】

原始魔術と原始君主 現代運動としての社會的態 度	佐野 學 [我等] 六二 四九
ラ・バ・ブリー「社會心と いふものがあるか」(譯) 露西亞社會思想に就て(講 演)	長谷川萬次郎 [我等] 六二 四九
過激社會運動取締法案に就 て	昇 曙夢 [法政] 六二 一九
過激社會運動取締法案に就 て	小室 春富 [新聞] 六二 一九
獨逸過激運動鎮壓令	牧野 英一 [志林] 六二 二四
我國民の自覺反省を促す	増島六一郎 [財經] 六二 二九
近代社會運動の基調(講演)	綿貫 哲雄 [日社] 六二 二九
社會調査の方法	山口 正 [社政] 六二 二九
勞働問題と悲觀的社會思想	鹽澤 昌貞 [社政] 六二 二九
社會改造思想に於ける法 律及法律學の地位	田中 誠二 [國家] 六二 二九
ウエツプ夫妻の改造組織	平木 泰治 [商研] 六二 二九
謂ゆる眼ざめたる人々	河上 肇 [我等] 六二 二九
有産者の倫理	河上 肇 [我等] 六二 二九
對角線的に觀たる水平社問 題	榎田 民藏 [我等] 六二 二九
所有、知識及び勞働	長谷川萬次郎 [我等] 六二 二九

吾青年の道	高島 晴雄 [辯協] 六二 二七
奈良縣下國粹會對水平社爭 鬭事件報告書	布施 辰治 [辯協] 六二 二七
原始基督教と社會問題	高橋誠一郎 [三學] 六二 二七
サン・シモンの社會改造哲 學及び連帶思想	米田庄太郎 [經叢] 六二 二七
英國勞働黨の社會改造策	永井 亨 [社政] 六二 二七
改造の原理と婦人の職分	田崎 仁義 [長彙] 六二 二七
地方民力の涵養が第一義	河田 嗣郎 [エゴ] 六二 二七
思想の激變と民主主義	保坂 白嶺 [新聞] 六二 二七
社會的體験と人格的向上と	安達元之助 [法新] 六二 二七
震災と社會思想と反動思想	森戸 辰男 [我等] 六二 二七
無産者階級と世界的恐慌	榎田 民藏 [我等] 六二 二七
男性社會と女性社會	赤神 良讓 [經商] 六二 二七
社會威壓力の衰耗	小松堅太郎 [社雜] 六二 二七
平等社會と交換の概念	土方 成美 [經論] 六二 二七
改造機運への促進	布施 辰治 [辯協] 六二 二七
社會運動と社會進化	坂西 由藏 [國經] 六二 二七
人間生活の基調とバラック 問題	布施 辰治 [辯協] 六二 二七
人事相談所より見たる社會 相	早田 正雄 [法政] 六二 二七
信用制度と社會運動	出井 盛之 [社政] 六二 二七
東洋大學事件と思想善導問	

題	佐伯 復堂 [新聞] 六二 一三
水平社と徳川公	播磨 龍城 [新聞] 六二 一三
時局問題の批判	小林丑三郎 [經商] 六二 一三
色に對する反情	赤神 良讓 [經商] 六二 一三
社會問題解決策としての金 融機關	大森 繁治 [銀叢] 六二 一三
思想問題批判	河崎義三郎 [辯協] 六二 一三
中世寺院法と社會問題	山口正太郎 [國經] 六二 一三
最近の社會思想上に於ける 局面轉換	大山 郁夫 [我等] 六二 一三
私有財産制と貴族市民及勞 働階級	長谷川萬次郎 [我等] 六二 一三
人間の服従關係を否定する 迷信	長谷川萬次郎 [我等] 六二 一三
社會運動に於ける「行動」 と「意識」と	本莊 可宗 [法政] 六二 一三
社會に對する個人の服従と 反抗	長谷川萬次郎 [我等] 六二 一三
「ツ・ナロッド」と其後の 革命的社會運動	伊藤 秀一 [三學] 六二 一三
過激思想の取締	神戸 正雄 [時經] 六二 一三
街頭社會觀	今井 時郎 [社政] 六二 一三
英國社會思想の變遷と勞働 政策	米本とし枝 [社政] 六二 一三

【社會問題】 【社會立法】

社會運動としてのK・K・K	澤田 謙 [社政] 六二 一四
歐洲の社會思想概観	鹽澤 昌貞 [早政] 六二 一四
英吉利社會運動大要	小泉 信三 [財經] 六二 一四
好奇心に關する一考察	赤神 良讓 [社研] 六二 一四
宗教を論じ思想問題に及ぶ	河崎義三郎 [辯協] 六二 一四
淫蕩民話の對策と高等政策	高島 晴雄 [辯協] 六二 一四
正義思想と仁爲思想との對 立	高木友三郎 [新聞] 六二 一四
私生子保護問題	早田 正雄 [法政] 六二 一四
私生子問題に就て	高田 慎吉 [原雜] 六二 一四
佛蘭西社會思想	小泉 信三 [財經] 六二 一四
基督教の影響を受けたる社 會思想	尾形 繁之 [商經] 六二 一四
年頭の社會觀	山田 美峰 [臺法] 六二 一四
宗教を論じて思想問題に及 ぶ	河崎義三郎 [法公] 六二 一四
見えざる手のみちびき	浦口 文治 [社研] 六二 一四
英國社會思潮小史	大竹 虎雄 [法政] 六二 一四
英國に於ける社會的立法	田崎 慎治 [日經] 六二 一四
英國に於ける社會的立法の	

【社會立法】

參照 最低賃額。勞働法。

新傾向
最近に於ける注目すべき三
社會的立法
英國に於ける社會政策的立
法事業
社會的立法及法律解釋
社會的立法事業の新傾向
戰時に於ける獨逸の社會的
立法問題
復興に伴ふ社會施設と社會
立法の必要
獨逸に於ける社會政策的立
法の發達に就いて
イタリヤに於ける社會立法
チエツ・スロヴァキア共
和國の社會立法に就て
ヌースバウムの「獨逸新經
濟法」の一節（勞働法に
就て）

關	一	【國家】四三三	二
杉	琢磨	【國家】六三二	二
寺田	四郎	【國家】六四二	六八
泉田	吉次郎	【新聞】六七	三九八
鈴木	義男	【國家】六九三	一
宇都宮	鼎	【社政】六〇	四九
早田	正雄	【法政】六三二	二
伊藤	清	【經評】六四	一
中村	武	【法政】六五	一
鈴木	福治	【法政】六五三	五
上田	操	【法曹】六五	四

【借地】 參照||借地法。
地所明渡訴訟に現はれたる

借地人の奸手段
借地權保護
借地人保護問題
東京市内に於ける借地關係
の解剖
借地問題に就て
借地借家及小作爭議の調停
的解決
震火災に因る家屋滅失後の
借地借家の關係
帝都震災後の借地借家爭議
調停の概略
借地權の保護に付感ずる儘
を

【借地借家調停法】
借地借家調停法の委員に就
て
大震火災と借地借家調停法
借地借家調停法の結果と新
借地借家臨時處分法の實
施に就て

稻村	慶太郎	【辯協】四二	二
鳩山	秀夫	【法協】四三	二七
高窪	喜八郎	【新聞】四三	一五
土屋	倫啓	【新聞】六六	一三
泉田	吉次郎	【新聞】六七	一四
神戸	正雄	【時經】六一	一
梶田	年	【法曹】六二	一
遠藤	登喜夫	【法政】六三	二
山内	權三郎	【法新】六四	一
安齋	林八郎	【新聞】六一	二〇
穂積	重遠	【法協】六三	三
今村	恭太郎	【新聞】六三	一

【借地借家臨時處理法】

借地借家臨時處理法案を評
す
震災後の借地借家調停の結
果と新借地借家臨時處理
法の實施に就て
借地借家臨時處理法に就て
借地借家法調停の結果と新
借地借家臨時處分法の實
施に就て
借地借家臨時處理法第七條

【借地法】
借地法案に付て
借地法制定之急務
借地法問題
最近借地法問題二則（地代
増徴の慣習、短期借地證
書の効力）
借地法案
借地法案批評

布施	辰治	【法新】六三	九一〇
今村	恭太郎	【法曹】六三	二〇
瀬尾	藏治	【辯協】六三	二六
今村	恭太郎	【新聞】六三	一三
岩田	寅造	【正義】六五	二
三瀨	信三	【志林】四三	三
横山	勝太郎	【辯協】四四	一五
三瀨	信三	【法協】四五	三〇
三瀨	信三	【法協】六三	三三
山内	權三郎	【法政】六七	一五
三瀨	信三	【法協】六七	三

借地法案を論評す
借地法案を評す
借地借家兩法案を評す
借地及ハ借家兩法案と其社
會政策的價値
新借地法新借家法の疑義
借地法案を論評
借地法案を評す
借家借地法の現在及び將來
裁判上の和解と借地法
所謂裁判上の和解と借地法
に就て

【借家】
獨逸に於ける借家人保護に
關する法律案
借地借家及小作爭議の調停
的解決
獨逸の借家人保護借家協定
所
震火災に因る家屋滅失後の
借地借家の關係
借家問題に關し緊急勅令の

【借家】 參照||借家法。住宅。

土屋	倫啓	【新聞】六七	一
奥戸	善之助	【新聞】六八	一
中島	玉吉	【法叢】六九	四
三瀨	信三	【國家】六九	三四
山野	井龜五郎	【法政】七〇	一八
土屋	倫啓	【新聞】七〇	一
奥戸	善之助	【新聞】七〇	一
三瀨	信三	【法協】七〇	三九
黒川	眞前	【法曹】七三	二
馬淵	分也	【辯協】七三	二九
我妻	榮	【法協】七二	四〇
神戸	正雄	【時經】七一	一
田原	天南	【臺法】七二	一六
梶田	年	【法曹】七三	一

【借家】【借家法】

發布を望む
帝都震災後の借地借家争議
調停の概略
獨逸に於ける借家人保護及
借家調停所
借家人の権利

- 龜山 要 [新聞] 六二一年 二六五
- 遠藤登喜夫 [法政] 六三二年 一五
- 清水 鼎良 [法曹] 六三二年 五
- 中塚 正信 [民衆] 六二五年 一

【借家法】

借地借家兩法案を評す
借地及び借家兩法案と其社
會政策的價值
住宅問題と新借家法案(講
演)
住宅問題と借家法案
借家法に就て
借家法第一條の適用上同法
附則第十一條の解釋に就
て
新借地法新借家法の疑義
借家法借地法の現在及び將
來
借家法案を論評
借家法第五條を論ず

- 中島 玉吉 [法叢] 六九四 一
- 三浦 信三 [國家] 六九三 六
- 末弘殿太郎 [日社] 六〇九 一
- 末弘殿太郎 [法協] 六〇三 二
- 恩田 武市 [法政] 六〇一 六
- 杉生 札 [辯協] 六〇二 一〇
- 山野井龜五郎 [法政] 六〇一 一〇
- 三浦 信三 [法協] 六〇三 二
- 土屋 倫啓 [新聞] 六〇一 一八〇〇
- 恩田 武市 [法政] 六〇一 二

借家契約の効力
借家法不遑及論
不履行に因り契約を解除さ
れたる賃借人の造作買取
請求權
憲政會の借家法改正法案を
評す
借家法第九條の賃貸借終了
の意義に就て
燒跡の造作買取請求權
所謂燒跡造作買取請求權問
題
賃貸人が造作買取請求に應
ぜざる場合に於ける賃借
人の權利
借家法私案
契約解除の場合は造作買取
請求權なきか
借家法を全國的に施行すべ
し

- 恩田 武市 [法政] 六二一年 四
- 藥師寺志光 [志林] 六二二年 九
- 藥師寺志光 [新報] 六二三年 五
- 土屋 倫啓 [新聞] 六二一年 二〇八二
- 所龍 龍 [新聞] 六二一年 二二三
- 鈴木喜三郎 [辯協] 六三二年 五
- 馬淵 分也 [辯協] 六三二年 七
- 岡村 玄治 [新報] 六三二年 一〇
- 鬼武 義彦 [新聞] 六三二年 二四五
- 山口 直 [新聞] 六三二年 二〇一
- 大里榮太郎 [法新] 六二五年 六
- 鹽田 環 [志林] 六二二年 八
- 竹井 廉 [法新] 六二四年 一

【社債】

參照 會社。株式。株式會社。
金融。債券。證券。

社債券を論ず(講演)
擔保附社債信託法論
社債權者と利益配當及び總
會出席權
本邦社債統計
株式社債の發行及引受
株式會社が公告に依らずし
て募集したる社債は無効
也
社債發行差額を論じて處分
法の適否に及ぶ
社債及年金の利率率計算法
債券發行の法律上の性質を
論ず
社債引受團體論
社債差損金の整理法
社債差益金の性質及整理法
書替社債(譯)
擔保附社債と据置期限前の
償還
社債の法律上の性質

- 土子金四郎 [國家] 六二七年 七
- 池田寅二郎 [法記] 六二七年 七
- 三橋 久美 [明學] 六四一年 二
- 戸田 海市 [國經] 六四一年 九
- 鈴木 生 [新聞] 六四一年 一
- 大原 信久 [新聞] 六四一年 一
- 原口 亮平 [國經] 六四一年 二
- 岡野敬次郎 [新報] 六四二年 二
- 山室 宗文 [法協] 六四二年 四
- 佐藤 雄能 [東經] 六四五年 一
- 佐藤 雄能 [東經] 六四五年 一
- 大島 親貞 [東經] 六四五年 一
- 豐浦 與七 [京法] 六四五年 五
- 西本辰之助 [三學] 六四五年 五

【社債】

社債の計算に因る要項に就
て
公債の研究
公社債利拂の理論と實際
社債募集手続料協定問題
社債發行の現状及將來を論
ず
擔保附社債設論
英米の社債
擔保附社債信託に於ける擔
保の變更
増資か起債
大正十三年上半期に於ける
社債界の推移
社債論
外債としての物上擔保附社
債
擔保附社債總額引受者とし
ての外國會社
擔保附社債信託法に於ける
外國信託會社
物上擔保附社債とオーブン・
エンド・モーアゲージ
擔保附社債に關する公告

- 原口 亮平 [國經] 六二一年 五
- 太田垣士郎 [銀研] 六二一年 三
- 松島 喜作 [銀叢] 六二一年 三
- 太田垣士郎 [銀叢] 六二一年 四
- 太田垣士郎 [銀研] 六二一年 四
- 服部 洪 [銀研] 六二一年 六
- 服部 洪 [資料] 六二一年 九
- 鈴木 武治 [銀研] 六二一年 六
- 橋本 良平 [商事] 六二一年 三
- 花房 武雄 [金融] 六二一年 一
- 佐藤 雄能 [會計] 六二一年 一
- 栗栖 越夫 [銀研] 六二一年 六
- 栗栖 越夫 [銀研] 六二一年 七
- 栗栖 越夫 [銀研] 六二一年 八
- 栗栖 越夫 [銀研] 六二一年 八
- 栗栖 越夫 [銀研] 六二一年 八

【社債】

擔保附社債原簿と其閱覽の請求
 擔保附社債に關する信託の承繼
 大正十三年度募債場の概観
 金融の繁閑と公社債募集市場との關係
 資本の社債化と其の保護に就て
 社債の限度と償還整理法
 擔保附社債に關する信託契約に就て
 擔保附社債の形式と發行に就て
 擔保附社債の成立に就て
 擔保附社債に關する信託の特質を論ず
 擔保附社債の見長、短期社債の比較觀察
 起債法として普通化しつつある社債
 無額面株式及轉化社債に就て
 株式會社の社債の總額と商

栗栖	越夫	「銀研」	大四年	九卷	二號
栗栖	越夫	「銀研」	大四年	九	四
吉田	繁吉	「銀叢」	大四年	四	三
吉田	繁吉	「銀叢」	大四年	四	四
萬	雄一郎	「金融」	大四年	二	三
栗原	廣太	「金融」	大四年	二	四
栗栖	越夫	「金融」	大四年	二	七
栗栖	越夫	「金融」	大四年	二	八
栗栖	越夫	「金融」	大四年	二	九
栗栖	越夫	「金融」	大四年	二	一〇
栗栖	越夫	「金融」	大四年	二	一一
池島	庸一	「會計」	大四年	二	一七
長谷川安兵衛		「早商」	大四年	一	一
山本	俊麿	「正義」	大四年	一	四

法の規定
 社債權と其の裁判上の保護
 社債總額を擴大するの可否
 擔保附社債と擔保權の實行
 社債と財團抵當
 日本社債法要義
 社債界の弊害と社債法の活用
 社債發行の方式と發行者の責任
 社債の經濟的機能を論ず
 擔保附社債の性質に就て
 社債擔保の變更と社債權者集會
 商法の法定事項と社債申込證
 社債申込の方式に就て
 擔保附社債權者の權利に就て
 電氣事業會社の社債發行限度を擴張すべきか
 社債發行限度擴張の問題
 社債權者集會に於ける多数決の原則

竹田	省	「イン」	大四年	一	一
山田	正三	「イン」	大四年	一	二
毛戸	勝元	「イン」	大四年	一	三
栗栖	越夫	「イン」	大四年	一	四
栗栖	越夫	「イン」	大四年	一	五
栗栖	越夫	「イン」	大四年	一	六
板橋	菊松	「イン」	大四年	一	七
谷田	三郎	「イン」	大四年	一	八
西本辰之助		「イン」	大四年	一	九
藤田	貞次	「イン」	大四年	一	一〇
栗栖	越夫	「イン」	大四年	一	一一
遊佐	慶夫	「イン」	大四年	一	一二
鳥賀陽然良		「イン」	大四年	一	一三
西本辰之助		「イン」	大四年	一	一四
栗栖	越夫	「イン」	大四年	一	一五
吉川	義弘	「會計」	大五年	一	一六
神戸	正雄	「時經」	大五年	一	一七
栗栖	越夫	「銀研」	大五年	一	一八

「物價指數公社債」を論ず
 社債の募集と引受募集の意義
 金融上の新傾向、物價指數社債に就て
 社債發行の可能に就て
 投資物として公債の株券並に社債の優劣
 社債募集の決議と其の効力を論ず
 商法の社債法と特殊債券法
 社債の償還期限に就ての一考察
 社債權者の裁判上の救済手段
 抽籤償還問答
 社債變更に就て
 擔保附社債と期限前償還
 金融界の反動と社債の前途

岩崎	博	「銀研」	大五年	一〇卷	七號
栗栖	越夫	「銀研」	大五年	一〇	四
岩崎	博	「銀研」	大五年	一〇	五
藤波	正	「銀研」	大五年	一〇	七
高城仙次郎		「法研」	大五年	一	一
板橋	菊松	「イン」	大五年	三	一
板橋	菊松	「イン」	大五年	三	二
板橋	菊松	「イン」	大五年	三	三
板橋	菊松	「イン」	大五年	三	四
板橋	菊松	「イン」	大五年	三	五
遊佐	慶夫	「イン」	大五年	三	六
豊浦	與七	「イン」	大五年	三	六
後藤登喜男		「イン」	大五年	三	六

【社債】 【奢侈】 【シヤフスベリー】 【暹羅】

奢侈を論ず
 奢侈と貧困
 「奢侈と貧困」を讀みて
 榊田法學士に答ふ
 河上教授の示教に就て
 デヴィッド・ヒュームの奢侈論
 論と其功利主義的倫理
 物資の缺乏と奢侈
 奢侈の經濟史觀
 ジョン・ラスキンの奢侈論
 奢侈抑制と租稅政策

シヤフスベリー伯の生涯
 (Anthony Ashley Cooper, Earl of Shaftesbury, 1801-1885)

【暹羅】
 暹羅國古代法研究に就て
 暹羅事件
 暹羅國著作權法
 暹羅國に於ける各國領事裁判の現制一般
 暹羅の世界經濟上の位置

田島	錦治	「新報」	四八	五	四八
河上	肇	「經叢」	大五	二	四
榊田	民藏	「國家」	大五	三〇	五
河上	肇	「國家」	大五	三〇	六
榊田	民藏	「國家」	大五	三〇	六
高橋誠一郎		「三學」	大九	一四	一
石川	文吾	「國經」	大九	二八	二
佐野	學	「我等」	大一一	四	三
奥井復太郎		「三學」	大一一	一六	五
堀江	歸一	「エウ」	大二三	二	一四
上田貞次郎		「國經」	大二三	三	六
政尾	藤吉	「法協」	四五	一八	九
有賀	長雄	「外時」	四五	五	九
水野鍊太郎		「法協」	四五	二	九
山内	四郎	「國際」	四五	〇	一〇
河津	暹	「外時」	四五	三	三

【暹羅】【自由】

暹羅に於ける英國使節	及川 恒忠	〔外時〕大三一九	三六
西暹羅の富源	阪部 一郎	〔洋經〕大五〇一	六九九
暹羅の錫鑛業	阪部 一郎	〔洋經〕大五〇一	七四三
支那及暹羅の歐洲出兵	嶋川 新	〔外時〕大六二六	三二一
國際労働と暹羅	嶋川 一郎	〔社政〕六一一	二七
暹羅經濟事情		〔資料〕大二九	二
シヤムの鐵道		〔資料〕大二九	八
暹羅國王刑法法典	岡田朝太郎	〔早法〕大二三	一

【自由】 參照||民主主義。

言論の自由	宮本平九郎	〔志林〕四四三	二〇
居住的移轉の自由を論ず	山崎 捨吉	〔法政〕四七	八
自由權	上杉 慎吉	〔法政〕四三	九
自由の強制	河上 肇	〔日經〕四七	一
國體觀念と自由思想	小山 東助	〔國國〕六一	六
經濟政策と經濟的自由	氣賀 勳重	〔三學〕大三八	六
出版の自由	江木 衷	〔新聞〕大三一	九五
新自由主義の發達	石橋 湛山	〔洋經〕大四一	七〇〇
自由主義か社會主義か	舞出長五郎	〔國家〕大七三	五
私法上の自由權を論ず	菅原 春二	〔京法〕大七三	九
自由反對の二型	財部 靜治	〔商經〕大七一	一〇
政治現象としての自由、平等及國家施設の原理	佐々 弘雄	〔國家〕大九三	一〇

自由と平等との理論的不調和	林 惠海	〔日社〕大〇九	一一
J. S. Mill の名に於て思想及び言論の自由を評す	村瀬武比古	〔國國〕大一一〇	一
教育上の自由平等を論ず	廣川 捨吉	〔法政〕大一一九	二
フレイ・プレスの叫び	千葉 龜雄	〔我等〕六一	三
經濟と自由	堀 經夫	〔經叢〕六一	四
自由概念の限界	村瀬武比古	〔法治〕六一	五
拘束せられたる自由	高橋 親吉	〔臺法〕六一	二
アダム・スミスの自由主義に就て			
自由主義者の愛	濱田 恒一	〔三學〕大一一七	〇
自由及び自由權の研究	石川三四郎	〔我等〕大一一五	〇
自由解放思想の移推	中島 重	〔同論〕六一	〇
個人の自由と社會の進歩	黒田 禮二	〔我等〕六一	一
國民自由權の尊重に就て	栗原 信一	〔法治〕大一一三	一
英國の保守黨及び自由黨と自由主義思想	大塚 春吉	〔辯協〕大一一八	一〇
自由主義思想	永井 亨	〔社政〕大一一	〇
結社の自由と労働組合主義	國際労働局	〔社政〕大一一	〇
憲法上の「自由權」の比較研究	高橋 信司	〔同論〕大一一	〇
社會主義と自由主義	上田貞次郎	〔企社〕大一一	〇
新自由主義と農村問題	上田貞次郎	〔企社〕大一一	〇

【衆議院】 參照||議會。選舉。

衆議院は選舉人の全體を代表せず	本野 一郎	〔國家〕四三	四
衆議院議長論	福田 笑迎	〔東經〕四一	一四六三
議員の歳費と無賃乘車制度について	黒澤 和雄	〔東經〕四四	一六六四
統計上より見たる衆議院痛嘆すべき議場の失態	横山 雅男	〔統集〕大一一	三八四
解散及總選舉	山形 東根	〔東經〕大四七	一八三
衆議院解散の要件及び其責任の歸着	稻田周之助	〔新報〕大六二	七
數度の衆議院解散	稻田周之助	〔新報〕大六三	三四
帝國議會閉會中の衆議院解散	稻田周之助	〔新報〕大六四	三
	稻田周之助	〔新報〕大六五	一〇

【宗教】 參照||基督教。道德。佛教。 回教。

宗教統計	高橋 二郎	〔統雜〕四五	七五
宗教の監督	華陽樓主人	〔法協〕四七	二
法律と宗教との關係	穂積 陳重	〔新報〕四三	九
宗教と國家	宮本平九郎	〔志林〕四三	二
獨逸諸國に於ける宗教團體	副島 義一	〔志林〕四三	二
制度の變遷並現狀の大略	渡邊清太郎	〔法政〕四三	四
國家と宗教の沿革的關係	穂積 八東	〔新報〕四三	一〇
獨逸宗教制一斑	吾孫子 勝	〔志林〕四三	三
國勢調査に於ける宗教	世良 太一	〔統雜〕四五	一
國家と宗教(講演)	添田 壽一	〔國家〕四七	八
我宗教制度の將來を論ず	清水 澄	〔國家〕四〇	二
法律と宗教	鈴木 充美	〔辯協〕四〇	二
宗教と警察との依る便宜感			
化救濟	佐藤 範雄	〔刑評〕四三	二九一二
宗教改革時代と資本主義	阿部 秀助	〔三學〕四三	三
內務省の宗教政策を評す	渡邊 機堂	〔東經〕四五	一六三〇
國民教育と宗教	相原 介一	〔國國〕六一	一一
東洋の經濟に及ぼせる宗教の影響に就て	岡田 重次	〔國經〕六一	一四
信仰上より見たる京都市人口	横山 雅男	〔統集〕六一	三三四
社會學と現代宗教學との交渉	赤松 智城	〔日社〕大一一	一一

【衆議院】 【宗教】

宗教に對する實理政策
法律と宗教
宗教政策と國民思想の動搖
(講演)
人口問題に於ける宗教的解決(講演)
我國宗教制度の將來に就て
異民族の同化と宗教
宗教の罪と法律の罪
宗教團體の法上の地位に就て
社會運動と宗教運動
道教に就いて
宗教行政法
支那に於ける一神教
宗教制度の變遷
神社は宗教か(講演)
社會問題と宗教
兒童期に於ける宗教心の解剖
大本教批判に要する豫備的智識
大本教の初殿取潰問題
再び大本教神殿取潰問題に

建部 遜吾	〔日社〕	大三	二	一	二
鶴澤 總明	〔國國〕	大四	三	一	〇
大森 禪	〔日社〕	大四	二	三	四
渡邊 海旭	〔日社〕	大四	三	一	二
清水 澄	〔新聞〕	大四	一	〇	七
蜷川 新	〔國際〕	大五	一	四	六
坂倉松太郎	〔法政〕	大七	一	五	一
佐々木惣一	〔京法〕	大七	一	七	〇
河上 肇	〔社問〕	大八	一	六	〇
宍倉 保	〔亞經〕	大八	三	三	〇
柴田駒三郎	〔法政〕	大八	六	二	〇
宍倉 保	〔亞經〕	大九	四	一	二
織田 萬	〔法叢〕	大九	三	一	〇
高島 米峰	〔法政〕	大〇	一	八	二
山室 軍平	〔社政〕	大〇	一	六	〇
小松 雄道	〔法政〕	大〇	一	八	二
播磨 龍城	〔新聞〕	大〇	一	八	四
播磨 龍城	〔新聞〕	大〇	一	八	六
播磨 龍城	〔新聞〕	大〇	一	八	九

就きて
宗教を通じて見たる古代猶太の國民性
社會的宗教(講演)
法の淵源としての宗教
宗教論二篇
反動的安定と宗教的傾向
宗教的態度と現代社會
戰爭に類したる宗教と其の改造に就ての考察
宗教論
宗教社會學と認識論
宗教に對する一考察
國家の宗教に對する關係に就ての政治的概念
宗教と社會主義との關係
民主制と宗教
植民は布教なり
フイヒテの宗教哲學に關する一考察
宗教を論じ思想問題に及ぶ
宗教と犯罪との關係に就て
宗教生活と經濟生活カルヴ
イニズムの英國經濟に及

播磨 龍城	〔新聞〕	大〇	一	九	六
三浦 新七	〔商研〕	大〇	一	一	〇
岩井 龍海	〔日社〕	大〇	九	三	五
堀江專一郎	〔新報〕	大〇	三	三	四
帆足理一郎	〔我等〕	大〇	四	一	〇
長谷川萬太郎	〔我等〕	大〇	四	二	〇
長谷川萬太郎	〔我等〕	大〇	四	七	〇
藤森 達三	〔國國〕	大〇	一	一	〇
笹倉 新治	〔法政〕	大〇	一	九	〇
デユルケーム	〔我等〕	大〇	五	五	〇
村瀬武比吉	〔法治〕	大〇	二	九	〇
不破 清警	〔新聞〕	大〇	三	三	四
財部 靜治	〔經叢〕	大〇	三	三	〇
村瀬武比吉	〔法治〕	大〇	三	八	九
長田 三郎	〔商經〕	大〇	四	〇	〇
河瀬 憲次	〔社科〕	大〇	四	七	〇
河瀬義三郎	〔辯協〕	大〇	四	一	〇
福場 保洲	〔社雜〕	大〇	四	一	〇

ぼせる影響について
社會進化と宗教
經濟史上に於ける宗教の地位
近世英國國民史上に於ける宗教の地位
American foreign policy with respect to Japanese religious affairs
宗教を論じて思想問題に及ぶ
宗教に對する態度に就いて
宗教心理學に就て
獨逸の宗教統計

笹森 建三	〔商濟〕	大四	六	一	〇
山口正太郎	〔我等〕	大四	七	五	一
石濱 知行	〔我等〕	大四	七	四	〇
徳増榮太郎	〔企社〕	大五	一	二	〇
和田 禎純	〔國際〕	大五	二	五	〇
河緒義三郎	〔法公〕	大五	三	〇	四
レヒニン	〔マル〕	大五	四	四	〇
岡村 貫一	〔法政〕	大五	三	五	六
中川與之助	〔經叢〕	大五	三	六	〇
江木 衷	〔法協〕	大五	六	四	九

る社會主義の謬見
ジョンロックの私有財産制度論
私有財産主義に依る産業社會の改造
私有財産に關する一考察
私有財産制と貴族市民及労働階級
私有財産制度の基礎に就て
私有財産制の發達及制限

桑田 熊藏	〔法政〕	大〇	一	一	六
福田 徳三	〔三學〕	大〇	三	二	〇
藤森 達三	〔國國〕	大〇	九	四	一
工藤直太郎	〔社政〕	大〇	一	〇	〇
長谷川萬太郎	〔我等〕	大〇	七	四	〇
林 要	〔同論〕	大〇	一	七	〇
小林丑三郎	〔政經〕	大〇	一	一	〇
今野 精吉	〔法政〕	大〇	三	二	四
謝花 寛濟	〔新聞〕	大〇	七	一	〇
三浦 信三	〔法協〕	大〇	九	三	二
梅原錦三郎	〔新聞〕	大〇	九	一	七
藥師志光	〔志林〕	大〇	二	五	一

【宗教】 【住居を侵す罪】 【私有財産】 【集産主義】 【住所】

【住居を侵す罪】

住宅侵入罪を論ず

【私有財産】

私有財産廢止の國家に關す

【住宅問題】

参照：建築。借家。地代。都市。都市計畫。

住居問題の解決	桑田 熊藏 [國經] 四三
家屋の構成と經濟狀態	下村 宏 [三學] 四四
住家の完備と兒童體格の關係	高橋 二郎 [統雜] 二九三
宅地の地代を論ず	河田 嗣郎 [京法] 四四
公設住家制度	上杉 慎吉 [法協] 二九
住居問題概論	戸田 海市 [京法] 六
近代に於ける都市の發達と住宅問題	笠間 梶雄 [國家] 二五
住居問題	氣賀 勘重 [三學] 六
土地投機と住居問題	關 一 [國國] 六一
札幌區に於ける住家の狀態	高岡 熊雄 [國經] 一六
住居問題に對する都市政策	松崎 壽 [志林] 一六
住居問題と都市政策	松崎 壽 [商經] 一六
住居問題及園市園郊	森川 端夫 [法政] 一五
小住宅改良問題	神戶 正雄 [經叢] 一七
住宅改良の三角考察	藤澤 穆 [政治] 一八
住居問題(講演)	佐野 利器 [日社] 一八
都市と住宅問題	石井 謹吾 [辯協] 一八
住宅問題と日本建築の將來	權田保之助 [國家] 一八

住宅問題の意義	渡邊 鐵藏 [經學] 九一
家賃騰貴と都市計畫	戸田 海市 [經叢] 九二
住宅問題と新借家法案(講演)	末弘嚴太郎 [日社] 九三
住宅問題と借家法案	末弘嚴太郎 [法協] 九三
住居統計概論	財部 靜治 [經叢] 九三
住宅に關する社會政策	宮部 準次 [社政] 九三
俸給生活者の住宅難	深海 豐二 [社政] 九四
住宅問題	西垣 恒矩 [社政] 九五
住宅政策及び其金融	渡邊 鐵藏 [財經] 九八
住宅政策	渡邊 鐵藏 [經論] 九八
家賃の正當なる計算	宮田 庄吉 [社政] 一〇一
全國家賃調査報告	林 平馬 [社政] 一〇二
人類の環境改良と住居問題の發生に就て	伊藤 眞雄 [商經] 一〇二
京都市に於ける家賃の統計的研究	岡崎 文規 [經叢] 一〇七
住宅地政策	田中 貢 [經商] 一〇三
都市借家問題の現在及將來	岩田 唯雄 [辯協] 一〇三
各國の住宅政策	田中 貢 [經商] 一〇三
理想住宅の供給と不良住宅の改良	田中 貢 [經商] 一〇四
産業住宅問題	澤田 謙 [都問] 一〇四
衛生學上より見たる日本家	

屋の煖房法

住宅問題に關する最近の文獻

都市に於ける住宅政策	北澤新次郎 [早商] 二五
第四回全國家賃調査報告	横山勝太郎 [法新] 二五
ラトウール「フランス都市の土地政策と住宅問題」(譯)	榊原 平八 [社政] 二五
英國住居政策の由來及住居供給に關する法制	鈴木 武雄 [都問] 二五
英國に於ける住居改修に關する法制の發達	伊藤 眞雄 [商經] 二五
英國の一九〇九年住居及都市計畫條例	伊藤 眞雄 [商經] 二六
英國住宅政策及都市計畫	關 一 [國經] 二七
英國に於ける共營住宅	南木 性 [社政] 二七
英國住宅補助政策	關 一 [國經] 二七
最近英國の住宅政策	澤田 謙 [社政] 二七
英國労働黨の住宅政策批判	澤田 謙 [社政] 二七
英國住宅組合史觀	猪谷 善一 [商研] 二七
獨逸大市府の住居問題	上西半三郎 [日社] 二七
獨逸都市の土地並に住宅政策	

策

獨逸都市の住宅巡視員制度

住宅難に對する獨逸の立法	藤澤 穆 [政治] 一〇八
獨逸に於ける住宅難の救済	我妻 榮 [法協] 一〇九
獨逸に於ける住宅建築に關する公共的施設	堀切善次郎 [社政] 一〇九
佛國に於ける廉價住居法と小不動産法	渡邊 鐵藏 [經論] 一一一
歐西現代の住居問題	織田 萬 [京法] 一〇三
獨逸に於ける自由法說に付	上西半三郎 [日社] 一〇三
自由法說非なり	乾 眞介 [社政] 一一一
佛蘭西に於ける自由法說	
英國に於ける自由法學說	
英國の自由法運動觀	
自由法說の價値	
自由法說概評	
自由法運動	

【自由法】

自由法論の研究に関する二
三の補遺
標語としての法律の社會化
及び自由法
自由法論の理想的及び實踐
的意義に就て
自由法論と法源の科學的自
由探求

- 牧野 英一「志林」大二 二四一—二
牧野 英一「社政」大二 一—三
牧野 英一「志林」大二 二五—二
牧野 英一「志林」大二 二六—二
牧野 英一「志林」大二 二六—二

【儒教】

儒墨老の社會主義
儒教の社會政策
儒教と民本主義
儒教の本義より國際聯盟を
觀ず
支那の無政府と儒家思想

- 吉田 良春「國家」四七 八—九
五來 欣造「國家」大五 四—二
服部宇之吉「日社」大八 六—四
松永 榮「日社」大九 七—四
小島 祐馬「我等」大四 七—三

【出獄人保護】 免囚保護を見よ

【出版】 參照II著作權。新聞紙。

出版と著作
出版法改正私議
藝術と政治との關係を論じ
て小説「逆徒」發賣禁止
處分に及ぶ
出版の自由
守札神佛畫像出版の取締法
現行出版物法の研究

- 佐々木惣一「京法」四四 三—四
美濃部達吉「新報」四四 二—六
平田 修「辯協」大二 一七—一
江木 衷「新聞」大三 一—九
石原雅二郎「法政」大二 一—九
宇野 慎三「法協」大二 一—九

【シュミット】 (Peter Heinrich Schmidt. 1870-)

經濟地理學研究に関するシ
ュミットの見解

- 伊藤 秀一「三學」大五 二—三

【シムペーター】 (Josef Schumpeter)

シムペーターの「貨幣理
論基本方程式」に就て

- 徳重 伍介「國經」大四 三—四

【シュモラー】 (Gustav Schmoller. 1838-1908)

シュモラー氏の訃音
學界の巨人グスターフ・シ
ュモラー逝く
シュモラー教授の獨逸戰後
の社會觀
シュモラー教授の史傳に就
て

- 工藤 重義「國家」大六 三—八
神戸 正雄「經叢」大六 五—二
楠田 民藏「經叢」大六 五—三
長 壽吉「經叢」大六 五—四

【需要と供給】

自給自足の大道
需要の法則と價格の豫見
正常需要及供給の動的考察
と時の要素
需要曲線、供給曲線及び價
格曲線
震災による主要需要増加品
及其生産業に對する影響
需要供給論と貨幣數量説
需要曲線に就て
マーシャルの需要供給曲線
國際貿易に於ける需要供給
の一般關係

- 財部 靜治「法論」大七 一—九
手塚 壽郎「國經」大九 二—九
石川 興二「經叢」大二 〇—三
河上 肇「經叢」大二 〇—二
山口 茂「商研」大四 四—三
中川 友長「經研」大四 二—四
中山伊知郎「社科」大五 二—一
柴田三四治「銀叢」大五 六—五

【狩獵】

狩獵法第十一條中の家族の
意義及同法に依る免狀下
附なき場合に於ける救済
手段
狩獵制度に就て

- 島村他三郎「志林」四四 二—二
佐藤 百喜「國家」大七 三—十八

【準禁治産者】

民法第一二條に就て
妻及準禁治産者と訴訟能力
準禁治産宣告決定の公告に
就て
準禁治産者と親權の行使
準禁治産者と親權
準禁治産論
準禁治産者の賣買同意と代
金受領

- 池田寅二郎「法協」四三 二—四
谷田勝之助「新聞」四二 一—四
瓊浦 學人「新聞」四一 一—五
鈴木 虎雄「新聞」四四 一—七
穂積 重遠「法協」四五 三—四
岡松參太郎「志林」大八 二—一
長谷川陸郎「新聞」大二 一—二

【準備金】

法定準備金私見

- 石川 文吾「國經」四三 八—四

法定準備金積立の標準	佐藤 雄能	〔東經〕四四	六四	一六三
合併會社の法定準備金	佐藤 雄能	〔東經〕四四	六四	一六五
任意積立金と所得税	佐藤 雄能	〔東經〕四五	六六	一六一
積立金課税問題に就て	龜山 要	〔新聞〕六二	一	八五〇
積立金の給付と周旋業との區別を論ず	龜山 要	〔新聞〕六二	一	八六一
法定準備金論	佐藤 雄能	〔東經〕六二	六六	一七二
任意準備金論	佐藤 雄能	〔東經〕六二	六六	一七三
法定準備金算出の基礎たる利益の意義	I M 生	〔保評〕六三	七	一
會社の秘密積立金を論ず	田尻 常雄	〔國經〕六四	一九	二
準備積立金に就いて	片尾 俊也	〔會計〕六六	一	五
秘密積立金の計算に就て	小山 强次	〔會計〕六七	四	一
積立金と所得税	小山 强次	〔會計〕六七	四	二
法定積立金を論ず	中島 精二	〔會計〕六七	四	五
法定準備金を論ず	原口 亮平	〔國經〕六七	二四	四
秘密積立金の推算	渡邊 鐵藏	〔國家〕六七	三三	六
渡邊博士の「秘密積立金の推算」を讀みて	池田 龍藏	〔三學〕六七	三三	七
秘密積立金の推算に關し池田中村兩氏に答ふ	渡邊 鐵藏	〔國家〕六八	三三	一五
税法上の積立金に就いて	中村 繼男	〔會計〕六八	六	三
増加積立金論	小山 强次	〔會計〕六八	五	六
積立金を論ず	小宮山 敬保	〔計理〕六九	一	五

秘密積立金の保證性を論ず	河谷 武夫	〔商經〕六二	一一	二九八
株式會社に於ける秘密積立金の研究	橋本 良平	〔商事〕六二	四	一
準備積立金と銷却金との差異	磯野 半造	〔商事〕六二	四	二
積立金振替の中間増資に關する所得問題と新判例	矢部 俊雄	〔會計〕六三	一五	三
商法第一九四條第一項の法定準備金に就て	加島 五郎	〔新聞〕六三	一	三三二
法定準備金の性質に就て	吉川 義弘	〔商事〕六四	六	一

【上院】 貴族院を見よ

日本莊園の系統	中田 薫	〔國家〕四九	二〇	一一
王朝時代の莊園に關する研究	中田 薫	〔國家〕四九	二〇	三九
十一世紀より十四世紀までの英國マノール制度一斑	藤谷光之助	〔國經〕六九	二二	三
土地法と莊園	山崎 宗直	〔三學〕六五	一〇	五
マナアと莊園の比較	瀧本 誠一	〔三學〕六〇	一五	七

【莊園】 參照II封建制度。

【傷害の罪】

毆打創傷罪に關する現行刑法の規定は刑法の原理に反す

刑法草案傷害罪修正私考

誤殺誤傷に就て

殺傷に就て

我刑法傷害罪を評論して最近立法例に及ぶ

傷害致死に付て

自傷補助と承諾傷害

刑法第二〇七條の適用範圍に就て

奥島 南葉 〔新聞〕六一 | 一 | 二〇四〇 || 磯邊 四郎 | 〔明法〕四三 | 年 | 一〇 | 二〇 |
谷村 伸	〔法協〕四五	二〇	四	二〇
岡田朝太郎	〔明學〕四七	一	七	四
牧野 英一	〔法協〕四二	二六	六	六
大場 茂馬	〔刑評〕四四	三	一〇	一〇
岡田 庄作	〔志林〕六八	二二	八	八
伴 輝吉	〔新聞〕六〇	一	一六三	三

【傷害保險】

奇災保險論

現行法規と傷害保險

傷害保險と現行法規

傷害保險と勞働保險の範圍

傷害保險の見地より觀たる

栗津 清亮 〔保雜〕四三 | 一 | 一五八 || 三隅 正 | 〔保評〕四四 | 二 | 六 | 六 |
| 栗津 清亮 | 〔保評〕四四 | 二 | 八 | 八 |
| 栗津 清亮 | 〔保雜〕四四 | 一 | 一六二 | 二 |

【傷害の罪】【傷害保險】

工場危險に就て

傷害保險事業の難易

大不列顛に於ける傷害保險

傷害保險契約の性質と其兼營に就て

傷害保險の法性を論ず

傷害保險の性質、現狀及び改正保險法の短評

伊太利災厄保險機關論

各種の職業と傷害保險

傷害保險の醫事に就て

傷害及健康保險論

傷害保險契約の性質と其兼營に就て

傷害補償と傷害保險に就て

職工扶助と災害保險

交通傷害に就て

傷害保險

我國に於ける傷害保險の狀況

羅災保險金の始末

羅災保險金の受領者

災害保險の發達

近藤 成虎 〔保雜〕四四 | 一 | 一六二 || 栗津 清亮 | 〔國經〕四四 | 九 | 四 | 四 |
中村 敬三	〔保雜〕四五	一	一八五	五
栗津 清亮	〔評論〕六二	二	六	六
青山 衆司	〔新報〕六二	三三	四八	八
栗津 清亮	〔新聞〕六二	一	八三七	七
杉 琢磨	〔國經〕六三	一七	一三	三
栗津 清亮	〔日經〕六三	一五	四	四
栗津 清亮	〔保雜〕六三	一	二〇五	五
惣崎 貞夫	〔保雜〕六三	一	二〇六	六
栗津 清亮	〔保雜〕六三	一	二〇七	七
栗津 清亮	〔保雜〕六三	一	二〇八	八
栗津 清亮	〔保雜〕六七	一	二二五	五
瀧谷 善一	〔國經〕六九	二八	二一三	三
玉野重次郎	〔保雜〕六九	一	二八四	四
田中 貢	〔國國〕六〇	九	一七三	三
栗津 清亮	〔東經〕六〇	八三	二〇八	六
神戸 正雄	〔時經〕六二	一	一六	六
神戸 正雄	〔時經〕六二	一	一七	七
清水 玄	〔社政〕六四	一	五七	七

【商慣習】 商法—法令を見よ

外國渡航賤業婦人統計表調
 娼妓自由廢業の法理
 娼妓の自由廢業
 娼妓契約の效力を論じて娼妓保護の方法に及ぶ
 娼妓契約の效力
 娼妓取締規則に就て
 娼妓の自由廢業問題
 娼妓病院の統計
 社會の改善と娼妓問題
 娼妓と妊娠との關係に就て娼妓に付て
 警察行政としての私娼撲滅
 歐洲の公娼と私娼
 娼妓と前借金
 賣笑婦賣買の真相
 娼妓稼禁止法論

羽生長太郎	〔統雜〕	四五	一	七
長島鷺太郎	〔法政〕	四五	四	三八
長島鷺太郎	〔辯協〕	四三	四	九六
長島鷺太郎	〔明法〕	四三	一	二
江木 衷	〔新報〕	四三	一	一四
大場 茂馬	〔新報〕	四三	一	二六
江口 淡	〔新聞〕	四三	一	一六
櫻井熊太郎	〔新聞〕	四三	一	一八
二階堂保則	〔統集〕	四三	一	二九六
寺尾 亨	〔刑評〕	四三	一	二
濱井 照人	〔統雜〕	四三	一	二八七
岩井 尊文	〔新聞〕	四三	一	四九六
豊原 清作	〔辯協〕	四五	二〇	六
雲 舟 生	〔財經〕	四五	三	二二
森戸 辰男	〔國家〕	六八	三	二
深見 豊二	〔社政〕	六九	一	二
金城 善助	〔新聞〕	六〇	一	一九一

公娼の前借金に就て
私娼の禁制を断行せよ
社會問題としての賣春制度
廢妓問題
江戸に於ける賣笑制度と非人制度

岡崎 文規	〔經叢〕	六二	一七	一
佐伯 復堂	〔新聞〕	六二	一	二二
碧湖 學人	〔臺法〕	六四	一九	四七
播磨 龍城	〔新聞〕	六四	一	二四一
上林 豊明	〔社科〕	六五	二	五六
參照	會計學。會社。科學的管			
理法。外國爲替。貨幣				
爲替。關稅。恐慌。競争				
銀行。金融。景氣。經濟				
減價。原價計算。工業。廣				
告。財産目錄。産業。市場				
資本。商業會議所。商業				
教育。商業政策。商業道德				
商標。信託會社。信用。倉				
庫。デパートメント。ス				
ト了。投機。富。取引所。				
暖簾。販賣。貿易。簿記。				
嘉村今朝一	〔統集〕	四五	一	二二
濱田健次郎	〔國家〕	四〇	一	三
濱田健次郎	〔國家〕	四〇	一	八九
松崎藏之助	〔國家〕	四三	一四	一六五

【商業】

商業の發達を論ず
國際通商と帝國政策並に商

田島 錦治	〔内外〕	四五	一	五
坂部行三郎	〔國家〕	四五	一	一八五
高根 義人	〔内外〕	四七	三	一三
松崎藏之助	〔法協〕	四七	三	二
高橋 一郎	〔統雜〕	四七	一	二七四
河津 暹	〔志林〕	四九	八	六
河津 暹	〔志林〕	四九	八	二二
河津 暹	〔志林〕	四九	八	二二
山内 正瞭	〔國家〕	四〇	二	一〇
筑山 生	〔東經〕	四一	五	一四〇
伊藤 述史	〔國經〕	四二	六	一
上田貞次郎	〔國經〕	四二	七	一
河田 嗣郎	〔國經〕	四二	七	一
宮崎 駿兒	〔東經〕	四二	五	一四七
黒澤 龍演	〔東經〕	四二	六	一五七
金子堅太郎	〔日經〕	四三	八	四一五
津村 秀松	〔國經〕	四三	八	五十六
松本 丞治	〔新報〕	四三	二〇	七
河津 暹	〔法協〕	四三	二	二
田崎 義介	〔國經〕	四三	九	四一五

商業と統計
商務官に就て
我邦中古商業の「座」に就

横山 雅男	〔統雜〕	四三	一	二八八
高島左一郎	〔國經〕	四四	二	一
福田 徳三	〔國經〕	四四	二〇	一六
河津 暹	〔日經〕	四四	九	甲五
興相全太郎	〔國經〕	六二	二	四
服部文四郎	〔志林〕	六二	一四	一〇
Ishikawa	〔國經〕	六二	二	四
内池 廉吉	〔國經〕	六二	二	四
志田鉦太郎	〔國經〕	六二	二	一
石川 文吾	〔國經〕	六二	二	六
飯島千代太	〔日經〕	六二	二	三
内池 廉吉	〔日經〕	六二	二	三
坂田重次郎	〔日經〕	六二	二	七九
内田 銀藏	〔國國〕	六三	二	二
熊崎 良	〔國經〕	六三	二	二一三
堀切善兵衛	〔三學〕	六三	八	五六
飯島 幡司	〔國經〕	六四	一九	六

【商業】

移	津村 秀松	〔國經〕	大五二〇	二
歐洲戦後の世界的商戦	本多 精一	〔財經〕	大五三三	一
商工心理學	大野 辰見	〔商經〕	大五七三	一
「座」の研究	三浦 周行	〔經叢〕	大五八二	一
「座」の起源と其語源	三浦 周行	〔國經〕	大六三三	一
「座」研究(再び)	三浦 周行	〔經叢〕	大六七六	一
歐米の商工業と東洋市場	鶴見左吉雄	〔財經〕	大六四四	一
我が商工業の現在及び将来	岡 實	〔財經〕	大六四四	二
佐野博士著「新選商學提要」	藤本幸太郎	〔國經〕	大六三三	三
所謂「得意」問題	岡田 市治	〔三學〕	大六六一	六
商業學の使命を論ず	兒林百合松	〔商經〕	大六一	六
商務省論	河津 暹	〔國家〕	大七三三	一
徳川時代に於ける某商家の家風書	中田 薫	〔國家〕	大七三三	一
徳川時代に於ける商工階級	瀧本 誠一	〔國經〕	大七二五	四
國際商業と戦争との關係を論ず	森川 端夫	〔法政〕	大七二五	七
支那商人の心得	大橋 末彦	〔亞經〕	大八三三	一
英國商店法に就て	武田 英一	〔國經〕	大八二六	三
商事(Handelsache, Commercial matter)の概念を論ず	田多井四郎治	〔辯協〕	大九二四	五
商の概念を論ず	田多井四郎治	〔辯協〕	大九二四	一
商道九篇に就て	瀧本 誠一	〔三學〕	大九二五	二
昔の商業と商業道德	三浦 周行	〔國經〕	大九三三	三

マーカンチリズム概論	高橋誠一郎	〔三學〕	大八三三	一〇
獨逸の世界商業市場征服策	棗田 藤吉	〔商經〕	大八三一	一六
我國商業組織是非	村本 福松	〔商經〕	大九〇一	三
商工經營と人	村本 福松	〔商事〕	大九〇一	一
商業會計論	須藤 文吉	〔商事〕	大九〇一	一
Mercantilismの思想的研究	關 未代策	〔國國〕	大一一〇	三
ミルとマーカンチリズム	榎本 鑛治	〔三學〕	大一一六	二
科學的商業研究序論	村本 福松	〔商經〕	大一一一	二七
議會と商工業	神戸 正雄	〔時經〕	大一一一	九
商工經營上の危険とその對策	村本 福松	〔商經〕	大一一一	一
ビュヒャーの商業論	大野 辰見	〔商經〕	大一一一	三
組織概念としての商業	向井 鹿松	〔三學〕	大一一七	三
アダム・スミスの商業に對する思想	向井 鹿松	〔三學〕	大一一七	七
マーカンチリズムとアダム・スミス	高橋誠一郎	〔三學〕	大一一七	七
物價高低の原則と現代商業制度	前田加一郎	〔商經〕	大一一一	三
獨逸大銀行の商工業に對する關係	須美 芳夫	〔銀叢〕	大一一一	六
商工黨組織と農民黨の必要	河田 嗣郎	〔エゴ〕	大一一一	五
汎太平洋協會商業會議	石川 文吾	〔國經〕	大一一一	二

桑港大火災關東大震災と國際商業	寺田 四郎	〔國際〕	大一一三	二
國際商業と國際主義	内池 廉吉	〔外時〕	大一一三	三
分治と統一の商權書に就て	長畑 桂藏	〔長彙〕	大一一一	四
The Application of Psychology in Business Correspondence.	Torii	〔長彙〕	大一一二	二
商業學の教授上に實際問題を用ふるの價值	田崎 慎治	〔國經〕	大一一三	三
「商」に就いて	山尾 時三	〔法協〕	大一一三	四
商業及商業學「内池廉吉博士改評商業學概論」を讀みて	津田 武二	〔國經〕	大一一三	五
宮座の研究	中山 太郎	〔社雜〕	大一一三	一
商業學の本質	大野 辰見	〔商經〕	大一一三	一
商業學に就て	上田貞次郎	〔國經〕	大一一三	一
近世初期に於ける商業の本質	野村兼太郎	〔社科〕	大一一四	一
商業學に於ける商業の意義	大野 辰見	〔商經〕	大一一四	一
賣買に於けるサービスの意義	矢野 剛	〔商事〕	大一一四	五
資本主義經濟組織の下に於ける商業の一機能に就て	谷口 吉彦	〔經叢〕	大一一四	一
鑄貨の起源も最古商業國の				

考證	勝矢劍太郎	〔經商〕	大一一四	七
勝矢學士の考證的批評に對して	赤神 良讓	〔經商〕	大一一四	八
商業組織の改善	上田貞次郎	〔商研〕	大一一四	二
大災後の商業狀態及政策概観	細矢 祐治	〔商事〕	大一一四	二
商業労働問題	和田 清	〔商事〕	大一一四	一
發見及發明時代に於ける商業狀況	佐々木吉郎	〔經商〕	大一一四	一〇
日本商業史授業に關する疑問の若干	佐古 慶三	〔商經〕	大一一四	一
商業史と經濟史	大野 辰見	〔商經〕	大一一四	一
獨逸に於ける銀行と商業との關係	申本友三郎	〔銀研〕	大一一四	九
英國に於けるマーカンチリズムの興隆及び衰亡	高橋誠一郎	〔社科〕	大一一四	一
運輸及通信の速度の差異が商業の投機性に及ぼす影響の商業の永遠性に關する一考察	宮島 保衛	〔商濟〕	大一一四	二
二十世紀のマーカンチリズムと紀元一六〇〇年代の全自由輸出論	春日井 薫	〔經商〕	大一一四	五
マーカンチリズムに於ける				

【商業】 【商業會議所】 【商業學校】 【商業教育】

る貨幣觀念の發展
佛敎の興立と商人階級の活動
成功の階梯
陳列窓の心理學的研究
近江商人の起源に就ての一考察
ハーバード大學「商業研究所」
商業大經營の利益及び其程度

高垣寅次郎〔商研〕六二四年 五卷 二號
友松 圓諦〔三學〕六二四年 一九
モアハウス〔銀叢〕六一四年 一六
矢田 篤〔商工〕六二五年 一
田中 秀作〔彥バ〕六二五年 一
平井泰太郎〔國經〕六二五年 四〇 二二三
渡邊 鐵藏〔經論〕六二五年 四 四

【商業會議所】

商業會議所の存立
在外商業會議所論
商業會議所論
關西商業會議所聯合經濟調查會事業概況
戰爭貿易と國際商業會議所
英露商業會議所の組織
紐育商業會議所に於ける仲裁制度
都市計畫と米國商業會議所

戸田 海市〔國經〕六二四年 二一
江木 定男〔志林〕六二四年 一七八
河津 暹〔新報〕六二五年 二六 三
神戸 正雄〔經叢〕六二四年 二
田宮準一郎〔國國〕六二五年 三
中島 玉吉〔法叢〕六二八年 二 三
根本 清六〔三學〕六二八年 一三 八一九

在支日本商業會議所聯合會 善生 永助〔財經〕六二〇 八 三
【商業學校】 商業教育を見よ

【商業教育】

高等商業教育論
大帝國實業大學の説
漢堡に於ける市立商業大學の新設
商業大學論
商業教育に關する意見
商科大學問題に就て
商業教育と新聞紙
商業教育より見たる投機
ロンドン經濟政治學校講義
目錄
獨逸の高等商業學校
戰後の商業教育(講演)
商業教育と經濟學
商科大學と新商業道德
伯林高等商業學校冬學期講義
義及演習要目

山内 正瞭〔國家〕四四〇 二 九
福田 徳三〔日經〕四四〇 一 一〇
阿部 秀助〔日經〕四四〇 一 一二
丹羽 筑山〔東經〕四四一 一五八 一四五〇
高木 信威〔日經〕四四二 五 五
黒澤 龍濱〔東經〕四四三 六〇 一四九七
津村 秀松〔國經〕四四三 九 一
石川 文吾〔日經〕四四四 九 一二
上田貞次郎〔國經〕六二八年 二 二
渡邊 鐵藏〔國家〕六二八年 二 二
佐野 善作〔日社〕六二四年 三 一二
堀内 泰吉〔國經〕六二五年 三 四
上野 道輔〔國家〕六二八年 三 六
武藤 長藏〔國經〕六二九年 一 一三

參照||會計學。徒弟。簿記。

實業補習教育に就いて

(講演)
實業教育振興の急務
日本商業教育略史
伯林商科大學經營學研究室の組織及經營
獨逸商學雜誌「商科大學號」に就て
我國商業教育とシーボルトライプチヒ商科大學に於ける「稅務研究所」
我國實業補習教育の概要

青柳 榮司〔日社〕六二〇 八卷 三二五號
横井 時敬〔財經〕六二〇 八 八
佐野 善作〔商研〕六二一年 三
平井泰太郎〔國經〕六二二 三五 六
平井泰太郎〔國經〕六二二 三七 一
武藤 長藏〔國經〕六二二 三五 五
平井泰太郎〔國經〕六二四 三六 一
小出 滿二〔農經〕六二四 一 二

【商業恐慌】 恐慌を見よ

【商業使用人】

協同支配人は我商法に於て之を認むることを得べきか
支配權の範圍を論ず

松本 丞治〔志林〕四四三 三 一九
平島直太郎〔志林〕四五五 四 三〇
平島直太郎〔新聞〕四五五 一 八四

【商業教育】 【商業恐慌】 【商業使用人】 【商業政策】

支配人が主人の許諾なくして會社の無限責任社員となつて得ざる理由

爲るを得ざる理由
支配人の復讐
商業使用人に關する奥國の新法
支配人の權限を論ず
商法第三二條に就て
商業使用人の保護
介入權の行使と損害賠償請求の許否
商業使用人保護に關する社會政策的規定上の必要に就て

片山 義勝〔新報〕四四一 一八 三
立石 謙輔〔明學〕四四一 一 二〇〇
吾孫子 勝〔國經〕四四三 九 四
竹田 省〔新報〕四四四 二 一 六
高木 藏吉〔新聞〕四四四 一 七四五
吾孫子 勝〔志林〕六二二 一五 九
田中耕太郎〔新報〕六二七年 一〇
武田藏之助〔民衆〕六二四年 二 一三

【商業政策】

近世に於ける獨逸商業政策の發展を論ず
近世に於ける英吉利の商業政策の發展を論ず
Reaction in commercial policy and defects of protectionist theories

津村 秀松〔國家〕四四八 一九 三〇
津村 秀松〔國家〕四四九 二〇 四八
E. H. Vickers〔國經〕四四〇 二 五

參照||關稅。產業政策。

外國商政概論	關 一	〔國經〕四〇	二卷 六七號
對韓商業政策私議	山内 正瞭	〔日經〕四四〇	一 一〇
商業政策に於けるカルテルの地位	笠間 梶雄	〔國家〕四四一	三 三三
我國商業政策の方針を論ず	堀江 歸一	〔國經〕四四二	六 三
米國の商業政策と軍備	堀越善重郎	〔東經〕四四三	五九 一四七
英國商政史の一節	車谷馬太郎	〔國經〕四四四	八 一五
商業政策に對する時論	堀江 歸一	〔三學〕四四四	四 四
津村教授の商業政策を讀む	守屋源次郎	〔日經〕四四四	九六 一二
守屋君の拙著批評に答ふ	津村 秀松	〔日經〕四四四	九 九
著書の批評に就て	福田 徳三	〔日經〕四四四	九 一〇
津村教授の答に答ふ	守屋源次郎	〔日經〕四四四	九 一二
商業政策に於ける殖民	松岡 均平	〔法協〕六二	三〇 一三
津村教授の商業政策を讀む	守屋源次郎	〔日經〕六二	三〇 一三
守屋君の拙著批評に答ふ	津村 秀松	〔國經〕六二	三〇 一三
津村教授の「商業政策」下巻を讀む	守屋源次郎	〔日經〕六二	三〇 一三
本國殖民地間の商業政策	河津 暹	〔日經〕六四一七	四 四
本國殖民地間の商業政策を論ず	河津 暹	〔國家〕六四二九	五 五
將來の對外商業政策	瀧本 誠一	〔國經〕六八二七	二 二
對外商政の新生面	徳重 伍介	〔亞經〕六八三	三 三
戦後の商業政策	飯島 幡司	〔國經〕六六二三	四 四
改造問題としての對外商業			

政策	河津 暹	〔國家〕六九三四	二 二
商業政策上に於ける門戸開放地域	馬場 誠	〔商經〕六〇	一 一
商業政策當面の二問題	神戸 正雄	〔時經〕六二	一 四
大災後の商業状態及政策概観	細矢 祐治	〔商事〕六四	五 二
内國資本保護の商業政策的方法	菅谷 重平	〔銀叢〕六四	四 五
商業政策より見たる獨逸の過去及現在	河津 暹	〔經論〕六五	四 三
【商業帳簿】			
商業帳簿を論ず	高橋 捨六	〔新報〕四四二	二 二九
「カード」式記簿と商業帳簿	志田鉦太郎	〔國家〕四四二	一 一
商業帳簿檢閲の檢證	飯塚鏡之助	〔新聞〕四四一	一 四八
商業帳簿の檢閲と檢證に付て	楓橋 散人	〔新聞〕四四一	一 四八
經濟史の材料としてのラック	坂西 由藏	〔國經〕四四四	一〇 二
ザの商業帳簿	武田貞之助	〔新聞〕六二	一 四八
商業帳簿論	會田勲左衛門	〔會計〕六七	三 五
商業帳簿の規定に就きて			

古代伊太利商業帳簿に於けるアレングの法律上の效力に就て	岡田 誠一	〔志林〕六二〇	三 卷 四號
我國在來の商業帳簿	大森 研造	〔經叢〕六二〇	三 卷 四號
計算上より見たる我國商業帳簿の規定	下野直太郎	〔商研〕六三	四 一
【商業登記】			
商業登記修正私見	潮田 方藏	〔法協〕四二〇	一〇 八一〇
商業登記の效力	鈴木 宗言	〔法政〕四三〇	四 四〇
商業登記	松波仁一郎	〔新聞〕四三九	一 卷 八一七
商業登記の効力	竹田 省	〔京法〕四四三	五 四
商業登記の歴史	東 季彦	〔法協〕六四三	八 八
商業登記の効力に就て	東 季彦	〔法協〕六五三	四 八
【商業道德】			
商業道德を論ず	谷本 富	〔國經〕四一	五 五
商業の眞髓と商業道德	筑山 生	〔東經〕四一	五七 一四四〇
商業道德と武士道	松崎藏之助	〔日經〕四三	七 八九
我國の商業道德を論ず	河津 暹	〔國家〕四四二	五 五
商業道德の基礎	谷本 富	〔國經〕四四二	五 五
商工業の發展と商業道德	河津 暹	〔日經〕四四四	九 四一五

改正商法と商業道德	鈴木券太郎	〔刑評〕四四	三 六
商業道德か工業道德か	松崎 壽	〔日經〕四四五	二 二
日本の商業道德と國民道德	津村 秀松	〔國經〕六二	三 三
Commercial morality and commercial science	B. Ishikawa	〔國經〕六二	三 三
再び津村教授の商業道德論に就きて	松崎 壽	〔日經〕六二	一〇 九
商業道德と營利主義	内池 廉吉	〔日經〕六二	二 二
商業道德論	河津 暹	〔日經〕六三	一五 四六
商業道德と時勢の變	神戸 正雄	〔經叢〕六五	二 二
商科大學と新商業道德	上野 道輔	〔國家〕六八	三 六
昔の商業と商業道德	三浦 周行	〔國經〕六二	三 三
商業道德の調和	内池 廉吉	〔國經〕六二	三 三
現代商業道德の傾向	鈴木 隆輔	〔同論〕六三	一 一五
【證券】			
選擇持參人證券論	高根 義人	〔内外〕四五	一 三
呈示證券	高根 義人	〔新報〕四五	二 二
公衆信用證券	齋藤 禮三	〔明法〕四五	一 三九
免責證券論	齋藤 禮三	〔明法〕四五	一 四四
流通證券の範圍	高根 義人	〔内外〕四八	四 二一三
流通證券の發行	青木 徹二	〔新聞〕四八	一 三二八
	青木 徹二	〔新聞〕四八	一 三三〇

【證券】

米券としての預金證質入證

證券分類論

證券保管事業

證券資本論

再び「甲又は持參人」の形式を以て發行する證券に就て

證券持分制

貳枚證券廢す可からず

米國のボンドハウスと日本の現物仲買

物權的證券に關する疑問

支拂に使用せらるる信用證券の數量に就て

證券的資本制

無記名證書を目的とする質權

無記名證券の取得に關する民法及商法の關係

無記名證券取得者の保護

盜品たる無記名證券質入の效力

大藏省證券を論ず

川上 賢三〔國經〕四九一年 卷一 五號

青木 徹二〔法政〕四四〇一〇 八九

下村 宏〔國家〕四四二二三 九

服部 春一〔國經〕四四三九 五十六

岡野敬次郎〔新報〕四四三二〇 九

服部 春一〔東經〕四四三二一 五三

吉田八十綱〔新聞〕四四三二一 六八〇

丹羽 豐〔國經〕四四四二一 五

竹田 省〔京法〕四四五七 三

武田 英一〔國經〕六二二一四 二

神戸 正雄〔京法〕六二二八 一〇

高窪喜八郎〔評論〕六二二 一七

水口 吉藏〔新報〕六三二二四 二

青木 徹二〔評論〕六三二二 二四

富井 政章〔志林〕六四一七 二

小川郷太郎〔經叢〕六四一 二

小川博士の大藏省證券論を讀みて

有因債權證券の證券的性質

大藏省證券に就て尾上學士に應ふ

證券金融機關の將來

再小川博士の大藏省證券論に就て

大藏省證券の割引歩合に就て

英國の證券動員令

英國の證券動員實施の經過に就て

戰費財源としての大藏省證券を論ず

印度の金融と印度證券

米國證券の外國保有高と買戻償還

De développement de la note d'arret et de son role dans le droit français contemporain

英國整理證書法

商業證券の意義

尾上登太郎〔國家〕六四二九 一〇

竹田 省〔京法〕六四一〇 二

小川郷太郎〔經叢〕六四一 六

丹羽 豐〔東經〕六四七 一七九

尾上登太郎〔國家〕六五三〇 三

三木 純吉〔經叢〕六五二 二

雪 堂 生〔財經〕六五三 三

色部 貢〔國家〕六五三〇 一〇

岡本兵太郎〔商經〕六五一 四

堀江 歸一〔三學〕六六一 三

門脇 龍雄〔國經〕六六三 六

I. Ray 〔法協〕六六三五 七

加藤 正治〔新報〕六七二八 二一三

西本辰之助〔三學〕六七三 三

金額券に就いて

亨利・ソーントン紙券信用論

證券的權利に就いて

證券交換所問題

指圖證券に就て

商品切手に就て

信託會社と證券取扱業務

證券取引所に於ける賣買取引

證券取引所の取引方法

證券資本主義並に其の現象

證券短期取引實際上の缺陷

事業金融と證券市場

合衆國に於ける證券引受組合

喪失證券に就て

信用指圖の判例批判

爲替は證券市場にどう響くか

英國大藏省證券を論ず

證券出納の實務

我國證券界の現狀に就て

ボンドとボンド・ハウス

竹田 省〔新報〕六八二九 四號

福田敬太郎〔國經〕六九二八 四

竹田 省〔法叢〕六九四 六

棗田 藤吉〔商經〕六九一 一七

永並 豊吉〔商經〕六九一 二四

中西新兵衛〔會計〕六九一 二四

細矢 祐治〔國經〕六一一 一六

島本 篤次〔商事〕六二二 三

島本 篤次〔商事〕六二二 三

申本友三郎〔銀研〕六二二 三

島本 得一〔商事〕六二二 三

松崎 壽〔商經〕六二二 三

池島 庸一〔銀研〕六二二 三

太田 義繁〔銀研〕六二二 三

松永 義雄〔辯協〕六二二 三

加藤 和根〔銀叢〕六二三 三

濱野 壽〔銀研〕六二三 三

高山 武雄〔銀研〕六二三 三

榎並 越夫〔銀研〕六二四 一

濱岡 五雄〔イン〕六二四 一

證券經濟論

我國證券市場の發達と定期取引問題

米國證券市場の實際

國際課税に於ける人及び證券の所在

我國の證券金融制度に就て

銀行と證券市場

選擇所持人證券法史に就て

證券取引に於ける早受渡制度

橋本 良平〔商事〕六四四 五

橋本 庄藏〔商事〕六四四 五

勝田 貞次〔商事〕六四四 五

神戸 正雄〔經叢〕六五二 三

岡田 純夫〔銀研〕六五二 三

菊本直次郎〔イン〕六五二 三

平田 央〔商叢〕六五二 三

神戸 正雄〔時經〕六五二 一

植村 俊平〔法協〕四二一 六

岡野敬次郎〔法協〕四二一 六

高根 義人〔新報〕四二七 四

高根 義人〔新報〕四二七 四

高根 義人〔新報〕四二七 四

塚田達二郎〔志林〕四二六 五

志田鉦太郎〔法政〕四二七 八

【條件】

條件論

聯係略説

修正條件は義務の發生を止めず

再び條件を論ず

當事者が既に確定せん事實を知らずして條件と爲したる法律行為の性質を論ず

條件及期限

【證券】

【條件】

【條件】【證據】

條件論	三島良太郎 [明學] 三六
停止條件は債務者の意思のみに繫らしむるを得るか	石坂音四郎 [京法] 四二
停止條件と解除條件との區別	土方 寧 [法協] 四二
條件の成否未定の間に於ける權利及其之を擔保に供したる場合に於ける擔保の性質	西川 一男 [新報] 四二
條件の不許可(羅馬法)	春木 一郎 [京法] 四二
條件成就の効果を適及せしむる意思表示の効力	鳩山 秀夫 [志林] 四二
條件附權利者の條件成就に因りて受くべき利益の第三者に因る侵害と不法行為	横田 秀雄 [新報] 六三
條件の成就を妨げられたる當事者か條件を成就したるものと看做し得べき時期	西川 一男 [新報] 六三
條件附法律行為の適及効果を生ぜしむべき意思表示	石坂音四郎 [新報] 六三

矛盾條件論	乾 政彦 [新報] 六三
停止條件成就前の履行不能の性質	長島 毅 [新報] 六六
解除條件の成就に因り權利か讓渡人に復歸せる場合と原始取得	長島 毅 [新報] 六八
既定條件に民法第一二八條第一二九條を準用する根據	吉田 久 [新報] 六三
民法第一二八條と同第一三〇條との適用に関する疑問外二篇	姉齒 松平 [臺法] 六四
證據の定義を論ず	高根 義人 [法協] 四五
日英證據法異同	土方 寧 [法協] 四二
證據の定義種類及效力	馬淵銳太郎 [法協] 四二
證據の定義種類及效力	近藤 猪三 [法協] 四二
證明の責任	勝本勘三郎 [法協] 四二
證據の定義種類及效力	勝本勘三郎 [法協] 四二
證據の負擔	高橋 敏三 [新報] 四三
證據大義、附司法警察官調書の釋	横田 國臣 [法協] 四三
證據法に關する裁判事務の	

一進歩	奥田 義人 [新報] 四六
フライスレル氏證據法原論(譯)	中山成太郎 [法記] 四九
舉證の責任を論ず	棟居喜九馬 [志林] 四三
證據論	棟居喜九馬 [志林] 四三
日本法廷に於ける證據法理の根本的誤謬	佐藤 博愛 [新報] 四三
證據保全の何物たるを論ず	併せて堂島事件に及ぶ
舉證の責任	橋倉 次雄 [新報] 四三
刑事裁判に於て證據舉示の範圍を論ず	仁井田益太郎 [志林] 四三
疏明	幽谷 山人 [新聞] 四三
舉證の責任を論ず	小山 松吉 [新聞] 四三
刑事探證學	仁井田益太郎 [内外] 四三
供述者の心理状態	ハンクローズ [新聞] 四三
所謂微憑に就て	豊島 直通 [刑評] 四三
採證に關する東西思想の相異	富田 山壽 [京法] 四三
素行調査の改良を論ず	長島鷲太郎 [辯協] 四三
刑事法上心證の自由	野村 嘉六 [新聞] 四三
指紋に基く人の異同識別及分類	國分 直記 [刑評] 四三
	大場 茂馬 [刑評] 四三

【證據】

證據法定定の必要	江木 衷 [新報] 四四
刑事訴訟に於ける證據及び證據に關する行爲	大場 茂馬 [新報] 四四
舉證責任論	菅原 春二 [法記] 六三
裁判所のみに顯著なる事實と證明の必要	三木猪太郎 [新報] 六二
證據調に就て	高根 義人 [辯協] 六二
所謂虛無の證據に關する大審院判決を論ず	天野宗太郎 [新聞] 六二
大審院判決の批評に付き天野判事に質す	南 陽太郎 [新聞] 六二
消極的確定の訴に於ける舉證責任の分配	菅原 春二 [新報] 六三
證據調の期日と口頭辯論期日の關係	菅原 春二 [新報] 六三
共同被告人供述の證據力	大井 静雄 [辯協] 六五
共同被告人供述の證據力	林 頼三郎 [新報] 六五
當事者雙方及證人の出頭せざる場合と證據決定の取消	阿部文二郎 [新報] 六五
證據申請輕視の弊風	眞下 五郎 [新聞] 六五
被告人の訊問と刑訴改正案	岸井 辰雄 [辯協] 六六
血痕の識別に就て	片山 國嘉 [新聞] 六六
證據の取捨及び事實の認定	雉本 朗造 [法論] 六六

裁判と證據	泉二 新熊〔法政〕大七二五 八九號
舉證責任	岡村 玄治〔志林〕大八二九 九二二
證據論	岸井 辰雄〔辯協〕大〇二五 一
證據法上 Res Restate の法則	梅原錦三郎〔法政〕大〇一八 一
口供による證據を論ず	梅原錦三郎〔法政〕大〇一八 五
證據に關する裁判上了解の事實	梅原錦三郎〔新聞〕大〇一 一七九三
風聞風説の證據力を論じて	菊江 久治〔辯協〕大二二六 三
改正刑法に及ぶ	中山 端芳〔臺法〕大二一六 七二二
指紋法の價值と其の利用	松岡 義正〔法曹〕大三一 一
當事者本人の訊問を論ず	小室 春富〔辯協〕大二二 二〇五六
民事訴訟に於ける證據調の許否に就て	岩野 稔〔新聞〕大二三 一 二〇六八
陪審制度と證據法	松南 健彦〔新報〕大二三 三四 二〇六八
裁判上公知事實の證據力	安田 幹太〔法曹〕大三二 九
證據列擧と證據説明	唯一の證據方法たる檢證申請の却下及び證據調の限度
刑事訴訟に於ける公知の事實と實驗則	加藤 正治〔法協〕大四四 三
違法なる證據調と刑事訴訟法第四一條との關係	小山 松吉〔法曹〕大四三 四
刑事探證資料	山田 平藏〔正義〕大二四 一 二〇六六
	山崎 佐〔正義〕大二四 二 二〇六六

宣誓	佐々木茂三郎〔志林〕大二三 二七號
人證に就て	菊池 武夫〔新報〕大二三 一
刑事訴訟法第一二三條の被告人に就て	原 嘉道〔辯協〕大九二〇 九九
證人能力	溝淵 孝雄〔明學〕大九二 一〇四
數名の證人に對する豫審判事の同一事項の訊問	佐甲 管根〔京法〕大四一 三 五七
傳聞の證言	大場 茂馬〔新報〕大四三 二〇 二二
證人と精神鑑定の必要	富田 山壽〔京法〕大四五 五 二二
會社が訴訟當事者たる場合に取締役は證人たることを得るや	吳 秀三〔新聞〕大四五 一 六七九
證言及び之に關する證據行為を論ず	山内確三郎〔新報〕大四五 二二 一
豫審に於て訊問を受けたる證人の供述書と公判に於ける證言の拒絶	大場 茂馬〔新報〕大四五 三三 二四
證人訊問論	三木猪太郎〔新報〕大四五 三三 七
證言心理學	中村徳重郎〔辯協〕大四五 二六 一六三
果して謬らざる乎(證人忌避却下の適否に就て)	皆川 治廣〔法協〕大二三 一〇
證人訊問に就て	齋藤 巖〔新聞〕大二一 一 八五三
目撃證人	喜多村桂一郎〔新聞〕大二三 一 九二三
	篠宮龍太郎〔新聞〕大二三 一 九七七

民事訴訟に於ける宣誓の方式	樽原周次郎〔新聞〕大四二 一 五五六
當事者宣誓制度の規定を望む	尾越 辰雄〔新聞〕大四四 一 七五八
刑事訴訟法上の宣誓無能力の範圍及其の疑問二、三	鈴木 茂雄〔法政〕大九一七 一〇
宣誓書の捺印と大審院判例捺印なき宣誓書の效力と大審院判決の批判	齋藤 巖〔新聞〕大二三 一 二九九五
證人の能力を論ず	荒木 櫻洲〔新聞〕大二三 一 二〇〇四
人證論	岡村 輝彦〔法協〕大二二 六 三五三
豫審と證人調	植村 俊平〔新報〕大四五 二 一八
證人の資格に就ての問答	野副 重一〔法協〕大七七 二 一
證人宣誓の效力	高木 豊三〔法記〕大七七 四 三二
官吏は刑事訴訟法の雇人なりや	日山彦十郎〔新報〕大九六 五八
人證論	原 嘉道〔辯協〕大四〇 一 二
人證に關する判例	岸 清一〔辯協〕大四二 二 一一
證言の價值	信岡雄四郎〔志林〕大四三 一 二
證人及其調書	本多 五六〔法協〕大四三 一七 五
證人訊問に就て	信岡雄四郎〔辯協〕大四三 三 二二
親族の關係を有する證人の	高木金之助〔新報〕大四三 九 九二

證人忌避の原因なしとの決定と即時抗告の起算點	阿部文二郎〔新報〕大六二七 五
辯護士に證人訊問權を與ふべし	梅原錦三郎〔辯協〕大二〇二五 六
民法第二九九條一項四號の前主と裏書人の關係	前田直之助〔新報〕大二一三 三 五
證言の意義	津田 進〔法治〕大二三 三 二
證人訊問術の奧義	梅原錦三郎〔新聞〕大二二 一 二〇七一
人證を少くしたい	石田文次郎〔新聞〕大二三 一 三三四
證言の正確率	堀江專一郎〔正義〕大四一 二 二
證人の訊問に就て	矢追 秀作〔法政〕大四三 三 九
證人と署名の範圍に就ての大審院の判決批評	荒木 櫻洲〔新聞〕大四四 一 二四六八
證人の資格	津田 進〔法治〕大四五 五 一
陪審制度の實施と證人訊問方法の革新	磯谷幸次郎〔法曹〕大四五 四 一四
ターニー「證人訊問論」(譯)	三浦 強一〔法公〕大四五 三〇 四一六
筆蹟の眞偽を鑑定に付するの當否	岡村 輝彦〔辯協〕大五一 二 一〇
鑑定に關する規定の不完全を述べ其救治法に及ぶ	鹽入 太輔〔新聞〕大五一 一 七〇
職權に因る檢證鑑定の性質	

に付て 鑑定人の性質 精神鑑定に對する希望 解剖及び鑑定に就て 古文書の裁判鑑定 鑑定人の性質を論ず 醫事鑑定人の選定 筆蹟鑑定論 近來の鑑定料は民事訴訟の 精神に反せざるや 法學醫的鑑定を要する實例 私署證書の性質及檢眞を論ず 起訴後の檢事の聽取書 書證の意義 證書の運用 巡查報告書の信用 被告人以外の者に對する聽 取書は果して有効なりや 辯護士事務員に證書拒絶の 權なし 證書の眞否確定の手續	横田 五郎〔新報〕四二七 大場 茂馬〔新報〕四四二 三浦榮五郎〔刑評〕四四二 片山 國嘉〔新聞〕六三 三浦 周行〔京法〕六五二 井野 英一〔法政〕六六四 一友 山人〔新聞〕六八 播磨 龍城〔新聞〕六九 雲外 居士〔新聞〕六二 花井 卓藏〔正義〕六四 石山 彌平〔新報〕八五 笠原文太郎〔新聞〕八 板倉松太郎〔志林〕四 板倉松太郎〔志林〕四 天野 敬一〔辯協〕四二 天野 敬一〔辯協〕四二 天野 敬一〔辯協〕四二 戸田佐太郎〔新聞〕四 加藤 正治〔志林〕四	横田 五郎〔新報〕四二七 大場 茂馬〔新報〕四四二 三浦榮五郎〔刑評〕四四二 片山 國嘉〔新聞〕六三 三浦 周行〔京法〕六五二 井野 英一〔法政〕六六四 一友 山人〔新聞〕六八 播磨 龍城〔新聞〕六九 雲外 居士〔新聞〕六二 花井 卓藏〔正義〕六四 石山 彌平〔新報〕八五 笠原文太郎〔新聞〕八 板倉松太郎〔志林〕四 板倉松太郎〔志林〕四 天野 敬一〔辯協〕四二 天野 敬一〔辯協〕四二 天野 敬一〔辯協〕四二 戸田佐太郎〔新聞〕四 加藤 正治〔志林〕四	檢證證書と報告證書 檢事の聽取書に關する卑見 刑事訴訟に於ける文書の證 據能力 ユリウス・ジゲル氏文書 の證據力 聽取者の證據力に就て 證書の實質的證據力を論ず 證書訴訟及爲替訴訟と民事 訴訟法第三三五條第三四 二條第三四六條を論ず 私署證書に關する立證責任 自由心證主義と證書の證據 力 私署證書と證據力 檢證 管外檢證に就て 臨檢の際に於ける注意の一 斑 英國檢屍官制度に就て 刑事自白論 自白論	加藤 正治〔志林〕四二七 磯部 四郎〔辯協〕六三 林 頼三郎〔新報〕六四 小栗栖國道〔法叢〕六〇 花本福次郎〔辯協〕六〇 藤田 和夫〔辯協〕六一 松倉慶三郎〔新聞〕六一 姉齒 松平〔臺法〕六一 姉齒 松平〔臺法〕六一 岸井 辰雄〔辯協〕六四 木村 萬象〔新聞〕六一 板倉松太郎〔志林〕六一 岡本 梁松〔法記〕六三 秋山 眞澄〔新聞〕六五 佐藤 博愛〔新報〕六一 仁井田益太郎〔内外〕六一	加藤 正治〔志林〕四二七 磯部 四郎〔辯協〕六三 林 頼三郎〔新報〕六四 小栗栖國道〔法叢〕六〇 花本福次郎〔辯協〕六〇 藤田 和夫〔辯協〕六一 松倉慶三郎〔新聞〕六一 姉齒 松平〔臺法〕六一 姉齒 松平〔臺法〕六一 岸井 辰雄〔辯協〕六四 木村 萬象〔新聞〕六一 板倉松太郎〔志林〕六一 岡本 梁松〔法記〕六三 秋山 眞澄〔新聞〕六五 佐藤 博愛〔新報〕六一 仁井田益太郎〔内外〕六一
---	---	---	---	--	--

刑訴法第二一九條第三項の自白

自白 證據方法としての自白 自白の採用に就て 自白と證據 自白と證據力に關する大審 院判決の批判 假自白又は條件附自白規定 を設くへし 自白の意義	板倉松太郎〔志林〕四二〇 鳩山 和夫〔辯協〕四二〇 渡邊輝之助〔新聞〕四二〇 泉二 新熊〔法政〕六二 荒木 櫻洲〔新聞〕六三 齋藤 巖〔新聞〕六三 津田 進〔新報〕六五 鈴木 宗言〔法政〕四三 富谷銆太郎〔志林〕四五 志田鉦太郎〔法政〕四五 松本 丞治〔新報〕四七 帶刀吉五郎〔新聞〕四七 澤田 例外〔新聞〕四九 伊藤金次郎〔新聞〕四九 岸本 晋亮〔新聞〕四九 立石 謙輔〔明學〕四九 長瀬 欽司〔法政〕四九 松岡 義正〔法記〕四九	板倉松太郎〔志林〕四二〇 鳩山 和夫〔辯協〕四二〇 渡邊輝之助〔新聞〕四二〇 泉二 新熊〔法政〕六二 荒木 櫻洲〔新聞〕六三 齋藤 巖〔新聞〕六三 津田 進〔新報〕六五 鈴木 宗言〔法政〕四三 富谷銆太郎〔志林〕四五 志田鉦太郎〔法政〕四五 松本 丞治〔新報〕四七 帶刀吉五郎〔新聞〕四七 澤田 例外〔新聞〕四九 伊藤金次郎〔新聞〕四九 岸本 晋亮〔新聞〕四九 立石 謙輔〔明學〕四九 長瀬 欽司〔法政〕四九 松岡 義正〔法記〕四九
---	---	---

【商號】

【商號】

參照：商標。

類似商號區別の標準 商號を以てする訴訟行爲 商號使用者は他人に代りて 取引を爲す場合に尙ほ其 商號を使用し得るか 仲買人の商號を論ず 他人の既登記商號と支店の 商號登記 商號と商標の共通點と特色 支那に於ける商號に就て	猪股 洪清〔新聞〕六二 前田直之助〔新報〕六二 猪股 洪清〔新聞〕六二 古屋 愿三〔新聞〕六三 猪股 洪清〔新聞〕六三 石 大次郎〔辯協〕六六 田中 忠夫〔商事〕六六 參照：運送營業。運送取扱。營 業。寄託。交互計算。證券。 倉庫營業。仲立營業。問屋 營業。匿名組合。取引所。 賣買。保險。有價證券。	猪股 洪清〔新聞〕六二 前田直之助〔新報〕六二 猪股 洪清〔新聞〕六二 古屋 愿三〔新聞〕六三 猪股 洪清〔新聞〕六三 石 大次郎〔辯協〕六六 田中 忠夫〔商事〕六六 參照：運送營業。運送取扱。營 業。寄託。交互計算。證券。 倉庫營業。仲立營業。問屋 營業。匿名組合。取引所。 賣買。保險。有價證券。
--	---	---

【商行爲】

供給契約に就て 商行爲論 商法第三條と第二六三條と の關係 商法施行前に生じたる商事 債權の時効に因る消滅 銀行の有する債權の時効論 附屬の理義に基く商行爲を 論ず	奥田 義人〔新報〕四九 渡邊清太郎〔法政〕四九 青山 衆司〔新報〕五一 池田 季雄〔新聞〕五六 武田貞之助〔新聞〕五七 青山 衆司〔明學〕五八	奥田 義人〔新報〕四九 渡邊清太郎〔法政〕四九 青山 衆司〔新報〕五一 池田 季雄〔新聞〕五六 武田貞之助〔新聞〕五七 青山 衆司〔明學〕五八
--	--	--

【商行爲】【上告】

個人の金銭貸付業は商行爲なりや
商行爲の委任と商行爲たる委任
物の保管の意義
社団法人と商行爲
旅店の主人並に料理店其他の飲食店の主人と客との法律上の關係
商法第二六八條の代理人の行爲は何人の爲めに其の効力を生ずるや
商法第二七五條第二八五條の商行爲に因りて生じたる債務又は債權の解釋
商行爲の解釋を論ず
温泉及温泉營業者の私法及公法上に於ける權義關係を論ず
宿屋とは何ぞ
場屋主人の責任の沿革と其基本

- 横山勝太郎【新聞】四八一年 二七五
- 青山 衆司【明學】四九一年 九
- 吾孫子 勝【志林】四九〇年 九二
- 森 作太郎【新報】四九〇年 四四二
- 烏賀陽然良【京法】四九二一年 四
- 飯島 喬平【志林】四九二一年 二
- 梅 謙次郎【志林】四九二一年 二
- 青山 衆司【新報】四九二一年 二〇
- 松本 郁朗【辯協】四九二一年 一六四
- 松波仁一郎【新聞】四九二一年 一八六
- 烏賀陽然良【新報】四九二一年 七

【上告】

上告裁判所の評議を公開せよ
刑 事
檢察の附帶上告に就て
刑訴法第二八一條の法則を論ず
上告審に繫屬したる事件にして舊法により親告罪にあらざるものを新法に於て親告罪と爲したる場合の處分
宣告當時正當なる第二審判決が新法に照して不法なる場合に於ける上告裁判所の判決
上告審に繫屬中輕き新法施行せられたる場合の判決
第二審が強盜の事實を認め、て竊盜の法條を適用したる場合に於ける被告人の上告

- 新井要太郎【辯協】六七三 六
- 成野 學人【新報】四九二一年 五
- 花井 卓藏【新聞】四九二一年 二六
- 板倉松太郎【志林】四九二一年 九
- 泉二 新熊【新報】四九二一年 二
- 板倉松太郎【志林】四九二一年 一
- 大場 茂馬【新報】四九二一年 五

第一審第二審に於ける管轄違の不當認定と上告裁判所の判決
上告審の破毀移送に因り消滅すべき第二審公判手續の範圍
判事の自由裁量と上告裁判所の權限
電報に依る上告趣意書の効力に關する大審院の判決に就て
驚くべき上告棄却思想
刑訴法第二七〇條
所謂「被告人ノ不利益ニ歸スル上告論旨」に就て
上告審と事實審理
上告裁判所に於ける新刑事訴訟法實施後一年間の實績
上告不理の例外
控訴の適否と上告審の審査
上告理由に付
大審院民事訴訟判決の改良

- 三木猪太郎【新報】四九二一年 六
- 三木猪太郎【新報】四九二一年 二
- 天野 徳也【國家】四九二一年 二
- 赤井 幸夫【新聞】四九二一年 二九二
- 小林 龜郎【新聞】四九二一年 一三六
- 板倉松太郎【新報】四九二一年 七
- 中村 了詮【辯協】四九二一年 七
- 草野豹一郎【新聞】四九二一年 一〇一
- 磯谷幸次郎【法曹】四九二一年 五
- 津田 進【新報】四九二一年 二
- 津田 進【新報】四九二一年 二〇
- 河村讓三郎【法記】四九二一年 十八

【上告】【正司考祺】

を望む
上告審に於て第一審裁判所に差戻すへき場合
民事訴訟法に於ける上告の性質を論ず
上告審に於ける訴の認諾と其拋棄
實驗法則の違背は上告の理由となるや
任意規定に異なる約款の解釋と上告
民事上告理由書の提出に付き辯護士諸君の注意を求む
本案か上告審に在る場合と假差押の管轄
特許局の審決に對する上告期間伸長に就て大審院の判決を疑ふ
破毀差戻後の判決の資料
【正司考祺】
徳川末期の經濟學者正司考祺

- 朝倉外茂鐵【新報】四九二一年 三六
- 板倉松太郎【志林】四九二一年 六
- 松岡 義正【法政】四九二一年 一
- 前田直之助【新報】四九二一年 二
- 高根 義人【辯協】四九二一年 一八四
- 雉本 朗造【京法】四九二一年 一
- 磯石幸次郎【辯協】四九二一年 二
- 阿部文二郎【新報】四九二一年 九
- 石 大次郎【新聞】四九二一年 二〇六
- 加藤 正治【法協】四九二一年 五
- 吉田 忠輔【早商】四九二一年 二

【常識】
 人格と常識
 常識論
 所謂常識と感情
 常識論

江原 素六〔法政〕四二二
 高窪喜八郎〔辯協〕四三三
 天野宗太郎〔新聞〕四四四
 横田 國臣〔新聞〕四五五

【證書訴訟及び爲替訴訟】

證書訴訟に就て
 證書訴訟に於ける留保の判決に對する上訴と後の通常訴訟と並行し得べきや否やの問題に付ての法曹會議に對する反對意見
 高木 豊三〔法協〕四二四
 河村讓三郎〔法協〕四二九
 磯部 尚〔辯協〕四三三
 松波仁一郎〔志林〕四四〇

爲替訴訟に就て
 爲替訴訟及爲替訴訟に於て留保を掲ぐることを脱漏したる判決の控訴
 爲替訴訟法に關する疑義

岩田 一郎〔新報〕四四二
 武川 佳海〔新聞〕四五五

控訴審に於て證書訴訟を通常訴訟に引直し得るや
 爲替訴訟に於て原告敗訴後該手形の譲渡と通常訴訟の提起とに付て
 證書訴訟に於ける留保判決と後の手續
 證書訴訟及爲替訴訟と民事訴訟法第三三五條第三四二條第三四六條を論ず
 著音器―證書訴訟に於ける檢査―證據決定

菅原 春二〔新報〕六三二
 古山 愛胤〔新聞〕六七二
 前田直之助〔新報〕六八二
 板倉慶三郎〔新聞〕六一一
 前田直之助〔法曹〕六三二

【少數代表】

比例代表を見よ
 參照 海運。船員。船舶。

英國商船法
 領海に於ける外國商船内の犯罪管轄を論ず
 領海内に於ける外國商船商船に關する權利義務
 領事裁判權ある國に於ける

西川鐵次郎〔法協〕四二〇
 秋山雅之助〔志林〕四三四
 高橋 作衛〔法協〕四三二
 ナイベルス〔國際〕四三七

商船船員の犯罪管轄權
 經濟上商船の進歩を論ず
 外國商船内の犯罪に對する裁判管轄問題に就て
 最新商船統計
 汽船輸入税輕減の急務
 武装商船問題
 國際法上潛航商船の資格
 交戰國商船の自己防衛權
 商船の武装解除に對する獨逸の宣言に就て
 商船の抵抗の自由及商船の武装
 本邦商船輸出禁止の可否
 交戰國の武装商船と中立國の武装商船
 潛航艇と武装商船
 構造上より見たる商船の發達
 外國領海内に於ける商船の地位に關する佛國主義
 海戰の際敵の商船取扱に關する英國主義
 ジョーンス商船法中差別的

松田 道一〔國際〕四二九
 渡邊水太郎〔國經〕四三〇
 菊地 駒次〔國際〕四三九
 山本唯三郎〔東經〕四四五
 神川 彦松〔外時〕四五三
 泉 哲〔外時〕四五二
 藤部定次郎〔京法〕四五二
 松波仁一郎〔新聞〕四五二
 立 作太郎〔國家〕四六三
 伊藤重治郎〔國家〕四六三
 立 作太郎〔外時〕四六二
 寺田 四郎〔國際〕四七二
 小島昌太郎〔商經〕四九一
 板倉 卓造〔三學〕五〇一
 板倉 卓造〔法研〕五二一

【商船】 【上訴】

規定の運命
 本邦商船隊の素質に就て
 優秀商船に就て
 商船の速力増加と其の費用

増井 幸雄〔外時〕六二二
 増井 幸雄〔外時〕六二二
 倉田 庫太〔國經〕六二二
 増井 幸雄〔三學〕六一一

【上訴】
 參照 控訴。抗告。上告。

カルステンズ公訴事件に就て
 檢事の附帶上訴の性質を論ず
 辯明書提出期間を論じて當局諸公に訴ふ
 上訴の抛棄と取下
 再度開席したる被告人は上訴を爲し得るや若し得るとせば其上訴期間の起算點如何
 上訴の期間を論ず
 刑事上訴論
 上訴と刑の執行猶豫
 法律上代理人又は辯護人の爲したる上訴の取下

平山銓太郎〔新報〕四二二
 小木曾義房〔法政〕四三三
 佐々木清綱〔新聞〕四四一
 豊島 直通〔志林〕四四一
 板倉松太郎〔志林〕四四二
 板倉松太郎〔刑評〕四四四
 岡田 庄作〔國國〕四七六
 津田 進〔志林〕四八二
 林 頼三郎〔新報〕六八二

少年裁判法と陪審制度の利害	水上長次郎〔新聞〕大二三	九七四
少年裁判所に就て	豊島 直通〔新聞〕大二	九八〇
幼年裁判に就て	牧野 英一〔志林〕大四一七	七
幼年裁判法制定の必要	山崎 佐〔志林〕大四一七	九二〇
少年裁判所に關する各國立法の趨勢	大場 茂馬〔新聞〕大四	一〇二
少年裁判所に就て	谷本 弘〔辯協〕大五二〇	五
少年裁判所制度を論ず	穂積 陳重〔新聞〕大五一	一七六
米國に於ける幼年裁判所	泉二 新熊〔法政〕大六四	一
現行法と少年裁判所	田宮準一郎〔國國〕大七六	三
少年裁判所制定に就て	泉二 新熊〔新報〕大七二	六
少年審判の終結處分の本質を論ず	福島 一郎〔新聞〕大七一	一四三
少年審判所の事業の成績に就て	石山豊太郎〔新聞〕大七一	二〇五
獨逸幼年裁判所の實況に就て	宮城長五郎〔法新〕大三一	五
獨逸刑事訴訟法草案に規定せる幼年裁判手續	泉二 新熊〔法記〕大二三	五
獨逸少年裁判所法	武田鬼十郎〔新聞〕大三一	九六
	中央 忠雄〔法曹〕大三一	一〇

【少年犯罪】

米國に於ける小供裁判所	穂積 陳重〔法協〕大五〇	二五
北米合衆國少年裁判所論	谷野 格〔法記〕大五一	一九
亞米利加に於ける幼年裁判所法の概要	寺田 精一〔志林〕大四五	一四
亞米利加に於ける少年裁判所	泉二 新熊〔新報〕大二三	六
佛國及其他諸國の少年裁判所	蘆野 正〔京法〕大三	九
歐米に於ける幼年裁判所に就て	泉二 新熊〔新聞〕大四	一〇
歐米に於ける少年裁判及監獄制度	笠井健太郎〔朝司〕大三	三二

未成年者の犯罪に對する社會的豫防方法	小河滋次郎〔辯協〕大九二	一〇
未成年犯罪者の刑罪責任能力に就て	小河滋次郎〔法記〕大九二	一〇
刑法改正案に於ける未成年者の刑事責任	泉二 新熊〔新報〕大九〇	一七
少年犯罪者の處分に就ての希望	平沼騏一郎〔刑評〕大九三	二
兒童の盜竊に就て	乙竹 岩造〔刑評〕大九三	二
兒童懲戒權に就て	小山 令之〔新聞〕大九四	一
少年犯罪及び其救濟策	澤田順次郎〔刑評〕大九五	四
少年犯罪者に關する法律草案の概要	岡田 庄作〔志林〕大九五	一四
少年の竊盜犯	吳 秀三〔新聞〕大九三	九三
少年犯と法曹の注意	吳 秀三〔新聞〕大九三	九三
少年犯罪論	寺田 四郎〔新聞〕大九三	一
行刑上より見たる少年犯罪者	豊島 直通〔新聞〕大九三	九五六
微罪釋放青少年の保護一斑	原 胤昭〔新聞〕大九三	九六四
幼年犯人の心理に就て	岩井 尊文〔京法〕大九三	三
英國の感化事業殊に其年少犯人取扱に就て	富田 山壽〔京法〕大九三	一〇
少年犯罪傳播の實例	横山鑛太郎〔法記〕大九三	二六

【少年法】

少年犯罪救助策	菱川 憲正〔新聞〕大九五	一〇七
少年と少女の犯罪動機に就て	黒田源太郎〔統雜〕大九五	三六
少年者の犯罪動機	羽柴瑪之助〔統雜〕大九六	三七
統計上より見たる犯罪少年	黒田源太郎〔統雜〕大九七	三八
少年犯に就て	山岡萬之助〔新聞〕大九八	一五
監獄統計に現はれたる少年受刑者	羽柴瑪之助〔統雜〕大九八	一六
少年犯罪の豫防と社會的協力	泉二 新熊〔法協〕大九三	三
少年犯罪論	大澤 眞吉〔新聞〕大九三	一〇
少年労働と少年犯罪	三好豊太郎〔社政〕大九三	一〇
注目すべき未成年者の犯罪	大島 正義〔法新〕大九三	一〇
少年の異常行為處遇上の精神醫學臨床と少年犯罪豫防	清水 鼎良〔法曹〕大九三	一〇

【少年法】 【少年保護】 【少年労働】 【消費】

少年法の通過に際して
少年法の成立
少年法第八條と刑法第六條との關係
少年法の施行に際して
少年法の理解
少年法は宜しく消念法たるべし

泉二 新熊 [法治] 六一 一
牧野 英一 [志林] 六一 二四 六
梶田 年 [法曹] 六一 一
泉二 新熊 [法曹] 六一 一
小野清一郎 [社政] 六一 三六
不破 清警 [新聞] 六一 二〇八〇

【少年保護】

兒童保護の法制關係に就て
未成年者の保護に關する現行制度の缺陷
兒童保護
少年保護制度に就て
虐待兒童保護問題
米國兒童保護法の發達
兒童福祉問題の沿革
米國に於ける兒童福祉問題
貧窮兒童の國庫救済
新時代の少年保護と感化事業
兒童保護論

小河滋次郎 [刑評] 四五 四 五七
水口 吉藏 [國國] 六一 三 一
長岡 熊雄 [新聞] 六一 一五六
山岡萬之助 [新聞] 六一 一七九
原 紹胤 [社政] 六一 六
村上源太郎 [社政] 六一 二二
水上鐵治郎 [社政] 六一 二六
水上鐵治郎 [社政] 六一 二九
神戸 正雄 [時經] 六一 三三
和田 一次 [臺法] 六一 八二
早田 正雄 [法政] 六一 八二

兒童の公的扶養問題
兒童保護の經濟的基礎

【少年労働】

高田 慎吾 [原雜] 六一 三 一
高田 慎吾 [原雜] 六一 三 二

幼年労働及失職問題
少年労働及徹夜業の禁止
少年労働者
女子及少年労働者に關する英國の新立法
農業労働に於ける小兒雇傭問題
少年労働者問題
少年労働と少年犯罪

和田 清 [國經] 六一 三 三
戸田 海市 [經叢] 六一 八 六
芳賀 榮造 [社政] 六一 八 八
島崎 一郎 [社政] 六一 一五
中原 誠 [社政] 六一 一 一九
青木 善祐 [社政] 六一 一 三三
三好豊太郎 [社政] 六一 一 四八

【消費】

物品消費論 (ハウススキッヘル氏統計論より)
國民消費額調
消費と生産
家族の消費經濟
消費節約論
生産消費統計の調査に就て

相原 重政 [統集] 五一 一 二五
奥井 魯吉 [統集] 五一 一 二六
馬場 鏗一 [明學] 五一 一 八四
河田 嗣郎 [京法] 五一 一 四
河津 暹 [日經] 五一 一 六
横山 雅男 [統雜] 六一 一 三四

消費の順序並に限度に關する原則及び其行はるる結果に就て
消費に關する學說の發達
消費者同盟の必要
戦後の消費經濟
生産利益と消費利益の衝突
消費經濟論
消費原料の價格
家計調査に於ける消費單位 (クエントロンを論ず)

増井 幸雄 [三學] 六一 九 二〇
瀧本 誠一 [經叢] 六一 四 一
瀧本 誠一 [商經] 六一 八
阿部 秀助 [國家] 六一 三 二
河田 嗣郎 [經叢] 六一 四 二
奥井復太郎 [三學] 六一 二 二
太田 哲三 [會計] 六一 六 六
長澤 柳作 [統時] 六一 六 六
長谷川萬太郎 [我等] 六一 三 三
柳澤 泰爾 [經商] 六一 三 三
中山伊知郎 [商研] 六一 三 三
大野 辰見 [商經] 六一 三 三
古屋 美貞 [同論] 六一 一 四
増井 幸雄 [三學] 六一 四 四
岩崎 卯一 [我等] 六一 七 二〇

【消費組合】

消費組合に就て
消費組合經營の方法
バーセル消費組合の發達
消費組合を論ず
本邦に於ける消費組合
物價騰貴、廢物利用、消費組合
營利主義の矯正と消費組合
消費組合の經營
生活安定充實策 消費組合論
本邦に於ける消費組合の現狀
物價低減第一 消費組合運動の要
消費組合運動の研究
ウエップ夫妻著、消費組合運動
パーカー氏の消費組合論
社會推移の法則を論じて消費組合運動に及ぶ
東京に於ける消費組合の現況
ヰキルプラスト「階級闘争

河津 暹 [新報] 五一 一 八 五
河津 暹 [日經] 五一 一 三 八
高野岩三郎 [國家] 五一 一 三 九
戸田 海市 [國經] 五一 一 二 一
高野岩三郎 [國家] 六一 六 一 八
石川 文吾 [新報] 六一 七 二 九
松崎 壽 [商經] 六一 一 一 六
志立鐵次郎 [財經] 六一 一 一 二
志立鐵次郎 [財經] 六一 一 一 八
本位田祥男 [財經] 六一 一 一 三
志立鐵次郎 [財經] 六一 一 一 七
志立鐵次郎 [資料] 六一 一 一 九
本位田祥男 [經論] 六一 一 一 二
佐藤 輝雄 [國經] 六一 一 一 三 五
長岡保太郎 [社政] 六一 一 一 二
神田 正雄 [社政] 六一 一 一 二

【消費】 【消費組合】

【消費組合】【消費税】

によらざる社会主義への
一 道程としての消費組合

消費組合に關する二名著	鈴木 平吉 [商研] 六二 二
消費組合の限界	上田貞次郎 [商研] 六二 二
消費組合の發達と經營	濱田 精一 [三學] 六二 二七 三四
消費組合としての消費者組合	河津 暹 [社政] 六二 一 三〇
消費組合運動と組合使用人	澤田 謙 [社政] 六二 一 三三
本邦消費組合の現況	町田義一郎 [三學] 六四 九 二二
改造運動としての消費組合	後藤 貞治 [原ア] 六四 一 一
運動	河津 暹 [經評] 六四 一 一
社会運動に於ける消費組合の地位	本位田祥男 [經研] 六五 三 二
共同社会と利益社会との綜合として消費組合制度	平野 常治 [社雜] 六五 一 二五
英國の消費組合	上田貞次郎 [國經] 四九 一 六
英吉利に於ける消費組合の發達	津村 秀松 [國經] 四四 六 四
英國消費組合に於ける利潤分配の研究	久保田明光 [國經] 六一 三 三
英國消費組合近況	森田 良雄 [社政] 六一 二 二
英國消費組合の研究	本位田祥男 [社科] 六一 二 三

其 他
獨逸消費組合の近況に就て
ロシアの消費者組合運動に就て
フランス消費組合發達史
歐洲に於ける消費組合の勢力

獨逸消費組合の近況に就て	高野岩三郎 [三學] 六三 八 四
ロシアの消費者組合運動に就て	長岡保太郎 [社政] 六一 一 三二
フランス消費組合發達史	岩下 堅造 [社政] 六二 一 三二
歐洲に於ける消費組合の勢力	本位田祥男 [社政] 六五 一 六七
石油消費税に就て	能美 茂雄 [亞經] 四一 五七 一四六
消費税に就て	瀧本 美夫 [東經] 四一 五七 一四三
比較消費税論	河田 嗣郎 [國經] 四二 六 三
織物消費税存廢に就き	福島 平 [志林] 四二 一 五
現行砂糖消費税法を論ず	堂 [新聞] 六七 一 二五
消費税が生産者に及ぼす影響の社会政策的考察	神戸 正雄 [經叢] 六九 一〇 二
消費税に於ける累進課税	神戸 正雄 [經叢] 六九 一〇 三
我が邦消費税の體系を論ず	神戸 正雄 [經叢] 六一 二 二
Spending's taxの提唱に就て	北崎 進 [經商] 六四 四 特別號
ミルス氏の Spending's tax 説	北崎 進 [經商] 六四 四 特別號
消費税體系の影響に就て	牛尾 健治 [商經] 六四 一 三九

【消費貸借】

印度國產綿布消費税の廢止 交通税及消費税における重 複課税	神戸 正雄 [時經] 六二 五 四三
消費貸借に就て	森 作太郎 [新聞] 四六 一 一三
利息附消費貸借に就て	林 鈴彦 [法協] 四九 二 四 六
消費貸借と公正證書の效力	磯谷幸次郎 [法記] 四四 二〇 九
東京地方裁判所の判決を評す	山内 公允 [新聞] 四四 一 六三
金錢貸借公正證書作成に付 必要な注意	林 龍太郎 [新聞] 四四 一 六五
消費貸借に關する公正證書 の効力に就て	森 作太郎 [新聞] 四四 一 六六
金錢貸借公正證書作成に就 て	常 山 [新聞] 四四 一 六三
金錢消費貸借に關する公正 證書に就て	吉野千代吉 [新聞] 四四 一 六五
金錢貸借公正證書作成に就 て	松澤 卓規 [新聞] 四四 一 六七
金錢消費貸借公正證書作成 方法に就て	田 島 [新聞] 四四 一 六七
金錢消費貸借に關する公正	

【消費税】【消費貸借】

證書に就て	北遠實務生 [新聞] 四四 一 六七
金錢消費貸借に關する公正 證書に就て	常 山 人 [新聞] 四四 一 六七
金錢の授受前に作成したる 消費貸借公正證書の效力	横田 秀雄 [志林] 四四 一 二
消費貸借の成立要件と所有 權の移轉	石坂晋四郎 [志林] 四四 一 二
消費貸借の成立と占有の移 轉	富井 政章 [法協] 四四 三〇 一
消費貸借に因りて金錢其他 の物を給付する義務を負 ふ場合に其物を以て消費 貸借の目的と爲すことを 得るや	石坂晋四郎 [志林] 四四 一 一七
準消費貸借と既存債務の關 係に就て	高村久之助 [新聞] 四四 一 七八
民法第五八八條に依る消費 貸借の成立	石坂晋四郎 [評論] 六九 一 一
無期限消費貸借の履行期に 就て	木村篤太郎 [新聞] 六二 一 九〇
代理人の不法領得の意思と 消費貸借の成立	長島 毅 [新報] 六二 三 五
消費貸借に於ける借主の返 還時期	小池 隆一 [法研] 六三 三 二

【商標】 【證憑湮滅罪】

商標専用權侵害より生ずる損害賠償を論ず

- 高橋 敏三 [法協] 四七二 三號
原 嘉道 [新報] 四八五 一號
山田 三良 [國家] 四九二 一八號
矢部 廉 [志林] 四四三 一七號
太田 資時 [新報] 四六三 七九號
花岡 敏夫 [國際] 四四〇 二號
楓橋 散人 [新聞] 四四一 四九五號
楓橋 散人 [新聞] 四四一 五〇八號
長瀬 欽司 [法政] 四四二 二二號

- 花岡 敏夫 [辯協] 四四二 一三四號
竹田 省 [京法] 大九七 八號
堀江專一郎 [辯協] 大二七 一七九號
石 大次郎 [辯協] 大五二〇 三號
南部 皆治 [辯協] 大六二 三號
石 大次郎 [辯協] 大六二 六號

- 商標の類似
商標權蔑視の時弊を論ず
商標は共有することを得る
商標登録と營業
商號と商標の共通點と特色

蘭領印度の商標問題
乃木大將の肖像氏名を商標とするは善良の風俗に反するか

- 原 借江 [東經] 大六五 一九〇三
杉田金之助 [新聞] 大六六 一三六六
藤田 實雄 [辯協] 大七三 二
長島繁太郎 [辯協] 大七三 七
太田 資時 [辯協] 大七三 一〇
藤田 實雄 [辯協] 大八三 九
清瀬 一郎 [新聞] 大八一 二〇〇六
小野 久 [新聞] 大二〇 一八一九

- 刑法第一〇四條に所謂證憑に就て
他人を教唆して自己の罪證を湮滅せしめたる者の責任
商標の標準化
商品の對内賣上の取扱
商品の金利の取扱
マルクス「經濟學批判」に於ける商品論
商品價格の經濟的及び倫理的公正
商品切手に就て
本邦に於ける重要商品建値の單位
商品の意義
重要商品の取引方法
商品勘定に就いて
商品の分配機關に就て
商品の品位鑑定に就て
商品學將來の諸問題
商品擔保の手形割引に關する一考察
商品券勘定に就て
農産物商品化の必要
特殊なる商品券
商品推積の理論
アウトガートに於ける「輸出商品陳列所」

【證憑湮滅罪】

に就て
罪證湮滅の責任に關する曲

- 法叢 野人 [新聞] 四四五 一七四號
淺野豐三郎 [新聞] 四四五 一七五號
荒木豐三郎 [新聞] 四四五 一七六號
池田喜太郎 [新聞] 大九〇 一七九號
寺崎 福彦 [新聞] 大九〇 一八〇號
池田喜太郎 [新聞] 大九〇 一八〇號
佐賀與志逸 [新聞] 大九〇 一八七號

- 商品としての農地
商品陳列所と巡回商人
地代は商品を高價ならしむるや
商品信用の經濟上に及ぼす影響
商品積込と南洋

- 横井 時敬 [國經] 四九一 一七號
河津 暹 [法協] 四四三 二二號
河田 嗣郎 [日經] 四四四 九八號
岡田 重次 [日經] 大九三 四號
阪部 一郎 [洋經] 大四一 七二號

【證憑湮滅罪】 【商品】

【商品】【常平倉】【商法】

坂口氏の近著「高等商品學」を讀みて
商品の萌芽形態に於ける社會的性質
對立物の統一としての商品

【常平倉】

往時の社會及常平倉制度と今日の米價調節
貯穀と常平倉
食糧問題と常平倉制度
米價安定と常平倉
常平倉
常平倉運用の標準
常平倉設置論
常平倉論
水戸藩常平倉の成立
水戸藩常平倉の運用

【商法】

修正商法に就て諸賢の高教

Table listing authors and page numbers for '常平倉' and '商法' sections.

に關ゆ
社會主義と商法との關係
商法の將來
レーマー博士日本商法評論
萬國的商法
商法雜題
商法の改正に就て
民法商法と社會政策
商法修正案と國際私法的規定
ヴィバンテ教授と其民法商法論
法統一論
商法雜題
我商法と共同代理
現行商法對照商法中修正案
商法修正案を評す
商法上嚴罰政策を論ず
商法改正と公認検査制度に就て
商法修正案に就て
商法改正の要點
商法修正案に就て

Table listing authors and page numbers for '商法' section.

商法修正案を讀む
商法修正案を評す
商法修正案論評
商法改正の要旨
商法修正案會社論に就て
商法修正案に就て
商法修正案に對する評論
商法中改正法律案を評す
保險協會の商法修正意見を評す
民商二法統一論
議會を通過したる商法修正案に就て
改正商法と商業道德
商法中改正法律に就て
行爲の自由と商法
改正商法案施行規定に就て
商法修正案に就て
商法修正案延期に關する意見

Table listing authors and page numbers for '商法' section.

商法の世界統一
最近十五年間に於ける商法學說の變遷
商法改正意見
商法雜題
商法と勞働問題
商法と勞資關係
商法の法源
商法の基本觀念を定むる必要に付て
今議會に提出せられたる商法中改正法律案に就て
信託法と民法商法其他との關係を論ず
商事非常立法評論
商法學の任務
商法と外債に就て
民法商法を本島(臺灣)人間に施行の可否
法律體系中に於ける商法の地位
商法雜題
組織法としての商法と行爲法としての商法

Table listing authors and page numbers for '商法' section.

【商法】

技術的法としての商法

商法第三條と第二六三條との關係

田中耕太郎〔志林〕卷二九三號

公法人の商行為

商慣習

商慣習法

當事者の雙方の商慣習法の相異なる場合の準備法

商法第三條の適用に就て

商法第三條の適用に就て

商法三條の趣旨

一方的商行為と商法第三條

獨逸商法改正草案摘要

欽定大清商律を評す

一九〇六、七年に於ける英國商事立法

清國商法編纂に就て志田博士に望む

獨逸商法に關する近著一斑

獨逸商事法概論の發達

舊西班牙商法典より現行西班牙商法典に

青山 衆司〔新報〕卷二七三號

松波仁一郎〔新聞〕卷二七三號

森 作太郎〔新聞〕卷二七三號

松波仁一郎〔新聞〕卷二七三號

梅 謙次郎〔志林〕卷二〇四號

中西惣三郎〔新聞〕卷二〇四號

兵 頭 生〔新聞〕卷二〇四號

毛 勝元〔京法〕卷二〇四號

青山 衆司〔評論〕卷二〇四號

リ ン グ〔法協〕卷二〇四號

松本 丞治〔法協〕卷二〇四號

毛戸 勝元〔京法〕卷二〇四號

青木 徹二〔保雅〕卷二〇四號

武田 省〔京法〕卷二〇四號

寺田 四郎〔國經〕卷二〇四號

寺田 四郎〔新報〕卷二〇四號

稻 郎 子〔新報〕卷二〇四號

花井 卓藏〔新報〕卷二〇四號

木村 元雄〔國家〕卷二〇四號

戸田 海市〔國家〕卷二〇四號

立 作太郎〔外時〕卷二〇四號

穂積 八東〔法政〕卷二〇四號

佐々木秋三郎〔法政〕卷二〇四號

宗街 學人〔新報〕卷二〇四號

鐵城 學人〔新報〕卷二〇四號

水野 遵〔國家〕卷二〇四號

秋山雅之助〔法政〕卷二〇四號

倉知 鐵吉〔法政〕卷二〇四號

藤波 元雄〔法記〕卷二〇四號

不須多樓主人〔新報〕卷二〇四號

寺尾 多亨〔國際〕卷二〇四號

西班牙ベルバオ市商事條例

近世歐洲商法の發達

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

寺田 四郎〔國經〕卷二九三號

寺田 四郎〔新報〕卷二九三號

【條約】

的觀察

條約批准論

國際條約論

憲法上の立法事項に關する

條約の締結及其効力

憲法上の立法事項の實行を目的とせる條約に就て

條約の形式

條約及條約法

條約は新領土に當然其効力を及ぼすものなるや否やを論ず

條約と法律

條約の頒布は法律を變更する効力ありや

臺灣と條約との關係

國家の政治機關に對する國際公法の拘束力を論ず

條約と法律事項

アッペール「國際條約を論ず」(譯)

條約締結權及條約と法律條約の解釋を論ず

稲 郎 子〔新報〕卷二七三號

花井 卓藏〔新報〕卷二七三號

木村 元雄〔國家〕卷二七三號

戸田 海市〔國家〕卷二七三號

立 作太郎〔外時〕卷二七三號

穂積 八東〔法政〕卷二七三號

佐々木秋三郎〔法政〕卷二七三號

宗街 學人〔新報〕卷二七三號

鐵城 學人〔新報〕卷二七三號

水野 遵〔國家〕卷二七三號

秋山雅之助〔法政〕卷二七三號

倉知 鐵吉〔法政〕卷二七三號

藤波 元雄〔法記〕卷二七三號

不須多樓主人〔新報〕卷二七三號

寺尾 多亨〔國際〕卷二七三號

條約の締結と議會の職權

戰爭と條約との關係

條約批准問題

條約の自由締結權と其履行に必要な法律案に對する議會の自由協贊權との衝突に就て

條約の國法上の効力

立法事項を包含したる條約は我國に於ては如何なる形式を以て臣民を拘束することを得るや

條約の第三國に及ぼす效果

條約の國內に於ける効力

條約の締結と其執行との關係に關する諸學說を批評す

國際條約批准論

條約法理問答

條約批准の拒絕

批准拒否の法理

織田 萬〔内外〕卷二九三號

山田 三良〔新聞〕卷二九三號

寺尾 亨〔國際〕卷二九三號

上野 眞正〔志林〕卷二九三號

吉野 作造〔國家〕卷二九三號

清水 澄〔志林〕卷二九三號

中村 進午〔外時〕卷二九三號

美濃部達吉〔國家〕卷二九三號

美濃部達吉〔法協〕卷二九三號

美濃部達吉〔國家〕卷二九三號

ホー ル〔志林〕卷二九三號

穂積 八東〔法協〕卷二九三號

寺尾 亨〔法協〕卷二九三號

中村 進午〔法政〕卷二九三號

中村 進午〔外時〕卷二九三號

【條約】

日英新協約の形式に關聯して條約の默示的批准を論ず	立 作太郎 [國家] 四九二
條約締結權と立法權との關係に就て	小原 新三 [法政] 四九二
條約批准論	花井 卓藏 [辯協] 四九二
日露講和條約の締結に關する憲法上の所感	齋藤 隆夫 [新聞] 四九二
條約の效力發生の時期	立 作太郎 [國際] 四九五
條約の性質	村上 恭一 [法協] 四九五
日韓條約と條約締結權	立 作太郎 [國家] 四九二
日韓覺書と憲法	佐々木惣一 [京法] 四九二
條約改正と最惠國約款	河津 暹 [國經] 四九二
條約改正と三大問題	寺尾 亨 [刑評] 四九二
條約改正と土地所有權	米田 實 [國際] 四九二
國家の併合と條約關係	立 作太郎 [國家] 四九二
條約改正に就て	大隈 重信 [外時] 四九二
高橋博士の國際條約の性質に關する説を批駁す	千賀鶴太郎 [京法] 四九二
條約締結の脅迫に就きて高橋博士の説を批駁す	千賀鶴太郎 [京法] 四九二
批准に就きて高橋博士の説を批駁す	千賀鶴太郎 [京法] 四九二
戰爭と條約	蜷川 新 [國際] 四九二
戰時法規と國際條約	立 作太郎 [國際] 四九五
批准拒否の理由に就きて高橋博士の説を批駁す	千賀鶴太郎 [京法] 四九五
國際條約の學理的解釋	千賀鶴太郎 [京法] 四九五
國際條約に關する議會の權限	美濃部達吉 [法協] 四九五
政事條約の本質	牧野 義智 [國國] 四九五
條約締結權と自治植民地	泉 哲 [國際] 四九五
自治植民地條約締結權の行使	泉 哲 [國際] 四九五
條約の効力	立 作太郎 [國家] 四九五
條約の批准	立 作太郎 [新報] 四九五
條約につきて	清水 澄 [新報] 四九五
戰後に於ける最惠國約款の撤廢と互惠本位條約	泉 哲 [國國] 四九五
條約締結に關して清水博士に答ふ	立 作太郎 [國家] 四九五
聯盟と憲法及條約問題	牧野 義智 [國際] 四九五
國際條約と國際法規との關係に就きてウルマンの説を批駁す	千賀鶴太郎 [法叢] 四九五
條約の留保附批准	立 作太郎 [外時] 四九五
條約と法律との關係	清水 澄 [新聞] 四九五
條約につきて	清水 澄 [國家] 四九五

【條約】

平和條約と憲法問題	金森徳次郎 [法政] 四九二
條約に關して	立 作太郎 [國家] 四九二
條約の新生面	伊藤 述史 [國聯] 四九二
條約に關する國際慣例	立 作太郎 [國家] 四九二
憲法法律及び條約	泉 哲 [新報] 四九二
條約の第三國に及ぼす影響	泉 哲 [法政] 四九二
イェリネツクの國際條約本質論	恒藤 恭 [同論] 四九二
國際條約の法理的解説	稻田周之助 [外時] 四九二
國際條約の諮詢	稻田周之助 [新報] 四九二
國際條約の效力	泉 哲 [新報] 四九二
條約の效力と批准との關係	泉 哲 [法政] 四九二
國際條約締結權	稻田周之助 [國家] 四九二
條約の登錄と其の效力	鳩山 秀夫 [國際] 四九二
立法部の議決に基つて條約の廢棄	泉 哲 [法政] 四九二
法律と條約との軋觸	泉 哲 [新報] 四九二
國際條約の成立及び効力	泉 哲 [外時] 四九二
國際協定と批准との關係	田川大吉郎 [國知] 四九二
相互援助條約は必要なりや	松原 一雄 [國際] 四九二
國際法上及條約上の用語に就て	谷島 香道 [臺法] 四九二
條約の效力發生期	
不平等條約廢止の法律的基礎	
基礎	岡本 彰 [亞經] 四九二
產業主義と當來の國際條約	早坂 二郎 [國知] 四九二
不平等條約の改竄可なり	船越光之丞 [外時] 四九二
不平等條約撤廢の先決問題	小川 節 [外時] 四九二
帝國主義と不平等條約	松原 一雄 [外時] 四九二
國際條約の締結	稻田周之助 [新報] 四九二
米國上院と條約締結權	木村 惇 [外時] 四九二
各種條約	ルボン [法協] 四九二
常定仲裁條約	ジロイ [法協] 四九二
總括にして永久なる仲裁條約に就て	三浦彌五郎 [法協] 四九二
一般仲裁條約を論ず	北原 多作 [外時] 四九二
臘納獸保護條約の目的	高橋 作衛 [新報] 四九二
海牙條約の改良すべき點	跡部定次郎 [京法] 四九二
佛國と海牙國際法條約	立 作太郎 [新報] 四九二
現戰爭に於ける海牙諸條約の適用	箕作 元八 [國際] 四九二
所謂二重保障條約に就いて	廣田 弘毅 [外時] 四九二
潛水艇及毒瓦斯に關する五國條約	坂本 俊篤 [外時] 四九二
江木翼氏の「四國條約と保留」を讀む	
新式潛水艇及び毒瓦斯に關する五國條約	

【條約】【剩餘價值】【シヨオ】

ローザン會議條約を評す	泉	哲	〔法治〕六三	三	六
阿片賣買の制限に國際協定	泉	哲	〔國際〕六四	二	二
ロカルノ條約の意義	西澤	英一	〔財經〕六四	三	三
誤られたる潜水艦及毒瓦斯條約	坂本	俊篤	〔外時〕六四	四	四
安全保障條約の成否	高木	信威	〔外時〕六四	四	四
婦人及兒童の賣買禁止條約	三宅	哲一郎	〔外時〕六四	四	四
ロカルノ條約批判	高木	信威	〔外時〕六四	四	四
ロカルノ諸條約と新歐洲	須磨	彌吉郎	〔外時〕六四	四	四
ロカルノ協約を論ず	町田	梓樓	〔外時〕六四	四	四
ロカルノ條約と軍縮問題	坂本	俊篤	〔外時〕六四	四	四
ロカルノ條約解説	坂本	俊篤	〔外時〕六四	四	四
ロカルノ協定と國際聯盟	青木	節一	〔國知〕六五	六	六
ロカルノ諸條約管見	須磨	彌吉郎	〔外時〕六五	六	六
マルクスの「剩餘價值學說」	田	徳三	〔國經〕六五	二	一
剩餘價值論梗概	福田	徳三	〔國經〕六五	二	一
價值と剩餘價值	丸谷	喜市	〔國經〕六三	七	五
剩餘價值の原理	丸谷	喜市	〔國經〕六三	七	五
剩餘價格の成立	河上	肇	〔經叢〕六七	七	一
マルクスの剩餘價值構成の原理に就て	山口	正太郎	〔同論〕六九	一	三

【剩餘價值】

マルクス氏剩餘價值説の評論	田島	錦治	〔經叢〕六一	一	四
安倍法學士譯「唯物史觀と剩餘價值」	水谷	長三郎	〔經叢〕六一	一	四
剩餘價值と租税	小林	丑三郎	〔經商〕六二	二	一
新剩餘價值説及社會階級協和論	田島	錦治	〔經叢〕六一	一	四
剩餘價格論につき高田博士に答ふ	河上	肇	〔社問〕六二	一	四
高田博士の再論について	河上	肇	〔社問〕六二	一	四
剩餘價值の研究	小林	丑三郎	〔經商〕六二	二	一
マルクスの「剩餘價值學說」と階級闘争	森戸	辰男	〔原雅〕六四	三	二
マルクスの「剩餘價值學說」史とその學界への貢獻	森戸	辰男	〔我等〕六四	七	四
マルクス「剩餘價值學說史」	森戸	辰男	〔原バ〕六四	一	九
マルクス「剩餘價值學說史」	森戸	辰男	〔原バ〕六四	一	九
マルクス「剩餘價值學說史」	大内	兵衛	〔原バ〕六五	一	三
マルクス「剩餘價值學說史」	久留	辰男	〔原バ〕六五	一	三
久留辰男	久留	辰男	〔原バ〕六五	一	三
久留辰男	久留	辰男	〔原バ〕六五	一	三
シヨオを中心として觀たるフエビヤン社會主義運動	町田	義一郎	〔三學〕六〇	一	五
	町田	義一郎	〔三學〕六〇	一	五

【シヨオ】(George Bernard Shaw, 1856-)

【職業】

職業調査論	ジョ	ンネー	氏	人民の職業	八五	
職業組合論	ル	ツ	オン	〔法協〕六三	二	
職業の死亡に於ける影響	岡	松	徑	〔統集〕六九	一	
一八七五年獨逸帝國職業調査の結果	相	原	重	政	〔統集〕六九	
臺灣總督府直轄學校生徒父兄職業及年齢別	堀	内	八	郎	〔統雜〕七〇	
職業調査の必要に就て	相	原	重	政	〔統集〕七一	
現在人職業調方一斑	世	良	太	一	〔統集〕七一	
一八九五年獨逸帝國職業調査	加	藤	晴	比	古	〔統集〕七二
職業調査の必要	吳	文	聰	〔統雜〕七三	一	
獨逸帝國職業及營業調査に就て	相	原	重	政	〔統集〕七三	
一八九五年獨逸帝國職業及營業調査職業分類	相	原	重	政	〔統集〕七三	
職業名稱録	高	橋	二	郎	〔統集〕七五	
一八九五年に於ける獨逸帝國職業及營業調査報告書	高	野	岩	三	郎	〔統集〕七五
一八九五年獨逸帝國職業調査	高	野	岩	三	郎	〔統集〕七五

參照：商業。職業紹介。婦人職業。労働及び労働階級。

【職業】

本邦の職業調査	花	房	直	三	郎	〔統集〕七三
一八九五年獨逸帝國職業調査の結果に於ける僕婢の狀態	高	橋	二	郎	〔統集〕七六	
ベルチオン氏職業分類の修正	相	原	重	政	〔統集〕七九	
現代青年の就職に付て	高	橋	二	郎	〔統集〕八二	
教育と就職難	植	松	考	昭	〔洋經〕八四	
一九〇七年普國職業及工業營業調査事務概況	植	松	考	昭	〔洋經〕八四	
熊本市職業調査	植	松	考	昭	〔洋經〕八四	
明治四十五年熊本市職業調査の結果	植	松	考	昭	〔洋經〕八四	
社會主義と就職難	相	原	重	政	〔統集〕八四	
英國職業局之近況	北	崎	進	〔東經〕八五	六	
東京府下の職業調査に就て	小	西	虎	雄	〔國經〕八六	
職業分類の比較研究	石	川	惟	安	〔統集〕八六	
無職業と犯罪	坂	本	敦	〔統集〕八六		
東京市に於ける職業の分布	泉	二	新	熊	〔志林〕八五	
各種の職業と傷害保險	坂	本	敦	〔統集〕八五		
就職難論	坂	本	敦	〔統集〕八五		
職業の分岐併合の一例	栗	津	清	亮	〔日經〕八三	
徒弟制度と職業教育	前	田	隆	吉	〔三學〕八三	
	本	庄	榮	治	郎	〔經叢〕八四
	三	位	甚	造	〔日經〕八四	

【職業】 【職業紹介】

職業類別の制度に就て
職業統計
職業及營業調査に現はれたる
獨逸の有業婦人
一九〇七年獨逸帝國職業及營業調査
職業調査
職業調査預言に就て
職業上の地位を論ず
徴兵検査と職業
戦後の政治經濟と職業及營業調査
札幌區の職業に関する研究
女子職業問題(譯稿)
佛國新職業組合法
男女職業の分野に就て
職業と鉛中毒の實際及其豫防法
職業心理學上の諸問題
婦女の職業と職業紹介所
職業指導の根本問題
職業上の興味と不満と科學的經營法
雇傭心理より見たる職業分析

坂本 敦	〔統集〕	六四	一	二〇
岡松 徑	〔統集〕	六五	一	三五七
森戸 辰男	〔統集〕	六五	一	四三三
高野岩三郎	〔統集〕	六五	一	四四
財部 靜治	〔新報〕	六六	一	一〇
坂本 敦	〔統集〕	六六	一	四三三
高岡 熊雄	〔國經〕	六七	二	二五
伏間 教順	〔統集〕	六七	一	四五四
高岡 熊雄	〔統集〕	六八	一	四五六
小林 照朗	〔日社〕	六九	一	一
末弘殿太郎	〔法協〕	七〇	一	一
増井 光藏	〔國經〕	七〇	一	一
長谷川卯三郎	〔社政〕	七〇	一	一
若林 米吉	〔社政〕	七〇	一	一
豊原 又男	〔財經〕	七一	一	一
若林 米吉	〔社政〕	七一	一	一
村本 福松	〔商經〕	七一	一	一
若林 米吉	〔社政〕	七一	一	一

職業と化學的中毒
職業と道徳
學校卒業生の就職難と生活難
求職者に對する所謂科學的
選擇と労働權の主張との
調和如何
職業指導の心理學的背景

【職業紹介】
參照||失業。

高峰 博	〔洋經〕	六三	一	一〇六
松倉慶三郎	〔新聞〕	六三	一	三三九
田中 貢	〔社研〕	六四	一	二
村本 福松	〔商經〕	六四	一	三七
古賀 行義	〔商叢〕	六五	一	一
關 一	〔國經〕	六九	一	一
杉 琢磨	〔法協〕	六九	一	一
田中 太郎	〔統集〕	七〇	一	一
布川 孫市	〔統集〕	七〇	一	一
佐々木勝三郎	〔日經〕	七一	一	一
北澤新次郎	〔國經〕	七一	一	一
生江 孝之	〔法政〕	七一	一	一
八濱德三郎	〔社政〕	七一	一	一
青木 節一	〔社政〕	七一	一	一
原 胤昭	〔新聞〕	七一	一	一
豊原 又男	〔財經〕	七一	一	一

労働紹介制度
英國の労働紹介制度
英國の國立職業紹介所の成績
職業紹介業に就て
労働紹介所論
労働紹介所論
職業紹介所論
職業紹介事情の精神
職業紹介事業の國營を論ず
職業紹介に關する一二の希望
婦女の職業と職業紹介所

關 一	〔國經〕	六九	一	一
田中 太郎	〔統集〕	七〇	一	一
布川 孫市	〔統集〕	七〇	一	一
佐々木勝三郎	〔日經〕	七一	一	一
北澤新次郎	〔國經〕	七一	一	一
生江 孝之	〔法政〕	七一	一	一
八濱德三郎	〔社政〕	七一	一	一
青木 節一	〔社政〕	七一	一	一
原 胤昭	〔新聞〕	七一	一	一
豊原 又男	〔財經〕	七一	一	一

【植民】

歐米に於ける職業紹介事業
獨逸の職業紹介事業統一

近世植民論
統計と拓殖の關係
植民情報局を設置すへし
ケンメルマン氏の海外移植民に關する所論要旨
普魯西王國に於ける國家的
近世植民事業
支那に於ける葡萄牙人の貿易及植民の濫觴
殖民銀行政策論
殖民社會論
滿洲に於ける我殖民問題
殖民及び殖民地の意義
伊太利の植民事業
朝鮮植民事業の前途
殖民なる名辭に就きて
商業政策に於ける殖民

參照||移民。植民政策。植民地。

永井 亨	〔社政〕	六一	一	二四
林 癸未夫	〔社政〕	六一	一	三二
田島 錦治	〔國家〕	六一	一	二二七
高橋 二郎	〔統集〕	六一	一	三〇七
瀧本 美夫	〔日經〕	六一	一	一
山内 正瞭	〔國家〕	六一	一	一
高岡 熊雄	〔國經〕	六一	一	一
北崎 進	〔東經〕	六一	一	一
遠藤 源六	〔國經〕	六一	一	一
山内 正瞭	〔國家〕	六一	一	一
河津 暹	〔國家〕	六一	一	一
山本美越乃	〔國經〕	六一	一	一
堀切善兵衛	〔三學〕	六一	一	一
永井柳太郎	〔外時〕	六一	一	一
北崎 進	〔東經〕	六一	一	一
新渡戸稻造	〔法協〕	六一	一	一
松岡 均平	〔法協〕	六一	一	一

【植民】

チュニリスに於ける佛蘭西の植民
殖民經濟政策に對する世論に就て
近世各國の植民的活動の原
因を論ず
植民の終極目的
獨逸植民研究所調査報告
獨逸の植民的運動の回想
東洋拓殖會社の價値
日本人の海外に於ける發展
西比利亞植民
コロニーの意義に就きて
過去に於ける和蘭の植民的活動
植民國としての丁抹の末路
獨逸の植民的發展の起源
海外發展の二意義
邦語の植民なる名辭は蘭語の譯なりとの説
熱帯の價値と之が利用の必要
帝國統一後の獨逸の植民的活動

高岡 熊雄	〔國經〕	六二	一	一
江木 翼	〔日經〕	六二	一	一
山本美越乃	〔國經〕	六二	一	一
新渡戸稻造	〔法協〕	六二	一	一
神戸 正雄	〔京法〕	六二	一	一
山本美越乃	〔經叢〕	六二	一	一
田中 穂積	〔財經〕	六二	一	一
内田 嘉吉	〔財經〕	六二	一	一
山本美越乃	〔經叢〕	六二	一	一
山本美越乃	〔經叢〕	六二	一	一
山本美越乃	〔經叢〕	六二	一	一
武藤 長藏	〔國家〕	六二	一	一
山本美越乃	〔經叢〕	六二	一	一
山本美越乃	〔經叢〕	六二	一	一

【植民】 【植民政策】

大英植民帝國の發展
英國植民協會
再び邦語の植民なる名辭の由來に就て
古代に於ける植民史訓
ノルマン・エンゲルの植民論
The colonial expansion of England, America and Japan.
植民の發達と其意義
植民問題 (講演)
植民問題 (講演)
植民問題 (講演)
内地植民問題の社會學的考察
戦後の植民危險論に就て (講演)
古代植民史の研究
中世歐羅巴に於ける植民運動
特許植民會社制度の批判
ブラジル植民事業
邦人と海外植民
近世資本主義と植民經濟

武藤 長藏	〔國家〕	六八三	四六
山本美越乃	〔經叢〕	六九〇	六
田中 正夫	〔國經〕	六〇〇	四
Bigelow	〔商研〕	六一〇	二
大鹽 龜雄	〔經商〕	六一一	三
稻田 昌植	〔日社〕	六一九	三
高岡 熊雄	〔日社〕	六一九	三
稻田周之助	〔日社〕	六一九	三
小林 郁	〔日社〕	六一九	三
山内 正瞭	〔日社〕	六一九	三
大鹽 龜雄	〔經商〕	六一一	三
大鹽 龜雄	〔經商〕	六一一	三
青柳郁太郎	〔東經〕	六一八	一
峯岸繁太郎	〔東經〕	六一八	一
阿部 秀助	〔三學〕	六一七	一

拓殖務省の設置を提唱す
獨逸の國內植民事業
特許植民會社制度研究
移植民獎勵問題と世の謬見
モーリス植民史の一節
失敗に終り易き内地植民
植民は布教なり
戦時獨逸内地植民制度の改革
邦人の海外在留者

植民政策と海運業
南進主義の植民政策
友人に與へて植民政策の本義を論ずる書
滿韓平南洋將た米大陸平マキアベリーの植民政策
植民政策とマキアベリー
鐵血宰相と植民政策
植民政策の極致
植民政策より見たる回教徒
植民政策の模倣

植民政策の三階級
共和獨逸の内地植民政策に就て
日本の移殖植民政策
新日本の植民政策

世界に於ける白人種植民地發展論
植民地會議
帝國憲法と植民地
獨逸植民地最近の發展
移殖地選擇問題に就て
アッシュレー教授の植民地會議觀
獨逸植民地發展
國際經濟上に於ける植民地
植民地に於ける土地制度を論ず
帝國憲法と植民地租借地及保護國との關係

船田 中	〔法政〕	六三二	九
河田 嗣郎	〔經叢〕	六三二	三
山本美越乃	〔經叢〕	六三二	一
長田 三郎	〔商經〕	六三三	一
稻田周之助	〔エコ〕	六四三	一
長田 三郎	〔商經〕	六四四	一
伊藤 兆司	〔農經〕	六四四	一
神戸 正雄	〔時經〕	六四五	一
堀 光龜	〔日經〕	六四一	一
永井柳太郎	〔外時〕	六四三	一
河津 暹	〔日經〕	六四三	一
植松 老昭	〔洋經〕	六四三	一
稻田周之助	〔新報〕	六四二	一
稻田周之助	〔日經〕	六四四	一
赤木 格堂	〔外時〕	六四五	一
原 勝郎	〔外時〕	六二七	一
赤木 格堂	〔外時〕	六二七	一
原 勝郎	〔外時〕	六二七	一
松下 芳男	〔法治〕	六四四	一
伊藤 兆司	〔農經〕	六四五	一
矢内原忠雄	〔エコ〕	六四五	一
淺見 登郎	〔外時〕	六四五	一
津村 秀松	〔國經〕	六四〇	二
津村 秀松	〔國經〕	六四〇	二
稻田周之助	〔新報〕	六四二	一
高木 二郎	〔國經〕	六四五	一
神戸 正雄	〔明學〕	六四五	一
熊崎 良	〔國經〕	六四一	一
尾崎 虎一	〔國家〕	六四三	一
服部文四郎	〔外時〕	六四三	一
高岡 熊雄	〔國經〕	六四三	一
高岡 熊雄	〔日經〕	六四三	一
稻田周之助	〔新報〕	六四三	一

【植民政策】

【植民地】

獨逸人の觀たる印度植民政策
戦後の我が植民政策
植民政策上の根本問題
植民政策より觀たる回教徒
植民政策より觀たるジョム
植民政策の變轉期
現戰争對植民政策
我國植民政策の改善を要す
植民政策上より觀たる委任統治
植民政策の一大轉機
今後の植民政策の基準
世界經濟と植民政策
スミスの對植民地策
社會主義と植民政策に關するエンゲルスの書簡
社會主義と植民政策
アダム・スミスの植民地策
植民政策上の一考察
歐米人の日本植民政策批判に就て
植民政策と帝國主義

堀切善兵衛	〔財經〕	六四二	九
神戸 正雄	〔經叢〕	六五二	六
泉 哲	〔國國〕	六八七	四
河津 暹	〔外時〕	六六二	三
蛭川 新	〔外時〕	六六二	三
山本美越乃	〔經叢〕	六一一	一
山本美越乃	〔新報〕	六一三	一
山本美越乃	〔經叢〕	六一六	一
長田 三郎	〔商經〕	六一一	三
山本美越乃	〔經叢〕	六一八	一
細川 嘉六	〔原雜〕	六三二	一
カウツキ	〔原雜〕	六三二	一
山内 正瞭	〔商研〕	六三三	一
長田 三郎	〔商經〕	六三三	一
淺見 登郎	〔早政〕	六四四	一
松下 芳男	〔法治〕	六四四	一

世界に於ける白人種植民地發展論
植民地會議
帝國憲法と植民地
獨逸植民地最近の發展
移殖地選擇問題に就て
アッシュレー教授の植民地會議觀
獨逸植民地發展
國際經濟上に於ける植民地
植民地に於ける土地制度を論ず
帝國憲法と植民地租借地及保護國との關係

津村 秀松	〔國經〕	六四〇	二
津村 秀松	〔國經〕	六四〇	二
稻田周之助	〔新報〕	六四二	一
高木 二郎	〔國經〕	六四五	一
神戸 正雄	〔明學〕	六四五	一
熊崎 良	〔國經〕	六四一	一
尾崎 虎一	〔國家〕	六四三	一
服部文四郎	〔外時〕	六四三	一
高岡 熊雄	〔國經〕	六四三	一
高岡 熊雄	〔日經〕	六四三	一
稻田周之助	〔新報〕	六四三	一

【植民政策】 【植民地】

【植民地】

英國殖民地法制概要	江木 翼〔國家〕四二二	條約締結權と自治植民地	泉 哲〔國際〕六六一
植民地發展につきて	河津 暹〔新報〕四二〇	自治植民地の外立	泉 哲〔國際〕六六一
我植民地としての墨西哥の	堀内 静宇〔洋經〕四四一	自治植民地條約締結權の行	泉 哲〔國際〕六六一
價值	松岡 均平〔國家〕四二六	國內法上植民地の地位	山本美越乃〔經叢〕六七六
植民地土地政策	茅原 華山〔外時〕四一五	實質上より觀察せる植民地	山本美越乃〔經叢〕六七六
瀛洲は帝國唯一の植民地	植松 考昭〔洋經〕四四五	の分類	獨逸植民地の教育制度
經濟上より見たる我植民地	松崎藏之助〔日經〕六一二	統計上より見たる植民地土	人の同化
の價值	對島郁之進〔京法〕六一七	植民地領有の目的	植民地の労働政策
植民地の經營と相續法	稻原 勝治〔外時〕六一七	植民地の労働政策	民族自決主義と植民地問題
植民地警察の特質	山本美越乃〔經叢〕六一一	植民地の土地政策	獨逸植民地の經濟的價值
熱帯植民地の經營	河津 暹〔國家〕六四九	最近に於ける我が植民地問	題
佛國植民地の現勢	渡邊 秀雄〔國家〕六四九	植民地に於ける國民運動	植民地に於ける土地開發を
本國植民地間の商業政策を	堀切善兵衛〔三學〕六四九	促進する方策としての地	税
論ず	河津 暹〔日經〕六四一	植民地創設の方法	植民地の經濟政策に就きて
植民地地方費の法律上の性	山本美越乃〔經叢〕六四二	植民地の銀行問題	
質に就て	原 岱江〔東經〕六六六		
歐洲戰爭と植民地問題	山本美越乃〔經叢〕六六六		
本國植民地間の商業政策	山本美越乃〔經叢〕六六六		
民族的自覺と植民地土民の	泉 哲〔國際〕六六六		
教育			
英國植民地の恐米論			
獨逸植民地の處分問題			
植民地の分類に就きて			
國際法上植民地と其の地位			

【植民地】 【植民地法】 【食糧】

スミスの植民地觀の由來の	地位	長田 三郎〔經叢〕六三二	植民地の財政方針	堀切善兵衛〔三學〕四四三	
アダム・スミスの植民地論	矢内原忠雄〔經論〕六四三	矢内原忠雄〔經論〕六四三	植民地財政の根本義	小林丑三郎〔日經〕四四三	
矢内原教授の「アダム・スミ	スの植民地論」を讀みて	山本美越乃〔經叢〕六四二	我國植民地財政政策概論	小林丑三郎〔東經〕四五五	
スミスの植民地論に關し山	本博士に答ふ	矢内原忠雄〔經論〕六四四	植民地の關稅制度を論ず	渡邊 秀雄〔國家〕六四三	
スミスの植民地論について	矢内原教授の教を乞ふ	長田 三郎〔經叢〕六四二	植民地の財政政策に就きて	山本美越乃〔經叢〕六四三	
スミスの植民地觀に關して	再び矢内原教授に應ふ	山本美越乃〔經叢〕六五三	門戶開放主義と植民地稅率	小島憲一郎〔外時〕六〇三	
スミスの植民地論につき矢	内原教授に答ふ	長田 三郎〔經叢〕六五三	植民地と根本法	稻田周之助〔新報〕四一八	
アダム・スミスの植民地觀	に對する争點	谷口彌五郎〔我等〕六五八	植民地に對する立法政策論	山内 正昭〔國家〕四一三	
植民地統治論序	日本の植民地統治問題	田島 錦治〔京法〕四〇二	英國植民地法制概要	稻田周之助〔新報〕四一九	
植民地統治の二大主義に就	て	小倉 和市〔三學〕四二二	植民地法と内地法との關係	江木 翼〔國家〕四二二	
植民地統治の形式に就きて	植民地統治と同化主義	山本美越乃〔外時〕六三〇	日本植民地法に就て	山田 三良〔法協〕四五〇	
植民地關稅問題に就て	財	山本美越乃〔經叢〕六七七	植民地立法政策	美濃部達吉〔國家〕四五二	
	政	末松偕一郎〔國家〕六〇三	食料米及一人平均分配量	稻田周之助〔新報〕六四五	
		小林丑三郎〔東經〕四〇三	食料論(食料としての人肉	を論ず)	文聰〔統集〕四六一
				河上 肇〔京法〕四三三	

食費の低廉
我國民の食物
日本の食料品問題
食料品騰貴の原因と影響
戦時に於ける食糧問題
食物の改良と生活費の節約
吾人の食物問題
戦争の食料品価格に及ぼせる影響
食料品としての大豆の價値
營養食物研究の急務
東京市に於ける果實、蔬菜の需要状況
食料供給に關する帝國の地位
食料の價格と供給
我國に於ける食糧獨立問題
國民生計問題と食糧政策
食糧品市場論
東京府下に於ける蔬菜の產生及供給
食糧問題と常平倉制度
食料問題と開墾助成計畫
食糧増産と開墾

古谷 青松	〔東經〕	二六八	一七二
添田 壽一	〔日社〕	六三二	一一一
石井 宗吉	〔國國〕	六三二	三三
河田 嗣郎	〔京法〕	六三九	三六
辻村 楠造	〔財經〕	六四二	二二
莊田平五郎	〔財經〕	六四二	三三
淺野 陽吉	〔國國〕	六四三	九
岡 實	〔國家〕	六五〇	二
佐伯 矩	〔財經〕	六五三	二
竹内秀次郎	〔統集〕	六六一	四七
矢野 貫城	〔亞經〕	六六一	二
舞出長五郎	〔國家〕	六七三	一
鈴木梅太郎	〔財經〕	六七五	四
添田 壽一	〔財經〕	六七五	一〇
内池 廉吉	〔國經〕	六八二	三
竹内秀次郎	〔統集〕	六八一	四八
仲小路 廉	〔財經〕	六八七	二二
河田 嗣郎	〔經叢〕	六八八	三
戸田 海市	〔經叢〕	六八八	五

我國の食糧問題と其對應策
我國に於ける食糧問題
食糧問題と我國將來の危機
食糧問題即法律問題
食糧問題に就て日英の一比較
人口及食糧問題對應策
男女食糧費の相異に關する調査
日本の米 英國のパン
生活改善と食糧問題
男女食糧費比較研究
國民食糧問題
食料品市場問題
我國の人口對食糧問題
食糧問題解決策
食糧問題と朝鮮の米作
吾國の食糧政策
食糧政策の確立に就て
食糧問題と畑作經濟
本邦食糧問題と肥料
食料増殖問題と林業政策
日本の食料問題
動物界の食糧問題

稻垣 乙丙	〔財經〕	六八六	六
矢作 榮藏	〔國家〕	六八三	八
田中 香涯	〔我等〕	六八一	一〇
播磨 龍城	〔新聞〕	六八一	一〇
矢野 貫城	〔亞經〕	六八八	四二
志立鐵次郎	〔財經〕	六八九	七
田中 太郎	〔統集〕	六八九	四七
田川大吉郎	〔洋經〕	六八九	九七
山本象太郎	〔財經〕	六九〇	二二
安田 龜一	〔社政〕	六九〇	二二
森本 厚吉	〔國經〕	六九二	四一
河田 嗣郎	〔經叢〕	六九五	五
山本美越乃	〔經叢〕	六九五	五
諸井 四郎	〔財經〕	六九六	六
河田 嗣郎	〔經叢〕	六九六	六
伊藤 悌藏	〔經商〕	六九三	八
根村 正位	〔洋經〕	六九三	一〇
小野 武夫	〔エゴ〕	六九三	一四
山本美越乃	〔經叢〕	六九二	六
石原 修	〔社雅〕	六九四	一四
川村多實二	〔經叢〕	六九四	一四

英

英國食物供給問題
英國に於ける食料品と其輸送方法
英國の食料品と物價
英國の食料及び原料
英國戦時の食糧問題と農業政策
英佛に於ける重要食料品の管理
食糧問題に就て日英の一比較
獨逸に於ける鮮魚の供給
戦時に於ける獨逸の食料問題
獨逸國民の食物
獨逸の國勢及び食物自給力の統計的研究
戦時獨逸國民食料問題
獨逸の戦時經濟狀態殊に食料問題
獨逸の農業保護關稅と食料品自給力

エノモリスト	〔三學〕	六二八	一
河田 嗣郎	〔經叢〕	六五二	三
氣賀 勘重	〔三學〕	六六一	二
堀江 歸一	〔三學〕	六七三	七八
山本美越乃	〔經叢〕	六七八	一六
矢野 貫城	〔亞經〕	六八八	一四
高岡 熊雄	〔日經〕	四〇〇	一九一〇
阿部 秀助	〔國經〕	六三一	七
横山 雅男	〔統集〕	六三一	四〇
津村 秀松	〔國經〕	六四一	二
藤本幸太郎	〔國經〕	六四一	四
渡邊 鐵藏	〔國家〕	六四二	五六
河田 嗣郎	〔國經〕	六四二	二

交戰第一年一九一四年度伯林食料物價講和の原因と獨逸の食料供給

悲觀さるゝ獨逸の糧食
獨逸の食料問題
獨逸の食糧生産
獨逸の食糧困難慘狀及戰時食糧政策
佛國戰時の食料政策
佛國戰時の食料問題
佛國の戦時食料問題
英佛に於ける重要食料品の管理
北米合衆國食物供給問題
北米合衆國食物供給論
米國の食物動員論
米國の食物政策と貿易制限
米國に於ける農産食料品分配組織に就て

藤本幸太郎	〔國經〕	六四九	六
渡邊 鐵藏	〔外時〕	六五三	二七
渡邊 鐵藏	〔國經〕	六五〇	一五
雪 堂 生	〔財經〕	六五三	一〇
土方 成美	〔國家〕	六六三	五
大森 研造	〔經叢〕	六八九	四
戸川 篤次	〔國家〕	六二〇	二
飯橋 迂史	〔財經〕	六四二	九
増井 幸雄	〔三學〕	六五〇	八
山本美越乃	〔經叢〕	六六五	六
山本美越乃	〔經叢〕	六八七	一六
瀧谷 善一	〔國經〕	四四三	九
高岡 熊雄	〔國經〕	四四三	八
増井 幸雄	〔三學〕	六六一	六
横井 時敬	〔財經〕	六七五	三
村本 福松	〔商經〕	六七一	一〇

米國に於ける食糧取締 岡田 忠彦 [國家] 六一三六 二〇

シヨッペンハウエルの自然 法學說 寺田 四郎 [國經] 六三二 一〇

戰時歐洲の食物供給 他 [國經] 六三二七 四

獨逸國民の所得高 普魯士、撒遜、英吉利の所得統計 參照||給料。財産。資本。賃銀。富。

奧太利の食物供給及金融 [國經] 六四一八 一

瑞典に於ける戰時食料品問題及食料品政策 武田 英一 [國經] 六六二三 二一五

印度に於ける食糧問題 [資料] 六一〇七 四

印度支那に於ける食料品農業概況 向井 章 [亞經] 六四四九 四

【庶子】 實子を見よ

帝國人民の所得 露國々民の所得 國民所得の推定 所得の意義に關する論争 國民所得の本質及調査方法を論ず

【女子】 婦人を見よ

世界七大強國民の所得 所得の概念 所得を中心とする經濟理論の結構 本邦所得種類別の研究 所得の性質を論じて所得税改正案に及ぶ

【書證】 證據一書證を見よ

所得のバレット線に就て 英國國民所得の解剖

【職工組合】 労働組合を見よ

所得統計 取引所得税法の改革 國債利子所得税免除の議 松崎博士に與ふる書(所得税及び財産税を結合するの可否)

【シヨッペンハウエル】 (Arthur Schopenhauer, 1788-1860)

所得税法改正私議 任意積立金と所得税 所得税を論じて同法改正案に及ぶ

所得分配統計を論じて森本博士に答ふ 沙見 三郎 [經叢] 六一〇三 三號

高野岩三郎 [統集] 四九一 一

所得と勞賃 堀 經夫 [經叢] 六一〇三 五六

戸田 海市 [國經] 四一六 四一五

所得と價值との關係に關する一考察 竹島富三郎 [商經] 六一〇 三三

無名氏 [日經] 四一四 一〇

我國に於ける國民所得の發達 沙見 三郎 [經叢] 六一〇四 三

ノイマン [日經] 四一四 二

所得不平等の計量問題 (譯) 宗藤 圭三 [同論] 六一〇 七

神戶 正雄 [日經] 四一六 八

法人の所得 陶山誠太郎 [商經] 六一〇 二九

佐藤 雄能 [東經] 四一六 一

ファイッシャーの所得理論の計理學的根據 高瀬莊太郎 [商研] 六一〇 三

小川郷太郎 [國經] 六一〇 四

我が國民所得の地方別研究 沙見 三郎 [經叢] 六一〇四 四五

松崎藏之助 [法協] 六一〇 五

セイの資本所得論 增井 幸雄 [三學] 六一〇 六

杉山直治郎 [法協] 六一〇 三

【所得】 外人所得稅論 中村 進午 [新報] 四九二 二

石川 重吉 [保雜] 四九五 二

所得税法改正の議 堀江 歸一 [國經] 四九二 二

北川 浩 [國經] 六六三 二

所得税法改正私議 瀧本 美夫 [國經] 四九二 二

東 嶺五郎 [會計] 六六二 三

所得統計に基き我國に於ける國民所得の増進及其分配に關する研究 高野岩三郎 [國家] 四九二 七

中村 繼男 [會計] 六六二 五

會社使用人の慰勞賞與金に對する所得税賦課問題
 所得税に於ける所得の意義を論ず
 所得税改正論
 第一種所得税の増加に就て所得の性質を論じて所得税改正案に及ぶ
 山林所得の課税に就て
 法人所得税の課税上より觀たる船舶償却に就いて
 減資利益及合併差益と所得税
 第一種所得税率改正私議
 所得税に於ける所得の統一課税
 所得税法の缺陷と其弊害
 積立金と所得税
 額面超過と所得税課否問題
 間接費準備金勘定及増加積立金勘定と所得税
 個人所得税法と擔稅力
 山林所得の課税に就いて
 所得税法改正案私見

神戸	正雄	〔經叢〕	六六	五	一
神戸	正雄	〔經叢〕	六六	五	三
成瀬	義春	〔三學〕	六六	二	二
佐藤	雄能	〔東經〕	六六	七	一
堀切善兵衛	〔三學〕	六七	三	二	
關口健一郎	〔國國〕	六七	六	三	
佐藤	善助	〔會計〕	六七	三	六
小山	強次	〔會計〕	六七	四	三
宮本	久藏	〔會計〕	六七	四	五
神戸	正雄	〔經叢〕	六七	六	五
堀切善兵衛	〔三學〕	六七	二	六	
小山	強次	〔會計〕	六七	四	二
森下李太郎	〔會計〕	六七	六	一	二
小山	強次	〔會計〕	六八	五	三
小國	修平	〔會計〕	六八	五	三
森下李太郎	〔會計〕	六八	五	三	五
松永	義雄	〔新聞〕	六八	一	五

現行税制改正統一所得税法論
 法人所得税の性質
 所得税法改正法案の立法的研究
 會社の資本減少差益と所得税課税問題に就いて
 所得税均等負擔の理想と實現
 所得税法改正に關する所見
 所得税改正案の論點
 所得税に就て武藤氏に答ふ
 所得税の改正を論ず
 超過所得税論
 改正所得税法案の是非
 會社合併の場合に於ける課税上の諸問題
 地方税としての所得税の重要
 地方所得税に於ける他地方交渉の問題
 地方所得税に於ける特別課税對附加税
 改正所得税法に於ける法人

柿沼	谷雄	〔新聞〕	六八	一	一
佐藤	雄能	〔會計〕	六八	二	二
藤澤	弘	〔會計〕	六九	七	二
松野健太郎	〔會計〕	六九	八	三	
汐見	三郎	〔經叢〕	六九	一〇	三
秋田	稔	〔財經〕	六九	七	七
三上	忠造	〔財經〕	六九	七	八
汐見	三郎	〔經叢〕	六九	一	一
小川郷太郎	〔經叢〕	六九	一	二	
小川郷太郎	〔經叢〕	六九	二	二	
小林丑三郎	〔東經〕	六九	二	五	
中村	繼男	〔會計〕	七〇	九	二
神戸	正雄	〔經叢〕	七〇	二	二
神戸	正雄	〔經叢〕	七〇	三	三
神戸	正雄	〔經叢〕	七〇	二	四

所得の算定及び税率適用圖解
 所得税の弱點
 我邦の所得税と普通の原則
 我邦の所得税を論ず
 所得税法改正私見
 所得税法に就て
 會社合併と所得税に就いて
 所得税取扱中改正追加の要領
 不當利得税を論ず
 鐵道業の所得税に對する町村附加税の賦課方法
 納稅義務と事業年度の變更との關係の一例に就て
 會社の合併に因る差益に對する所得税の賦課を論ず
 信託と所得税
 震火災による被害損金と法人の所得税及營業税
 第三種所得税法に於ける營業所得
 所得税辯
 所得税の轉嫁

二宮	丁三	〔計理〕	六〇	一	六
神戸	正雄	〔經叢〕	六〇	三	四
小川郷太郎	〔經叢〕	六〇	三	六	
神戸	正雄	〔經叢〕	六〇	三	一
松	披	〔財經〕	六一	九	三
田邊	忠男	〔財經〕	六一	九	三
平田	芳造	〔會計〕	六一	二	三
中村	繼男	〔會計〕	六一	九	四
小川郷太郎	〔經叢〕	六一	九	六	六
佐藤	雄能	〔會計〕	六一	九	六
關口健一郎	〔會計〕	六一	一〇	四	
宿利	英治	〔新報〕	六一	三	九
矢部	俊雄	〔會計〕	六一	三	四
中村	繼男	〔會計〕	六一	三	六
須藤	文吉	〔商事〕	六一	二	六
川村	環一	〔計理〕	六一	一	三
神戸	正雄	〔經叢〕	六一	一	三

法人所得税法の矛盾
 現行所得税法の非難
 勞働者所得に對する特別課税
 減資差益と會社の所得税及營業税
 減資と所得税との關係に就て
 生命保險と所得税の史的考察
 鐵道の買収差益と所得税
 第二種所得税と資本利子税
 外國法人の所得税に就いて
 法人留保所得税に就て
 外國法人課税の不統一と其改善
 改正法人所得税概説
 英國所得税法調査委員會報告
 英國所得税法小史
 英國所得税法改革に關する新研究

小篠	相一	〔會計〕	六二	一	三
矢島慶次郎	〔會計〕	六二	一	三	四
神戸	正雄	〔經叢〕	六二	〇	六
織田	吉藏	〔會計〕	六二	一	六
矢島慶次郎	〔會計〕	六二	一	六	六
藤川	博	〔保評〕	六二	一	七
佐藤	雄能	〔會計〕	六二	一	七
小川郷太郎	〔イソ〕	六二	二	六	
渡部	義雄	〔會計〕	六二	二	六
小川郷太郎	〔イソ〕	六二	三	二	
中崎	重嗣	〔會計〕	六二	一	三
織田	吉藏	〔會計〕	六二	一	六
堀江	歸一	〔國經〕	六二	二	二
武田	英一	〔國經〕	六二	二	六
堀江	歸一	〔三學〕	六二	一	三

【所得税】 【庶民銀行】 【署名】 【所有】

六七二

佛國に於ける所得税問題 佛國に於ける所得税の成立 及成績	青木 得三〔國家〕四三三 工藤 重義〔國家〕六六三 吉村 良〔三學〕四四二
米國所得税法改正問題 合衆國に於ける所得税法の 制定	内池 廉吉〔國經〕六三三 松崎 壽〔志林〕六三六 向井 鹿松〔三學〕六三八 舞出長五郎〔國家〕六七三 岩井 尊文〔國際〕六七六
米國所得税法概論 米國聯邦新所得税法 北米合衆國の新所得税及過 剩利得税法	下野直太郎〔會計〕六七三 關口健一郎〔會計〕六七四 關口健一郎〔會計〕六七四 山本 貞作〔會計〕六八五 中村 繼男〔會計〕六九七 中村 繼男〔會計〕六九七
米國所得税法と日本被備船 者の責任	中村 繼男〔會計〕六九七 中村 繼男〔會計〕六九七
現行所得税法に於ける第三 種所得の計算	關口健一郎〔會計〕六七四 關口健一郎〔會計〕六七四
所得税納税金額算出方法 法人戦時利得税の計算に就 て	山本 貞作〔會計〕六八五 中村 繼男〔會計〕六九七 中村 繼男〔會計〕六九七
改正税法に基く法人の所得 計算に關する私見 所得税の計算に就て	中村 繼男〔會計〕六九七 中村 繼男〔會計〕六九七

法人所得税の計算及申告方 に就て	山本 貞作〔會計〕六〇二 信用組合を見よ
【署名】	水口 吉藏〔評論〕六四四 署名に就て 商法の署名(明治三十三年 法律第十七號)と氏名文 字印影を論ず 署名の成立 署名の意義 署名の位置
【署名】	松倉慶三郎〔新聞〕六一 鬼武 義彦〔新聞〕六三 田中耕太郎〔民衆〕六三 播磨 龍城〔新聞〕六五 署名の位置
【署名】	水口 吉藏〔評論〕六四四 署名に就て 商法の署名(明治三十三年 法律第十七號)と氏名文 字印影を論ず 署名の成立 署名の意義 署名の位置
【署名】	松倉慶三郎〔新聞〕六一 鬼武 義彦〔新聞〕六三 田中耕太郎〔民衆〕六三 播磨 龍城〔新聞〕六五 署名の位置
【署名】	水口 吉藏〔評論〕六四四 署名に就て 商法の署名(明治三十三年 法律第十七號)と氏名文 字印影を論ず 署名の成立 署名の意義 署名の位置

【所有權】

參照II土地所有權。

所有權起原を論ず 社會主義と所有權の廢止及 制限	アギニアノー〔法協〕四九 小川郷太郎〔法協〕四九 本庄榮治郎〔經叢〕六五 田島 錦治〔商經〕六六一 小林 俊三〔辯協〕六八三 河上 肇〔社問〕六二 平野義太郎〔社科〕六四 平野義太郎〔法集〕六四
所有權の起源 所有權に就ての經濟學的管 見	小川郷太郎〔法協〕四九 本庄榮治郎〔經叢〕六五 田島 錦治〔商經〕六六一 小林 俊三〔辯協〕六八三 河上 肇〔社問〕六二 平野義太郎〔社科〕六四 平野義太郎〔法集〕六四
ルトゥルノー「所有權の將 來」(譯)	平野義太郎〔法集〕六四
生産手段に關する所有權の 睡眠	河上 肇〔社問〕六二
グントの「所有權と民事的 統制組織」	平野義太郎〔社科〕六四
グンド「所有權秩序の發生」 (譯)	平野義太郎〔法集〕六四
【所有權】	參照II入會權。外國人士 地所有權。共有。 物權。
埋没の物品及尸屍の事を論 ず	奥田 義人〔法協〕四九 田中 隆三〔新報〕四五
鑛業權と土地所有權	田中 隆三〔新報〕四五

水面所有權論 水面使用權に就て 命令の區域と民法第二〇六 條	江木 衷〔新報〕四六 政尾 藤吉〔新報〕四九 倉知 鐵吉〔法政〕四〇 長岡 春一〔國家〕四三 岡本芳二郎〔法協〕四二 淺見倫太郎〔新聞〕四七 上杉 慎吉〔新報〕四八 青木 一郎〔法政〕四二 横田 秀雄〔志林〕四〇 西川 一男〔新報〕四八 菊池 武雄〔新報〕四九
水面所有權論 水面使用權に就て 命令の區域と民法第二〇六 條	江木 衷〔新報〕四六 政尾 藤吉〔新報〕四九 倉知 鐵吉〔法政〕四〇 長岡 春一〔國家〕四三 岡本芳二郎〔法協〕四二 淺見倫太郎〔新聞〕四七 上杉 慎吉〔新報〕四八 青木 一郎〔法政〕四二 横田 秀雄〔志林〕四〇 西川 一男〔新報〕四八 菊池 武雄〔新報〕四九
水面所有權論 水面使用權に就て 命令の區域と民法第二〇六 條	江木 衷〔新報〕四六 政尾 藤吉〔新報〕四九 倉知 鐵吉〔法政〕四〇 長岡 春一〔國家〕四三 岡本芳二郎〔法協〕四二 淺見倫太郎〔新聞〕四七 上杉 慎吉〔新報〕四八 青木 一郎〔法政〕四二 横田 秀雄〔志林〕四〇 西川 一男〔新報〕四八 菊池 武雄〔新報〕四九
水面所有權論 水面使用權に就て 命令の區域と民法第二〇六 條	江木 衷〔新報〕四六 政尾 藤吉〔新報〕四九 倉知 鐵吉〔法政〕四〇 長岡 春一〔國家〕四三 岡本芳二郎〔法協〕四二 淺見倫太郎〔新聞〕四七 上杉 慎吉〔新報〕四八 青木 一郎〔法政〕四二 横田 秀雄〔志林〕四〇 西川 一男〔新報〕四八 菊池 武雄〔新報〕四九
水面所有權論 水面使用權に就て 命令の區域と民法第二〇六 條	江木 衷〔新報〕四六 政尾 藤吉〔新報〕四九 倉知 鐵吉〔法政〕四〇 長岡 春一〔國家〕四三 岡本芳二郎〔法協〕四二 淺見倫太郎〔新聞〕四七 上杉 慎吉〔新報〕四八 青木 一郎〔法政〕四二 横田 秀雄〔志林〕四〇 西川 一男〔新報〕四八 菊池 武雄〔新報〕四九

六七三

【所有権】

すへしとの判決と假執行の宣言
不法原因に基づく物の給付と所有権
所有権の本質に付て
河川使用の法律關係
所有権の基礎觀念に就きて
消費貸借の成立要件と所有権の移轉
所有権者及地上権者と代理占有
煤煙に因る相隣者間の權利侵害
擔保的所有権移轉論
袋地所有権者の通行權に就て
請負契約に因る所有権の取得
承役地所有者の委棄と所有権の移轉
隣地通行權者の償金不拂と通行權消滅の請求
競賣に因る所有権の取得
土地貸借人と民法第二三三

前田直之助	「新報」	四二〇	二	八
西川 一男	「新報」	四四二	二	三
三浦 信三	「志林」	四四三	二	三
石坂音四郎	「京法」	四四六	二	六
岡村 司	「京法」	四四六	二	二
石坂音四郎	「志林」	四四三	二	二
西川 一男	「新報」	四四三	二	二
松本 丞治	「志林」	六二二	二	八
松本 丞治	「法記」	六二三	二	二
中島 玉吉	「評論」	六二二	二	三
横田 秀雄	「法記」	六三二	二	八
富井 政章	「新報」	六三二	二	一〇
嘉山 幹一	「新報」	六四二	二	五
横田 秀雄	「評論」	六四四	二	六

條の剪除又は截取權
灌漑用水權に就て
所有權留保論
埋藏物の發見者は誰そ
所有權移轉行為に關する有因主義及び無因主義を論ず
持分の差異を論ず
體繼的所有權を論ず
相隣權を論ず
一筆の土地の一部の所有權解除條件の成就に因り權利か讓渡人に復歸せん場合と原始取得
煤煙の隣地に及ぼす影響と權利行使の範圍
共有の特分と權利
所有權の目的分割に因る權利發生の根據
土地所有權と礦業權との關係に付て
所有權より生ずる物上請求權
先占と代理

水口 吉藏	「新報」	六四二	二	八
水口 吉藏	「國國」	六五二	二	九
三浦 信三	「法協」	六六三	二	四
乾 政彦	「志林」	六六一	二	八
睦道 文藝	「京法」	六六二	二	二
守安富太郎	「新聞」	六六一	二	二
松原 祐馬	「新聞」	六六一	二	二
岩田 新	「志林」	六七〇	二	九
大橋 誠一	「辯協」	六八二	二	一
長島 毅	「新報」	六八二	二	二
末川 博	「法叢」	六八一	二	六
長島 毅	「新報」	六九三	二	四
長島 毅	「新報」	六九三	二	二
中口 末松	「新聞」	六九一	二	二
鳩山 秀夫	「志林」	六九二	二	二
長島 毅	「新報」	六九三	二	二

土地所有と試掘權の關係に就て

共有物の讓渡
造作の意義に就て
境界線の縦の觀察
地下水利權に關する一考察
所有權の不可侵
英法上の合有の觀念に付て
民法第三七一條第一項但書の適用と同法第二四二條但書の意義
王朝時代に於ける動産所有權
水利權問題
土地の工作物の所有者占有者の責任
層階所有權に就いて

横山 亮三	「新聞」	六〇一	二	八
藥師寺志光	「新報」	六〇三	二	五
松根 秀彌	「新聞」	六二二	二	一〇〇
勝山 内匠	「法曹」	六三二	二	二
小林已智次	「農經」	六四一	二	二
稻田周之助	「新報」	六四五	二	二
本莊鐵次郎	「法研」	六四四	二	三
姉齒 松平	「臺法」	六四九	二	七
瀧川政次郎	「新報」	六四三	二	二
播磨 龍城	「新聞」	六四三	二	二
中村 武	「新報」	六五三	二	五
中村 武	「新報」	六五三	二	六

【シエラリス】 (Jean Jaure, 1850-1914)
平和論者ジャン・シエラリスを想ふ
青木 節一「國聯」六一二 五

【白河樂翁】

白河樂翁の「物價論」を評す
樂翁公の人口増殖政策
【シレジア】
シレジア問題の紛糾
シレジア問題
オストプロイセンに於けるプレビシットの顛末
進化説と政治學
ロリアの「進化論の進化」
人類進化の現状
政治學上に於ける進化論の價值
生物進化論の誤解
進化論より觀たる社會民主

高城仙次郎	「三學」	四四五	二	二
本庄榮治郎	「經叢」	六七七	二	五
吉川潤二郎	「外時」	六〇三	二	四〇四
田原禎次郎	「國家」	六〇三	二	九一〇
堀切善次郎	「國家」	六一三	二	二六
和田垣謙三	「國家」	四二二	二	四三三
高田 保馬	「京法」	六二二	二	八
海野 幸徳	「國國」	六三二	二	二
稻田周之助	「新報」	六七二	二	七
川村多實二	「經叢」	六六五	二	一

參照：社會。

【所得權】【ジョレス】【白河樂翁】【シレジア】【進化】

【進化】【人格】【シンクレア】【親権】

坂田 實「社政」大〇年 一巻 一四七
山口正太郎「我等」大〇年 七 七
嘉治 隆一「我等」大〇年 七 七
今野 秀輔「商濟」大五 六 二

【人 格】 参照|| 權利及び義務。

田能村秋阜「明學」四〇 一 二二三
井上 友一「法政」四一 二 六七
江原 素六「法政」四二 二 八
河田 嗣郎「日經」四三 七 一
石川 興二「經叢」大九 二〇 三六
深作 安文「法公」大五 三〇 三四

【シンクレア】 (Upton Beall Sinclair (Pseud. Arthur String), 1878-)

北澤新次郎「原バ」大四 一 二二

【親 権】

大島三四郎「法協」四九 四 二五

就て
民法第八八八條の規定に就て
未成年者の代表に就て民法の缺點
「借財」の意義に關し志方 銀君に答ふ
民法第八八六條二號の借財には約束手形振出の行爲を包含することを論ず
親権と戸主權
約束手形の振出は必ずしも借財に非ず
準禁治産者と親權の行使
親權喪失に對する疑義
準禁治産者と親權
民法八八八條の規定に付て
幼兒引渡請求權
親權を行ふ母か婚姻を爲して夫を入籍せしめんとする場合
親權者たる母の親族會の同

宮田 四八「法協」四二 一六 一〇
長谷川菊太郎「辯協」四三 四 三〇
石山 彌平「新報」四四 二 二二二
梅 謙次郎「志林」四七 六 五九
田中 眞藏「新聞」四七 一 二〇六
志方 銀「法記」四七 一四 一五〇
岡村 司「志林」四九 八 三
梅 謙次郎「志林」四九 一〇 一
鈴木 虎雄「新聞」四九 一 七五三
貞 倭 生「新聞」四九 一 七五五
穂積 重遠「法協」四九 三〇 四
石田 政藏「法協」四九 三〇 四
藥師寺傳兵衛「法記」大八 二九 七
牧野菊之助「新報」大八 二九 九

意なき行爲と民法一〇條

獨逸に於ける親權進化の史的概観

民法第九〇八條第八號に關する新判例の適用に就て親權濫用に關する二三の考察

ローマ親權法の東方化

長島 毅「新報」大〇年 七 七
末川 博「法叢」大二 七 二二三
齋藤 巖「新聞」大二 一 二〇一七

小池 隆一「法研」大三 三 一
栗生 武夫「法叢」大四 二 二二
參照|| 權利及び義務。自由。人格。臣民。生存權。奴隷。民衆主義。

帝國憲法と天賦人權
エリネツク氏佛國人權の宣言
人權擁護の必要を論じて司

法制度の革新に及ぶ
人権蹂躪は事實也
人権問題と陪審制度
人権蹂躪と即決例廢止
所謂人権問題に付き敢て苦言す

鳩山 和夫「辯協」四三 二 一三七
横山勝太郎「辯協」四三 二 一三九
松田 源治「辯協」四三 二 一四〇
ト部喜太郎「辯協」四三 二 一四〇
小 猿 生「新聞」四三 一 六六
稲田周之助「國經」大〇年 一三 六

【親權】【人權】

人権の尊重と正法の確立
人権を論ず
人権の尊重
人権の根本義(講演)
人権問題(講演)
人権問題に就き眞率なる調査を望む
人権蹂躪の新實例
人権蹂躪問題の根本的解決
人権蹂躪問題を難す
人権問題と國家の賠償責任
人権問題に付き牧野所長に質す
人権蹂躪(和歌山監獄の狀態を難す)
人権蹂躪問題と探偵術の修習
米國の女權と其判例
法律學上より見たる人権
人身と法律
制限的人役權に就て
權利空に迷ふ法界の奇蹟
日本に於ける人権の擁護

鶴澤 總明「國國」大三 二 七
谷本 弘「國國」大三 二 九
ト部喜太郎「辯協」大三 二 八
鶴澤 總明「辯協」大三 二 八
江木 衷「辯協」大三 二 八
鶴澤 總明「辯協」大三 二 八
今村力三郎「新聞」大三 一 九四三
石田仁太郎「新聞」大三 一 九四九
牧野菊之助「新聞」大三 一 九五二
平松 市藏「新聞」大三 一 九五三
大井 靜雄「新聞」大三 一 九五四
駒澤 辰明「新聞」大四 一 九九八
原 嘉道「辯協」大四 一 一九八
眞鍋 虛舟「辯協」大四 一 一九九
鶴澤 總明「國國」大五 四 四
陣道 文藝「法論」大六 一 四
三浦 信三「法協」大六 三 五
齋藤 巖「新聞」大七 一 三九二
宮岡恒次郎「辯協」大七 三 二
宮岡恒次郎「新報」大八 二九 二

京都の演職事件に関する人権問題に就て
 ベーラの The Right of Man
 英國に於ける民権發達の経路
 我國に於ける人身賣買の風俗
 聖トマス私有權論
 ユーグノー戦争の喚起せる民権思想に就て
 正義とは何であるか
 人權擁護の基礎的保障
 人權伸張運々たり
 自然的人權

人口蕃殖原則一斑
 人民論
 都會人口論
 人員に關する問題
 經濟學上人員學の應用
 人口論に就き比類上の觀察
 人口問題に就てラベンスタ

【人権】
 【人口】

大澤 眞吉	〔辯協〕大九二四	五
村瀬武比古	〔國國〕大10九	二二
川手 忠義	〔新報〕大〇三	二
瀧川政次郎	〔我等〕大二	二
高橋誠一郎	〔國經〕大二三	四一五
松平 齋光	〔法政〕大二二〇	九一〇
松本 重敏	〔正義〕大四一	四
横山勝太郎	〔法新〕大四一	三
高山 利雄	〔辯協〕大四二九	五
村瀬武比古	〔法治〕大四四	九
參照 移民・國勢調査・權民。人口統計。統計。(マルサスの人口論に就ては「マルサス人口論」を見よ)		
小鹿島 果	〔統集〕大六	二
小野 彌一	〔統集〕大七	七
吳 文聰	〔スタ〕大九	七
吳 文聰	〔スタ〕大九	七
河合 利安	〔スタ〕大九	七
洛西 山人	〔統集〕大三四	一

インが所論
 地積及人口論
 人口の研究
 比例人口の一部
 人口は滔々として都會に流入す
 人口論
 舊人口問題及新人口問題
 人口増加體性觀
 人口論
 都會に於ける人口集中の弊害を論じて田園生活鼓吹の必要に及ぶ
 人口問題と國力の關係
 人口の研究
 人口の増加と犯罪
 現代文明國に於ける人口問題
 人口と犯罪
 人口と犯罪を讀む
 經濟的條件の出生率に及ぼす影響
 人口集中に關する新定律

田中 太郎	〔統集〕大六	一
吳 文聰	〔統集〕大七	一
吳 文聰	〔統集〕大九	一
岡松 徑	〔統集〕大九	一
河上 肇	〔日經〕大〇	二
小林 郁	〔國經〕大〇	三
稻田周之助	〔國經〕大〇	四
財部 靜治	〔京法〕大〇	三
小林 郁	〔國經〕大〇	四
河上 肇	〔日經〕大〇	二
吳 文聰	〔統集〕大〇	一
吳 文聰	〔統集〕大〇	一
澤村 晴夫	〔刑評〕大〇	一
米田庄太郎	〔國經〕大〇	一
花井 卓藏	〔新報〕大〇	二
一瀬勇次郎	〔新報〕大〇	二
高田 保馬	〔京法〕大二	八
石橋 五郎	〔國經〕大二	一五

人口減少の防止
 經濟的進歩と人口法則
 カンナン教授の人口論
 スピノ人口論
 支那及び日本の人口論
 マルサス以後の人口論
 戦後戦後の人口
 新マルサス主義
 新マルサス主義に關する主要の論者
 本邦諸雜誌に現はれたる人口に關する論説及び記事
 人口に關係ある和漢の書籍
 「日本經濟叢書」に於ける人口記事
 戦後の人口増加政策
 人口と勞銀の趨勢
 歐洲戦争と世界の人口
 女に子を生ます政策
 稠密なる本邦人口
 樂翁公の人口増殖政策
 人口増加の經濟的觀察
 人口移動の一形相に於ける

中川 望	〔國國〕大四	三
米田庄太郎	〔經叢〕大四	一
伊藤 眞雄	〔商經〕大五	一
大野 辰見	〔商經〕大五	一
瀧本 誠一	〔經叢〕大五	二
米田庄太郎	〔經叢〕大五	二
小川郷太郎	〔經叢〕大五	二
神戸 正雄	〔經叢〕大五	二
神戸 正雄	〔經叢〕大五	二
本庄榮治郎	〔經叢〕大五	二
本庄榮治郎	〔經叢〕大五	二
高野 彌吉	〔經叢〕大五	二
米田庄太郎	〔經叢〕大五	三
高田 保馬	〔經叢〕大五	三
門脇 龍雄	〔國經〕大六	三
米田庄太郎	〔經叢〕大六	四
財部 靜治	〔經叢〕大七	六
本庄榮治郎	〔經叢〕大七	七
高野岩三郎	〔國家〕大七	三

動搖因と集中因
 人口と國力
 世界の人口に及ぼせる歐洲文明の影響
 人口とは何ぞや
 世界戦争と人口の變動
 人口及食糧問題對策
 オッペンハイマアの人口論
 人口と文化
 社會科學上に於ける人口論の範圍並地位
 人口集中の現象に對する經濟的説明
 人口の移動と社會政策
 新マルサス主義英語通俗書
 解題
 James Steartの人口論
 ジョン・スチュアルト・ミルの人口制限論
 日本人口處分問題と外交政策
 デユースミルヒの人口論
 ライト氏の人口論
 秋田藩及び鹿兒島藩の人口

大場 實治	〔日社〕大八	六
大西猪之介	〔國經〕大八	七
松崎 壽	〔商經〕大八	一
財部 靜治	〔統集〕大八	一
沙見 三郎	〔經叢〕大九	二
志立鐵次郎	〔財經〕大九	七
和田 武	〔同論〕大〇	一
伊達 宗雄	〔國經〕大〇	三
〔資料〕大〇		八
奥井復太郎	〔三學〕大二	六
河津 暹	〔社政〕大二	一
山本 宣治	〔經叢〕大二	七
柴田銀次郎	〔國經〕大二	三
伊藤 久秋	〔商濟〕大二	三
日置 益	〔外時〕大三	四
高野岩三郎	〔原雜〕大三	二
竹村豊太郎	〔社科〕大四	一

政策	土屋 喬雄〔國家〕大四年三卷三號
生存權對人口法則の問題	南 亮三郎〔國經〕大四年三八一—二
マルサスの人口論と其後の實況	中野竹四郎〔長彙〕大四年六四—五
人口學說史上に於けるグロント及びベチイ	高橋誠一郎〔三學〕大四年一九—五
ジエームス・ミルと新マルサス主義	岡崎 文規〔經叢〕大四年二—
人口増加と社會進歩	高橋誠一郎〔社政〕大四年一—
人口理論の社會的背景	久保田明光〔早政〕大四年一—
人口増殖と帝國主義	松下 芳男〔法治〕大五年二—
人口論におけるマルサスとマルクスの交錯	大内 兵衛〔經論〕大五年四—
日本人口	村田 豊〔統集〕大四年二—
日本帝國の人口	相原 重政〔統集〕大四年一—
日本帝國人口論に就て	相原 重政〔統集〕大四年一—
日本の人口	河合 利安〔統集〕大四年一—
我國人口の將來	宮本 基〔統雜〕大四年一—
現在人口の價值如何	宮本 基〔統雜〕大四年一—
人口の疎密に就て	中村 金藏〔統集〕大五年一—
大日本國古來人口考	高橋 二郎〔統集〕大五年一—
日本の人口	河合 利安〔統集〕大五年一—
本邦人口論	高橋 二郎〔統集〕大五年一—

輓近本邦人口増加の比較研究	高野岩三郎〔國家〕大六年一—
我國人口増加の傾向に就て	河合 利安〔統雜〕大六年一—
我邦人口の増殖力に就て	河合 利安〔統集〕大六年一—
我邦人口は如何	財部 靜治〔京法〕大六年一—
人口問題	植松 考昭〔洋經〕大六年一—
人口問題私見	山本美越乃〔國經〕大六年一—
本邦人口の近狀	高野岩三郎〔法協〕大六年一—
日本の人口	大岡 保〔日經〕大六年一—
本邦現在人口の種類及價值	高橋 勝弘〔統集〕大六年一—
統計上より見たる都市人口と社會問題	田中 太郎〔統集〕大六年一—
我國上古の人口	河合 利安〔統雜〕大六年一—
我國中古の人口	河合 利安〔統雜〕大六年一—
我邦近古の人口	河合 利安〔統雜〕大六年一—
近世（江戸幕府時代）の人口	河合 利安〔統雜〕大六年一—
明治維新の人口	河合 利安〔統雜〕大六年一—
人口問題の將來	河合 利安〔統雜〕大六年一—
人口問題に對する時局の教訓	稻田周之助〔日經〕大六年一—
日本人口論	下村 宏〔財經〕大六年一—
人口問題（講演）	三上 正毅〔國國〕大六年一—
人口問題（講演）	建部 遜吾〔日社〕大六年一—
人口問題（講演）	高野岩三郎〔日社〕大六年一—

人口問題（講演）	永井 潛〔日社〕大四年三—
人口問題に於ける宗教的解決（講演）	渡邊 海旭〔日社〕大四年三—
人口増率の減少に就て	吳 文聰〔東經〕大四年一—
人口問題の將來	稻田周之助〔新報〕大五年二—
歐洲交戦國の人口問題と日本の人口問題	高野岩三郎〔國家〕大五年三—
徳川時代の人口	本庄榮治郎〔經叢〕大五年二—
日本及び支那の人口に關する主要なる歐文論著	本庄榮治郎〔經叢〕大五年二—
大正二年末帝國人口に就て	花房直三郎〔統集〕大五年一—
本邦都市の人口概観	竹内秀次郎〔統集〕大五年一—
維新後の戸數と人口との關係	本庄榮治郎〔經叢〕大六年一—
人口の消長に就て	石川 惟安〔統集〕大六年一—
市町村現住人口の價值に就て	竹内秀次郎〔統集〕大六年一—
米の收穫高と人口の増加	加藤 銀藏〔統集〕大六年一—
帝國人口の前途如何	二階堂保則〔統集〕大六年一—
誰か能く人口問題を解決する	峰岸繁太郎〔東經〕大九年二〇七—
我國の人口對食糧問題	山本美越乃〔經叢〕大二年一—
本邦都市に於ける人口集中の趨勢	小林鐵太郎〔社政〕大二年一—

ワシントン會議と我國人口問題	横山 雅男〔統雜〕大二年一—
本邦人口増加率の減耗	加藤 銀藏〔統集〕大二年一—
我國の人口問題	横山 雅男〔東經〕大二年一—
人口問題の統計的批判	佐々木啓七〔統集〕大二年一—
我が過剰人口と伯刺西爾移民	清水 靜文〔外時〕大二年一—
人口問題	神戶 正雄〔時經〕大二年一—
人口問題及び移民問題	稻田周之助〔新報〕大二年一—
日本の人口問題	稻田周之助〔外時〕大二年一—
人口過剰に關する若干の考察	矢内原忠雄〔經論〕大四年一—
我國人口問題の真相に就て	竹島 雄三〔國知〕大四年一—
我國最近の人口	神戶 正雄〔時經〕大五年一—
國法人口に就て	宮本 基〔統雜〕大五年一—
我國の過剰人口	野田 信夫〔社政〕大五年一—
支那及び日本の人口論	瀧本 誠一〔經叢〕大五年一—
日本及び支那の人口に關する主要なる歐文論著	本庄榮治郎〔經叢〕大五年一—
支那に於ける人口過剰論の梗概	鈴木券太郎〔經叢〕大五年一—
支那の人口問題に就て	木村増太郎〔亞經〕大六年一—
支那人口の研究	木村増太郎〔資料〕大六年一—

戸籍簿及人口異動調査に關する萬國統計會議の決議
人口統計及内閣訓令第一號に就て
人別調査は果して不急の業なるか
人口調査法及條目
人口推定法に就て
現在人口調査
行政に對する人口統計の調査及動力の一端を述べ
現任人口數の本籍人口數より多き原因如何
人口の觀察は如何なる學科の領域なるや
人口統計に就て
人口統計概論
人口調査に關する各次萬國統計公會の決議意見書
明治三十三年人口動態比例
人口調査に對する希望
日本の男女
人口統計大意
一戸平均人口の多少

高橋 二郎	〔統集〕	四二	二〇九
花房直三郎	〔統集〕	四二	二二〇
宮本 基	〔統雜〕	四三	一六〇
高橋 二郎	〔統集〕	四三	二二八
相原 重政	〔統集〕	四三	二二四
世良 太一	〔統雜〕	四三	一六八
田口 隆三	〔統集〕	四三	二二六
宮本 基	〔統雜〕	四四	一八四
岡松 徑	〔統雜〕	四四	二四七
高橋 二郎	〔統集〕	四四	二四七
花房直三郎	〔統集〕	四四	二四八
高橋 二郎	〔統集〕	四五	二五五
高橋 二郎	〔統集〕	四五	二五五
吳 文聰	〔統集〕	四五	二五五
和田千松郎	〔統雜〕	四五	二二二
河合 利安	〔統集〕	四五	二二七
高橋 二郎	〔統集〕	四五	二二八
吳 文聰	〔統集〕	四五	二二八

都鄙人口比例
輓近本邦人口増加の比較研究
統計の大意及人口動態統計の効用
人口調査の實況に就て
統計の大意及人口動態統計の効用
人口動態統計調査手續
結婚と離婚及出産と死亡
人口調査の時單名票國際交換に關する萬國協會の決議
我邦男女の數的關係
民數統計論
人口階級別行政区劃數の統計
人口動態統計に關する各次萬國統計協會の決議
日本帝國人口動態統計十年比例に就て
人口増加體性觀
男女の統計的研究
人口年齡上の分配及死亡の

吳 文聰	〔統雜〕	四六	一三五
高野岩三郎	〔統雜〕	四六	一三二
相原 重政	〔統雜〕	四六	二九〇
石川 惟安	〔統集〕	四六	二八七
相原 重政	〔統集〕	四六	二九〇
關 三吉郎	〔統集〕	四六	二九一
河合 利安	〔統集〕	四六	二九三
高橋 二郎	〔統集〕	四六	二九五
河合 利安	〔統集〕	四六	三〇二
高橋 二郎	〔統集〕	四六	三〇三
高橋 二郎	〔統雜〕	四六	二七四
高橋 二郎	〔統集〕	四六	三〇〇
花房直三郎	〔統集〕	四六	三〇一
財部 靜治	〔京法〕	四六	三〇一
財部 靜治	〔京法〕	四六	三〇二

定數
列國民年齡の組織
各國統計人口計算法
人口調査の職業分類に關するベルチヨンの報告
各國推定人口算定法
所帯に就て
家族統計
我邦人口は如何
各國國勢要覽
最近各國詮查斯及統計局中
央經費
巴里統計迅速類別請負會社
明治三十一年同三十六年及同四十一年に於ける三回の人口靜態調査に依る帝國人口の年齡別體性及其の變遷
明治三十一年同三十六年及同四十一年に於ける三回の人口靜態調査に依る帝國人口の年齡別體性及其の變遷

高橋 二郎	〔統雜〕	四二	二二二
河合 利安	〔統雜〕	四二	二二二
高橋 二郎	〔統雜〕	四二	二七〇
高橋 二郎	〔統集〕	四二	二二二
高橋 二郎	〔統集〕	四二	二二二
吳 文聰	〔統集〕	四二	二二二
高橋 二郎	〔統集〕	四二	二二二
財部 靜治	〔京法〕	四二	二二二
横山 雅男	〔統集〕	四二	二二二
高橋 二郎	〔統雜〕	四三	二八四
高橋 二郎	〔統集〕	四三	二五三
花房直三郎	〔統集〕	四四	二六六
濱田 富吉	〔統集〕	四四	二七二

響
本邦人口中に於ける男子超過に就て
人口動態平行法則論
最近人口靜態統計
配偶者の有無に關する統計調査
寄留法施行の結果と現住人口の調方
人口統計大意
本邦人の生死に關する統計的批判の概要
生死減少逆行の法則
天保人別改令
最近二回の人口靜態調査期間に於ける各地方現在人口の増減
大正二年末都郡最人口に於ける男女の權衡
伊能氏の古今戶口考
本籍人口の年齡構成及其變遷
天保五年調査諸國人數帳
大正五年の本邦各郡市人口

布川 孫市	〔統集〕	四三	四〇五
高野岩三郎	〔國經〕	四四	四一五
米田庄太郎	〔國經〕	四四	五一六
大山 壽	〔經叢〕	四四	一
財部 靜治	〔國經〕	四四	六
石川 惟安	〔統集〕	四四	四八
花房直三郎	〔統集〕	四四	四九
二階堂保則	〔統集〕	四四	四三
高田 保馬	〔經叢〕	四五	六
幸田 成友	〔三學〕	四五	八一三
花房直三郎	〔國家〕	四五	一三
花房直三郎	〔統雜〕	四五	三六二
高橋 勝弘	〔統集〕	四五	四九
濱田 富吉	〔統集〕	四五	四四
篠崎 亮	〔統雜〕	四六	三六九

と出生死亡
人口統計の革新
各國第一回國勢調査當時の
國狀と其人口
米麥價暴騰の原因と人口の
増加
人口調査に於ける現住主義
と常住主義とに就て
人口統計小票の誤謬に就て
大正七年日本帝國人口動態
の梗概
三田谷君の長壽者に關する
調査報告に就て所感を述
ぶ
大正九年の人口靜態と八年
の人口動態
前代未聞の奇異なる現象
(大正九年及十年の人口
動態に就て)
推定人口に就て
震災地人口調査の施行
市勢調査に就て
古代の戶籍計帳の研究
過去半世紀間に於ける各地

竹内秀次郎	〔統集〕	六六	一	三六
富士川 游	〔統集〕	六七	一	三七
伏間 教順	〔統集〕	六七	一	四七
石川 惟安	〔統集〕	六七	一	五三
濱田 富吉	〔統集〕	六八	一	五七
今井 榮之	〔統集〕	六九	一	七二
森 數樹	〔統集〕	六九	一	七七
石川 惟安	〔統集〕	七〇	一	二〇
濱田 富吉	〔統集〕	七一	一	四九
二階堂保則	〔統集〕	七一	一	五〇
内館 泰三	〔統集〕	七二	一	五〇
横山 雅男	〔統集〕	七三	一	四六
澤田 吾一	〔統集〕	七三	一	五九

方人口の發達と其の内容
變遷
推定人口に就て
海外在留本邦人口累年比
較
男女の數的關係に就て
婚姻及離婚
婚姻の事實
結婚の産兒力
結婚年齢論
夫婦年齢組合せ
雙者の結婚
近親結婚と統計
離婚統計の一二
我國の結婚歩合
本邦結婚統計一斑
本邦離婚統計一斑
本邦離婚統計の一斑
夫婦婚姻年齢の組合せ
日本人の婚姻妊娠及び出生
我國の離婚率に就いて
我國の都市及び地方に於ける
婚姻の統計的觀察

濱田 富吉	〔統集〕	六三	一	五九
長澤 柳作	〔統集〕	六三	一	五〇
戸田 基	〔統集〕	六四	一	四七
出淵 勝郎	〔統集〕	六五	一	五七
岡松 徑	〔統集〕	四五	一	三
矢崎鎮四郎	〔統集〕	四八	一	三
横山 雅男	〔統集〕	三三	一	九四
田中 太郎	〔統集〕	三三	一	九八
田中 太郎	〔統集〕	三三	一	三七
松本 修	〔法協〕	四六	二	二
市川 靜淵	〔統集〕	四六	一	二六
河合 利安	〔統集〕	四九	一	三〇
高野岩三郎	〔法協〕	四九	二	二五
高野岩三郎	〔法協〕	四九	二	二二
高野岩三郎	〔統集〕	四九	二	二二
岡松 徑	〔統集〕	六二	一	二二
財部 靜治	〔經叢〕	六四	一	二
二階堂保則	〔國國〕	六五	一	五
岡崎 文規	〔經叢〕	六一	一	五
岡崎 文規	〔經叢〕	六一	一	六

本邦の結婚統計
婚姻年齢の統計的研究
本邦の離婚統計
婚姻率に就て
都鄙別による離婚率
貧富別及職業別より觀たる
出生率及婚姻年齢の研究
夫妻年齢の出生に關係ある
の論
男女上の事實住人の増減に
關する事を論ず
結婚の産兒力
生兒に男女の區別を生ずる
の理及び生兒の男數如何
に超過するの理を論ず
死産
死産及病死嬰兒論
出生論
野蠻と開化に由て出生に多
少あるを論ず
男子の女子より多く生る、
理由
私生兒の出生

加藤 銀藏	〔統集〕	六二	一	三〇
岡崎 文規	〔經叢〕	六二	一	四六
加藤 銀藏	〔統集〕	六二	一	五〇
岡崎 文規	〔經叢〕	六三	一	三
岡崎 文規	〔經叢〕	六四	一	四
古川 利雄	〔社雜〕	六四	一	二二
寺田 勇吉	〔統集〕	四五	一	三
岡松 徑	〔統集〕	四六	一	三
矢崎鎮四郎	〔統集〕	四八	一	三
今井 武夫	〔統集〕	四六	一	四六
世良 太一	〔スタ〕	四三	一	五〇
高橋 二郎	〔スタ〕	四三	一	五三
高橋 二郎	〔スタ〕	四四	一	六八
伊藤 茂見	〔統集〕	四五	一	一三
吳 文聰	〔統集〕	四六	一	九二
矢 竹 士	〔統集〕	四六	一	二九

死體出生を見る
初生兒の出生に就て
日本の出生
日本の出生と男女
不正順なる社會的現象(私
生兒論)
日本の出生と季節
日本の公生と私生
出生論
出生統計の萬國一定の編纂
に關するフォンケレジ
氏の所論
出生死亡の時間
日本婦人の月經及妊娠に就
て
公生兒と私生兒
人口の増加と死産を論じ敢
て大方の人士に告ぐ
伊國ジニー氏産兒證性の研
究
我邦人口の増殖力に就て
我國の出生力
本邦出生統計一斑
死産と懐孕期の不同

矢 竹 士	〔統集〕	四六	一	二九
田中 太郎	〔統集〕	四〇	一	一九
河合 利安	〔統集〕	四二	一	二〇
河合 利安	〔統集〕	四二	一	二〇
田中 太郎	〔統集〕	四二	一	二〇
河合 利安	〔統集〕	四二	一	二〇
田中 太郎	〔統集〕	四二	一	二〇
河合 利安	〔統集〕	四二	一	二〇
河合 利安	〔統集〕	四二	一	二〇
吳 文聰	〔統集〕	四三	一	二〇
相原 重政	〔統集〕	四三	一	二〇
高橋 二郎	〔統集〕	四四	一	二〇
山田 謙治	〔統集〕	四五	一	二六
廣瀬 吉雄	〔統集〕	四六	一	三三
吳 文聰	〔統集〕	四六	一	三三
高橋 二郎	〔統集〕	四九	一	三〇
河合 利安	〔統集〕	四〇	一	三三
河合 利安	〔統集〕	四〇	一	三三
高野岩三郎	〔國家〕	四三	一	三六
高橋 二郎	〔統集〕	四三	一	三六

生命保險會社の死因統計に就て
 本邦小兒死亡の特流
 青年の死亡
 戦争死亡率に就て
 壯年者の死亡率及其原因
 本邦人の月別死亡の研究
 天壽の説
 本邦に於ける急性傳染病患者及其死亡
 幼兒死亡と貧困
 土葬と火葬とは何れが多いや
 我邦の結核死亡數
 被害者及不慮死傷者に就て
 生死減少進行の法則
 乳兒死亡率と出生率との關係
 本邦死亡率の推移
 戦争死亡率に就て
 大正五年の本邦各都市人口と出生死亡
 地方別十ヶ年結核死亡

上原 正道	〔統集〕	大三	一	四〇三
二階堂保則	〔統集〕	大三	一	四〇二
二階堂保則	〔國家〕	大四	二九	九一二
高田他家雄	〔保雜〕	大四	一	三三三
中村 芳貞	〔統雜〕	大四	一	三三六
二階堂保則	〔統集〕	大四	一	三三二
財部 靜治	〔經叢〕	大四	一	三四七
加藤 銀藏	〔統集〕	大五	一	四一八
河上 肇	〔經叢〕	大五	二	二
横山 雅男	〔統雜〕	大五	一	三六六
河合 利安	〔統集〕	大五	一	四二一
石川 惟安	〔統集〕	大五	一	四三三
高田 保馬	〔經叢〕	大五	二	六
高田 保馬	〔經叢〕	大五	三	一
龜田豐治朗	〔日社〕	大五	三	三一五
高田他家雄	〔保雜〕	大五	一	三三〇
竹内秀次郎	〔統集〕	大六	一	四六六
河合 利安	〔統集〕	大六	一	四七三

中壽の説
 本邦人の死亡率に就て二三の觀察
 邦人の國民死亡率と經驗死亡率との推移の趨勢に就て
 戦争の死亡率に及ぼす影響
 悪性感冒に因る死亡の統計
 大正五年の本邦死因統計に就て
 大都市に於ける出生及び幼兒死亡に就きての觀察
 黒人の死亡率に就て
 在監人の疾病と死
 實際死亡率の計算公式に就て
 本邦死亡率の研究
 投身者の統計に就て
 本邦の死亡統計
 學齡期の人口死亡率
 死因及疾病分類
 地震と死亡率
 邦人の生命に就て
 配偶の有無と死亡率

財部 靜治	〔經叢〕	大六	五	二
二階堂保則	〔統集〕	大六	一	四三三
角尾猛次郎	〔保雜〕	大七	一	二五九
糸井 靖之	〔國家〕	大七	三	二
麻生義一郎	〔保雜〕	大八	一	二六九
二階堂保則	〔統集〕	大八	一	四七七
三田谷敬外三	〔商經〕	大九	一	四一九
玉野重次郎	〔保雜〕	大九	一	二七七
羽柴瑪之助	〔統雜〕	大九	一	四一七
佐藤峰太郎	〔保雜〕	大九	一	二九〇
赤神 良讓	〔日社〕	大九	一	三三五
加藤 銀藏	〔統雜〕	大九	一	四三七
加藤 銀藏	〔統集〕	大九	一	四九六
濱田 富吉	〔統時〕	大九	一	五二二
土肥梶太郎	〔保評〕	大九	一	一〇
藤本幸太郎	〔國經〕	大九	一	三三七
岡崎 文規	〔經叢〕	大九	一	四

日本人の生命
 死亡率出生率相關の現象
 傳染病統計條目
 病患統計論
 東京府癲狂院の患者統計表
 吉良君の痘瘡の統計に係る所見に就て
 痘瘡患者種痘後經過年數痘瘡の統計に係る所見
 明治二十七年集鴨病院醫事年報を讀む
 日本人は如何に疾の器たるか
 貧民の病症に就て
 上水と疫病
 東京府管内六病院に於ける精神病患者に就て
 警視廳に於ける傳染病統計の材料蒐集方法
 東京府集鴨病院年報を讀む
 本邦人の胃腸病に就て
 花柳病蔓延の状況調査
 類の話

佐藤 保兒	〔國經〕	大三	三	七
竹村豊太郎	〔三學〕	大五	二〇	五
高橋 二郎	〔統集〕	四五	一	二
嘉村了朝一	〔統集〕	四六	一	二〇
榎 俣	〔統集〕	四二	一	八
吳 文聰	〔統雜〕	四五	一	三
吳 文聰	〔統雜〕	四五	一	三
卷良 太一	〔統集〕	四五	一	二二六
河合 利安	〔統雜〕	四五	一	二六
河合 利合	〔統集〕	四六	一	一六六
河合 利安	〔統集〕	四七	一	一五二
石川 惟安	〔統集〕	四五	一	二五七
石川 惟安	〔統集〕	四五	一	二六
二階堂保則	〔統集〕	四五	一	三〇三
河合 利安	〔統集〕	四五	一	三〇九
二階堂保則	〔統集〕	四五	一	三三〇
長谷川佐太郎	〔統集〕	四五	一	三五五
二階堂保則	〔統集〕	四五	一	三六六

米國に於ける疾病と其損失
 集鴨病院最近十年間患者統計
 疾病と社會狀態との關係
 在監人の疾患に就て
 驚駭すべき傷害の統計
 本邦に於ける急性傳染病患者及其死亡
 日本生命保險會社の統計より見たる流行性感冒
 在監人の疾病と死
 監獄統計に現はれたる病者の統計上より觀たる大正七年の流行性感冒
 死因及疾病分類
 流行性腦炎の統計
 體育、衛生等
 ダンソンの身體生長統計表
 衛生統計の效用
 不具者原因探討
 學校生徒の近視眼
 人體の發育(ケトン)統計論
 より
 學齡者の成長

難波誠四郎	〔國家〕	四四	三五	二
吳 秀三	〔統集〕	大九	一	四一〇
大山 壽	〔京法〕	大九	一	八
二階堂保則	〔統集〕	大九	一	四一四
粟津 清亮	〔保雜〕	大九	一	二三五
加藤 銀藏	〔統集〕	大九	一	四一八
守田 常直	〔保雜〕	大九	一	二八〇
羽柴瑪之助	〔統雜〕	大九	一	四二七
羽柴瑪之助	〔統集〕	大九	一	四八四
加藤 銀藏	〔統集〕	大九	一	四九〇
近藤 榮藏	〔統集〕	大九	一	五二二
渡邊源次郎	〔統集〕	大九	一	一九
和田 莞爾	〔統集〕	大九	一	二六
寺田 勇吉	〔統集〕	大九	一	三〇
横山 雅男	〔スタ〕	大九	一	五
田中 健士	〔統集〕	大九	一	六一
吳 秀三	〔スタ〕	大九	一	二七

鐵籠は衛生の大關係あり
 軀幹の發達と文明との關係
 本邦人各年齢體重の調査成績
 健康人及病人の用水量
 第八回萬國衛生及民生學會
 議事綱目
 農民の健康
 小學女生徒健康の有様
 小學校教員の健康の狀態
 盲啞失官の原因
 北陸婦人の月經に就て
 學生生徒健康上の狀況
 本邦盲啞聾者の數
 大學々生の視力統計
 本邦の不具者に就て
 文部省直轄學校生徒身體檢
 査成績の概況
 第十回萬國衛生及民生學會
 規則
 日本婦人の月經及妊娠に就
 て
 不具の數其れ幾何ぞ
 歐米各國盲啞瘋癲の統計

杉	亨二〔スタ〕四二	年	三
横山	雅男〔統集〕四二	一	八〇
三輪	徳寛〔統雜〕四二	一	八〇
横山	雅男〔統集〕四二	一	八〇
高橋	二郎〔統集〕四三	一	一五三
新渡戸	稻造〔統集〕四三	一	一六六
寺田	勇吉〔統雜〕四三	一	一九
白井喜之	作〔統雜〕四三	一	二二五
池田	近勇〔統雜〕四三	一	二二五
山田	謙治〔統集〕四三	一	一八七
寺田	勇吉〔統集〕四三	一	一三三
岩井徳次郎	〔統雜〕四三	一	一四二
吳	文聰〔統集〕四三	一	二〇〇
横山	雅男〔統雜〕四三	一	二六六
岩井徳次郎	〔統集〕四三	一	三三一
高橋	二郎〔統集〕四三	一	三二五
山田	謙治〔統集〕四五	一	二五
吳	文聰〔統集〕四五	一	三九一
相原	重政〔統集〕四五	一	三〇〇

我國の盲啞
 日本婦人の身體に就て
 住家の完備と兒童體格の關
 係
 貧民の健康狀態
 北陸婦人の月經及娠孕力に
 就て
 貧民の體力に就いて
 本邦學生生徒小學兒童の體
 力に就て
 邦人體力低下の問題に就て
 妊娠因産婦因褥婦因附其幼
 兒について
 精神的活力と年齢
 長壽者に關する調査報告
 日本に於ける營養質の供給
 と國民の保健食量

東京の人口に就て
 明治廿五年中東京府下の出
 生と死亡
 明治二十五年中東京府下の
 疾病と死亡
 明治廿五年中東京府下の年

河合	利安〔統集〕四九	一	三〇三
山田	謙次〔統集〕四九	一	三二七
高橋	二郎〔統集〕四九	一	二九三
二階堂保則	〔統集〕四九	一	三五五
山田	謙治〔統集〕四五	一	三六
高田	保馬〔經叢〕六五	二	四
加藤	銀藏〔統集〕六五	一	四九
吳	文聰〔統集〕六五	一	四三〇
山崎	佐〔志林〕六六	一九	一
河上	肇〔經叢〕六六	四	六
三田谷	啓〔統雜〕六二〇	一	四一七
稻垣	乙丙〔統時〕六二	一	六
今井	武夫〔スタ〕四二二	一	四七
河合	利安〔統雜〕四六	一	八七

齡と死亡
 明治廿五年中東京府下の男
 女と死亡
 明治廿五年中東京府下の住
 所と死亡
 東京府下の自殺統計
 本邦三大都市の人口
 東京府下の不慮死傷
 東京府下の死亡者に就て
 東京府下の各種死亡者に就て
 東京府下の人口に就て
 東京府下の人口に就て
 明治三十八年に於ける東京
 府下肺結核死亡調査
 東京府下に於ける自殺者
 慶應二年に於ける江戸の人
 口
 明治四十三年末現在東京府
 第二回現住者職業調の仕
 組
 東京市に於ける無配偶男女
 兩性の關係
 東京市の現住人口に就て
 東京市の人口に就て

河合	利安〔統雜〕四六	年	八八
河合	利安〔統雜〕四六	一	八九
河合	利安〔統雜〕四六	一	九〇
横山	雅男〔統雜〕四六	一	一一二
横山	雅男〔統集〕四六	一	一一二
横山	雅男〔統集〕四六	一	一一二
河合	利安〔統雜〕四六	一	一一三
石川	惟安〔統集〕四六	一	一一四
石川	惟安〔統雜〕四六	一	一一五
石川	惟安〔統集〕四六	一	一一五
石川	惟安〔統集〕四六	一	一一五
横山	雅男〔統雜〕四六	一	一一七
栗本	庸勝〔統集〕四六	一	一一六
加藤	銀藏〔統集〕四六	一	一一三
三島	道良〔統雜〕四六	一	二八〇
石川	惟安〔統集〕四六	一	三六一
坂本	敦〔統集〕四六	一	三三五
坂本	敦〔統集〕四六	一	三七七
石川	惟安〔統集〕四六	一	三六〇

大正二年に於ける東京府下
 の死亡
 東京府西多摩郡壯者體格檢
 査成績
 東京府現住者職業別所帶數
 及人員
 大正六年中の東京市現住人
 出生と妊娠率
 物價の影響より見たる東京
 市の最近人口動態
 東京市内細民の所帯及人口
 に關する統計的觀察
 東京市の水面人口及所帯
 東京市に於ける幼兒死亡率
 に就て

甲 斐國男女年齢及び身上の
 有様(明治十二年末)
 明治十二年末甲斐國現在人
 別調顛末
 甲斐國現在人別調記憶誤
 明治十二年二月一日甲斐國
 現在人別調の概況
 甲斐國人員及年齢中數

石川	惟安〔統集〕六四	一	四二二
加地	成雄〔統雜〕六六	一	三七六
石川	惟安〔統集〕六六	一	四三五
竹内秀次郎	〔統集〕六七	一	四四八
荒木	淺雄〔統集〕六七	一	四五一
荒木	淺雄〔統集〕六〇	一	四八九
財部	靜治〔經叢〕六二	一	六
早田	正雄〔法文〕六四	三	六
高橋	二郎〔統集〕四六	一	二八八
岡松	徑〔統雜〕四三	一	二七九
高橋	二郎〔統集〕四六	一	三三九
吳	文聰〔統雜〕六六	一	三六

臺灣の不具者に就て	水科七三郎 [統集] 四七	二七九
臺灣戸口調査視察談	高橋 二郎 [統集] 四六	二七九
臺灣戸口調査に就て	花房直三郎 [統集] 四三	二七九
臺灣戸口調査の實況に就て	關 三吉郎 [統集] 四九	二七九
印度のセンサスと臺灣の臨時戸口調査	高野岩三郎 [國經] 四〇	二
臺灣戸口調査の報告	瀧本 美夫 [國經] 四二	一
臨時戸口調査に現はれ	高野岩三郎 [國家] 四四	三
臺灣における死亡率及び疾病統計に就きて	内田 銀藏 [經叢] 六六	五
臺灣戸口調査の實驗	水科七三郎 [統集] 六七	三
第二次臨時臺灣戸口調査に就て	高野岩三郎 [統集] 六七	四
臺灣戸口調査の實驗	水科七三郎 [統集] 六七	四
其他本邦各部	實曆三年十二月伊豆七島調本邦三大都市の人口	奥田 一夫 [統集] 四七
	茨城縣の死産に就て	横山 雅男 [統集] 四三
	伊豆七島の人口に就て	小川 速 [統集] 四七
	札幌區勢調査	石川 惟安 [統集] 四九
	明治四十二年十月一日神戸	高岡 熊雄 [國家] 四三
市勢調査の結果	相原 重政 [統集] 四二	三五六
札幌區々勢調査の概況	高岡 熊雄 [統集] 四四	三五九
佐渡郡々勢調査の顛末概要	深井 康邦 [統集] 四四	三六一
新潟縣佐渡郡郡勢調査の實勢一斑	高橋 勝弘 [統集] 四五	三五五
朝鮮李朝歴代の戸口	横山 雅男 [統集] 六二	三三〇
愛媛縣四坂島センサスに就て	横山 雅男 [統集] 六三	四〇一
新潟縣の盲人調査	深井 康邦 [統集] 六三	四〇二
大坂市人口の體性的研究	山口 正 [國經] 六四	一九
土州古今人口考	武市佐市郎 [統集] 六四	三五六
富山縣の翁媪調査	財部 静治 [經叢] 六五	三五
宮崎縣出生の現在と將來	中村 芳貞 [統集] 六七	三九〇
札幌區の人口に関する研究	高岡 熊雄 [統集] 六七	四〇三
鳥取縣の人口政策	中尾 染藏 [統集] 六八	三九六
國勢調査に現はれたる北海道人の消息	佐々木啓七 [統集] 六〇	四一九
飛彈川村の人口に就て	岡崎 文規 [商經] 六三	三
關東廳戸口の調査(調査法)に就て	宮本 基 [統集] 六四	四六六
英國現在の人口	殖日直太郎 [統集] 四〇	六九
英國近世衛生の進歩	中山 隆治 [統集] 四〇	七三

現今英國人口の調査及田園市都の人口	柏村 孝正 [統集] 四四	二二三	
一八九〇年制度、英、威民勢調査法	小笠原 金之助 [統集] 四三	二二六	
英國最近のセンサス	田中 太郎 [統集] 四六	二八六	
倫敦統計協會センサス委員の報告	後藤 市藏 [統集] 四二	三三五	
英國に於ける出生死亡及婚姻に關する統計報告摘要	英克蘭及威爾斯の未成年者婚姻	[統集] 四三	三三九
一八〇一年以降伯林倫敦巴里三市人口増加の趨勢	藤本幸太郎 [國經] 六三	二七	
英國に於ける出生率の減退	森戸 辰男 [國家] 六六	三	
自一九一三至一九二三年間に於ける英、佛、獨、露の人口動態	大内 武夫 [經商] 六三	七	
漢土歴代境域人員統計	山寺 信炳 [統集] 四七	二五	
支那歴代の戸口	横山 雅男 [統集] 四六	二八	
支那人口統計論稿	財部 静治 [京法] 四四	二	
清國人口統計の内容に就て	根岸 信 [國經] 四四	四	
清國戸口調査の實施	横山 雅男 [統集] 六二	二二六	
支那近代の戸口に就て	内藤虎次郎 [經叢] 六五	三	
支那の人口統計	善生 永助 [財經] 六六	一〇	
支那の人口調査	服部宇之吉 [亞經] 六七	二	
支那人の出生及び死亡	柏田 忠一 [亞經] 六八	三	
支那に於ける人口の分布	中野竹四郎 [長彙] 六四	六	
獨逸帝國人別調の話	寺田 勇吉 [スタ] 四〇	二〇	
獨逸帝國人口の増加	相原 重政 [統集] 四〇	一九	
一八九〇年獨逸帝國の結婚出生及死亡	相原 重政 [統集] 四四	二四	
獨逸帝國推定人口算定法	相原 重政 [統集] 四四	二四	
一九〇〇年調査の外國に在る獨逸國船舶人口	相原 重政 [統集] 四六	二七	
一九〇〇年自由聯合市ブレームン人口調査の結果評論篇緒言	相原 重政 [統集] 四六	二七	
一八九五年獨逸國職業調査結果の編製に於ける諸分類の原則	相原 重政 [統集] 四九	二〇	
一九〇七年獨逸國職業及營業調査の計畫及組織	高橋 二郎 [統集] 四〇	三九	
一九〇〇年獨逸帝國人口調査の結果に於ける所帯に依て分ちたる人口	相原 重政 [統集] 四三	三三六	
獨逸國勢に關する統計資料	田中鐵三郎 [統集] 六二	三九二	

【人口統計】 【清國】 【震災】

匈牙利國人口調査法	相原 重政〔統集〕四三	二五
一八九五年索遜王國人口調査法	相原 重政〔統集〕四三	二六
瑞西國死亡統計材料徵集法	相原 重政〔統集〕四三	二七
式	相原 重政〔統集〕四三	二七
勃國疾患統計材料徵集法に就て	相原 重政〔統集〕四三	二七
一九〇〇年匈牙利國人口調査職業別人口に就て	相原 重政〔統集〕四三	二七
諸國に於ける男女兩性の割合	相原 重政〔統集〕四三	二七
合	相原 重政〔統集〕四三	二七
奧地利國人口動態統計材料徵集法	相原 重政〔統集〕四三	二七
瑞西國人口調査法	相原 重政〔統集〕四三	二七
一八九〇年葡萄牙王國及屬島人口調査法令規定	相原 重政〔統集〕四三	二七
佛伊人口動態調査の原票	相原 重政〔統集〕四三	二七
一九〇七年希臘國詮査斯の結果	相原 重政〔統集〕四三	二七
埃及國最新國勢調査概況	相原 重政〔統集〕四三	二七

【清國】 支那を見よ

【震災】(大正十二年) 参照 火災保險。地震。東京。

震災善後策の批評	高城仙次郎〔法研〕六三	二	三一
震災の教訓と復興問題	山本美越乃〔經叢〕六三	一七	五
大正の大地震に對する國民的反省及對策	神戸 正雄〔時經〕六三	一	一四
災後の一所感	奥田 大造〔會計〕六三	一三	六
震災と我國國際關係	河野 恒吉〔國知〕六三	三	二〇
震災と移民問題	赤松 祐之〔國知〕六三	三	二一
大震災の國際的觀察	泉 哲〔國知〕六三	三	二二
大震災と國際平和の促進	内ヶ崎作三郎〔國知〕六三	三	二二
災禍の教訓	河田 嗣郎〔エコ〕六三	一	二三
國の大難に當面して	小川市太郎〔エコ〕六三	一	二三
震災善後策	阪谷 芳郎〔エコ〕六三	一	二三
震災と外交及び軍隊	建部 遜吾〔外時〕六三	一	二三
震災後の軍縮論批判	三宅覺太郎〔外時〕六三	一	二三
震災の朝鮮人に及したる影響を憂ふ	上田貞次郎〔外時〕六三	一	二三
大震災の原因並に結果に就て	大澤 眞吉〔新聞〕六三	一	二三
救護の緩急	播磨 龍城〔新聞〕六三	一	二三
今秋の大災事	荒木 櫻洲〔新聞〕六三	一	二三

【震災】

變災と動亂	小泉 信三〔財經〕六二	二	二四
災後の一週年に際して	石川 文吾〔國經〕六三	三	三七
關東震災の對策と經濟生活の様式	竹島富三郎〔商經〕六三	一	三三
大震災の損害額計算に就て	古館市太郎〔計理〕六三	一	一七
震災地人口調査の施行	寺田 四郎〔新聞〕六三	一	三六
桑港大火災と關東大震災の比較	松崎 壽〔銀研〕六三	三	三
帝都復興及商工業復興の金融對策	平野 清〔銀研〕六三	三	三
震災金融に直面して	松崎 壽〔銀研〕六三	三	三
復興資金の財源	勝田 貞次〔銀研〕六三	五	三
財界循環より觀たる震災財界の前途	星野 行則〔銀叢〕六三	一	五
震災後の復興と金融問題	山口竹太郎	一	五
災害と金融	吉田眞一	一	五
佐々木剛之助	松島 喜作〔銀叢〕六三	一	五
災害防禦と銀行業務	神戸 正雄〔銀叢〕六三	一	五
復興と外債問題批判	橋本 喜作〔銀叢〕六三	一	五
復興と外債輸入論	細矢 祐治〔銀研〕六三	一	五
震災金融の諸問題			
經濟復興金融の理論と實際			

復興事業と不動産金融	松崎 壽〔銀研〕六三	六	一
震災と銀行文書	藤城 敬二〔銀研〕六三	六	一
金融循環より見たる震災財界の前途	遠山 貞一〔銀研〕六三	六	一
日銀發行制度改善と復興資金	松崎 壽〔銀研〕六三	六	一
大震災と金融問題	杉 程次郎〔新報〕六三	二	二
震災前後に於ける金融界の變化と其後の趨勢	山室 宗文〔銀叢〕六三	三	三
經濟復興資金の融通に就て	堀江 觀吉〔銀叢〕六三	二	三
商工業者に對する復興資金復興と通貨	堀江 歸一〔エコ〕六三	二	三
復興資金	播磨 龍城〔新聞〕六三	一	三
經 濟 問 題	播磨 龍城〔新聞〕六三	一	三
震災地に於ける生産減退程度調査			
震災による主要需要增加品及其生産業に對する影響			
震災の本邦對外貿易に及ぼす影響			
取引所の震災善後策	長永 義正〔財經〕六三	九	一〇
農村の被る震災の影響	河田 嗣郎〔エコ〕六三	一	一〇
大震災と保護預業務	栗栖 越夫〔銀研〕六三	五	一〇

震災経済観	河田 副郎〔経叢〕六三二	七	震災による失業労働者に関する調査	三邊 金藏〔財経〕六三二	九
復興事業と経済界の現況	河田 副郎〔経叢〕六三二	一七	大震災後の失業救済法	河津 忍〔社政〕六三二	一八
帝都復興と産業振興	神戶 正雄〔時経〕六三二	一七	震災後の失業救済	遊佐 敏彦〔社政〕六三二	一八
震災地と産業組合	大森 健作〔経叢〕六三二	一七	大震災に伴ふ失業問題	永井 亨〔社政〕六三二	一八
震災に関する會計問題	原口 亮平〔會計〕六三二	一七	大震災と社会思想	永井 亨〔社政〕六三二	一八
大正癸亥の關東大震災と即今當來の會計問題	中村 茂男〔會計〕六三二	一七	大震災と社会思想	永井 亨〔社政〕六三二	一八
大震災と支那防穀令の解禁	細谷 清〔外時〕六三二	一七	大震災と社会的復興	田澤 義輔〔社政〕六三二	一八
桑港大火災關東大震災と國際商業	寺田 四郎〔國際〕六三二	一七	震災と公徳心	友枝 高彦〔社政〕六三二	一八
震災と本邦纖維工業	高橋 龜吉〔マル〕六三二	一七	震災と社会思想と反動思想	播磨 龍城〔新聞〕六三二	一八
復興對策としての資本主義復興景氣論の一節	丹羽 豊〔銀叢〕六三二	一七	震災時に於ける社会心理の考察	森戸 辰男〔我等〕六三二	一八
實例引用震火災損失填補論	川村 環一〔計理〕六三二	一七	震災後の犯罪現象に関する統計的概観	蠟山 政道〔我等〕六三二	一八
震災に依る喪失無記名國債證券の再交付	樋貝 詮三〔新聞〕六三二	一七	帝都復興事業と社会政策	小野清一郎〔國家〕六三二	一八
大災後の商業狀態及政策概観	細矢 祐治〔商事〕六三二	一七	バラック建築及び鉛板に關する調査	菊池 慎三〔社政〕六三二	一八
財政問題	井上準之助〔エユ〕六三二	一七	假小屋建設問題に就て	伊藤 政行〔財経〕六三二	一八
大天災と財経對策	成瀬 義春〔財経〕六三二	一七	焼け跡の假小屋問題	坂 芳市〔新聞〕六三二	一八
復興財源にあり	山本 貞作〔會計〕六三二	一七	假小屋と火災保險問題	牧野 英一〔志林〕六三二	一八
震災に伴ふ稅務の諸問題	小川郷太郎〔経叢〕六三二	一七	人間生活の基調とバラック	西本辰之助〔法研〕六三二	一八
失業問題					

問題	布施 辰治〔辯協〕六三二	二六	帝都復興と京濱兩港の使命	寺島 成信〔エロ〕六三二	二
バラック移轉料問題	布施 辰治〔法公〕六三二	二六	復興と宣傳	成瀬 義春〔財経〕六三二	二
復興事業と經濟界の現況	河田 副郎〔経叢〕六三二	一七	帝都復興計畫の概要	宮武 貫一〔法治〕六三二	二
震災の教訓と復興問題	山本美越乃〔経叢〕六三二	一七	理想と實際との一致(特に復興計畫に就きての考察)	神戶 正雄〔時経〕六三二	一八
帝都復興の根本問題	河津 暹〔會計〕六三二	一七	復興私案	小宮三保松〔新聞〕六三二	一八
帝都復興に關する若干の考察	神戶 正雄〔時経〕六三二	一七	復興に對する覺悟	播磨 龍城〔新聞〕六三二	一八
復興事業の國家的意義	河田 副郎〔エロ〕六三二	一七	帝國の復興と帝都の復興	後藤 新平〔新聞〕六三二	一八
帝都復興事業の難關	堀江 歸一〔エロ〕六三二	一七	帝都復興計畫に就て	佐野 利器〔新聞〕六三二	一八
民間の復興事業を盛ならしめる道	堀江 歸一〔エロ〕六三二	一七	震災と法律問題	中治 武二〔同論〕六三二	一八
復興事業と私人の活躍	堀江 歸一〔エロ〕六三二	一七	這次の災厄と法律思想の改造	牧野 英一〔社政〕六三二	一八
復興景氣の來否如何	片岡 直温〔エロ〕六三二	一七	大震災と司法	不破 清警〔新聞〕六三二	一八
復興事業と財経對策	小川市太郎〔エロ〕六三二	一八	震災に因る家屋滅失後の借地借家の關係	梶田 年〔法曹〕六三二	一八
帝都復興の眞意義	播磨 龍城〔新聞〕六三二	一八	震災と現行法の缺陷	男 健之助〔新聞〕六三二	一八
復興に就ての一端	播磨 龍城〔新聞〕六三二	一八	凶災に直面して(民事政策的考察、震災事件の處理)	寺崎 勝治〔法政〕六三二	一八
復興と人心の轉換	播磨 龍城〔新聞〕六三二	一八	大震災と調停和解	藤沼藤七郎〔法曹〕六三二	一八
復興策	松倉慶三郎〔新聞〕六三二	一八	大震災と借地借家調停法	穂積 重遠〔法協〕六三二	一八
復興に伴ふ社會施設と社會立法の必要	早田 正雄〔法政〕六三二	一八	保 險	參照 火災保險	
帝都復興計畫の批判	神戶 正雄〔銀叢〕六三二	一八	震火災と海上保險者の責任	中山秀治郎〔國經〕六三二	一八
復興は東京市自ら之に當れ	小川市太郎〔エロ〕六三二	一八	震災に關する生命保險統計	竹下 清松〔保雜〕六三二	一八

【震災】 【震災保険】 【親子】 【シンジケート】 【人事訴訟手続】 【神社】

震災に關する生命保険統計 鈴木 敏一〔保雜〕六三二八 三〇二
震災に關する生命保険統計 與石丑太郎〔保雜〕六三二八 三〇二
震災に關する生命保険統計 土肥棍太郎〔保雜〕六三二八 三〇二

【震災保險】

震災保險論 神戸 正雄〔日經〕四三二五 二
震災保險の國營 片山 義勝〔保評〕六三二七 二
地震保險と其實行難 志田 鈞太郎〔エコ〕六三二二 二

【親子】

改正民法草案中親子の分限に關する規定に就て 片山 國嘉〔法協〕四二一六 五
「ロシア」革命と親子法 穂積 重遠〔法協〕六二〇三九 一三
親子の結合に就て 戸田 貞三〔社雜〕六二四一 一七

【シンジケート】

石炭シンジケート論 鹽田 環〔國家〕四四二六 七二
獨逸石炭シンジケート 松岡 均平〔國家〕六二二七 三七

【人事訴訟手続】

受訴裁判所の裁判長か人事

訴訟法の規定に従ひ無能力者の爲に選任したる代理人の性質を論ず 松岡 義正〔志林〕四三三
人事訴訟事件と裁判所の訴訟代理人選任に就て 中野 悌治〔新聞〕四三六 二九三
相續人廢除請求に關する意思無能力者の訴訟能力 中島 常松〔新聞〕四三九 三六三
親族會の決議に對する不服の訴に就て 飯島 喬平〔法協〕四四〇 二五

人事訴訟に關する司法上の疑義

無能力と人事訴訟 三橋 久美〔法協〕四四〇 二五
人事訴訟手続法に於ける別訴禁止主義 淺野 豊三郎〔新聞〕四四〇 一四四

臺灣に於ける人事訴訟手續 山田 正三〔法叢〕六二〇 五
離婚訴訟繫屬中に於ける妻の姦通被告事件と夫の上訴 後藤和佐二〔臺法〕六二一 六

人事訴訟と檢事を相手方と爲す訴に就て 林 頼三郎〔新報〕六三三 四
人事に關する訴訟に就て 山口 直〔法新〕六二一 二三
野村調太郎〔朝司〕六一四 四 七一九

【神社】

參照 榮記。

社寺領の觀念

神社の國法上の性質

神社祭祀の意義

徳川時代に於ける寺社境内の私法的性質

神社は宗教か(講演)

神社行政の原理

武家時代の神道概観

神社救貧制度の一例

竹内金太郎〔法協〕四四九 七
織田 萬〔志林〕四四〇 九

山田新一郎〔國家〕六四二九 七
中田 薫〔國家〕六五三〇 二

高島 新峰〔法政〕六二〇一 八
建部 遜吾〔日社〕六二〇八 三五

山本 信哉〔法政〕六四三三 一
黒正 巖〔經叢〕六五三三 二

【人種改良】

優生學を見よ

【人種問題】

參照 移民。國際關係。國民主義。國民性。種民。民族。猶太人。

マークス・ニーツエ氏の

日本禍論

ライトゲン教授の黃禍批評

世界に於ける白人種植民地

發展論

法律上に於ける日本人種

所謂人種問題とは何ぞ

日本人種今後の榮枯盛衰

國家問題と人種問題

津村 秀松〔國經〕四三九 一
瀧本 美夫〔國經〕四三九 一

津村 秀松〔國經〕四四〇 二
澤田 俊三〔新聞〕四四〇 一

高橋 作衛〔外時〕四四〇 二
河上 肇〔日經〕四四〇 八

戸田 海市〔志林〕四四〇 三
八一九

外人排斥論

歐洲列國の異人種同化能力の優劣と其の理由

人種の衝突と日本人の天職

亞細亞人移住は世界問題

歐洲大戰後と人種問題

稲田周之助氏「人種問題」を讀む

人種競争(講演)

人種競争(講演)

人種競争(講演)

Human conflicts and the Position of Japan

亞細亞洲に於ける蒙古人種

以外の人種

人種問題解決の緊要

人種差別撤廢否決に就て

人種差別の可否

脅威されつゝある日本民族

黒人大會を聯想して

白蘭の自個悲觀説(講演)

黃白人種の將來

人種問題の究極

蜷川 新〔國際〕六二二 九

蜷川 新〔國際〕六三二 六

添田 壽一〔日社〕六三一 四
平沼 淑郎〔外時〕六三二〇 二三四

稲田周之助〔新報〕六五二六 五
吉野 作造〔國家〕六五三〇 二

米田庄太郎〔日社〕六六五 一
新見 吉治〔日社〕六六五 一

今村 新吉〔日社〕六六五 一
添田 壽一〔國家〕六七三 八

矢野 貫城〔亞經〕六七二 四
神川 彦松〔外時〕六八二九 三四〇

米田 實〔外時〕六八二九 三四九
高橋 作衛〔國際〕六八一七 七

松本 重敏〔新聞〕六八一 一五四
下村 宏〔外時〕六九三 一

福井 盛太〔辯協〕六〇二 五
今井 時郎〔日社〕六〇九 一

田中萃一郎〔外時〕六〇三 四
稻垣 守克〔國聯〕六一二 五

【神社】 【人種改良】 【人種問題】

【人種問題】 【信書】 【ジンスバーク】 【人生】

人種的憎悪を論じて人種混
合に及ぶ
人種問題の過去及び将来
加州問題を論じて人種問題
に及ぶ
日本國民の世界に對する二
大主張
黒人の現状と獨立の新運動
シオン運動に就て
カピチュレションの沿革
回々教の人種包容性
有色人種に激して東京に大
會議を開け
「人種平等案」と劣等の烙印
排日問題と人種平等の論理
人種問題の極限と擴大
人種學的社會學說
ジエネローヴ議定書問題と
移民問題
色の衝突と選ばれたる民
人種争闘に就て
色の世界
世界聯邦の人種開争

稲垣 守克〔國聯〕六一 二卷 六號
稲田周之助〔外時〕六一 三六 四三三
赤松 祐之〔國聯〕六一 二
川島信太郎〔國際〕六二 三
新井 誠夫〔國知〕六二 三
矢内原忠雄〔經論〕六二 二
塚本 毅〔國經〕六二 三五 六
大久保幸次〔外時〕六二 三七 四四五
上杉 慎吉〔新聞〕六三 一 三三六
伊藤 正徳〔財經〕六三 一 九一〇
岡本 剛〔外時〕六三 四〇 四〇九
稻垣 守克〔國知〕六三 四 八一九
久保 榮三〔社雜〕六四 一 一九
宇佐美珍彦〔國知〕六四 五 一一
松井 等〔外時〕六四 四 四九三
三並 良〔外時〕六四 四 四九四
松原 一雄〔外時〕六四 四 五〇五
小松 紇〔外時〕六五 四 五一一

南米の移民及人種問題

【信書】

信書の秘密
行政法規中の一疑義(信書
の秘密)
信書の保護
信書の秘密
郵便信書の不可侵問題

竹島 雄三〔國知〕六五 六 四
二上 兵治〔法協〕四九 二四 四一五
山内 正瞭〔志林〕四〇 九 九
佐々木惣一〔京法〕六二 八 六
加藤 正治〔新報〕六三 二四 四
長岡 春一〔外時〕六五 二四 二八〇

【ジンスバーク】 (Morris Ginsberg)

ジンスバーク「總體意思の
概念」(譯)

新明 正道〔我等〕六二 二五 六八

【人生】

經濟學は應用せられたる人
生學の結果
人生の意義及び價值
生命の起源
人生の補償作用
人格主義の立場に於ける經

歲市 利美〔統集〕四七 一 一七六
川合 貞一〔三學〕四三 三 一六
藤森 達三〔國國〕六六 五 四
市村 光惠〔法論〕六七 一 二二

濟と人生の一考察
エドワード・カーペンター
の文明及人生觀
藝術と藝術的的人生觀
カトリックの人生觀と社會
思想
人生觀の改築と國家觀念の
展開
社會政策の人生觀とその觀
念的基礎
自然と人生

【人 性】

人性と恐怖主義
人性の深化
經濟學理の基調としての人
性考察
社會改良と人性論
正統派經濟學に於ける人間
性論
スマスに於ける「人間性」
の歴史性、階級性

石川 興二〔經叢〕六九 一〇 四六號
井藤 半彌〔商研〕六〇 一
大山 善男〔我等〕六一 二
石田 憲次〔同論〕六二 一
本莊 可宗〔國知〕六三 四 三八
永井 亨〔社政〕六五 一 一六六
江原 萬里〔經論〕六五 四 一六六
新明 正道〔我等〕六一 四 七
紀平 正美〔外時〕六二 三七 四三六
東 晋太郎〔國經〕六二 三六 三三四
島田 久吉〔三學〕六二 二〇 二
古屋 美貞〔同論〕六五 一 一九
住谷 悦治〔同論〕六五 一 二〇

【親 族】

親族及相續編論評
大寶令の親族法
男子女子
佛國民法の變革親族法上の
諸問題
最新の親族法
女人の地位
露國の親族法及相續法
親族關係と社會組織
親族法の改造と現代的家族
制度
新ロシアの親族法相續法
日本親族法の特質
米國加州親族法釋義
エックスタインの「日本親
族法論」
身分論
尊屬及卑屬の名稱に就て
親族に就て
身分及方式に就て

參照見。戸主及び家族。
婚姻。親權。親子。親族
會。扶養義務。
石山 彌平〔新報〕四一 八 九二
池邊 義象〔京法〕四九 一 一六一
ルイブリデル〔法協〕四四 二六 五
ルイブリデル〔法協〕四四 二七 二
穂積 重遠〔志林〕四四 二 三
岡村 司〔志林〕四四 二 四
穂積 重遠〔法協〕四四 二九 九一
野村兼太郎〔三學〕六〇 一五 一
磯谷幸次郎〔志林〕六〇 二二 三
穂積 重遠〔國知〕六二 三 九
山口 弘一〔商研〕六四 五 二
岩本 英夫〔法政〕六四 二二 二
中川善之助〔國家〕六五 四〇 五
大塚勝太郎〔法協〕四三 八 八
平島直太郎〔新聞〕四四 一 四
鈴木喜三郎〔法政〕四四 五 四
柳川 勝二〔法政〕四四 五 六

【人生】 【人性】 【親族】

【新聞紙】

商業教育と新聞紙	津村 秀松(國經) 四三 九卷 一號	新聞紙の發行停止を論ず	美濃部達吉(明學) 四九 一
新聞の起源	熊崎 良(國經) 四四 一〇 六	新聞紙編輯人發行人印刷人の責任	藤波 元雄(法記) 四九 一六 一
統計上より見たる新聞の廣告	川島金五郎(國家) 六二 二七 一〇	法律上より觀たる發賣禁止問題	美濃部達吉(國家) 四四 二三 八
新聞賣子の研究	横山 雅男(統集) 六三 一八 一	新聞紙に對する正誤權	織田 萬(京法) 四四 一四 一
新聞紙と社會教育	中村 桂(三學) 六三 一八 一	新聞紙の性質に關する東京地方裁判所の判決を讀む	横山勝太郎(辯協) 四四 二三 一三四
新聞賣子の調査	大山 郁夫(我等) 六九 二 一	新聞紙法上の檢事の差止め命令は何人に交付すべきか	巍 丘 生(新聞) 四四 二 一五九〇
新聞の起源	稻葉 幹一(社政) 六〇 一 一四	發賣禁止論	平出 修(新聞) 四四 一 一六〇七
英米のスクール・オブ・ジャーナリズム	關 末代策(法治) 六三 三 七九	新聞雜誌の摘發記事	戸水 寛人(刑評) 四四 二 一五
歐洲大陸の新聞研究	小野 秀雄(社雜) 六三 一 六	新聞條例違反に就て	薇 山(新聞) 四四 一 一六五三
新聞紙團に就いて	小野 秀雄(社雜) 六三 一 七	新聞雜誌重罰論に就て	横山勝太郎(辯協) 四四 一五 一五二
Journalismの類稿	吉井 外雄(社雜) 六三 一 八	新聞の虛偽の報道に對する民事責任	寺田 四郎(新聞) 六三 一 一四九七
新聞發達史	赤神 良讓(經商) 六三 三 八九	新聞紙に對する不法の發賣頒布禁止に就て	大澤 眞吉(辯協) 六五 二〇 七
白耳義の秘密新聞と政府の宣傳政策	松本秋太郎(法治) 六四 四 二二	新聞紙の發行禁止と其の違反	佐々木惣一(京法) 六五 二 一八
	小野 秀雄(社雜) 六四 一 二二	新聞紙の同一性の意義	佐々木惣一(新聞) 六五 一 一三二
	花井 卓藏(辯協) 四三 一 九二	新聞紙法第四二條の解釋	草野豹一郎(志林) 六〇 二三 三九
		滿洲に新聞紙法を適用し行政訴訟の途を開くべし	小野 實雄(新聞) 六二 一 二二六

【新聞紙】 (法)

新刑訴訟法と新聞記事
「新聞紙法に於ける名譽」
新聞紙法改正の論點

富岡 重雄(法新) 六三 一 卷 平六
野津三太郎(臺法) 六四 一 九 二
布施 辰治(辯協) 六四 二 元 二

【臣民】

參照||權利及び義務。自由。人權。

參政の權利及國民の義務	ラトゲン(國家) 四三 三 二五
請願權の由來	合川 正道(法協) 四四 九 二〇
臣民の權利と法規の廢止	平岡定太郎(新報) 四四 三 三〇
警察權の所有權に對する關係	可成樓主人(新報) 四四 三 三二
公權は人格權なり	穂積 八東(法協) 四四 二 一〇七
警察と臣民の權利	一木喜徳郎(國家) 四四 二 一〇七
公法上の義務の抵觸	一木喜徳郎(法協) 四四 二 一〇七
命令の區域と臣法第二〇六條	一木喜徳郎(國家) 四四 二 一〇七
臣民の權利	倉知 鐵吉(法政) 四四 一 七
公務論	方圓 學人(新報) 四四 一 七
憲法第二六條	一木喜徳郎(新報) 四四 一 七
	下村 宏(新報) 四四 二 二八

【新聞紙】【臣民】【シムメル】

エリネットク氏公權論の梗概	美濃部達吉(新報) 四三 一 九
憲法第三〇條の解釋に付て	菊地 駒次(新報) 四三 一 三
民法第二〇六條の所有權は公權に非ず	上杉 慎吉(新報) 四三 一 三
所有權と所有權を侵されざる自由權との區別	市村 光惠(新報) 四三 一 五
所有權の不可侵	美濃部達吉(法政) 四三 一 五
公權利の觀念	穂積 八東(新報) 四三 一 二
私人も國家の公權を行使す	木村 鋭一(志林) 四三 一 二
法により所得税を賦課せらるべきものに非ず	鳩山 一郎(辯協) 四三 一 三
學童隔離と米國憲法の保障	米田 實(國際) 四三 一 八
外國人は日本の官吏に任ず	美濃部達吉(國家) 四三 一 二
ことを得るや	山口 弘一(志林) 四三 一 九
人の説	乾 政彦(法協) 四三 一 九
肖像權	丸山 鶴吉(新聞) 四三 一 九
警察と人民	清水 澄(新聞) 四三 一 〇
訴願に就て	算 克彦(法協) 四三 一 〇
皇國臣民の本質	金森徳次郎(法政) 六〇 一 八
法律上の平等	

【シムメル】 (Georg Simmel, 1858-1918)

シムメルの貨幣官能價值論 山口正太郎(同論) 六〇 一 六

恒藤恭著「ジンメルの經濟哲學」
ジンメルの社會學と社會心理學との關係
ジンメルの Distanzlehre に就て

増井 光藏〔國經〕六二 三五 一
林 惠海〔社雜〕六三 一
林 惠海〔社雜〕六五 一三
參照：貸付金。貨幣。銀行。金融。公債。社債。農業信用。物價

【信用】

餘信論
信用制度と通貨の節約
信用と物價との關係を論ず
日本の信用低落
信用の物價に及ぼす影響に就て

松崎藏之助〔國經〕四二 二
山崎覺次郎〔國家〕三三 三
スプリング〔國家〕三九 二
有賀 長雄〔外時〕四〇 二二

就て
日本信用恢復の要件
國際信用復興問題
信用と物價
世界的物價騰貴に於ける金と信用
貨幣及び信用に關する數量
說に就きて
信用取引額の限度
興信事業に對する政策

佐野 善作〔國經〕四一 三
有賀 長雄〔外時〕四二 二九
堀江 歸一〔三學〕六二 一七
神戸 正雄〔京法〕六二 八
戸田 海市〔京法〕六二 八
飯島 幡司〔國經〕六三 一七
田中 榮〔國經〕六四 一九
石川 文吾〔國經〕六五 一九

内外與信制度の研究
戰爭と信用通貨並に財政工業長期信用論
流通貨幣の數量と信用
ヘンリー・ソントン紙券
信用論

山崎 繁樹〔三學〕六五 二〇 六七
堀江 歸一〔三學〕六七 三 五九
張田 藤吉〔商經〕六七 九
高城仙次郎〔三學〕六七 三 二〇

信用と物價との關係
銀行信用調査の科學的考察
國際間の通貨並に信用問題
信用貨幣の意義
利子歩合論上に於ける信用說

福田敬太郎〔國經〕六九 二八 四
松崎 壽〔商經〕六九 一 一七
勝田 貞次〔銀研〕六〇 一 二二三
堀江 歸一〔三學〕六〇 一五 二二
竹島富三郎〔商經〕六〇 一 二四

銀行の信用調査組織
國際信用設定策としてのタ
I・ミューラン案
信用貨幣の分類標準
仕上信用制度に就て
信用査定と經濟調査
信用調査と經濟調査
信用報告書に關する制裁法
信用と通貨と物價
獨逸に於ける銀行及信用組織發達の概要
歐洲復興と國際信用設定策

勝田 貞夫〔銀研〕六一 二二 一六
寺澤進一郎〔銀研〕六一 二 六
松崎 壽〔商經〕六一 一 二五
竹島富三郎〔商經〕六一 一 二五
草島定太郎〔銀研〕六一 三 一
木村秀太郎〔銀研〕六一 二 三
楠本英二郎〔銀研〕六一 二 一
木村秀太郎〔銀研〕六一 二 一
片倉藤次郎〔商事〕六三 四 一
住吉 四郎〔銀叢〕六三 一 一三
青地玄二郎〔商濟〕六三 一 三

ゼノア會議と通貨並に信用問題

平野 清〔國經〕六二 三五 八

信用の作用に就て
マインヤルの貨幣信用及貿易論

〔資料〕六三 九

信用制度と社會運動
信用國有論
對外信用の失墜と其原因
信用調査の基本事項
Confirmed Bankers Credits に就て

平野 清〔商經〕六二 一 三二
出井 盛之〔社政〕六三 一 四三
岩崎 靜也〔銀叢〕六三 三 一
池田 龍藏〔エコ〕六三 二 三
藤城 敬二〔銀研〕六三 七 二

信用バロメーターの意義と其作法

竹内 恕平〔銀研〕六三 十 四一五

ドウグラスイズムの意義
地方銀行と信用調査組織
ロイドの信用基礎と其史的考察

勝田 貞次〔銀研〕六三 七 五
土田 杏村〔銀叢〕六三 三 二六
藤城 敬二〔銀研〕六三 七 五

信用調査部の運用

瀬戸彌三三〔商經〕六三 三 五六

信用に就て

勝田 貞次〔銀研〕六三 七 六

信用調査事項に就て

村上康三郎〔計理〕六三 一 一五

米國に於ける信用調査課に就て

岡田 誠一〔會計〕六四 一七 二

信用受授と銀行の責任

岩崎 靜也〔銀叢〕六四 五 二

信用と通貨に關する一考察

佐々木駒之助〔銀叢〕六四 四 二
土方 成美〔經研〕六四 二 二

【信用】 【信用組合】

銀行の信用と其利益
吾國商業銀行に適當なる信用調査の方法

須佐美芳男〔銀研〕六四 八 四

我が貿易業と國際信用問題
信用の統制

江崎 一造〔銀叢〕六五 六 二二三
橋口 明男〔商濟〕六五 四 四
上坂 西三〔銀研〕六五 一〇 五

【信用組合】

信用組合論
信用組合の道德的效果
信用組合に就て
家産制度と信用組合
庶民銀行の設立
庶民銀行に就て
庶民銀行論
庶民銀行に就て
信用組合に「貸付金回収月別明細表」の備付を爲すことの提案
分業主義の高調と對信用組合策
既設信用組合を無視せる小
商工資金の融通
庶民銀行の本質とその問題
莫斯科人民銀行論

平田 東助〔國家〕四二 六 六
加納 久宜〔日經〕四四 〇 四
加納 久宜〔東經〕四四 一 五九
神戸 正雄〔日經〕六九 一〇 二
落水居逸人〔東經〕六三 六九 一七三
遠藤 白嶺〔東經〕六四 七 一八九
榎谷 益藏〔法政〕六八 一 二
岩崎 靜也〔銀叢〕六三 三 二

別明細表」の備付を爲す

奥田 大造〔會計〕六三 一五 六

分業主義の高調と對信用組合策

佐野 包治〔銀叢〕六三 三 六

既設信用組合を無視せる小

松崎伊三郎〔洋經〕六三 一 一〇四

商工資金の融通

小幡 清金〔都問〕六四 一 五

庶民銀行の本質とその問題

向井 俊郎〔金融〕六四 二 六八

莫斯科人民銀行論

向井 俊郎〔金融〕六四 二 六八

【信用組合】 【信用状】 【信用に對する罪】 【信用保險】 【心理學】

下層階級保護と庶民金融政策

松崎 壽〔社政〕六二五年 一巻 六五號

【信用状】

信用状に就て
 商事信用状を論ず
 銀行信用状の研究
 法律上より觀たる信用状
 信用状に就て
 信用状の法律關係
 銀行信用状の統一
 信用状の判決例
 巡回信用状及旅行小切手に就て
 信用状に關する獨逸銀行の協定
 英吉利に於ける信用状判決例
 信用状に就て
 信用毀損の行爲に付きては

竹田 省〔法叢〕六二〇 一五
 松永 義雄〔辯協〕六二二 二天 十二
 拘澤 信吉〔銀研〕六二二 三 一六
 佐々木周八〔新聞〕六二二 一〇八
 香匠谷誠一〔商事〕六二二 四 二
 竹田 省〔法叢〕六二二 九 四
 柄澤 信吉〔銀研〕六二二 四 四
 廣瀨圓一郎〔銀研〕六二二 七 二
 加藤 和根〔銀叢〕六二二 三 三
 濱野 壽〔銀研〕六二二 七 一
 廣瀨圓一郎〔銀研〕六二二 八 七
 伊藤 重次〔正義〕六二二 一 九
 一 二 二 六
 一 二 二 六

【信用に對する罪】

福富 一郎〔憲法〕六二二 一七 一〇號

損害賠償を爲さしむ可き者也

森 作太郎〔新聞〕四四四 一 七三

【信用保險】

會社員積立金と信用保險
 有價證券に對する信用保險
 信用保險に就て
 信用保險
 信用保險を論ず

高木 章〔洋經〕四四三 一 五七
 パゾ 一〔保評〕四四四 四 四二
 吉井 桃磨〔保評〕六三 七 七八
 森 莊三郎〔經學〕六九 一 一
 原島 義〔商事〕六二二 四 四

【心理學】 參照：社會心理。

法律學と心理學との關係
 心理學と法曹
 自然生命心理及社會の解説
 商工心理學
 心理學者の經濟學觀
 經濟心理學の組織的研究
 心理學に就て
 政治心理學の體系
 法律心理學の應用
 適材選定の心理學的實驗
 使用人採用問題と心理學

鶴澤 總明〔明法〕四四五 一 三五
 寺田 四郎〔辯協〕四四五 一 六五
 藤森 達三〔國圖〕六二五 四 九
 大野 辰見〔商經〕六二二 一 一〇
 山口正太郎〔國經〕六二二 三 五
 米田庄太郎〔經叢〕六二二 一 一五
 瀧本 誠一〔經叢〕六二二 一 一三
 稻田周之助〔新報〕六二二 九 六
 江木 衷〔辯協〕六二二 六 九
 高垣寅次郎〔商研〕六二二 一 一
 栗原 信一〔經商〕六二二 一 六

經濟行動と心理學
 心理學に於ける社會的事實の考察
 經濟生活に於ける心理學の應用
 社會學と心理學
 陳列窓の心理學的研究
 經濟學の前提を爲す哲心理學及社會學の諸條件は
 經濟學との關係
 宗教心理學に就て

【森林】

本邦古來森林制度の概略
 羅馬の森林所有權
 印度の林政と森林統計
 國有土地森林原野の下戻法に就て
 國有土地森林原野下戻法と拜領地
 森林組合設立の必要
 林業の利益計算に就て
 吉野の森林に就て

増田 惟茂〔社叢〕六二二 一 四
 水上森太郎〔法治〕六二二 四 二
 新明 正道〔我等〕六二二 七 二〇
 矢田 篤〔商工〕六二二 一 二
 井關 孝雄〔法政〕六二二 二 二
 岡村 貫一〔法政〕六二二 五 六
 金子堅太郎〔國家〕四二二 二 二〇
 太田 資時〔法協〕四二二 九 七
 藤井 正景〔統叢〕四二二 一 一〇
 篠田 治策〔新聞〕四二二 一 三三
 劍南 生〔新聞〕四二二 一 三三
 久米 金彌〔日經〕四二二 一 四
 川瀬善太郎〔國經〕四二二 二 三
 安藤 時雄〔日經〕四二二 一 五

都會附近の林業經濟
 水害と森林の關係
 林政の發展
 本邦森林の統計
 國有林施業案編成の目的
 日本產業發達の裏面(森林業)
 戰後世界の森林と露國の地位
 森林保險に關する研究
 山林伐採の取得税に就て
 北海道に於ける森林盜伐と其搬出前に於ける處分
 森林保險の實行に就て
 森林火災保險に就て
 林業労働の本質と其趨勢
 林業労働問題概観
 木材金融論
 岡山藩の林政
 食料増殖問題と林業政策

川瀬善太郎〔國經〕四二二 一 五
 川瀬善太郎〔日經〕四二二 八 一
 横井 時敬〔日經〕四二二 九 七
 相原 重政〔統集〕六二二 一 三五
 岡本英太郎〔日經〕六二二 三 三
 一知半解樓〔財經〕六二二 二 一
 〔資料〕六二二 四 四
 三浦 義道〔保叢〕六二二 一 七
 川瀬善太郎〔國家〕六二二 七 七
 岡田 庄作〔新報〕六二二 三 三
 三浦 義道〔新報〕六二二 九 一〇
 三浦 義道〔保叢〕六二二 一 二八
 武内彰一郎〔社政〕六二二 一 八
 武内彰一郎〔社政〕六二二 一 二〇
 福島 太一〔商經〕六二二 一 三五
 黒正 巖〔農經〕六二二 一 三
 山本美越乃〔經叢〕六二二 二 六

【心理學】 【森林】

ス部

【水産】

参照ニ漁業。

水産經濟研究の必要を論じて其基礎的要件に及ぶ
水産經濟上養殖及び蕃殖保護の必要を論ず
日本産業發達の裏面(水産業)

山本美越乃〔京法〕六〇七二
山本美越乃〔京法〕六二八五
一知半解樓〔財經〕六四二〇
〔財經〕六七五八
〔財經〕六七五〇
細矢 祐治〔銀研〕六一三六
山本美越乃〔經叢〕六四二〇

【水雷】

中立の觀念より機械(觸發)水雷の可否を論ず
國際法協會と水雷
水雷敷設の制限
現戰爭に於ける敷設水雷

小林伊太郎〔外時〕四三九
牧野 英一〔外時〕四四〇
中村 進午〔外時〕四四〇
立 作太郎〔國家〕六五三〇

【水利】

朝鮮に於ける水に就きて
諸威に於ける水力國有法
普國新水法典に就て
水に關する私法的不備を論ず
タービン水車の製作に就て
地と水利用の原理と其の實驗
輓近水利に關する立法の趨勢
世界經濟上に於ける石炭及水力
防水問題と舊藩時代慣行の效力
臺灣に於ける水利概況及び其發達原因
臺灣に於ける水利舊慣行と其現在

神戸 正雄〔日經〕四四八
神戸 正雄〔京法〕六〇七二
隣道 文藝〔京法〕六二八
有馬忠三郎〔辯協〕六四一九
田澤 昌孝〔財經〕六五三
森村扇四郎〔財經〕六六三
池田 宏〔京法〕六七二
〔資料〕六一八
播磨 龍城〔新聞〕六三
野間 海造〔農經〕六五二
野間 海造〔農經〕六五二
野間 海造〔農經〕六五二

【瑞西】

瑞西國死亡統計材料徵集法

式

瑞西國人口調査法

瑞西から

獨瑞保廠契約法

瑞西の穀物專賣計畫

瑞西の取引所及銀行

社

パーセル消費組合の發達

瑞西に於ける戰時食料品問題及食料品政策

瑞西に於ける勞働爭議仲裁制度

瑞西に於ける失業者保護施設

設

獨瑞保險契約法

瑞西市區建築計畫法

瑞西航空法

The characteristics of the Swiss Constitution

瑞西刑法一九一八年草案正文

相原 重政〔統集〕四六二
相原 重政〔統集〕四四〇
井口 孝親〔我等〕六一七
毛戸 勝元〔京法〕四四一
瀧本 美夫〔國經〕四四七
棗田 藤吉〔商經〕六六五
高野岩三郎〔國家〕四四三
武田 英一〔國經〕六六三
松岡 均平〔社政〕六一三
小林鐵太郎〔社政〕六三三
毛戸 勝元〔京法〕四四一
池田 宏〔京法〕六七三
森山武市郎〔國國〕六〇九
Borgeaud〔國家〕六〇三
〔志林〕六二二

瑞西聯邦憲法より見たる聯邦制度

邦制度

瑞西將來の民法に於ける婦人の地位を論ず

瑞西民法草案の相續法に就て

瑞西の新民法

瑞西民法

最新の親族法

瑞西民法(譯)

瑞西民法に就きて

瑞西民法に於ける妻の地位

スイス民法の家制

スウエーデン

瑞典に於ける外國人の法律上の地位

瑞典の政體

瑞典の勞働保險

瑞典の對露獨政策

瑞典の製鐵製鋼及採炭業

瑞典鐵礦

杉村章三郎〔法協〕六四四
木村誠次郎〔志林〕四三二
山内 四郎〔法協〕四三二
ラバンド〔法協〕四二六
ルイブリデル〔法協〕四二六
穂積 重遠〔志林〕四二二
辰巳 重範〔新報〕四二〇
岡村 司〔京法〕六〇七
岡村 司〔京法〕六〇七
岡村 司〔京法〕六〇七
穂積 重遠〔日社〕六七六
安達峰一郎〔法協〕四三二
佐藤丑次郎〔京法〕六二八
杉 琢磨〔國家〕六二七
重徳 來助〔外時〕六四三
〔資料〕六八五
〔資料〕六八五

【瑞典】【樞密院】【蘇士運河】【スエツチング・システム】【杉亨二】

スカンディナヴィア三國と
國際紛議平和的解決運動
瑞典の金排除政策
瑞典に於ける社會保險の現
狀
輸出促進施設としての「瑞
典貿易協會」
労働及び労働階級

寺田 四郎〔國際〕六〇二〇 年 卷 六
松崎 壽〔商經〕六三二 一 三二
森 莊三郎〔經論〕六三三 一
平井泰太郎〔國經〕六四三 二
労働及び労働階級—瑞典を見よ

蘇西運河の將來
蘇西運河條約
國際法に於ける蘇士運河
スエズ運河會社の財政
蘇西運河と巴拿馬運河
埃及保護國蘇士運河將來の
地位
蘇士運河近況
巴拿馬運河と蘇西運河
現戰爭に於ける蘇士運河

宮本平九郎〔外時〕四三五 四九
松原 一雄〔國際〕四三七 三
松原 一雄〔法政〕四三七 八 二
上田貞次郎〔國經〕四四九 五
天羽 英二〔國經〕六〇一 三 六
有賀 長雄〔外時〕六四二 二 四九
〔資料〕六五二 一
稻原 勝治〔外時〕六五三 二 七三
立 作太郎〔外時〕六五四 二 八八

【スエツチング・システム】苦行制度を見よ

【杉 亨 二】

本邦統計鼻祖法學博士杉先
生八旬壽延記事
杉亨二翁略傳及事蹟
杉亨二翁九十壽祝賀頌末と
翁の事蹟
名譽會員法學博士杉亨二君
を弔す
恩師杉法學博士を悼む

田中 太郎〔統集〕六六一 附録
田中 太郎〔統集〕六六一 二七九
田中 太郎〔統集〕六六一 四四二
花房直三郎〔統集〕六六一 四四三
横山 雅男〔統集〕六六一 四四二

【蘇士運河】

蘇西運河論

松波仁一郎〔國家〕四三二 二 二五

【樞密院】

英國樞密院
樞密顧問に關して
樞密院の違憲行爲
憲法違反と樞密顧問
樞密院論
樞密院と普通選舉制
憲法附屬法律草案に對する
樞密院の決議の效力
樞密院論

土方 專〔新報〕四三五 二
清水 澄〔國家〕四三三 三
松影 山人〔國圖〕六二一 七
松本 重敏〔新聞〕六九一 一七九
稻田周之助〔新報〕六三三 二
稻田周之助〔新報〕六三三 一〇
稻田周之助〔新報〕六四三 五
美濃部達吉〔國家〕六四三 二 三五

故杉先生を追想して
敬で杉恩師の靈に告ぐ
故杉博士と舊統計學校
故杉先生を追慕す
故社長柳樊齋杉先生を追憶
す

小島 運重〔統雜〕六七 一 三八三
横山 雅男〔統雜〕六七 一 三八三
横山 雅男〔統雜〕六七 一 三八三
鈴木 敬治〔統雜〕六七 一 三八三
花房直三郎〔統雜〕六七 一 三八三
篠崎 亮〔統雜〕六七 一 三八三
福田 忠昭〔統雜〕六七 一 三八三
河合 利安〔統雜〕六七 一 三八三
高野岩三郎〔國家〕六七三 一 三八三
佐藤 利正〔統雜〕六八一 三九

鳴呼杉先生
法學博士杉亨二先生
杉先師略傳
故杉亨二氏と本邦の統計學
我縣(山梨)の國勢調査と
杉先生
明治先覺の第一人(杉亨二
翁三年忌に於ける追憶)
杉博士を懷ふ

桑原 重矩〔統雜〕六八一 四〇四
三浦 實直〔統雜〕六九一 四一

【スコット】(William Robert Scott, 1868-)

近世初期の英國株式會社に
對するスコットの觀察

高木 壽一〔三學〕六二一 一 二

【蘇 蘭】

蘇格蘭四市法律の内容
蘇蘭に於ける決闘及び法律
蘇蘭法、羅馬法及佛蘭西法
との關係
スコットランド自治(獨立)
問題
【スタアリン】(Ivan V. Stalin, pseud. "Joseph
Vissarionovich Djughashvili")
レーニンと民族問題
スターリンの極東政策
獨逸新民事訴訟法に於ける
第一辯論期日
フリードリヒ・スタイン教
授逝く
民訴改革論の種々相(故ス
タイン教授の改革論)
竹井 廉〔法曹〕六五 四 三四
大日本帝國及び共法制の沿

スターリン〔法記〕四四一 10 四
齋藤常三郎〔法叢〕六二二 10 四
竹井 廉〔法曹〕六五 四 三四

【スタイン】(Lorenz von Stein, 1813-1890)

<p>革 スタイン氏統計約説 我憲法とシュタイン マルクスとスタイン マルクス社會學説の起源並 に之に對するヘーゲル、 フォイエールパツハ、シュ タイン及びブルードンの 影響 平井 新〔三學〕六四一九 三</p> <p>【スタウディングガー】 (Franz Stauning) 波多野 鼎〔同論〕六二一 三</p> <p>【スタムラー】 (Rudolf Stammeler, 1856-) 美濃部達吉〔法協〕六二二 一 シユタムラー氏の哲學的立 場及び社會學の根本思想 シユタムラー氏の法學 シユタムラー氏の法理學 スタムラーの法理學の根本 的知見 恒藤 恭〔法叢〕六八二 五</p>	<p>スタイン〔國家〕四二〇 年一 卷一 六七 膠古迂人〔統雜〕四四一 三〇六 佐々木惣一〔京法〕六二八 六 波多野 鼎〔我等〕六三六 五</p> <p>スタムラー「法律的變化の 原因」 スタムラーの「法律概念論」 の考察 スタムラーの法律理論論の 考察 シユタムラーの唯物史觀論 の考察 シユタムラー社會意欲の特 性 シユタムラーの社會哲學 スタムラーの近業 シユタムラーの社會概念 シユタムレル「法律哲學 論文講演集」及「法律哲 學練習」 シユタムラー教授のちかぞ ろ シユタムラーの無政府主義 論 シエームス・スチュアート</p> <p>恒藤 恭〔法叢〕六九二 一 恒藤 恭〔同論〕六九一 一 恒藤 恭〔同論〕六〇一 四 山口正太郎〔國經〕六〇三 六 林 廣吉〔法治〕六一一 四 中島 寛次〔社政〕六三一 三 鈴木 義男〔志林〕六三二 六 堀 眞琴〔國家〕六三二 六 田中耕太郎〔社科〕六四一 三 森山武市郎〔法治〕六四四 六 堀 眞琴〔社科〕六五二 五</p>
--	--

<p>の研究 James Stewart の人口論 【ステイルナー】 (Max Stirner, Pseud. f. Kaspar Schmidt, 1806-1856) ステイルナーの唯我論 ステイルナーの自我主義哲學 に於ける政治自由の認識 ステイルナーの「唯一者」 とエンゲルス 【ステインネス】 (Hugo Sinnes, 1870-1924) フウゴ・ステインネス 澤田 謙〔外時〕六二七 六 【ステフィンガー】 (Ludwig Stephinger) シユテフィンガーの經濟哲 學の解説 山口正太郎〔同論〕六〇一 五 【ステルンベルク】 (Theodor Sternberg, 1878-) 法律哲學の發達概観 Neue Lehre von der Verfa-</p>	<p>福田敬太郎〔國經〕六八七 一 柴田銀次郎〔國經〕六三二 四</p> <p>財部 靜治〔經叢〕六六五 五 村瀬武比古〔國國〕六〇九 八 森戸 辰男〔我等〕六五八 四</p> <p>澤田 謙〔外時〕六二七 六 山口正太郎〔同論〕六〇一 五</p> <p>ステルンベルク〔法協〕六四三 一〇</p>	<p>fung im Privatrecht Recht und Rechtsphilosophie der Völker der Kaukasus ステイルンベルクの國家と法 律 Liberalitätswille und clausula rebus sic stantibus Pachtsystem und Hypotheken- system Tod als Endigungsgrund des Schuldverhältnisses Freie Rechtsfindung und un- mittelbare Demokratie Theodor Sternberg Die Rechtsanwaltschaft bei dem Reichsgericht Sternberg</p> <p>Sternberg 〔法協〕六六三 八 Sternberg 〔法協〕六〇三 一〇 Sternberg 〔法協〕六二四 四 Sternberg 〔法研〕六二二 一 Sternberg 〔法協〕六三三 一 Sternberg 〔法研〕六三三 一 Sternberg 〔法研〕六三三 一 Sternberg 〔法研〕六四四 一</p> <p>潘 德 新〔法治〕六二二 二 Sternberg 〔法協〕六二四 四 Sternberg 〔法研〕六二二 一 Sternberg 〔法協〕六三三 一 Sternberg 〔法研〕六三三 一 Sternberg 〔法研〕六三三 一</p> <p>【ストオウエル卿】 (Lord Stowell (William Scott), 1745-1835) 英國海上法の創立者スト ウエル卿 寺田 四郎〔海法〕六〇一 五</p> <p>【ストツダード】 (Lothrop Stoddard i. e. Theodore Lothrop, 1883-) 七二三</p>
---	---	--

【ストツダード】【ストライキ】【ストルツマン】【ストロハール】【スペイン】【スベングラール】【スベンサー】【スベンス】【スポールディング】【スマアト】

戦後歐洲に於ける社會的階級 (ストツダード氏の著)

伊藤 久秋 (長集) 大五 七 四號

【ストライキ】 同盟罷工を見よ

【ストルツマン】 (Rudolf Stolzmann)

限界効力學說に對するシュトルツマンの批評

大森義太郎 (經論) 大三一 三

【ストロハール】 (Emil Strohal, 1844-1914)

逝けるストロハール教授 陣道 文藝 (京法) 大四 一〇 九

【スパン】 (Othmar Spann, 1878-)

スエバン先生を訪ふ 岩崎 卯一 (社雜) 大五一 三

【スピノ】 (Camillo Supino)

伊太利學者スピノ氏の價值 寺尾 隆一 (國經) 四四 一〇 二
スピノ人口論 大野 辰見 (商經) 大五一 三

【スペイン】 西班牙 (イスパニア) を見よ

【スベングラール】 (Oswald Spengler, 1880-)

スベングラールの社會主義觀 稻垣 守克 (社政) 大四 一 五七

【スベンサー】 (Herbert Spencer, 1820-1903)

ウオードのスベンサー批評 田邊 壽利 (社雜) 大三一 五九

【スベンス】 (Thomas Spence, 1750-1814)

農業社會主義者としてのスベンス

森戸 辰男 (我等) 大三 六 二
森戸 辰男 (我等) 大四 七 一

【スポールディング】 (William F. Spaulding)

倫敦金融と外國銀行支店 スポールディング (三學) 大ニ 七 二

【スマアト】 (William Smart, 1853-1915)

スマアト教授近況

河上 肇 (經叢) 大四 一 三

【スミス】 (Adam Smith, 1723-1790)

生涯及び著作

アダム・スミスの生涯と環境 河津 暹 (經論) 大三一 一

スミスの論著書簡及び傳記 本庄 榮治郎 (經叢) 大三一 八 一

スミスに關係ある私書 本庄 榮治郎 (經叢) 大三一 八 一

アダム・スミス關係圖書目録 高垣寅次郎 (商研) 大二三 一 一

アダム・スミス研究文獻集 三邊 金藏 (三學) 大二 一 七九 一〇

カールデールのアダムスミス論 高橋誠一郎 (社政) 大二 一 三五

アダム・スミス傳拾遺 河上 肇 (經叢) 大六 五 三

アダム・スミスの書簡一通 河上 肇 (經叢) 大二三 一 七 六

グラスゴー大學に於けるアダム・スミスの講義其出版の由來等 田崎 義介 (國經) 四四 一〇 五六

【スマアト】 【スミス】

的地位 アダム・スミスの生涯及其著作

アダム・スミスの生涯と其の著述

アダム・スミスの生涯

アダム・スミス誕生二百年

アダム・スミス年譜

スミスの名其生涯及其學說等を早く我國に傳へたる蘭文經濟書

スミスの生涯

スミスの環境と功績

古典學者と其批評家

アダム・スミス先生を中心としてカーコーデーの人と長崎の人

Adam Smith 以前

ケネーとアダム・スミス

アダム・スミスと我國の實業界

人としてのアダム・スミス (パジオット) 學 說

竹島富三郎 (商經) 大ニ 一 三二

武藤 長藏 (商濟) 大ニ 五 二

武藤 長藏 (商濟) 大ニ 四 二

高橋誠一郎 (三學) 大ニ 一 六 二 一四

久留間鯨造 (原雜) 大ニ 一 一

村松恒一郎 (商研) 大ニ 三 一

武藤 長藏 (經叢) 大ニ 一 八 一

本庄榮治郎 (經叢) 大ニ 一 八 一

小林丑三郎 (東經) 大ニ 八 五 二 三五

青木 孝義 (法政) 大ニ 三 三

中谷 芳邦 (長集) 大ニ 二 三 四

關 未代策 (經商) 大ニ 一 三 五

瀧本 誠一 (三學) 大ニ 二〇 六

神戸 正雄 (時經) 大ニ 一 二

黒川 芳藏 (同論) 大ニ 一 三 二

マルクスの不變可變資本と
 アダム・スミスの固定流
 通資本との關係に就ての
 研究
 アダム・スミスの貨幣學說
 スミスの交換起原論及土地
 と資本との別點に就て福
 田博士に教を乞ふ
 アダム・スミスと近世社會
 學
 アダム・スミスの「租税の
 原則」
 スミスの貨幣論と社會問題
 アダム・スミスの資本概念
 に就て
 アダム・スミスの自由貿易
 除外論
 「道徳的情操論」と「國富論」
 アダム・スミスと經濟學
 アダム・スミスの經濟學
 アダム・スミスの貿易論
 貨幣問題より見たるアダム
 スミス
 アダム・スミスの貨幣論

福田 徳三〔國經〕四四二	年卷六號
松崎 壽〔國經〕四四二	二四
寺尾 隆一〔新報〕四四三	二一三
松崎 壽〔國經〕四四五	二五
工藤 重義〔國家〕六七三	一六
榊田 民藏〔政治〕六八一	一
黒川 芳藏〔同論〕六〇一	四
堀江 歸一〔三學〕六二六	四
高橋誠一郎〔三學〕六二六	五
河合榮治郎〔國家〕六二六	四
關 未代策〔經濟〕六一一	二
小泉 信三〔財經〕六一〇	二
山崎覺次郎〔經濟〕六二二	二
黒川 芳藏〔同論〕六三一	一〇

アダム・スミスと利己心
 アダム・スミスの哲學思想
 アダム・スミスの理論經濟
 學體系に就て
 スミスの根本思想と東洋の
 學說
 アダム・スミスと其後の佛
 蘭西經濟學說
 アダム・スミスの理論經濟
 學概論
 アダム・スミス論補遺
 アダム・スミスの租税論
 アダム・スミスの商業に對
 する思想
 マーカントイズムとアダ
 ム・スミス
 アダム・スミスの「道徳情
 操論」に就て
 アダム・スミスの貨幣論
 アダム・スミスの自由主義
 に就て
 アダム・スミスの殖民政
 策
 スミスの對殖民政
 策
 スミスの殖民政
 策の由來と

長田 泰三〔經濟〕六二二	一
福田敬太郎〔國經〕六三三	六
松浦 要〔新報〕六三三	八
瀧本 誠一〔東經〕六二五	二三五
増井 幸雄〔三學〕六二一	七
小泉 信三〔三學〕六二一	七
小泉 信三〔三學〕六二一	七
堀江 歸一〔三學〕六二一	七
向井 鹿松〔三學〕六二一	七
高橋誠一郎〔三學〕六二一	七
川合 貞一〔三學〕六二一	七
氣賀 勘重〔三學〕六二一	七
濱田 恒一〔三學〕六二一	一〇
山内 正瞭〔商研〕六三三	三
山本美越乃〔經濟〕六三一	一

地位
 スミスの研究題目たりし富
 の諸相を覗く
 アダム・スミスの根本思想
 概観
 國富論に現はれた貨幣理論
 アダム・スミスの社會政策
 福田博士の「アダム・スミ
 ス論」
 杉村廣藏氏の「福田博士の
 アダム・スミス論」に答
 ふ
 スミスの租税原則
 スミスの公債論
 スミスの所謂「眞實の價格」
 について
 スミスの自然主義觀と自由
 政策の見地
 スミスの自由貿易觀
 スミスと浪漫派經濟學
 スミスの自由放任論の特徴
 スミスの價格論と分配論
 スミスの學說に關して福田
 博士の教を乞ふ

長田 三郎〔經濟〕六三三	年卷五號
竹内 謙二〔國家〕六三三	七
竹内 謙二〔國家〕六三三	二〇
谷口彌五郎〔金融〕六三一	二
伊東 乃〔社政〕六三一	一
杉村 廣藏〔商研〕六三三	三
福田 徳三〔國經〕六三三	五
神戸 正雄〔經濟〕六三三	一
小川郷太郎〔經濟〕六三三	一
河上 肇〔經濟〕六三三	一
河田 嗣郎〔經濟〕六三三	一
作田 莊一〔經濟〕六三三	一
山口正太郎〔經濟〕六三三	一
堀 經夫〔經濟〕六三三	一
谷口 吉彦〔經濟〕六三三	一
谷口 吉彦〔經濟〕六三三	一
谷口 吉彦〔經濟〕六三三	一

アダム・スミスの思想に於
 ける社會的自然律
 倫理思想家としてのアダム・
 スミス
 アダム・スミスのフイデオ
 クラート批評
 アダム・スミスの經濟政策
 アダム・スミスの觀たる貨
 幣理論
 アダム・スミスの財政論梗
 概
 アダム・スミスと結社禁止
 法
 アダム・スミスの體系なき
 體系
 厚生哲學の闘士としてのア
 ダム・スミス
 アダム・スミスの婦人論
 アダム・スミスの殖民地論
 矢内原教授の「アダム・ス
 ミスの殖民地論」を讀み
 て
 スミスの殖民地論について
 矢内原教授の教を乞ふ

高瀬莊太郎〔商研〕六三三	一
杉村 廣藏〔商研〕六三三	一
村松恒一郎〔商研〕六三三	一
上田貞次郎〔商研〕六三三	一
高恒寅次郎〔商研〕六三三	一
内池 廉吉〔商研〕六三三	一
猪谷 善一〔商研〕六三三	一
三浦 新七〔商研〕六三三	二
福田 徳三〔商研〕六三三	二
永井 亨〔社政〕六四一	五
矢内原忠雄〔經濟〕六四二	四
山本美越乃〔經濟〕六四二	四
長田 三郎〔經濟〕六四二	五

スミスの植民地論に關して
山本博士に答ふ
スミスの植民地觀に關して
再び矢内原教授に應ふ
スミスの植民地論につき矢
内原教授に答ふ
アダム・スミスの植民地觀
に對する争點
アダム・スミスの政治論
アダム・スミスと自由貿易
價 値 論
使用價值と交換價值との別
に關するアダム・スミス
の說に就て
アダム・スミスの價值論に
就いて
アダム・スミスの價值論に
就いて
アダム・スミスの價值論に
就て
マルタスのアダム・スミス
價值學說批評
アダム・スミスの價值論に
就て

矢内原忠雄〔經論〕六四 二
山本美越乃〔經叢〕六五 三
長田 三郎〔經叢〕六五 三
谷口彌五郎〔我等〕六五 八
高橋 信司〔同論〕六五 一
竹内 謙二〔社政〕六五 一
福田 徳三〔新報〕明登 二〇
河上 肇〔三學〕六二 七
加田 忠臣〔三學〕六八 三
三邊 金藏〔三學〕六〇 五
長谷田泰三〔經論〕六一 一
舞出長五郎〔經論〕六二 一

アダム・スミスの價值論中
に於ける難關に就て
スミスとコンジアックとの
價值說
道德的價值判斷に關するス
ミスの思想
アダム・スミスに於ける勞
働價值法則の妥當性に就
て
スミスとリカードの價值說
に就て
國 富 論
アダム・スミスの「富國論
及リカードの「國民經濟及
租稅原論」に關はれたる
社會政策的方面
アダム・スミスの「富國論」
に見はれたる社會階級觀
竹内法學士譯「富國論」
「道德的情操論」と「國富
論」
「諸國民の富」のダブリン
版について
「國富論」に現はれたるア

三龜 金藏〔三學〕六二 七
田島 錦治〔經叢〕六三 一
恒藤 恭〔經叢〕六三 一
森 耕二郎〔經叢〕六四 二〇
山口 茂〔商研〕六三 三
黒崎 幸吉〔國經〕六二 一
黒川 芳藏〔同論〕六九 一
河上 肇〔經叢〕六一 二
高橋誠一郎〔三學〕六一 五
河上 肇〔經叢〕六二 七

ダム・スミスの政治思想
と彼以後に於ける英國の
政治及び行政改革の基調
富國論の研究方法に就きて
國富論に現はれたる貨幣理
論

西洋經濟思想の渡日は國富
論出版の年を以て嚆矢と
なすが如し
國富論の研究
邦譯「國富論」題言
「國富論」以後
國富論と初期獨逸經濟學者

【スミスミルト】
Johann Peter Süssmilch, 1707-
1767
デユースミルヒの人口論

蠟山 政道〔國家〕六二 三
財部 靜治〔經叢〕六三 一
谷口彌五郎〔金融〕六三 一
竹内 謙二〔國家〕六三 八
竹内 謙二〔社研〕六四 一
高橋誠一郎〔三學〕六四 二
高橋誠一郎〔三學〕六四 九
町田義一郎〔三學〕六五 二
高野岩三郎〔原雜〕六三 一

七部

【セイ】【正貨】【生活】 1 (Jean Baptiste Say, 1767-1832)

ジャン・バプティスト・セイの財産論
セイの経済政策論
價值論より見たるセイの地位
セイの資本所得論

- 増井 幸雄〔三學〕六三二八卷二號
- 増井 幸雄〔三學〕六四一九八
- 増井 幸雄〔三學〕六四一九
- 増井 幸雄〔三學〕六五二〇六

【セイ】【正貨】【生活】 貨幣を見よ

【セイ】【正貨】【生活】 参照II家計。住宅問題。食糧生活費。生活標準。

英獨兩國労働者の生活状態
生活難と犯罪
生活難講究と軍備制限協商
「生活賃銀」の意義
生活材料の價格騰貴に就きて
流通生活の意義

- 堀江 歸一〔國經〕四二六五
- 花井 卓藏〔刑評〕四四三
- 莊田 秋村〔東經〕四五五
- 丸谷 喜市〔國經〕六二五
- 神戸 正雄〔京法〕六二七
- 福田 徳三〔國經〕六二二

生活難と出生率の減少(建部博士に答ふ)
經濟學上より觀たる動物の生活と人類の生活
我生活状態革新の急務
中・下級社會の生活問題
物價騰貴と生活難
國民生活の安定と米穀の官營
生活史料と國家の生存
國民生活の危機を救へ
生活調査を論ず(京都市小學校教員生計調査)
教育者の生活難
生活改善II食糧問題
佛國に於ける生計騰貴の原因及結果
生活安定充實策II消費組合論
俸給生活者の住宅難
生活の基點としての都會文化と地方文化
生活と營利

- 津村 秀松〔國經〕六二二四一
- 河上 肇〔三學〕六二七二
- 伊藤 欽哉〔財經〕六四二
- 石井 滿〔國國〕六六五
- 氣賀 勘重〔三學〕六七二
- 大場 茂馬〔法論〕六七二
- 矢野 貫城〔亞經〕六七二
- 小林丑三郎〔財經〕六八六
- 汐見 三郎〔經叢〕六九二
- 高橋 正熊〔社政〕六九二
- 山本兼太郎〔財經〕六〇八
- 長岡保太郎〔社政〕六〇一
- 志立鐵次郎〔財經〕六〇八
- 深海 豐二〔社政〕六〇一
- 長谷川萬次郎〔我等〕六一四
- 大野 辰見〔國經〕六一三

現代に於ける生活恢復の要求

求
生活と乖離した「歴史」及「歴史的」事實
生活の機械化の「天才崇拜」の迷信
三味の生活
生活安定の要求と事實
文化生活と統計
生活の進化と意識の進化
群居生活と共存生活
消費體系の生活心理
生産體系の生活心理
家族的な生活者と非家族的な生活者
生活難緩和の手段
學校卒業生の就職難と生活難
世相を見て精神的生活を論ず

- 長谷川萬次郎〔我等〕六一四
- 大山 郁夫〔我等〕六一四
- 椎尾 辨匡〔法政〕六二二
- 恒藤 恭〔我等〕六二五
- 横山 雅男〔統維〕六三二
- 長谷川萬次郎〔我等〕六三二
- 稲垣 守克〔法政〕六三三
- 長谷川萬次郎〔我等〕六三六
- 戸田 貞三〔社政〕六四一
- 永富守之助〔エウ〕六四三
- 田中 貢〔社研〕六四一
- 河崎義三郎〔法公〕六五三

我家の生活費
貧民生活費の統計的研究
生活費の向上に就て
食物の改良と生活費の節約
歐洲各國に於ける生活費の高加に對する防止策
最近の物價騰貴と生計費
戰時に於ける英國の生計費
物價と生計費との關係に對する誤解に就て
賃金と生活費
米國の労働問題と生活費
生活費變動の測定
生活費の組織的研究の必要
生活費の昂上と労働者
米國に行はるる新らしき生活費節減方法
生計費研究法を論ず
米國に於ける一家五口の最少生活費調査
伯林最近の生活費
生計費調査と賃銀
シカゴ印刷工賃金調節の要因としての生活費

- 出谷 山人〔統集〕四二四
- 河上 肇〔日經〕四二二
- 河合 眞一〔國經〕六二二
- 莊田平五郎〔財經〕六四二
- 山本美越乃〔經叢〕六五二
- 五十嵐保司〔國經〕六六二
- 鈴木 彌直〔統集〕六六一
- 高城仙次郎〔三學〕六七二
- 舞出長五郎〔國家〕六八三
- 糸井 靖之〔國家〕六八三
- 山本美越乃〔經叢〕六九二
- 田川大吉郎〔洋經〕六九二
- 島崎 一郎〔社政〕六〇一
- 森本 厚吉〔經叢〕六〇二
- 山本美越乃〔經叢〕六〇三
- 汐見 三郎〔經叢〕六〇三
- 柴田銀次郎〔國經〕六一三
- 水上鐵治郎〔社政〕六一一

【生活費】 【生活標準】 【請願令】 【生産】

最近に於ける生活費騰貴の状況
 伊藤 文吉〔財經〕六二九 九號

卸賣と小賣値段と生活費との關係
 松岡 尚義〔社政〕六一一 一九

最高生活費問題
 布川 靜淵〔東經〕六一八四 二〇〇

最近に於ける日用品小賣價格に就て
 山崎 英雄〔商叢〕六三二 一

本邦に於ける官公吏教員及會社員の生計費
 柳原 平八〔統集〕六四一 二二〇

【生活標準】
 參照II書修。生活費。節約。實

最近獨逸に於ける生活の標準
 〔社政〕六一一 二四

國際社會問題としての生活標準
 綾川 武治〔外時〕六一二 五九 六〇 六一

國際的に見たる生活標準問題
 〔資料〕六一四 二一七

國際的生活標準論争論
 綾川 武治〔外時〕六一五 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

【請願令】
 馬場 鎮一〔國國〕六六五 六

請願令に就て
 請願令を讀む
 請願令に就て
 内大臣府及請願令

【生産】
 參照II企業。競争。資本。私有財產。報酬漸減。

生産に於ける進化
 不生産者の統計
 土地の生産力に就て
 生産理論
 消費と生産
 地代は全然生産費に含蓄せられざる乎
 經濟史上生産要素の效果に異同ある所以を論し併せて朝鮮開發問題に及ぶ
 ビュツヒヤー大量生産の法則

獨逸に於ける近世的大量生産の實例
 英國生産調査
 英國生産調査法
 生産消費統計の調査に就て

清水 澄〔法政〕六六一 二
 石山 彌平〔辯協〕六六二 四
 織田 萬〔京法〕六六二 五
 稻田周之助〔新報〕六六二 七
 田尻稻次郎〔國家〕四七 八
 T・T 生〔統集〕四九 一
 横井 時雄〔國家〕四六 一七
 神戶 正雄〔國家〕四六 一七
 馬場 鎮一〔明學〕四八 一
 山崎覺次郎〔國家〕四九 二〇
 松崎藏之助〔法協〕四九 二八
 坂西 由藏〔國經〕四四 一〇
 高木 二郎〔國經〕四九 一三
 高野岩三郎〔統集〕六一 一
 吳 文聰〔統集〕六三 一
 横山 雅男〔統集〕六三 一

収益と生産費との關係。
 商業は生産なりや
 生産の改良と販路の擴張
 生産物の分配階級を論じて
 其賃價に及ぶ
 相原重政著最近本邦生産統

計序
 クラーク教授の生産力説を難す
 生産政策か分配政策か
 生産利益と消費利益の衝突
 マルクスの唯物史觀に所謂生産の意義
 生産政策としての社會主義
 現時の企業狀態と限界生産力説
 生産と分配
 製造浪費の測定と生産標準の設定
 生産と營利の觀念に就て
 (附福田博士の公企業論に關する疑問)
 Marshall on the relation between economic rent

河上 肇〔經叢〕六四一 四號
 飯島 幡司〔國經〕六四一九 六
 阪田 貞一〔財經〕六五三 一〇
 村本 福松〔商經〕六六一 五六
 花房直三郎〔統集〕六六一 四三
 五音廣順次郎〔國經〕六六三 二一三
 河上 肇〔經叢〕六七六 五
 河田 嗣郎〔經叢〕六八九 四
 河上 肇〔經叢〕六八九 一
 河上 肇〔經叢〕六八八 一
 山口正太郎〔國經〕六八二 七
 手塚 壽郎〔國經〕六九二 九
 岡野 正平〔商經〕六九一 二
 瀨谷佐次郎〔同論〕六九一 三

and the marginal expenses of production
 生産指數に就て
 社會主義による生産の増減如何
 生産要素の生産上の位置と分配上の Zurechnung
 生産技術の歴史觀
 生産費と市價
 功利主義と生産政策
 The influence of so-called marginal rent upon the marginal expenses of production
 Buchanan 〔三學〕六一一 二六
 Buchanan 〔三學〕六一一 二六
 Buchanan 〔三學〕六一一 二六

ボルハルト「資本家的生産の意義」(譯)
 非人間化したる生産過程
 大減費から大増産へ
 資本主義的生産組織の真相
 勞働生産力と勞賃
 所有の道德より生産の道德へ
 會計眼に映ずる資本主義的生産の運命
 震災地に於ける生産力減退

高橋 正熊〔社政〕六〇一 九
 松浦 要〔新報〕六一〇 二二
 赤松 要〔國經〕六一三 三
 常松 三郎〔財經〕六一三 九
 堀 經夫〔經叢〕六一三 九
 水谷長三郎〔我等〕六一一 四
 出井 盛之〔我等〕六一一 四
 小林丑三郎〔經商〕六一一 四
 河上 肇〔社問〕六一一 四
 森 耕二郎〔經叢〕六一三 七
 長谷川萬次郎〔我等〕六一三 五
 中村 武男〔經商〕六一二 二

【生産】

【生産】【生産組合】

程度調査	〔資料〕六二九	九	二〇
震災による主要需要増加品 及其生産業に對する影響	〔資料〕六二九	九	二〇
唯物史觀に於ける「生産」 及「生産方法」(未定稿)	榎田 民藏〔原雜〕六二一	一	
生産手段に關する所有權の 睡眠	河上 肇〔社問〕六二一	四	
唯物史觀の公式に於ける「生 産」の意義 (榎田民藏君 が發表された論文紹介)	河上 肇〔社問〕六二一	四	
ローザ・ルクセンブルク「資 本主義社會に於ける再生 産の問題」(譯)	久留間 敏造〔原バ〕六二一	二	
生産的及び不生産的なる語 に就て	榎本 鎮治〔三學〕六二一	八七三	
社會と自然との平衡關係と 「生産力」	伊藤 秀一〔三學〕六二一	八	
生産體系と消費の體系	長谷川 萬太郎〔我等〕六二一	六	
生産者の市場制御に就て	村本 福松〔商經〕六二一	三	
Johnson "Pure theory of utility curves" Zlotoff "Note on the mathematical theory of Production" に就て	渡邊 孫一郎〔商研〕六二一	三	

世界生産體系の變遷に關す るバルフスの解釋	細川 嘉六〔原雜〕六二四	三	
失業と生産過剰	安積 十太夫〔統集〕六二四	一	
生産消費の均衡に關する論 争	増井 幸雄〔三學〕六二四	一九	
機械生産の創生と其必然性 に關するシスモンディ説	猪谷 善一〔商研〕六二四	五	
ダヴィット「有機的生產と 機械的生產」	東畑 精一〔農經〕六二四	一	
農商工に於ける純富の生産 に就て	那須 皓〔農經〕六二四	一	
生産曲線に關する研究	八木 高次〔勞科〕六二四	二	
本邦關稅沿革と其生産業に 及ぼしたる影響	生松 淨〔經研〕六二五	三	
生産要素論	大野 辰見〔商經〕六二五	一	
社會法學派の生産論	中川 新吾〔商經〕六二五	一	
效用生産説の一例	谷口 彌五郎〔我等〕六二五	八	
資本主義及資本主義的生產 方法	中川 新吾〔商經〕六二五	一	
〔生産組合〕			
丁抹國の生産組合	矢作 榮藏〔日經〕六二〇	一	
勞働者生産組合	上田 貞次郎〔商研〕六二〇	一	

【製】【絲】

生絲貿易と製絲業者	瀧 臺水〔東經〕六一七	一四	
滿洲の作蠶製絲業と單寧材 料	白仁 武〔東經〕六一七	一八	
群馬縣の製絲業	河田 嗣郎〔經叢〕六一五	一	
福島山形二縣の製絲業	河田 嗣郎〔經叢〕六一五	二	
製糸金融論	荒木 秀一〔銀研〕六一〇	一	
製糸女工とスウェツティン グ・システム	藤井 悌〔社政〕六一〇	一〇	
製糸女工登録制度及工銀 製糸資金論	柱 阜〔社政〕六一〇	一三	
我國製糸女工供給組合に關 する調査	太田 義繁〔銀研〕六一五	一	
本邦製糸業労働事情	山上 辨藏〔社政〕六一二	一	
産業社會の進化と産業組合	柱 阜〔社政〕六一三	一	
製糸の變遷	早川 直瀨〔國經〕六二四	三	
製糸工業企業形態論	早川 直瀨〔國經〕六二四	三	
製糸業組織の改造	早川 直瀨〔國經〕六二四	三	
〔政治〕			
參照 政治學。政治教育。政體。 政黨。選舉。選舉權。統 治。婦人參政權。內閣。 民主主義。	神戶 正雄〔時經〕六一五	一	

(尙各國名にて「政治」の項を見よ)			
大寶令の政府組織	辰巳 小次郎〔國家〕六一〇	一	
ハイン氏英國代議制度の由 來略説(譯)	合川 正道〔國家〕六一二	二	
維新前後政況の觀察(講演)	渡邊 洪基〔國家〕六一三	四	
政權論	黑田 長成〔國家〕六一四	五	
民約論の始祖	山石 政文〔新報〕六一〇	七	
法令萬能主義の空想	小川 平吉〔明法〕六一三	一	
モンテスキューの三權分立 論	市村 光惠〔内外〕六一六	二	
英國政策と佛國政策との比 較一斑	高橋 作衛〔新報〕六一三	三	
政黨政治の原動力	一木 喜徳郎〔法協〕六一三	二	
權力分立論一斑	美濃部 達吉〔新報〕六一七	二	
自由主義に基ける政治組織 を論ず	佐藤 丑次郎〔京法〕六一九	一	
立憲政下の三政治(大權政 治、議院内閣政治、議院 政治)	穂積 八東〔法協〕六一九	二	
三權分立	佐々木 惣一〔新報〕六一七	二	
佛國に於ける政教分離問題 の政治的觀察	小野 探吉平次〔國家〕六一〇	二	
コーン教授の官僚政治論	青木 得三〔國家〕六一〇	二	
憲政の基礎	牧野 賤男〔辯協〕六一〇	二	

【製絲】【政治】

保護と政治道徳（講演） 丹羽 筑山〔東經〕四一五八—四七二

政治方針革新の緊急を論ず 土田政次郎〔東經〕四一五七—四九七

英國代議制度の發達 美濃部達吉〔國家〕四一三三—三三

上院對下院 水野鍊太郎〔國家〕四一三三—一

金力と兵力 有賀 長雄〔外時〕四一三二—二

立憲政治の發達を論ず 仁保 龜松〔京法〕四一四九—九

官僚政治 上杉 慎吉〔法協〕四一三七—九

今期議會に反照したる立意 佐々木惣一〔京法〕四一四四—四

思想の進歩と退歩 獨逸帝國に於ける宰相責任 問題の政治的觀察 小野塚善平次〔法協〕四一三七—七

實業界の屬僚政治 福田 德三〔日經〕四一四六—一

支那に於ける政治說 淺井 虎夫〔京法〕四一四七—二

政權分配の經濟制度變移に伴ふ所以を論じて陪審制度に及ぶ 平沼 淑郎〔法協〕四一四二—二

英國風の政黨の武士道 穂積 八東〔法協〕四一三八—一

「レフエレンダム」に就て 上杉 慎吉〔國家〕四一三五—三

社會道徳と議會政治 莊田 秋村〔東經〕四一四一—五

政治組織の變遷 井上 密〔京法〕四一三七—三

日本の立憲政治に對するラートゲン教授の批評 美濃部達吉〔新報〕四一四三—一

個人の精力と國家政治問題の解決 莊田 秋村〔東經〕四一四一—三

獨逸に於ける最近の立憲政況 小野塚善平次〔法協〕四一五三〇—七

政治上及社會上の腐敗（講演） 添田 壽一〔國家〕六二二七—一

政治家の徳操 井本 常治〔國家〕六二二一—一

日本の國是と世界の大勢 小山 東助〔國家〕六二二一—一

政界所感 鶴澤 總明〔國家〕六二二一—一

憲政乎僚政乎 鶴澤 總明〔國家〕六二二一—一

政社とは何ぞや 佐々木惣一〔志林〕六二二五—〇

政黨内閣論 平澤 均治〔辯協〕六二二七—一

憲政擁護と政治確信 鶴澤 總明〔國家〕六二二一—一

政變の將來 鶴澤 總明〔國家〕六二二一—一

井上博士の「憲政の實現と建國の大義」を評す 松影 山人〔國家〕六二二一—一

外交内政共に一段の工夫を要す 鶴澤 總明〔國家〕六二二一—〇

政黨政治に關する英國名士の評論 水野鍊太郎〔國家〕六二二七—三

山縣公と立憲政治 松影 山人〔國家〕六二二一—一

帝國憲法と政黨政治 美濃部達吉〔國家〕六二二一—一

革新的運動の意義 關 和知〔國家〕六二二一—二

日本政治史上公議輿論の意義 稻田周之助〔新報〕六二二三—三

現代歐洲之憲政 佐藤丑次郎〔京法〕六二二八—七

政治家の本領 志立鐵次郎〔財經〕六三一—二

憲政と外交との關係 信夫 淳平〔外時〕六三一—二

學生と政治運動 福田 德三〔國家〕六三二—三

代議政治と直接民主政治 占部百太郎〔三學〕六三八—四

大隈内閣の成立と憲政の趨向 鶴澤 總明〔國家〕六三二—五

北條氏の雄大政策を憶ふ 王 山〔洋經〕六三一—六

文化改新の社會上經濟上並に思想上の意義 田崎 仁義〔國經〕六三七—三

民約説と米國の州權 穂積 陳重〔國家〕六二二七—五

施政方針の實行其如何 鶴澤 總明〔國家〕六三二—六

政治と生活 三浦鐵太郎〔國家〕六三二—九

現代政治の理想 安田與四郎〔日經〕六三二—九

官吏としての黨人 市村 光惠〔京法〕六三二—二

大隈内閣の態度 吉川 義章〔國家〕六三二—二

政治と法律 志賀和多利〔辯協〕六三二—八

政界の不穩と青年の長所 尾崎 行雄〔國家〕六三二—六

大正政治の發展的觀察 鶴澤 總明〔國家〕六三二—二

政界革新の繼續戰 鶴澤 總明〔國家〕六三二—四

アリストトールの革命論 植原悦二郎〔國家〕六三二—四

政治道徳 植原悦二郎〔國家〕六三二—四

憲政逆轉論 市村 光惠〔京法〕六四〇—二

輿論政治と行政 村田岩次郎〔三學〕六四九—二

代議政治の論理 石橋 湛山〔洋經〕六四一—七

憲政と選舉 植原悦二郎〔國家〕六四三—三

憲法政治の運用 添田 壽一〔國家〕六四三—八

憲政史上の三大汚點 石田仁太郎〔新聞〕六四三—一〇

低級なる政治思想 新井要太郎〔辯協〕六四三—九

政治家と時運の進歩 鶴澤 總明〔國家〕六四三—八

我政事家と歐米の政治家 植原悦二郎〔國家〕六四三—三

政戰大本觀 鶴澤 總明〔國家〕六四三—三

政道の根本は統一に在て破壊に非ず 鶴澤 總明〔國家〕六四三—二

大正四年と政教 三浦 周行〔國經〕六四三—一

徳政の研究 重德 來助〔外時〕六四三—二

議院政治と戰時 松田 義雄〔國家〕六四三—三

政治と學生 稻田周之助〔新報〕六四三—八

婦女の參政權及び政治運動 上杉 慎吉〔法協〕六四三—九

續民意論 中田 薫〔國家〕六四三—五

徳政の起源に就て 小林丑三郎〔新報〕六四三—五

物興の好機及國策 市村教授「憲政逆轉論」を讀む 吉野 作造〔國家〕六四三—一

立憲政治の基本觀念 宮路 貞一〔國家〕六四三—一〇

大隈内閣の憲法法律違背に就て 石山 彌平〔辯協〕六五二—〇

立憲内閣とは何ぞや 松本 重敏〔新聞〕六五二—七

我憲政の本義	上杉 慎吉〔志林〕大五二八	大戦役中及び講和會議中に現はれたる政治思想	稲田周之助〔新報〕大八元
政教の一致を論ず	天野 弘一〔辯協〕大六二二	大戦以後に發現せる新政治思想	牧野 義智〔國國〕大八七
平民政治家の議會觀	布施 辰治〔新聞〕大六二二	足利時代の徳政	三浦 周行〔國經〕大八二
憲法政治に對する防長人士の責任	江木 衷〔新聞〕大六二二	參政権とデモクラシー	松本 重敏〔新聞〕大八一
政論の批判と政治の二大要義	佐藤丑次郎〔法論〕大六一	社會的變動と政治的組織	大山 郁夫〔我等〕大八一
非政府論	不破 清警〔新聞〕大六一	東洋の經濟思想と荒政	小島 憲〔國國〕大八一
少數黨の政黨内閣論	松本 重敏〔新聞〕大六一	合議制漸く專制化する	新井要太郎〔辯協〕大九二
憲政濟美のクーデター	江木 衷〔新聞〕大六一	專制の推移	有賀 成可〔辯協〕大九二
官僚的とは何の意ぞや	市村 光恵〔法論〕大六一	「無政府」と「獨裁」	長谷川萬次郎〔我等〕大九二
戰時統制の問題	森戸 辰男〔國家〕大七三	政治現象としての自由平等	佐々 弘雄〔國家〕大九三
自由民政及永久平和（カントの學說を評す）	稲田周之助〔新報〕大七二	我が現代政治に於ける世界的傾向	長谷川萬次郎〔我等〕大九二
「ラッセル」の政治的理想	關 正雄〔國家〕大八三	實際政治に於ける自由主義と干渉主義	長谷川萬次郎〔我等〕大九二
現代議院政治の試金石	大山 郁夫〔我等〕大八一	最近外交並内治の重要事項に關する質問	高橋 作衛〔國際〕大九一
戰時及平時に於ける政府統制	森戸 辰男〔國家〕大八三	スチルナーの自我主義哲學	村瀬武比古〔國國〕大九一
我憲政の回顧と展望	吉野 作造〔我等〕大八一	に於ける政治自由の認識	占部百太郎〔三學〕大九一
憲政と民論	平澤 均治〔辯協〕大八三	恐嚇政治とロベスピエール	財部 靜治〔商經〕大九一
日本に於ける代議政體の發達	宮岡恒次郎〔辯協〕大八三	管掌分屬の弊は官僚に限るや	
近代政治を支配せる二大思潮	今村 勝〔新聞〕大八一		

思想問題と經濟問題との關係	稲田周之助〔新報〕大〇三	内閣對議會關係の考察	高木 信威〔新報〕大二三
労働運動、政治運動、教育運動	高橋 正熊〔社政〕大〇一	「政治的正義」と「人口論」	津田 誠一〔三學〕大二一
我國に於ける二重政府の問題	吉野 作造〔財經〕大〇八	農民と政治	神戸 正雄〔時經〕大二一
内政と外交	建部 遜吾〔外時〕大〇三	日本の政治	村瀬武比古〔法治〕大二二
幕府政治を論じて社會政策の根本問題に及ぶ	奥野 彦六〔社政〕大〇一	政治的社會	村瀬武比古〔法治〕大二二
君主主義と民主主義との調和	市村 光恵〔法叢〕大〇五	社會群の鬭争と其政治的意義	大山 郁夫〔我等〕大二二
高等政治と批判哲學	村瀬武比古〔國國〕大〇九	國家の滅亡と政體の變更	泉 哲〔國際〕大二三
ブライースに於ける政治的服従の原理	安澤喜一郎〔法治〕大一一	國際日本の政治及經濟	岡 實〔國知〕大二三
バラード氏著「日本海上政權史論」を讀みて	水野 廣徳〔國家〕大二三	デ・レオンの政治行動論	青野 季吉〔マル〕大二三
議會と政府	不破 清警〔新聞〕大二一	政權の授受と司法權の濫用	播磨 龍城〔新聞〕大二三
政治に於ける革新作用	村瀬武比古〔法治〕大二一	護憲と元老會議	播磨 龍城〔新聞〕大二三
マルクス説に於ける社會的	河上 肇〔社問〕大二一	我國の政治運動	永井 亨〔社政〕大二三
革命と政治的革新	田中幸一郎〔法研〕大二一	政治思想史上憲法發布前	板倉 卓造〔法研〕大二三
社會學者の政治研究	長谷川萬次郎〔我等〕大二一	憲政の發達と國家の隆盛	大塚 春富〔辯協〕大二三
政治的行動と社會的行動	村瀬武比古〔法治〕大三一	現代政治に於ける物質的基礎を論じ進で方法論に及ぶ	潘 德 新〔法治〕大二三
政治に於けるプラトニズムの公算	村瀬武比古〔法治〕大三一	政治的論理と政治的事實	村瀬武比古〔法治〕大二三
		政治的機構の本質と其限界	長谷川萬次郎〔我等〕大二三
		我國に於ける政治概念の類型的發展	蠟山 政道〔國家〕大三元
		政治の概念について	戸澤 鐵彦〔國家〕大三元
		外國の政變と我國	神戸 正雄〔時經〕大三一

【政治】

ラスキ「主権と聯邦主義並に主権と中央集権主義」
國體概念と政治思想
創造的政治及外交の基礎
無産階級政治運動
羅馬共和政治の滅亡
多數者政治に於ける二つの根本的現象
多數決の原理
普選實施後の政治果して如何

- 淺野 正一〔法叢〕六三二 五號
- 永井 亨〔社政〕六三三 四
- 大島 高精〔外時〕六三三 四六
- 湊 不三男〔財經〕六三二 一三
- 高橋誠一郎〔三學〕六四九 一〇
- 高橋 清吾〔社政〕六四一 五九
- 松本 重敏〔法新〕六四一 五四
- 布施 辰治〔辯協〕六四二 九
- 戸澤 鐵彦〔法集〕六四一 一
- 山田 陸穂〔外時〕六四二 五〇
- 村瀬武比古〔法治〕六四四 一
- 佐原 六郎〔法研〕六四四 三
- 小林丑三郎〔經商〕六四四 八
- 矢野 仁一〔外時〕六四四 四八
- 高橋 清吾〔早政〕六四一 二
- 山田止才三〔國家〕六四三 三
- 船田 中〔法政〕六四三 二五
- 猪谷 善一〔商研〕六四三 二
- 稻田周之助〔新報〕六四三 八

権限ある機關
モンテスキューの Les principes des Gouvernements の觀念に就て
無産階級の政治運動と法律家
政治科學及び政治の概念に就て
政治の本質に就て
易經哲學と政治の基準
リード「リジョンの政治組織」(譯)
政客心理と金貨氣質
政治史進行より觀たる歐洲國境の新訂
我國の現政界と「ドイツエ・イデオロギイ」
「大正維新」の標語に就いて
政治行動と現代的運動
政治組織の成立過程と我が憲法
憲政改革と柳樞の改版

- 稻田周之助〔新報〕六四三 八
- 松平 齊光〔法協〕六四三 六
- 布施 辰治〔辯協〕六四二 九
- 高橋 清吾〔早政〕六四一 一
- 戸澤 鐵彦〔國家〕六四〇 三
- 村瀬武比古〔政經〕六五一 一
- 弓家 七郎〔都問〕六五二 五
- 播磨 龍城〔新聞〕六五一 二五
- 奥平 武彦〔國家〕六五〇 二三
- 大山 郁夫〔我等〕六五 八
- 西 雅雄〔マル〕六五 四
- 長谷川萬太郎〔我等〕六五 八
- 高橋 清吾〔社政〕六五 一
- 岡田朝太郎〔早法〕六五 一

【政治學】

進化説と政治學
政治學上の一問題
政治學の系統
政治教育と政治學
ルソーの懺悔録を讀む
民約説の先驅
政治學の必要
行政學の範圍及政治學との限界
山鹿素行の民政論
希臘人及羅馬人の政治思想
政治心理學上より觀たる國

- 和田恒謙三〔國家〕三二二 二
- 金井 延〔法協〕三二二 一
- 小野 喜平次〔國家〕三二二 一
- 小野 喜平次〔國家〕三二二 一
- 岡村 司〔内外〕三二二 一
- 上杉 慎吉〔法協〕三二二 九
- 上野 貞正〔法政〕三二二 二
- 一木喜徳郎〔國家〕三二二 二
- 田崎 義介〔國經〕三二二 二
- 津島 壽一〔國家〕三二二 二

參照 外交。革命。議會。共產主義。行政。經濟學。警察。憲法。國際關係。國有。國家。財產。裁判所。司法。社會學。社會主義。自由。植民地。政治。政黨。選舉。選舉權。選舉法。租稅。地方行政。帝國主義。統治權。內閣。比例代表。封建制度。婦人參政權。民主主義。無政府主義。ユートピア。

家
ブートミーと其政治學說
露西亞に於ける政治學說の系統
支那に於ける政治學說の系統
政治學上に於ける進化論の價值
政治心理學の體系
トオマス・ホッブスの政治哲學に見はれたる經濟學說
東洋政治思想の史的研究
マインシリオの政治哲學
プラトン以前の政治學的要素
古代支那人の政治思想
政治學改造の必要ありや
古代ヘブル民族の政治思想
羅馬に於ける希臘思想の體系と其政治思想
ギリシャ思想の體系とその政治思想の内容
政治哲學の中心問題

- 稻田周之助〔新報〕六四二 二
- 小野 喜平次〔國家〕六四二 一
- 稻田周之助〔新報〕六四二 二
- 稻田周之助〔新報〕六四二 七
- 高橋誠一郎〔三學〕六四一 三
- 石田秀治郎〔政治〕六四一 二
- 村瀬武比古〔國體〕六四一 一〇
- 村瀬武比古〔國體〕六四一 二
- 稻田周之助〔法政〕六四一 七
- 稻田周之助〔新報〕六四一 〇
- 今中 次麿〔同論〕六四一 三
- 今中 次麿〔同論〕六四一 二
- 今中 次麿〔同論〕六四一 一
- 村瀬武比古〔國體〕六四一 九

【政治學】

最近六十年間英國政治學說の一斑

政治學史上より觀たるブルンチユリー氏の學說

トルストイの政治學的的地位

カルビンの政治思想

政治哲學の前提

絕對理想主義的政治哲學

ラスキの政治哲學

Politicalologyの創唱

カントの政治思想

政治哲學に於ける義務觀念の逆理を論ず

政治哲學認識の基礎

政治思想の哲學的研究

アリストテレスの政治學研究

多元的社會觀の政治學的價值

現代の社會的諸傾向と政治學との交渉

政治學の性質及範圍

政治學に於ける社會學的要素

財部	靜治	〔商經〕	大九	一
森	凱雄	〔國家〕	大〇	九
佐々	弘雄	〔國家〕	大〇	三五
今中	大磨	〔同論〕	大〇	一
今中	大磨	〔同論〕	大〇	一
村瀨	武比古	〔國家〕	大〇	九
村瀨	武比古	〔國家〕	大〇	九
柄倉	正一	〔我等〕	大〇	三
弓家	七郎	〔法政〕	大二	一
鹽見	清	〔同論〕	大二	一
今中	大磨	〔同論〕	大二	一
村瀨	武比古	〔法政〕	大二	一
村瀨	武比古	〔法政〕	大二	一
佐藤	克己	〔法政〕	大二	一
戸澤	鐵彦	〔國家〕	大二	三
鐵山	政道	〔志林〕	大二	四
大山	郁夫	〔我等〕	大二	四
山崎	又次郎	〔法研〕	大二	二

素

「國富論」に現はれたるアダム・スミスの政治思想と彼以後に於ける英國の政治及び行政改革の基調

政治學研究の前提としてのその可能性と獨自性に對する一考察

政治學の基礎概念

ジャン・ボーダンの政治思想

虞夏書に見はれたる政治經濟思想

政治現象の本質

政治學史上のマキアヴェリとホッブス

佐藤信淵の政治學說

古代漢族の政治思想

マキアヴェリの政治思想と德義觀念とに就て

宗教改革期政治學說上のチユードル王制

明治初期政治學參考文獻概

大山	郁夫	〔我等〕	大二	五
鐵山	政道	〔國家〕	大二	七
戸澤	鐵彦	〔國家〕	大二	七
淺野	正一	〔法政〕	大二	二
今中	大磨	〔同論〕	大二	一
松平	齋光	〔法政〕	大二	二
田島	錦治	〔經叢〕	大二	一
恒藤	恭	〔經叢〕	大二	一
島田	久吉	〔法研〕	大二	四
内田	繁隆	〔早政〕	大二	一
朝倉	子規男	〔臺法〕	大二	一
朝日	融溪	〔社雜〕	大二	一
榎	智雄	〔法研〕	大二	四

文化科學としての政治學の方法論

大學としての政治學經濟學の過去を顧みて政治經濟學部の使命に及ぶ

商書周書に見はれたる政治經濟思想

政治科學及び政治の概念について

第十三世紀英國の政治思想

グリーンの政治哲學

明治初期政治學關係文獻解題

アダム・スミスの政治論

【政治教育】

政治教育と政治學

政治と教育

政治教育

哲人主義の政治教育 講演

我國に眞の政治教育なし

政治教育と學校

吉野	作造	〔國家〕	大四	三
横田	喜三郎	〔國家〕	大四	三
高田	早苗	〔早政〕	大四	一
田島	錦治	〔經叢〕	大四	二
高橋	清吾	〔早政〕	大四	一
横	智雄	〔三學〕	大五	二
金子	鷹之助	〔企社〕	大五	一
吉野	作造	〔國家〕	大五	四
高橋	信司	〔同論〕	大五	一
小野	源喜平次	〔國家〕	明五	一
鶴澤	總明	〔國家〕	大二	一
佐藤	丑次郎	〔京法〕	大二	八
北	吟吉	〔日社〕	大四	三
布施	辰治	〔新聞〕	大六	一
佐藤	丑次郎	〔法叢〕	大八	一

總選舉からの政治教育的收穫

政治學校の近況

【聖書】

【精神病】

二個の注意すべき精神病件

精神病者と新刑法

精神病性人格と刑法

精神病性人格に就て

精神病的中間者の處分

歐米の精神病者監致手續

精神障害の分界點

精神病者の取扱

精神病と感化事業

社會現象としての精神病

精神病的的變徵

精神病的的變徵

精神病及び神經衰弱は如何にして治療せらる乎

我國に於ける精神病者の現

大山	郁夫	〔我等〕	大九	二
堀	眞琴	〔國家〕	大四	三
牧野	英一	〔法協〕	明四	二
吳	秀三	〔刑評〕	明四	一
片山	國嘉	〔刑評〕	明四	二
齋藤	玉男	〔刑評〕	明四	二
小山	溫	〔刑評〕	明四	二
齋藤	紀一	〔刑評〕	明四	二
井村	忠介	〔刑評〕	明四	三
齊藤	紀一	〔刑評〕	明四	三
片山	國嘉	〔刑評〕	明四	三
杉江	薰	〔刑評〕	明四	三
花井	卓藏	〔新報〕	大三	二
花井	卓藏	〔新報〕	大三	二
諸岡	存	〔法論〕	大七	一

【精神病】【性相學】【生存權】【政體】

況(講演) 中村 隆治 [日社] 大八 七 一三

犯罪精神病者の處遇に就て 杉江 薫 [法政] 大八 一六 一
精神病者としての犯人 瀧川 幸辰 [法政] 大八 二八 一九
刑事政策と精神病者 福島 一郎 [新聞] 六〇 一 一八六
犯罪の原因と腦の缺陷 芥川 信 [法曹] 六四 三 一
精神病醫及神經病醫會 北島 與吉 [法曹] 六五 四 六

【性相學】

性相學上の刑罰を論ず 播磨 龍城 [明學] 四二 一 一三
性相學上犯罪及び刑罰觀 播磨 龍城 [新聞] 四四 一 一七九
骨相に關する學說 寺田 精一 [志林] 四三 三 四
コウム氏著松軒翁譯性相學 原論之序 播磨 龍城 [辯協] 六六 二 六
性相學上臺灣統治論 播磨 龍城 [新聞] 六〇 一 一七九

【生存權】

價值哲學より觀たる生存權論 左右田喜一郎 [國經] 六七 二 五
生存權と自殺權 高橋誠一郎 [三學] 六〇 一 一五
生存權論小解 大野 辰見 [商經] 六一 一 二八
生存の道德 長谷川萬太郎 [我等] 六一 四 二二

生存權 生存權の概念の法律的適用に就て 牧野 英一 [志林] 六三 三 七
生存權對人口法則の問題 牧野 英一 [志林] 六二 二 五
生存權と恩給制度 南亮三郎 [國經] 六四 三 八
新法律學の基調たる生存權を論ず 土方 成美 [經研] 六四 二 一
中根 四郎 [新聞] 六五 一 二五四

【政體】

政體の説(講演) 三浦 安 [國家] 四三 四 四五
歐洲立憲政體の名稱を我國に流用するは非なり 穂積 八東 [法協] 四三 八 七三
立憲政體の本旨 末岡 精一 [法協] 四五 一〇 八
立憲の要義 末岡 精一 [法協] 四二 一六 九〇
國家、國體及政體の觀念 川島 仟司 [法協] 四三 一七 一〇三
日本政體論 不須多樓主人 [新報] 四三 九 一〇五
英國代議制度の發達 穂積 八東 [明法] 四四 一 二六
第十九世紀に於ける代議政體の發達を論し其の將來に及ぶ 美濃部達吉 [國家] 四七 一 八 二〇三
レニング [法協] 四七 三 四一五
小野塚喜平次 [法協] 四六 三 九

立憲政下の三政治(大權政治、議院内閣政治、議院政治)

【政治】

君主制度の成立を論ず 穂積 八東 [法協] 四三 九 一
憲政の基礎 井上 密 [法政] 四四 〇 二 八
立憲國に統治權の總攬者ありや 牧野 賤男 [辯協] 四四 〇 二 二二
政體批判 市村 光惠 [京法] 四四 三 五
國體及政體 上杉 慎吉 [志林] 四三 三 九
政體と國體 上杉 慎吉 [法協] 四四 二 九
國家及政體 河上 肇 [京法] 四四 六 三
瑞典の政體 美濃部達吉 [國家] 六〇 二 六 八二〇
立憲政體と地方自治制度 佐藤丑次郎 [京法] 六二 八 一〇
帝國政體の基礎原則 植原悦二郎 [國體] 六三 二 三
立憲の眞義 美濃部達吉 [法協] 六六 三 五
立憲政體と立法司法及行政 松本 重敏 [新聞] 六六 一 二三四
立憲非立憲の辯 松本 重敏 [新報] 六六 一 二三四
立憲政體に於ける帝國議會と政府との關係 市村 光惠 [法論] 六六 一 四
我が立憲政體の特色 松本 重敏 [新聞] 六七 一 一三七〇
ブルンチュリの政體論 上杉 慎吉 [國家] 六〇 五 七
自然法と立憲制 村瀬武比古 [國體] 六〇 九 四一五
羅馬の建國と共和政體の成立 副島 義一 [早法] 六一 一 一
森 凱雄 [國體] 六一 一〇 四

國家の滅亡と政體の變更 泉 哲 [國際] 六二 三 六
瑞西聯邦憲法より見たる聯邦制度 杉村章三郎 [法協] 六四 四 九一〇

【政黨】

日本に於ける黨派の消長(講演) 大隈 重信 [國家] 四三 二 〇 一
政黨の性質を論ず 萱野 二郎 [法政] 四四 一 二 二四
有力なる政黨の存立し得べき條件を論ず 佐藤丑次郎 [京法] 四三 一 八
進歩黨の内訌 桐北 居士 [東經] 四四 一 五八 一四六五
進歩黨の組織に就て 福田 笑迎 [東經] 四四 一 五八 一四六五
政黨の外部的作用を論ず 佐藤丑次郎 [新報] 四四 一 八 九
新政黨の組織に就て 山形 東根 [東經] 四四 二 五九 一四七四
日本政黨論 稻田周之助 [新報] 四四 二 二〇
獨逸に於ける官僚と政黨 田中萃一郎 [外時] 四四 五 一 一七三
外交と政黨 原 勝郎 [外時] 四四 五 一 一八四
政黨の觀念 佐藤丑次郎 [京法] 六〇 七 九
政黨の成立を論ず 佐藤丑次郎 [京法] 六三 九 七
東洋の大勢と政黨の革新 犬養 毅 [國體] 六四 三 四一五
政黨の統制を論ず 佐藤丑次郎 [京法] 六四 一〇 一 一三
「各國之政黨」を讀む 佐藤丑次郎 [京法] 六四 一〇 一 一五
政黨の鬭争を論ず 佐藤丑次郎 [京法] 六五 二 四

【政體】【政黨】

【政黨】 【製粉】 【生命保險】

政黨の實力	澁橋 逸民〔東經〕大五七四一八七五
選舉一元老—政黨論	今村 根存〔新聞〕大六一三三
政黨の鬭争(講演)	佐藤丑次郎〔日社〕大七一六—一三
政黨の寡頭政治的傾向	山口 義一〔法論〕大七一〇
政黨首領の地位を論ず	山口 義一〔法論〕大七一〇
閥力を論ず	市村 光惠〔法論〕大七一〇
兩黨候補と第三黨出現	高村 經徳〔外時〕大九三三—三七九
政黨の研究	米谷吉次郎〔日社〕大九三七—甲五
「労働者の非政黨聯盟」	鈴木 義男〔國家〕大九三四—三
政黨の論理	村瀬武比古〔國國〕大一一〇—二
最近十四年議會に於ける政黨各派所屬人員	〔統集〕大三一—五三三
政黨論	稻田周之助〔志林〕大三三四—三
シヨルレンベルガーの「政黨論」	龍谷 峻嶺〔法叢〕大四一三—五
政黨政治の實際と論理	村瀬武比古〔法治〕大四一四—一〇
政府の原動力としての政黨	高橋 清吾〔早政〕大五一—三
黨主と黨費	長谷川萬次郎〔我等〕大五八—二
國會及び政黨の不信用	稻田周之助〔新報〕大五三六—五
本邦製粉工業の地的分布に付て	百瀬俊太郎〔國經〕明四一—五五六

【製粉】

參照—小麥粉。

【生命保險】

本邦製粉業事情	諸井 四郎〔國家〕明四二六—五
山東に於ける卵粉製造業	落合石之助〔亞經〕大九四—一
本邦製粉業の發達と其將來	諸井 四郎〔財經〕大九七—五
本邦製粉事業の將來	諸井 四郎〔東經〕大九八二—二〇六八
財界の前途と製粉界の豫想	諸井 四郎〔財經〕大〇八—一
製粉界將來の歸趨	諸井 四郎〔財經〕六一九—一
保險論(殊に生命保險)	和田垣謙三〔國家〕明三二—二七
生命保險會社の新契約費用に就て	栗津 清亮〔保雜〕明三二—二九
生命保險と商法修正案	栗津 清亮〔保雜〕明三一—三三
西米戰爭と生命保險(譯)	麻生義一郎〔保雜〕明三一—三一
生命保險會社代理店組織(譯)	麻生義一郎〔保雜〕明三一—三三
生命保險會社の當事者に警告す	石關 寬之〔保雜〕明三一—三三
再び生命保險會社の當事者に警告す	石關 寬之〔保雜〕明三一—三三
生命保險事業の整理時代	栗津 清亮〔保雜〕明三三—四八
ウィリアム・ブリンントン「生命保險身體選擇に就て」(譯)	栗津 清亮〔保雜〕明三三—五三
的考察に就て	奥村 英夫〔保雜〕明三七—九一〇
眞宗信徒生命保險會社の現況に就て	近藤 幸止〔保雜〕明三七—九一〇
統計と生命保險との關係に就て	奥村 英夫〔統雜〕明三七—二八五
我國に於ける簡便生命保險事業の沿革	栗津 清亮〔保雜〕明三八—二〇〇
生命保險事業の社會的並に經濟的效果	栗津 清亮〔保雜〕明三九—一二二
商業上生命保險業の位置を論ず	石川 文吾〔國經〕明四〇—三
簡易生命保險事業論	村上 隆吉〔國經〕明四一—一四
生命保險事業のコムミツン	佐藤 三郎〔保雜〕明四二—一五七
ヨソ問題	相良 常雄〔東經〕明四三—一四九八
再び生命保險のコムミツン	相良 常雄〔東經〕明四三—一四九八
生命保險業とトラストの妙用	渡邊 英麿〔保評〕明四三—二六
商業者と生命保險業	石川 文吾〔保評〕明四三—二八
簡易生命保險會社の設立を望む	海老原介太郎〔保評〕明四三—二一
生命保險會社の營業費調査に就て	鈴木 太郎〔保雜〕明四三—一五三
生命保險に於けるエゼント	

生命保險會社の當事者に猛省を促す	中村 敬三〔保雜〕明三三—五〇
生命保險の歴史	仙代 生〔保雜〕明三三—五〇
二十世紀の首に於ける生命保險(譯)	東山 生〔保雜〕明三四—六六
敢て上流社會に生命保險を勸む	岸本玄之助〔保雜〕明三四—六六
生命保險事業經營の困難と其救治策	栗津 清亮〔保雜〕明三四—六六
速に生命保險會社の整理を望む	栗津 清亮〔保雜〕明三四—六六
酒客の保險可能に就て	富士川 游〔保雜〕明三四—六六
所謂生存保險に就て	近藤靜太郎〔保雜〕明三四—六六
簡易生命保險	志田卸太郎〔新報〕明三五—二二
簡易生命保險論	麻生義一郎〔保雜〕明三六—八
生命保險會社共通統計方式草案	中村精一郎〔保雜〕明三六—八
生命保險の根本的觀念に就て	奥村 英夫〔保雜〕明三六—八
所謂外國生命保險會社に就て(講演)	矢野 恒太〔保雜〕明三六—八
戰爭と生命保險	麻生義一郎〔保雜〕明三七—九
戰爭と生命保險界	麻生義一郎〔保雜〕明三七—九
生命保險業に於ける非統計	麻生義一郎〔保雜〕明三七—九

【生命保險】

の起源及び各国のエゼン シーシステムの概要
 生命保険事業と生残死亡表
 生命保険非保険論
 生命保険会社の廣告を論ず
 富豪と生命保険
 生命保険会社の監査制度講
 演)

生命保険事件の最近判決に
 就て

生命保険会社投資論
 救済組合と死亡財團
 簡易生命保険と労働保険と
 の關係

簡便生命保険を論ず
 生命保険契約に對する配當
 準備金に付て

死の觀念と生命保険
 人口増加と生命保険
 生命保険会社の設立と其經
 營

家屋購買と生命保険
 經濟的生命保險會社

鈴木 太郎	〔保雜〕	四五	一	一五
伊藤萬太郎	〔保評〕	四五	二	一四
原島 茂	〔東經〕	四五	五	一四
石川 文吾	〔國經〕	四五	八	一五
石川 文吾	〔日經〕	四五	六	一〇
栗津 清亮	〔保雜〕	四五	一	一七〇
和仁 貞吉	〔保評〕	四五	四	二
小原 又作	〔保評〕	四五	四	一五
三浦 義道	〔保雜〕	四五	一	一八〇
下村 宏	〔國經〕	四五	一〇	六
三浦 義道	〔保雜〕	四五	一	一八〇
玉木爲三郎	〔保雜〕	四五	一	一八
大原 祥一	〔保評〕	四五	五	五
大原 祥一	〔保評〕	四五	五	四
大原 祥一	〔保評〕	四五	五	四
嘯劍 生	〔保評〕	四五	五	六
惣崎 貞夫	〔保雜〕	四五	一	一八五
窪田隆太郎	〔保雜〕	四五	一	一八

生命保険の基礎的觀念
 生命保険業者と銀行業者と
 の關係

社會學と生命保険との關係
 各國帝王の生命保険、膠州
 灣に於ける保險

小口生命保險の官營(講演)
 生命保險の目的を論ず
 アルコールと生命保險
 生命保險會社の放資
 戰時生命保險論
 生命保險と調査の價値
 アクチュアリーの見地より
 する生命保險會社濫設防
 止策

小口生命保險官營の可否に
 就て

銀行業と生命保險業
 生命保險會社の合併を贊
 す

簡易生命保險官營實施に關
 する諸問題

生命保險の近狀と景氣
 生命保險の法性を論じて保

惣崎 貞夫	〔保評〕	六二	六	六七
岩間 六郎	〔保評〕	六二	六	四
大原 祥一	〔保評〕	六二	六	八
眞銅芳太郎	〔保雜〕	六二	一	一九九
石川 文吾	〔保評〕	六二	二	二〇
青山 衆司	〔評論〕	六二	二	一四
下村 重美	〔保評〕	六三	七	二二
納賀 雅友	〔保評〕	六三	七	二二
窪田隆太郎	〔保評〕	六三	七	二〇
泉 隆一	〔保評〕	六三	七	二一
栗津 清亮	〔保雜〕	六三	一	二〇九
石川 文吾	〔國經〕	六三	一	二七
高島佐一郎	〔三學〕	六四	九	五
栗津 清亮	〔保雜〕	六五	一	二三八
栗津 清亮	〔保雜〕	六五	一	二二二
村上 定	〔洋經〕	六五	一	七四

險の統一觀念に及ぶ
 デ・ウィット氏の生命年金
 計算の解剖

官營簡易生命保險の豫定解
 約率並加入見込員表を論
 ず

生命保險技術の發展的經路
 生命保險業の威信問題
 生命保險個々の契約より生
 ずる損益

生命保險業者の保健運動
 生命保險會社に於ける第一
 種所得金額の計算を論ず
 生命保險數學の基本定差方
 程式

生命保險會社の第一種所得
 計算に就て

再び生命保險會社の第一種
 所得計算に就て

簡易生命保險の現況
 生命保險と社會政策
 貿易生命最高制限額引上反
 對論

青山 衆司	〔新報〕	六五	二六	二〇
鈴木 敏一	〔保評〕	六六	一〇	一八
角尾猛治郎	〔保雜〕	六六	一	二四六
木村 伊助	〔保雜〕	六七	一	二二八
難波誠四郎	〔保評〕	六七	二	二二
龜田豊治郎	〔保評〕	六七	一	八三
財部 静治	〔經叢〕	六七	六	六
常吉 太一	〔會計〕	六七	四	四
龜田豊治郎	〔保雜〕	六八	一	二六五
佐藤 善助	〔會計〕	六八	五	二
佐藤 善助	〔會計〕	六八	五	四
天岡 道嘉	〔社政〕	六九	一	三
石川 文吾	〔國經〕	六九	二九	四
小山捨四郎	〔保評〕	六九	一四	一五

吾國生命保險事業の將來
 物價と生命保險との狀況
 經濟上より見たる配當附生
 命保險

國債整理と生命保險官營
 生命保險業の將來
 生命保險の變更増加に就て
 普通保險約款より見たる生
 命保險の研究

生命保險事業と商賣化に就
 て

才婚關係の法律と生命保險
 生命保險の經營と其會計
 我國生命保險事業の統計的
 觀察上の注意すべき點に
 就て

生命保險統計の觀察
 生命保險と會社の選定
 震災に關する生命保險統計
 震災に關する生命保險統計
 震災に關する生命保險統計
 震災に關する生命保險統計
 無診査保險の實驗的考察
 生命保險と所得税の史的考

石川 文吾	〔新報〕	六〇	三	二
大橋 八郎	〔保雜〕	六一	一	二九五
石川 文吾	〔商研〕	六一	一	三
森 莊三郎	〔國家〕	六一	三	一
森 莊三郎	〔保評〕	六一	三	一
伊藤 梅吉	〔保評〕	六一	三	一
石川 文吾	〔商研〕	六一	二	二
原島 茂	〔商事〕	六二	四	一
穂積 重遠	〔保評〕	六二	六	一
原島 茂	〔會計〕	六三	一	一五
角尾猛次郎	〔保雜〕	六三	二	三〇二
三浦 義道	〔保評〕	六三	二	二
佐藤 保兒	〔國經〕	六三	三	四
竹下 清松	〔保雜〕	六三	三	三〇二
鈴木 敏一	〔保雜〕	六三	三	三〇二
與石丑太郎	〔保雜〕	六三	三	三〇二
土肥梶太郎	〔保雜〕	六三	三	三〇二
ク ロ ス	〔保評〕	六四	一	四

察	藤川 博〔保評〕六四一八	七
血脈試験と生命保険	ハンタ 一〔保評〕六四一八	一一
生命保険事業経営概説	森 凱雄〔法治〕六四二四	一一
生命保険会社の金融管見	青木 誠一〔金融〕六四二二	九
生命保険の發達に就て	森 凱雄〔經叢〕六四四一	一〇
生命保険業の發達に就て	森 凱雄〔經商〕六四四四	一一
生命保険契約の利益配當資	源	
土肥梶太郎〔保評〕六四一八	七	
生命保険の爭奪戰	神戸 正雄〔時經〕六四一四	三〇
生命保険業の永遠の發展の	森 莊三郎〔保評〕六四二八	一〇
ために	村松 廣吉〔保雜〕六四一四	三〇七
生命保険事業上の利差を論	成田 弘毅〔保雜〕六四一四	三〇五
ず	結合	
生命保険と全部永久廢疾の	國崎 裕〔保雜〕六四一五	三〇九
地位	三浦 義道〔保雜〕六四一五	三〇九
生命保険の責任準備金に就	弘 助太郎〔エコ〕六四一四	四
て	Herbert Old〔保雜〕六四一五	三〇九
	清水文之輔〔銀叢〕六四一六	二
	森 凱雄〔法政〕六四二三	五六

伊 太 利	伊太利に於ける生命保険國	家專營案	神戸 正雄〔京法〕四五七	六
	伊太利に於ける生命保険官	營問題を論ず	三浦 義道〔法協〕六四三三	五
	伊太利官營生命保険の狀況	英	栗津 清亮〔保雜〕六四一五	二五
	英國幼者生命保險法	英國生命保險會の改正試験	玉木爲三郎〔法協〕四二八	一〇
	規則及受験科規則(譯)	英國に於ける郵便局營生命	麻生義一郎〔保雜〕四三	四
	保險組織	英國ブルンシテアル生命	栗津 清亮〔保雜〕四九	二〇
	保險會社の狀態	英國に於ける生命保險會社	三浦 義道〔保雜〕四四	一七九
	の狀況(講演)	戰時英國生命保險會社の決	竹下 清松〔保評〕六六一〇	八
	算狀態に就て	生命保險契約と英國法	竹下 清松〔保雜〕六六一	二二
	英國に於ける生命保險契約	戰時の英國生命保險	三浦 義道〔法協〕六六三	一一
	獨逸に於ける公法的生命保		三浦 義道〔保雜〕六七	二六〇
			麻生義一郎〔保評〕六八二	一

獨逸に於ける簡易生命保險	田中 弟稻〔保評〕四五	二
問題	三浦 義道〔保雜〕六五	二二
戰時の獨逸生命保險事業	大橋 八郎〔保雜〕六四〇	二九〇
佛 國	三浦 義道〔保雜〕六三	二〇九
佛國に於ける生命保險	麻生義一郎〔保雜〕六四	二三四
戰爭の大影響を蒙りたる佛	米	
國の生命保險	米國に於ける生命保險事業	の進歩
米國に於ける生命保險事業	米國紐育生命保險法改正條	項
米國に於ける生命保險學の	研究	
米國生命保險會社資産運用	石川 文吾〔國經〕四一	四
米國生命保險界に於ける恩	鈴木 太郎〔保雜〕四一	二四六
人	石川 文吾〔國經〕四二	二
米國生命保險會社が放棄よ	り得る所得	
米國生命保險會社事業の由	鈴木 太郎〔保雜〕四二	二二七
來	早川保次郎〔保雜〕六四	二四六
米國國營軍人生命保險制度	志摩清一郎〔國經〕六七	二

米國海上保險の大發展と生	命保險の好況	栗津 清亮〔保雜〕六七	二六〇	
米國政府の戰時生命保險	米國生命保險會社の代理人	森 莊三郎〔經論〕六二	三	
契約書	其 他	成田 弘毅〔保雜〕六四	二〇五	
濠洲の生命保險業	ニュージールランドに於ける	官營生命保險	栗津 清亮〔保雜〕四一	二四一
諸外國に於ける生命保險會	社資産狀態	加奈陀に於ける生命保險事	業の現況及其概評	
埃太利保險法と生命保險	丁抹生命保險業法	新爾蘭島の官營生命保險	布哇に於ける生命保險事業	
の研究	契約	謂はゆる生命保險規則に就	て	
生命保險契約の種類變更に				
	北山 巖〔保雜〕四三	四	四四	
	石川 文吾〔商研〕六三	四	一	
	武井 俊夫〔保評〕六六一〇	五		
	三宅 寛二〔保雜〕六六一	二四一		
	三浦 義道〔保雜〕六八一	二七四		
	野津 務〔國家〕六二二	三七	六	
	難波誠四郎〔保雜〕四四	一七六		